
遊戯王GX ~ 闇纏う風と盗賊王 ~

語り部

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王GX〜闇纏う風と盗賊王〜

【Nコード】

N9229L

【作者名】

語り部

【あらすじ】

突然、遊戯王の世界にやってきた少年「紫藤 嵐」。

彼はその身に宿る盗賊王と共に生きることを決めた。

それから2年、少年はデュエルアカデミアの実技試験へと向かう。

第1話 闇纏う風（前書き）

どうも初めまして第1話です。

ちなみに本作での禁止・制限はGXのアニメが基準になってるので
よろしくお願いします。

第1話 闇纏う風

海馬ランドにある大型のドーム。

ここではデュエリストを養成する為の学校『デュエルアカデミア（以降DA）』の実技試験が行われていた。

（SIDE：????）

アナウンス「受験番号1番、デュエル場に上がってください」

3

？（おい、相棒。 テメエの番だぜ）

ん？もう俺の番か？ふあ~~~~、よく寝た。

？（たく、俺様の宿主サマはのん気だな。 もっとも、そこらの雑魚

デュエリスト相手にテメエが負けるとは思わねえけどよ)

ふう、確かに俺はそこらの奴らに負ける気はねえけどな。さて、行きますか。

俺は顔に乗せていた本を上着のポケットに突っ込むと席を立ててデュエル場に向かう。

俺の名は『紫藤 嵐』、簡単に言えばトリッパーって奴だ。

2年ぐらい前にこの世界に飛ばされてきた。この世界は『遊戯王GX』ってアニメの世界だ。

この世界に来た理由はよくわからん。気が付いたら童実野町の公園で寝てた。

ちなみに俺の受験番号は1番。本来なら1年のときしかろくに出席のなかった三沢がこの番号だった。

?(おい、寝惚けてんのか?)

ちなみにさっきから煩いのは精霊………という落ちではない。いや、俺は精霊のカードを持ってんだけどこいつは違う。ってというか俺の精霊は喋れないし。

?(なんだったら俺様が変わってやってもいいぜ?)

ふざけるな、俺がやる。お前は見物でもしてろ………バクラ

俺がそう心の中で言うとバクラは舌打ちをした。

そう、こいつはあの武藤遊戯、もといアテムが戦った千年リングに宿っていた闇の意思『バクラ』だ。

本当はアテムとの戦いで消えたはずだったのだが俺がこの世界に来たときに何故か俺の身体の中にいた。

それも驚いたがもう1つ驚いたのが俺の容姿がバクラと瓜二つにな

っていたことだ。

違う点といえばバクラは白髪だが俺は黒髪。つまりは黒髪のバクラだ。

ちなみにこの2年間はあの俺様社長に世話になっていた。

ひよんなことから社長と対面してしまったのだ。

俺がバクラと同じ容姿だったから社長が偉く驚いていたのを覚えている。

しかもバクラが表に出てきて社長と話してしまったために事情を話すことになってしまったのだ。

その後、社長に世話になりながらいくつかのデュエル大会に参加していた。

さらには遊戯や城ノ内とも会ったことがある。しばらく警戒されていたが。

ただしバクラは千年リングがないため以前のような力はない。

せいぜい闇のデュエルと罰ゲームが行えるぐらいだ。

……うん、十分物騒だね。でも心を物に封じることができないからイカサマとかできないけどね？

つと、んなこと言ってるうちに会場に着いた。

試験官「試験だからといって緊張して硬くなることはない、思いっきりぶつかってきなさい」

会場には黒髪リーゼントみたいな髪型の先生。うん、モブの先生だね。

嵐「もちろん。全力で行かせて貰います」

俺がそう言つと俺と試験官の先生は互いにデュエルディスクを起動させる。

試験官「先攻は君に譲ろう」

嵐「じゃあお言葉に甘えて……俺のターン、ドロー！」

お……結構いいな

嵐「俺は魔法カード、天使の施しを発動！カードを3枚引いてその後カードを2枚捨てる！」

試験官「いきなり手札交換とは……手札事故でも起こしたかい？」

バクラ（おいおい、この先公大丈夫か？初っ端に手札交換したからって決め付けんなよ）

バクラの辛口評価に心の中で苦笑いする。確かにこの世界では最初のターンでの手札交換は嫌われてるからな。

嵐「さらに俺はカードを1枚伏せてターンエンド」

嵐

LP：4000

手札：3枚

モンスター：0

魔法・罫：伏せカード1枚

まあ1ターン目ならこんなもんかな？

試験官「モンスターを出さないとは……本当に手札事故でも起こしたかい？」

嵐「さて、どうでしょう？」

周りも筆記1位なのにあの程度かとか言ってる。ま、次のターンにはそんなこと言えなくなるけどな。

試験官「私のターン、ドロー！私はゴブリン突撃部隊を攻撃表示で召喚！ゴブリン突撃部隊でダイレクトアタック！」

ゴブリン突撃部隊

星：4

ATK：2300

DEF：0

嵐「伏せカードオープン！速攻魔法、スケープゴート！俺のフィールドに4体の羊トークンを特殊召喚する！」

羊トークン×4

星：1

ATK：0

DEF：0

試験官「ならば羊トークンのうちの1体に攻撃！」

大量のゴブリンが羊トークンをたこ殴りにして破壊した。普通にひ
でえ……

試験官「ゴブリン突撃部隊はバトルフェイズ終了時に守備表示にな
る！さらに私はカードを2枚伏せてターン終了！」

嵐

LP：4000

手札：3枚

モンスター：羊トークン3体（守備表示）

魔法・罫：0

試験官

LP：4000

手札：3枚

モンスター：ゴブリン突撃部隊（守備表示）

魔法・罫：2枚

嵐「俺のターン、ドロー！」

伏せカード2枚……十中八九罫だよな……まあ俺には関係ない。

嵐「俺は魔法カード、大寒波を発動！次の俺のターンのドローフェイズまで魔法・罫は発動、セツトすることはできない！」

試験官「なに！？」

嵐「さらにマッドデーモンを攻撃表示で召喚！そして墓地のランス・リンドブルムとデーモンの召喚をゲームから除外！」

試験官「いつの間に墓地に……あのときの天使の施しか！」

嵐「当たり前ですよ。手札からダーク・シムルグを特殊召喚！」

マッドデーモン

星：4

ATK：1800

DEF:0

ダーク・シムルグ

星:7

ATK:2700

DEF:1000

嵐「ダーク・シムルグは墓地の風属性モンスターと闇属性モンスターをゲームから除外して特殊召喚することができる！」

俺がデュエルディスクにカードをセットすると俺の場に黒い翼の巨大な鳥が出現した。

嵐「マッドデーモンでゴブリン突撃部隊に攻撃！」

マッドデーモンがゴブリン突撃部隊を破壊する。だがマッドデーモンの効果はここからが真骨頂だ。

嵐「マッドデーモンは貫通能力を持っている！ゴブリン突撃部隊の守備力は0、マッドデーモンの攻撃力分ダメージを受けてもらうぜ！」

試験官「ぐおおお！」

試験官LP4000 2200

嵐「そしてダーク・シムルグでダイレクトアタック！ダークテンペスト！」

試験官「わ、1ターンキル……ぐわあああああ！！」

試験官LP2200 0

よし、終わったな。さて帰るか……ん？

？「遅刻だあああああ！！」

俺が会場から出ようとしたら元気よく1人の少年が走ってきた。

原作主人公の『遊城十代』だ。

バクラ（なんだこのガキ。もう試験終わりだろうが）

確か電車が遅れたんだっけ？まあ交通機関の遅れじゃしょうがないよな。

結局原作どおりクロノスとのデュエルになったらしい。

嵐「がんばれよ」

俺が十代の肩を叩いてそう言うと十代は笑顔で「おう！」と答えた。この後も原作通りに進み、十代がE・HEROフレイムウイングマンで決めた。

俺はしばらく通路で見えていたが十代がフレイムウイングマンを出したところで観客席のほうに歩いていった。すると……………

？「ん？」

嵐「あ……………」

……………今日は原作キャラとのエンカウントが多いな。通路の角で『カイザー』こと『丸藤亮』とバッタリ出会ってしまった。

亮「お前は受験番号1番の……………」

嵐「どうも」

亮「先程は見事なデュエルだった。アカデミアではお前と戦う日を楽しみにしている」

カイザーはそう言うと俺の横を通り過ぎる。

嵐「俺も楽しみだよ。『カイザー』丸藤亮。俺の名は紫藤嵐だ。覚えておけ亮」

亮「いいだろう。しかし不思議だ。後輩に呼び捨てにされているのに悪い気がしない」

嵐「そいつは何よりだ。俺はどうにも敬語で話すのが苦手だな」

亮「俺は構わんがアカデミアでは気をつけるよ？」

カイザー「……………いや、亮はそう言つと通路を歩いていった。

こうして俺の実技試験は終わった。

今回は俺の精霊は使わなかったがDAでは使うことになるだろうな。

〈SIDE END〉

第2話 切り札（前書き）

調子に乗って連投。

今回嵐の精霊が登場します。喋りませんが。

第2話 切り札

〔SIDE: ARASHI〕

俺は今船に揺られている。あの後DAの入学試験合格の通知が来た。そして現在、俺はDAのある島に向かう船に乗っている。

……………しかし、視線を感じるな……………

バクラ（そりゃ自分の格好見りゃわかんだろ？）

バクラに言われて俺は自分の着ている制服に視線を落とす。

DAでは3段階に分かれて学生の待遇が違う。

成績優秀で中等部から所属する学生が入る『オベリスクブルー』。

高等部の試験で優秀な成績を修めたものが入る『ライエロー』。

そして成績によっては退学もありえる1番下の『オシリスレッド』。

ちなみに神の名があてがわれているのに何故ラーではなくオベリスクが上なのかというところの社長の趣味だ。

そして俺の制服は『オベリスクスブルー』。高校入学では異例だ。なんでも筆記1位と実技での1ターンキルが効いたらしい。

……調子乗りすぎたかな？これじゃあ漫画版の万条目準みたいなことになるかもしれん。

ちなみに制服の着方は前のボタン全開で中に着てる黒いシャツが見えている。

バクラ（いいんじゃないか？その制服が teme には似合ってると思っぜ？）

それはお前にも似合っつてるとか？

俺がそう言っつとバクラは笑っつて肯定した。

俺とバクラの顔はまっつたく同じだからしょうがないが。

？「やあ、受験番号1番」

俺が声のしたほうを向くとそこには黄色い制服を着た男子生徒が立っつていた。

嵐「なにか用か？受験番号2番」

？「受験番号2番じゃない、『三沢大地』だ」

嵐「なら俺も1番じゃない。『紫藤嵐』だよ、大地」

そいつは2年になって以降、『空気』『エアーマン』などといわれつた『三沢大地』だった。

三沢「しかし、さすがだな。高校入学でオベリスクブルーとは……
…だが君にはその色がしっくり来る」

嵐「おだてるな……」

バクラ（へえ、わかってんじゃねえか）

調子に乗る奴がいるから……

三沢「しかしこれから大変だろう？オベリスクブルーにはプライド
の高い連中が多いらしいからな」

嵐「関係ない。向かってくる連中はぶつたおすだけだ」

俺がそう答えると大地が真剣な顔になる。

三沢「やはりさすがだな。だからこそ倒し甲斐がある」

俺たちはそれからしばらく話していたがDAに着いたので別々にな
った。

その後入学式があつたのだが……思い出したくもない。どこの世界でも校長の話は異様に長い。そして今は寮の自分の部屋に来ている。部屋の中を見て驚いた。

アホみたいに広い……これで1人部屋なんだから凄まじい。

バクラ（ほお、いい部屋じゃねえか）

俺は荷物を置くと部屋を出た。

バクラ（あ？どこ行くんだよ？）

いろいろ見て周りたいたいんだよ。歓迎会まで時間あるしな。

俺は部屋を出るとDAのデュエル場に来た。
するとちょうど話し声が聞こえた。

取り巻きA「身の程知らずのオシリスレッドが！」

ああ、十代と万条目準とその取り巻きどもか。

嵐「おい、虎の威を借りることしかできない犬が吠えるなよ」

俺はどうにもその取り巻き共が気に入らないので介入することにした。

万条目「な、貴様は！？」

十代「あ！お前あのとときの！」

嵐「よお。試験以来だな、遊城十代」

取り巻きB「万条目さん！こいつですよ高校入学の分際でオベリス
クブルーに入ってきた身の程知らずは！」

取り巻きが座っていた万条目準になにか言っている。

取り巻きA「おい貴様！誰が犬だと！？」

取り巻きAがなにか言ってる。

嵐「お前らだよ。自分よりも強い奴に尻尾を振るだけの犬共。デュ
エリストだってんなら吠えるんじゃないやなくデュエルで語れ」

俺はそう言つとデュエルディスクを起動させる。

嵐「それともお前がやるか、猿山の大将？」

万条目「貴様！」

俺が万条目準に向かってそう言つと万条目準は顔を真っ赤にして怒り始めた。

バクラ（ヒヤハハハ！テメエもいい性格してんな）

だつてああいうのつて叩き潰したくなるだろ？

？「なにやつてるのこんなところで！」

バクラ（あんだよ、いいところなのよ）

バクラが悪態をつくなか、俺は声のしたほうを見るとそこには金髪の女子生徒が立っていた。

万条目「て、天上院くん！いや、こいつらに身の程を教えてやろうと思つてね」

明日香「もうすぐ寮の歓迎会が始まるわよ。速く行つた方がいいんじゃない？」

万条目「ちつ……おまえら行くぞ」

万条目準は……めんどいから準でいいや。準はそう言つと取り巻き

を連れてデュエル上を去っていった。

明日香「彼らにはあまり関わらないほうがいいわよ？」

明日香がそう言ってくるが俺はすぐに明日香に背を向ける。

嵐「向こうが関わってこないならな」

俺が寮に戻ろうとすると今度は十代に引き止められた。

十代「なあお前。俺とデュエルしようぜ！」

翔「あ、アニキ……」

十代は笑顔で俺をデュエルに誘う。一方の翔はおどおどして俺を見ている。本当に亮と似てないな。

嵐「また今度な。歓迎会に遅れて飯抜きは勘弁して欲しいからな」

俺はそう言つと寮に戻っていった。

嵐「さてと……」

夜、俺はカードケースが2つ付いたベルトを腰に巻くと青い制服を羽織って部屋を出た。

バクラ（どこ行くんだった？）

嵐「（ちよつとデュエル場にな……）」

バクラ（また原作知識って奴か？）

バクラがそう聞いてくるので俺は頷く。一応バクラには原作知識等のことは話してある。

俺はこれから十代が準に呼び出されたであろうデュエル場に向かう。

嵐（お、やってんじゃねえか）

デュエル場に付くとちょうど十代と準の勝負が始まったところだった。

取り巻きA「あ！お前は紫藤嵐！」

真っ先に取り巻きAが俺に気付いた。

取り巻きB「ちょうどいい！万丈目さん！この身の程知らずを俺たちでやっっちゃっていいですか!？」

万条目「俺がやるうと思ってたが……構わん好きにしろ！」

万条目がそう言うのと取り巻きAがデュエルディスクを起動させた。

取り巻きA「アンティールだ！お前のベストカードを賭けてもらうぜー！」

ったく、アンティは校則で禁止されてるだろうが。

明日香「ちよつと紫藤くん！そんなの受けることないわよ！」

声のしたほうを向くと明日香と翔がいた。

嵐「別に問題ねえよ。さっさと終わらせる」

俺はそう言うと2つのデッキケースのうち1つからデッキを取り出してデュエルディスクにセットする。

取り巻きA「やってみる身の程知らずが！」

「デュエル!!」

取り巻きA「俺の先攻!ドロー！」

先攻は取り巻きA。さて、どんなデッキを使うのか……

取り巻きA「俺はゴブリンエリート部隊を攻撃表示で召喚!さらにカードを1枚伏せてターン終了！」

ゴブリンエリート部隊

星：4

ATK：2200

DEF：1500

取り巻きA

LP：4000

手札：4枚

モンスター：ゴブリンエリート部隊（攻撃表示）

魔法・罫：伏せカード1枚

嵐「俺のターン、ドロー！」

悪くないな。

嵐「俺は魔法カード、天使の施しを発動。カードを3枚ドロし、その後2枚捨てる。」

そして俺は墓地のキラートマトとアーマード・ビーをゲームから除外し、ダーク・シムルグを特殊召喚！」

俺の目の前にはあの試験で出した黒い翼の巨鳥が現れた。

ダーク・シムルグ

星：7

ATK：2700

DEF：1000

翔「すごいっす！1ターン目に上級モンスターを召喚したっす！」

明日香「さすがは筆記1位ってところかしらね」

明日香と翔は感心したように見ているが取り巻きAは余裕そうな顔をしている。

取り巻きA「甘いぜ！俺は罠カード、激流葬を発動！モンスターが召喚・反転召喚・特殊召喚されたときフィールド上のモンスターを全て破壊する！」

ダーク・シムルグとゴブリンエリート部隊は激流に流されて墓地に送られた。

取り巻きA「念のために罫を張っておいて良かったぜ。さあ！早く雑魚モンスターを出しな！全部ぶっ潰してやるからよ！」

ちっ、全然痛手じゃねえがうぜえ。

嵐「俺はカードを2枚伏せてターンエンド！」

嵐

LP：4000

手札：3枚

モンスター：0

魔法・罫：2枚

取り巻きA「俺のターン！へっ、出す雑魚モンスターもないのか？俺はブラッドヴォルスを召喚！さら「罫カード発動！」なに！」

嵐「俺は奈落の落とし穴を発動！攻撃力1500以上のモンスターが召喚・特殊召喚されたときそのモンスターを破壊してゲームから除外する！」

召喚されたブラッドヴォルスは穴に落ちて消えていった。

取り巻きA「小癪な！だがまだだ！魔法カード、早すぎた埋葬を發動！800ライフを支払い、墓地のゴブリンエリート部隊を特殊召喚！ゴブリンエリート部隊でダイレクトアタック！」

取り巻き：LP4000 3200

鎧を着込んだゴブリンたちが俺に切りかかってくる。もつとも、その攻撃は通らないがな。

嵐「リバーズカードオープン！速攻魔法、スケープ・ゴート発動！俺のフィールド上に4体の羊トークンを特殊召喚する！」

俺の場には4体の色違いの羊が現れる。

取り巻きA「鬱陶しい！そんな雑魚すぐにぶっ潰してやる！ゴブリンエリート部隊で羊トークンのうち1体を攻撃！」

ゴブリンたちは実技試験のときのゴブリン突撃部隊と同じように羊トークンを袋叩きにしていた。

取り巻きA「ゴブリンエリート部隊は攻撃したターンのエンドフェイズに守備表示になる！ターン終了だ！」

嵐

LP：4000

手札：3枚

モンスター：羊トークン3体（守備表示）

魔法・罫：0

取り巻き

LP：3200

手札：3枚

モンスター：ゴブリンエリート部隊（守備表示）

魔法・罫：0

嵐「俺のターン、ドロォ！」

さて、終わらせるか。

取り巻きA「さあどうした！さつさとサレンダーしたらどうだ！？
高校入学の分際でおベリスクブルーなんて生意気なんだよ！」

嵐「なぜサレンダーする必要がある？このデュエルは俺の勝ちだ」

取り巻きA「は？は？は？は？は？は？は？は？は？お前馬鹿か？お前のフェイバリットモンスター、ダーク・シムルグは墓地だぞ！」

明日香「何を言ってるの？あの状況で逆転なんて………」

嵐「ふう、お前馬鹿か？誰が『ダーク・シムルグ』が俺のフェイバリットだと言った？」

取り巻きA「なんだと！」

嵐「見せてやる！俺の真の切り札を！俺は羊トークン2体と墓地のダーク・シムルグをゲームから除外し、このカードを特殊召喚する！このフィールドを取り囲み制圧しろ、the アトモスフィア！」

すると俺のフィールドには透明の球体を持った巨大な鳥が姿を現した。

theアトモスフィア

星：8

ATK：1000

DEF：800

嵐「アトモスフィアは自分フィールドのモンスター2体と墓地のモンスター1体をゲームから除外して特殊召喚できる！頼むぞ、アトモスフィア」

俺が小さくそう言つとアトモスフィアはコクツと頷く。そう、こいつが俺の精霊だ。

取り巻きA「なんだそりゃ！8星で攻撃力1000？それがお前の

切り札か！そんな雑魚モンスターで何ができる！」

嵐「はっ、そんなことはこいつの効果を見てから言いな！アトモスファイアの効果発動！」

1ターンに1度、表側表示の相手モンスター1体をこのカードに装備し、装備したモンスターの攻守分、攻撃力と守備力をアップする！俺はお前のゴブリンエリート部隊を装備！」

アトモスファイアの効果が発動するとゴブリンエリート部隊がアトモスファイアの持つ透明の球体に吸い込まれた。

theアトモスファイア

星：8

ATK：1000 3200

DEF：800 2300

取り巻きA「な・・・あ・・・あ・・・あ・・・あ・・・」

嵐「これで終わりだ！アトモスファイアのダイレクトアタック、テンペストサンクションズ！」

取り巻きA「う、うわあああああ！！！！！」

取り巻き：LP3200 0

取り巻きA「く、くそ！お前なんかに！」

俺が尻餅をついている取り巻きAを見下ろしている。十代のほうはまだ終わってないみたいだな。

明日香「大変よ！ガードマンが来たわ！こんな時間にアンティでデュエルやってたなんて知れたら退学になるかも！」

万条目「ちっ、お前たち行くぞ！こいつの実力はわかった、どうやら実技試験はマグレだったようだな！」

万条目は取り巻き2人を連れて去っていった。

その後十代がデュエル場を離れようとしなかったがなんとかガードマンが来る前に脱出できた。

（SIDE END）

第3話 闇纏う風が出会つは龍の姫（前書き）

今回ヒロインが登場します。

第3話 闇纏う風が出会うは龍の姫

〔SIDE：ARASHI〕

万丈目の取り巻きAを倒してから数日、今俺は実技試験でオベリス
クブルーの生徒と戦っていた。

「神禽王アレクトールでダイレクトアタック！」

「うわあああああ！！！」

ブルー生徒：LP1500 0

「「「「きゃあああああ！嵐さあああああん！！」「」「」

俺がデュエルに勝つと周りから……主にな女生徒から歓声が
上がる。

「相変わらず女子の人気の高いな」

俺がデュエル場から降りると大地が話しかけてくる。

そう、俺は何故か女子人気が高い。

まあ顔は悪くないと思う。っていうかバクラと同じだし。

(いいんじゃないか？ テメエもまんざらじゃねえだろ？)

まあな。男に生まれたからには女子にちやほやされるのは嫌な気分じゃない。

「しかし、翔はまだトリップしてんのか？」

ちなみに十代や翔とは普通に友人になった。

その翔だがさっきの体育の時間からいろいろやばい状態になってる。今日が偽ラブレター事件なんだな。まあオベリスクブルーの俺にはエンカウントしないことだが。

そう思ってたことがありました。

「嵐！翔が攫われた！」

何故こうなる？夜に十代がオベリスクブルー寮にやってきた。

「で？なんでわざわざ俺のところに来た？」

「いや、俺、女子寮の場所知らねえから」

「はあ……………」

俺は溜息を吐くと十代を案内してやることにした。

そして俺たちは今女子寮の前の池を船で進んでいる。

向かう先の船には2隻の船の上に5人の人影が見える……………
ん？5人？明日香に翔に明日香の友人2人だろ？あと1人誰だ？

「翔！」

「アニキ！」

「来たわね十代……………ってどうして嵐がいるの？」

「ええええええええええええ！あ、嵐さん！」

明日香が俺がいることを確認すると他2人が大声で驚く。たしか枕
田ジュンコと浜口ももえだったか？

もう1人は黒いショートカットの髪に勝気そうな鋭い目つきで制服のスカートの下にスパッツをはいてるボーイッシュな子だった。

「翔、お前なにやってるんだ？」

「こいつ女子寮のお風呂を覗いたのよ！」

「覗いてないっす！」

「これが学園にばれたら退学ですわね」

「そこで遊城十代、私とデュエルしなさい。あなたが勝ったら今回のことは学園には言わないわ」

どンドン原作どおりに進んでいく。

「それともし良かったら嵐もデュエルしない？」

急に俺に話を振られた。

「なんで？」

「高校入学でオベリスクブルーに入ったあなたのデュエルを見たいのよ」

「まあ、別に構わないぜ」

「じゃああなたの相手は「オレがやる」沙耶……………」

俺の対戦相手にさっきまで見ているだけだったボーイッシュな子が

名乗りを上げた。

「そいつの相手はオレにやらせる。お前もそれで良いよな？」

「お前は？」

「オレは加賀見^{かがみ} 沙耶^{みや}。どうすんだよ？やるのかやらねえのか？」

「いいぜ」

俺が了承すると先に十代と明日香がデュエルを始めた。しかし自分のことを俺って言う女ははじめて見たな。

(いいんじゃないの？相手が誰だろうとよ)

まあな。そうこうしてるうちに十代がサンダージャイアントで明日香を倒していた。

俺たちは船から降りて陸地で互いにデュエルディスクを起動させる。

「さて、じゃあ始めるか」

「おう！」

「デュエル！」

先攻は俺からだな。

「俺のターン、ドロー！」

ふむ………

「俺はクリッターを守備表示で召喚！さらにカードを1枚伏せてターン終了！」

クリッター

星：3

ATK：1000

DEF：600

嵐

LP：4000

手札：4枚

モンスター：クリッター（守備表示）

魔法・罫：伏せカード1枚

「オレのターン、ドロロー！俺は強欲な壺でカードを2枚ドロロー！オレはさらに魔法カード、融合を発動！オレは手札のロードオブドラゴンと神竜ラグナロクを融合し、竜魔人キングドラグーンを融合召喚！」

ロードオブドラゴンと神竜ラグナロクが合わさっていくと人の上半身と竜の下半身を持つドラゴンになった。

竜魔人キングドラグーン

星：7

ATK：2400

DEF：1100

「キングドラグーンの効果発動！1ターンに1度、手札からドラゴン族モンスターを特殊召喚することができる！オレは手札のタイラントドラゴンを特殊召喚！」

すると今度は加賀見のフィールドに赤い巨大な竜が召喚された。結構やばいな。

タイラントドラゴン

星：8

ATK：2900

DEF：2500

「オレはキングドラグーンでクリッターに攻撃！」

キングドラグーンの攻撃にクリッターが破壊された。だがクリッター

「はあいつを呼ぶ鍵だ。」

「俺はクリッターの効果発動！デッキから攻撃力1500以下のモンスターを手札に加える！俺はデッキから攻撃力1000のtheアトモスファイアを手札に加える！」

「だがまだだ！タイラントドラゴンでダイレクトアタック！プラストファイア！」

タイラントドラゴンの炎が俺を直撃した。

「ぐう！」

嵐：LP4000 1100

「（ちっ、手札に下級があれば仕留められたんだがな）オレはこれでターン終了だ！」

「このエンドフェイズに俺は速攻魔法、終焉の焰を発動！俺の場に2体の黒焰トークンが特殊召喚される！」

黒焰トークン

星：1

ATK：0

DEF：0

「あら、嵐さんはなんで攻撃されたときに使わなかったんでしょうか？」

浜口ももえが明日香に聞いている。

「恐らくさつき手札に加えた嵐の切り札のためね」

「アトモスファイア……ですか？明日香さん」

さすがに何度かアトモスファイアは使ってるからな。知ってる奴は知ってるな。

「ええ、あのカードは自分フィールドのモンスター2体を除外しなくちゃいけないわ。」

タイラントドラゴンは相手フィールドにモンスターがいれば2回攻撃できるからそれを防ぐためでしょうね（でも、キングドラグーンの効果は……）

沙耶

LP：4000

手札：3枚

モンスター：タイラントドラゴン、竜魔人キングドラグーン

魔法・罾：0

「俺のターン、ドロー！」

「お前の狙いはわかってるぜ。その黒焰トークンを除外し、アトモスフィアでオレのモンスターを奪う気だろ？だが、オレのキングドラグーンがいる限り俺のドラゴンは魔法、罾、モンスター効果の対象にはできないぜ！」

加賀見が得意気だが俺には打開策なんざすでに手札にある。

「知ってるさ。だが、俺の手札にはすでに打開策は出来てるぜ。俺は、お前のフィールドのキングドラグーンとタイラントドラゴンをリリース！」

「な！」

「俺はお前のモンスター2体をリリースして溶岩魔人ラヴァゴーレムを特殊召喚！」

加賀見のフィールドには赤い溶岩で出来たモンスターが出現した。しかし何度見ても巨兵に似てるな。

溶岩魔人ラヴァゴーレム

星：8

ATK：3000

DEF：2500

「ラヴァゴーレムは召喚条件によるリリースだ！よってキングドラ
グーンの効果は受けないぜ！」

「くっ！」

「このカードを特殊召喚したターン、俺は通常召喚は出来ないが・
・・・特殊召喚は出来る！俺は黒焰トークン2体と墓地のクリッ
ターをゲームから除外し、アトモスフィアを特殊召喚！」

t h eアトモスフィア

星：8

ATK：1000

DEF：800

「そしてアトモスファイアの効果でラヴァゴーレムを装備！」

theアトモスファイア

星：8

ATK：1000 4000

DEF：800 3300

「すごい、相手モンスターの除去と攻撃力アップを同時に……」

明日香たちが驚いている。そう、アトモスファイアにはラヴァゴーレムはかなり相性がいい。特にライフ4000のこの世界じゃかなりの脅威になる。

「これで終わりだ！アトモスファイアでダイレクトアタック！テンペストサンクシヨonz！」

「うわあああああ！」

沙耶：LP4000 0

「加賀見、楽しかったぜ」

「沙耶だ……オレのことは沙耶でいいぜ」

すると加賀見……沙耶が下の名前で良いと言ってきた。
その後、俺たちは翔を連れて女子寮を後にした。

第3話 闇纏う風が出会うは龍の姫（後書き）

というわけで第3話でした。

ちなみに沙耶は他の男性キャラと区別するため、男性キャラは漢字で「俺」、沙耶はカタカナで「オレ」となっています。

第4話 天狗の鼻をもげ(前書き)

今回は万丈目とのデュエルです。ではどうぞ。

第4話 天狗の鼻をもげ

〔SIDE: ARASHI〕

あの偽ラブレター事件から数日。あれ以来、明日香たち結構仲良くなっただ。

やっぱり沙耶はモブとかじゃなくてオリキャラだな。っていうかなんであも俺のどストライクの子が出てくるかな？

(ヒヤハハハ、相棒はああいう強気な女好きだもんな)

「あれ？嵐じゃねえか」

俺が校舎を出ようと思ったたら普通に沙耶に会った。

(噂をすればなんとやらって奴だな)

「今日は十代たちと一緒にじゃねえのか？」

「いつも一緒なわけじゃない。そう言うお前も明日香たちと一緒にじゃないのか？」

「オレだっていつもあいつらと一緒にじゃねえよ」

それからしばらく俺たちは互いのデッキに付いて話していた。

「クオオオオオオオオ」

「あれ？お前それ……………」

沙耶が声のしたほうには俺の精霊のtheアトモスファイアがいた。
こいつ、また出てきたな。

アトモスファイアは身体がでかいくせに割と甘えん坊で俺に頭を撫で
て欲しいときにこうやって勝手に出てくる。

……………ん？いま沙耶はこいつに反応したよな？

「お前も精霊持つてんのか？」

「お前もって……………」

俺がそう言つと沙耶の背後にタイラントドラゴンがいた。

「こいつがオレの精霊だよ」

「タイラントドラゴンか」

さらにそれからしばらくの間互いの精霊のことで話していた。しか
しここに邪魔者が……………

「おい！紫藤嵐！」

俺が呼ばれたほうを見るとそこには準と取り巻き2名がいた。

「なんだお前ら？」

沙耶も興味なさ気に万丈目たちのほうを見る。

「加賀見くんも一緒だったのか。まあいい、紫藤嵐。お前にデュエルを申し込む。当然、あの時と同じアンティルールでな」

「またか、お前らそんなに俺のカードが欲しいのか？」

「ふん、貴様の雑魚モンスターになんぞ興味はない。あんな弱点目白押しの雑魚なんぞな」

おい……いま、なんていったこいつ？俺の相棒を雑魚？

「おい、お前ら！今のは「いいだろう」「嵐？」

「受けて立ってやる。さっさとかかって来い」

「ふん、後で吠えずらくなよ？」

「「デュエル！！」」

「俺の先攻、ドロー！」

先攻は万丈目に取りられたか。

「俺はギルガースを攻撃表示で召喚！さらにカードを2枚伏せてターン終了！」

ギルガース

星：4

ATK：1800

DEF：1200

万丈目

LP：4000

手札：3枚

モンスター：ギルガース（攻撃表示）

魔法・罫：伏せ2枚

「俺のターン、ドロー！俺はキラートマトを守備表示で召喚！」

キラートマト

星：4

ATK：1400

DEF：1100

「さらにカードを2枚伏せてターン終了！」

嵐

LP：4000

手札：3枚

モンスター：キラートマト（守備表示）
魔法・罫：伏せ2枚

「俺のターン！俺はダブルコストーンを攻撃表示で召喚！」

ダブルコストーン

星：4

ATK：1700

DEF：1650

ダブルコストーンってことは手札に上級モンスターがいるな。

「さらに俺は魔法カード、デュアルサモン二重召喚を発動！このターン俺はもう1度通常召喚できる！」

俺はダブルコストーンを生贄に捧げる！このときダブルコストーンは闇属性モンスターの生贄召喚に使用するとき2体分の生贄になる！俺はデビルゾアを召喚！」

デビルゾア

星：7

ATK：2600

DEF：1900

フィールドには白くて巨大な悪魔が現れる。っていうか久々に見たなこいつ。

「さらに伏せカード発動！畏カード、メタル化・魔法反射装甲！このカードをデビルゾアに装備し、生贄にする！」

ちよつと待て、まさかのあのカードか？ぶつちやけ生贄にしないほうが強いぞ？

「俺はデッキからメタル・デビルゾアを特殊召喚！」

メタル・デビルゾア

星：8

ATK：3000

DEF：2300

ホントに出たよ。なんて懐かしいカードを。

「俺はギルガースでキラートマトに攻撃！」

ギルガースの剣でキラートマトが真っ二つに切り裂かれた。

「この瞬間、キラートマトの効果発動！デッキから闇属性の攻撃力1500以下のモンスターを攻撃表示で特殊召喚する！俺は2体目のキラートマトを特殊召喚！」

「だが今度はメタルデビルゾアで攻撃だ！」

今度はメタルデビルゾアの爪で切り裂かれた。

嵐：LP4000 2400

「くっ！俺はキラートマトの効果でクリッターを特殊召喚！」

「俺はこれでターン終了！」

万丈目

LP：4000

手札：1枚

モンスター：メタルデビルゾア（攻撃表示）、ギルガース（攻撃表示）

魔法・罫：伏せ1枚

「ふん、もはや俺の勝ちが決まったようなもんだな」

「さすがは万丈目さんだ！」

万丈目の得意気な顔に取り巻きも調子に乗る。

「なに言っただお前ら？嵐はまだ負けてねえぞ。おい嵐！オレに勝ったくせにそんな奴に負けんじゃねえよ！」

「か、加賀見くん！？」

沙耶が俺を応援してくれたことに万丈目たちは驚いている。
ま、女の前でかつこ悪い姿を見せるわけにもいかないな。

「俺のターン、ドロ！俺は手札から幻銃士を召喚！そして幻銃士の効果発動！召喚・反転召喚に成功したとき、フィールドのモンスターの数まで銃士トークンを特殊召喚する！俺の場にはクリッターと幻銃士の2体、よって2体の銃士トークンを守備表示で特殊召喚！」

幻銃士

星：4

ATK：1100

DEF：800

銃士トークン

星：4

ATK：500

DEF：500

「そして俺は幻銃士と銃士トークン、そして墓地のキラートマトをゲームから除外し、theアトモスフィアを召喚！」

theアトモスフィア

星：8

ATK：1000

DEF：800

「（くくく、召喚したな。さあ、メタルデビルゾアを吸収するがい。それぐらいくれてやる）」

「さらに俺は手札から神禽王アレクツールを特殊召喚！」

「なに!?!」

神禽王アレクツール

星：6

ATK：2400

DEF：2000

「このカードは相手フィールド上に同じ属性のモンスターが2体以上存在するときに特殊召喚できる。さらに魔法カード、ハリケーンを発動！フィールド上の全ての魔法・罠を手札に戻す！」

「な、なんだと！」

「やっぱな、伏せてたのはどうせサイクロンみたいな装備カードを破壊する系のカードか攻撃誘発型の罠だろ？それぐらい俺が警戒してないとも思ったか？」

「ぐ、おのれえ」

あの悔しそうな顔。どうやら凶星だったみたいだな。大体アトモスファイアの弱点なんて相手モンスターを装備カードにしなきゃいけないぐらいしかないだろうが。

「まあいい、俺はアトモスファイアの効果によりメタルデビルゾアを装備する！」

theアトモスファイア
ATK：1000 4000
DEF：800 3100

「終わりだ。アレクトールでギルガースを攻撃！」

アレクトールの攻撃でギルガースが吹き飛ばされた。

万丈目：LP4000 3400

「これで終わりだ！アトモスファイアのダイレクトアタック！テンペストサンクションズ！」

「そんな、そんな馬鹿なああああああ！！！」

万丈目：LP3400 0

「でもよ、アンティ貰わなくて良かったのか？」

デュエルの終わったあと、日も暮れてきていたので俺は沙耶を女子寮に送っていた。

「別に構わねえよ。どうせ俺のデッキにや入らねえしな」

「そっか。っつーかよ、別に送ってかなくてもいいんだぜ？」

「馬鹿、日も暮れてんだし女の1人歩きは危ねえよ。ましてやお前みたいないい女はな」

「な、なななな！」

沙耶が顔を真っ赤にしてうるたえてる。やばい、マジで可愛いな。

「ば、ばばば馬鹿いってんじゃねえよ！」

「俺は冗談なんか言ってるねえぜ？」

俺が笑いながらそう言つと沙耶はさらに顔を赤くする。

「も、もう目の前だからここまででいい！さっさと帰れ！」

「はいはい。仰せのままに、お姫様」

「お、お姫様！？」

おうおう、もう爆発しそうだな。退散するか。

「じゃあな……」

俺はそう言つと自分の寮に帰つていった。

＼SIDE END＼

＼SIDE：SAYA＼

お姫様つて、なに言つてんだよあいつ。

あんなこと言われたの初めてだからまだドキドキする。

「変な奴………」

でも、少し嬉しい………」

~
S
H
I
D
E
~
E
N
D
~

キャラ設定(前書き)

ここまでのキャラ設定です。

キャラ設定

名前：紫藤 嵐しやうとう あらし

『年齢』

転生前：22歳

転生後：14歳（転生直後） 16歳（現在）

身長：172

体重：59

外見：黒目黒髪の間バクラ

所属：オベリスクブルー

服装：オベリスクブルーの制服の上着の前を完全に空けている。

詳細：「遊戯王GX」の世界に転生した少年。

普段は黒目黒髪だが人格がバクラと入れ替わると髪の色が白く変色する。

いつの間にか「遊戯王GX」の世界にやってきていた。

転生してからの2年間、バクラと奇妙な共同人生を送っている。しかし本人はバクラを気に入っている。

性格は頭はクールにハートは熱くを地でいき、受けた恩は忘れない。好きなことはバイクで爆走することとデュエル。

デッキはアトモスフィアをエースとした風属性と闇属性の混合デッキ。

大嵐やハリケーンで伏せカードを除去し、アトモスファイアで相手モンスターを奪う戦い方をする。

トーチゴーレムやラヴァゴーレムを相手の場に召喚してアトモスファイアで奪うなどの戦い方はライフ4000の世界ではかなりの脅威。主人公にありがちな鈍感要素はなく、なにかと人の感情に敏感。

恋愛に関してもガンガン押していくタイプで赤面したり照れることがなく、実はそっち方面には結構経験豊富。

女子供でも気に入らない奴は潰すのが信条で実は結構バクラと似ている。

どこまでも我が道を行く人間で他者に流されることが少ない。

名前：バクラ

詳細：「遊戯王デュエルモンスターズ」の登場人物。

なぜか一輝の身体に直接憑依しているような状態になっている。

千年リングがないため以前のような魂の一部を物に宿すといったことはできず、できるのは闇のゲームと罰ゲームのみ。

嵐のことを気に入る嵐を「相棒」と呼ぶ。

案の定デッキは相変わらずのオカルトデッキ（ただしカードはアニメ版仕様）。

バクラの人格が表に出ると嵐の黒髪が白く変色する。

名前：加賀見^{かがみ} 沙耶^{さや}

年齢：15歳

身長：150

体重：ひみつ

スリーサイズ：大きい／細い／引き締まってる

所属：オベリスクラブ

外見：リリカルなのはのノーヴェをそのまま黒目黒髪にした感じ。

詳細：本作ヒロインで一人称が「オレ」の俺っ娘。ボーイッシュな外見で制服のスカートの下にスパッツを穿いている。

本人曰く「スカートはスースーするから嫌だ」とのこと。

兄が2人おり、その影響か男っぽく育ってしまい、両親は嘆いているらしい。

性格は男勝り……というか下手な男よりも男らしい。しかし可愛いものが好きという一面はある。

常に男っぽい格好をしており、制服じゃなければスカートなんてまです穿かない。

いままでその男っぽさから家族以外に女性扱いされたことが少なく、同性にもてるが本人にその気はなし。

女性扱いされたことがないからか「可愛い」などのそう言った言葉を聞くと照れて赤面する。

スタイルがよく、明日香並みに胸が大きいが本人は邪魔だと言って

いる。

デッキはタイラントドラゴンをエースにしたドラゴンデッキ。
とにかく攻撃力でガンガン攻めるタイプ。魔法、罠もドラゴンの特
殊召喚などに関連したものが多。

第5話 月一試験〜前編〜（前書き）

ついに月一試験です。前後編に分けました。まずは沙耶のデュエルです。

第5話 月一試験〈前編〉

〔SIDE：ARASHI〕

「で、ここはこうなる」

「なるほど」

俺はいま沙耶に勉強を教えている。

アカデミアには月に1度、定期試験がある。この試験しただいで寮の昇格や降格が決まる。

そしてアカデミアには当然デュエルだけでなく国語や数学、英語などもある。

俺はこつちに来る前は高校は卒業してたので大概のことは覚えている。

一方の沙耶はかなり勉強が苦手なようで十代みたいに実技は成績いいのに筆記にかなり不安がある。

「でもよ、勉強教わるならなんで明日香じゃないんだ？」

「だってお前入学試験の成績1位だろ？だったらいいじゃねえか」

「まあいいけどな。っとそろそろ遅いから寮帰れ、送ってくから」

もう夜の7時だしな。さすがにこれ以上はな。

「別に1人で帰れるぜ？」

「だから夜に可愛い女の1人歩きは危ないって言ってんだろ？おとなしく言うこと聞け」

「うう、わかったよ」

俺が可愛いって言ったら顔真っ赤になっちゃった。こづいところ
が可愛いんだよな。

結局この後、女子寮の前まで送っていった。

翌日、俺はすでに教室にいる。翔はもう来てるが十代は原作通りに遅刻したらしい。

ちなみに沙耶もまだ来てない。さっきメールで寝坊したって連絡が

来た。

「それじゃ試験をはじめるにや」

大徳寺先生が試験用紙を配り始める。しかしあの人がセブンスターズとは人は見かけによらないよな。

（あの先公、なんか変な感じがしやがるな）

バクラにはなんとなくわかるらしい。

そんなこと考えてるうちに試験を埋め終わった。沙耶は間に合うか？

〈SIDE END〉

〈SIDE SAYA〉

やばいやばいやばい！昨日寮に帰った後復習してたら寝坊した！
まったく明日番たちも起こしてくれりゃいいのに！

「ん？」

オレがしばらく走っていると前に見覚えのある赤い制服。ってあれ十代じゃねえか？

「十代！」

「お！沙耶じゃないか！」

「どうしたんだよこんなとこで！」

「寝坊した！」

同類か……とにかく急がねえとな。

「とりあえず急ぐぞ！」

オレと十代がしばらく走ってくと目の前にトラックを押すおばさんが……オレ弱いんだよここのうの！

結局オレと十代はおばさんの手伝いをして残り時間30分ぐらいで教室に着き試験を受けた。

ん？筆記の結果？前よりも全然出来たぜ！

〈SIDE END〉

〔SIDE：ARASHI〕

試験終了後、俺は沙耶や十代たちと合流した。

他の生徒は新しいパックが出るとかで出て行った。

そしてそれを聞いた十代と翔もパックを買ったために走っていった。

「君たちは新しいパックを買わなくていいのかい？」

大地が俺と沙耶に聞いてくる。

「別に今すぐ必要じゃないしな。もう少し落ち着いたら買うさ」

「オレもだな。そんないきなりデッキに入れても回んなくなるだけだし」

俺と沙耶が答えると十代と翔が戻ってきた。

「どうした？」

沙耶が十代たちに聞く。たしかクロノスが買い占めたんだっただか？

「販売してすぐに誰かに買い占められたらしいんす。これじゃ実技試験どうすればいいんすか？」

「別に大丈夫だろ？いきなり新しいカード入れてもバランス崩れるぞ？

それからしばらくして実技試験の時間になった。俺よりも先に沙耶の番が来た。

ちなみに十代は原作通りトメさんからパツクを1つ貰ったらしい。

〈SIDE END〉

〈SIDE：SAYA〉

実技試験でオレの番が来た。相手は誰だ？

「相手は豚見ぶたみ 和夫かずおナノーネ！」

げ、オレの相手をクロノス先生が呼ぶが呼ばれたのはオレが……と
いうかアカデミアでかなり嫌われてる野郎だ。

「ぶひひひひ、よろしくね沙耶タン」

気持ち悪い……！！オレの前に現れたのはブヨブヨに太った眼鏡を
かけたオベリスクブルーの男子だった。

「ぶひひひひ、お互い頑張ろうね？」

豚見が握手でもしようと思いついてくるがオレは瞬間的に後ずさる。

「お、オレに近寄んじやねえ豚野郎！」

「ぶひひひ、オレっ娘萌え〜。そんなに照れなくてもいいのに」

こいつはアカデミアの男子でオレを女扱いする数少ない男子だがこ
いつにはなに言われても嫌悪感しかわかねえ。

嵐に可愛いつて言われたときはあんなに嬉しかったのに……ってオ
レはなに考えてんだ！

「沙耶、そんな奴に負けんなよ！」

すると観客席から嵐がオレを応援してくれる。やべ、すげえやる気
でた。

「ち、何だよあいつ。ぼきの沙耶タンに気安く声かけやがって」

「いちいちつつせえぞ。さっさと始めようぜ」

こいつぶっ潰して嵐にいいとこ見せるか。やばい、嵐に褒められんの考えたら顔がにやけてくる。オレはどうしちゃまったんだよ!とにかくいまはこいつを倒さないとな。

「デュエル!」

「オレのターン、ドロー!オレはモンスターを1枚セット!さらにカードを1枚伏せてターン終了!」

沙耶

LP:4000

手札:4枚

モンスター:裏守備モンスター1体

魔法・罫:伏せカード1枚

「ほきのターン、ドロー!ほきは斬首の美女を召喚!」

斬首の美女

星：4

ATK：1600

DEF：800

豚野郎のフィールドに着物を着た女のモンスターが現れた。そういやこいつのデッキって女系のモンスターしか入ってなかったよな。

「ぶひひひ、着物美人萌え〜」

「……………なんか心なしか斬首の美女が嫌そうな顔してるよ。わかる気はするけどよ。」

「ぼきは斬首の美女で攻撃！」

おいおい、無用心すぎるだろ。

「オレは畏カード、聖なるバリア・ミラーフォースを発動！相手の攻撃宣言時、相手のフィールドの攻撃表示モンスターを全て破壊する！」

斬首の美女の攻撃をバリアが防ぎ、そして斬首の美女を破壊した。

「ぶひ！よくも僕の斬首の美女を！いくら沙耶タンでも許さないぞ！ぼきはカードを1枚伏せてターン終了！」

豚見

LP：4000

手札：3枚

モンスター：0

魔法・罫：伏せカード1枚

「オレのターン、ドロー！オレは手札から強欲な壺を発動！デッキからカードを2枚ドロー！」

よし、これで決めるぜ。

「オレはフィールドのミンゲイドラゴンをリリース！このカードはドラゴン族のアドバンス召喚に使用する場合、2体分の生贄に出来る！オレはタイラント・ドラゴンを召喚！」

タイラント・ドラゴン

星：8

ATK：2900

DEF：2500

「さらに手札から二重召喚を発動！このターンもう一度通常召喚を行うことが出来る！オレはロードオブドラゴン・ドラゴンの支配者
-を召喚！」

オレの場にはマントを翻し、ドラゴンを模した鎧を着た魔法使いが召喚された。

ロードオブドラゴン・ドラゴンの支配者・

星：4

ATK：1200

DEF：1100

「そしてオレは手札からドラゴンを呼ぶ笛を発動！手札のドラゴン族を2体まで特殊召喚できる！ただし今回オレは1体だけ特殊召喚するぜ！オレが特殊召喚するのはマテリアルドラゴン！」

オレのフィールドに金色のドラゴンが特殊召喚された。

マテリアルドラゴン

星：6

ATK：2400

DEF：2000

「これで決めるぜ！マテリアルドラゴンでダイレクトアタック！」

「ぶひひひひ！甘いよ沙耶タン！斬首の美女の仇だよ！ぼきも聖なるバリア・ミラーフォースを発動！」

「甘いのはテメエだ！マテリアルドラゴンのモンスター効果発動！モンスターを破壊する魔法・罫・モンスター効果を手札を1枚捨てることで無効にし、破壊する！」

オレは手札を捨てるとマテリアルドラゴンの攻撃はバリアを貫通して豚に直撃した。

豚見：LP4000 1600

「ぶひ！まさかドラゴンを呼ぶ笛で1体しか召喚しなかったのは！？」

「このためだよ！オレはタイラント・ドラゴンでとどめだ！プラストファイア！」

「ぶひひひひひひひひひひ！！！！」

豚見：L P 1 6 0 0 0

よっしゃ勝利！オレは豚見が何かいってるのも聞かずに嵐たちのもとに戻った。

「おい、嵐勝ったぜ！」

「おう、いいデュエルだったぜ」

なでりなでり

すると嵐がオレの頭を撫でてくる。実は昨日勉強を見てもらった

ときも何度か撫でてもらった。

うう、恥ずかしいけど気持ちいい……………

オレはしばらく嵐に撫でられていた。

〈SIDE END〉

「（ねえ、沙耶さんって……………）」

「（ええ、間違いないわね。本人は自覚してないみたいだけど）」

「（あらあらまあまあ）」

嵐におとなしく頭を撫でられる沙耶を見て翔と明日香とももえがそんなことを話していた。

第5話 月一試験〜前編〜（後書き）

次回は嵐のデュエルです。

感想お待ちしております。

第6話 月一試験〜後編〜（前書き）

月一試験の後編です。相手はあの人になりました。

他の方の小説でも出てきてるキャラなので知ってる人もいるかもしれませんが。

ちなみに今後はほとんどでない予定です。

第6話 月一試験〜後編〜

SIDE: ARASHI

沙耶のデュエルが終わって十数分。ついにオレの番が来た。

(決めようにも決まらねえな)

……うっさい。バクラが言ってるのは俺の頭の上に出てくる特大のタンコブ。

俺だけじゃなく十代や翔、三沢にも出来てる。

そしてその原因を作った奴(沙耶)はというと……

「うっさい」

顔を真っ赤にして唸ってる。まあ簡単に言えばこっぴつことだ。

俺に撫でられる しばらく大人しかったが皆に見られてるのに気付く 顔を真っ赤にして暴走 男性陣の頭にタンコブ

赤くなってる沙耶は可愛いからいいんだけどね。

(んなことよりデュエルに集中しろ)

わかってるよ。

「それで〜は、シニョ〜ル紫藤の相手はシニョ〜ル原なの〜ネ!」
クロノスがそう言うと会場には眼鏡をかけた女生徒が上がってきた。
……TFで見たことあんな……

「紫藤嵐くん、よろしく。原麗華です。……ホントに悪そうな顔を
してますね」

でた委員長タイプ。俺苦手なんだよな。

(……おい相棒、俺に代われ。このアマ、ぶっ潰してやる)

バクラは人相が悪いといわれて不機嫌になつとる。
ダメだ。俺が倒すから大人しくしてろ。

「あなたのことは知ってますよ。制服はキチンと着ないし、さつき
は不純異性交遊までしてましたね」

不純異性交遊？さつき沙耶の頭を撫でてたことか？

「アホらし……さつさと始めようぜ」

「いいでしょう。私が勝つたら今後あのようなことは慎んでもら
いますからね」

「「デュエル!」」

2人がデュエルを始めた頃、沙耶は……

「なんだあいつ偉そうに」

不機嫌になってた。

「俺のターン、ドロー！」

あいつのデッキがゲーム通りならバーンデッキだな……まあこの手札なら完封できるな。

「俺は天使の施しを発動！カードを3枚引き、その後で2枚捨てる！墓地のランスリンドブルムとブラッドヴォルスをゲームから除外し、ダークシムルグを特殊召喚！」

ダークシムルグ

星：7

ATK：2700

DEF：1000

「さらにサファイアドラゴンを攻撃表示で召喚！」

サファイアドラゴン

星：4

ATK：1900

DEF：1600

「カードを1枚伏せてターン終了！」

嵐

LP：4000

手札：3枚

モンスター：ダークシムルグ（攻撃表示）、サファイアドラゴン（攻撃表示）

魔法・罫：伏せカード1枚

「私のターン、ドロー！」

「お前のスタンバイフェイズに罫カード発動、魔封じの芳香！互いのプレイヤーは魔法カードをセットしなければ発動できず、セットしたカードは次の自分のターンまで発動することは出来ない！」

バーンデツキならこれでほぼ完封できる。

「時間稼ぎですね。では私はカードを3枚セットします」

原がカードをセットする。しかしディスクはエラー音を発した。

「え、エラー！？どうして!?!」

「ダークシムルグのモンスター効果だ！ダークシムルグがフィールド上に存在する限り相手プレイヤーはカードをセットすることは出来ない！当然魔法・罫だけでなくモンスターもな」

そう、ダークシムルグと魔封じの芳香のコンボはかなり強力だ。

これだけで新たにカードをセットすることが出来ない。

先攻1ターン目に完成すれば魔法・罫・モンスターのリバーブス効果

を完全に封じ込めることができる。

ちなみにこの世界では表側守備表示で出すことができるがもとの世界では通常召喚の場合攻撃表示で出さなければいけなかった。

「そんな・・・・・・・・・・」

一方、2人のデュエルを見ていた沙耶たちは・・・・・・・・

「これで麗華はほとんど打つ手がないわね」

「どういうことだよ明日香？」

明日香に十代が尋ねる。

「麗華はバーンデッキの使い手よ。魔法・罾・リバーズモンスター効果が封じられたら戦力が激減するわ」

「ああ、あのコンボは魔法・罾が主力のデッキには天敵だ」

明日香と三沢が十代たちに説明していた。

「く……私はプロミネンスドラゴンを守備表示で出して
イン終了です……」

プロミネンスドラゴン

星：4

ATK：1500

DEF：1000

麗華

LP：4000

手札：5枚

モンスター：プロミネンスドラゴン（守備表示）

魔法・罫：0

「プロミネンスドラゴンは私のエンドフェイスに相手に500ポイントのダメージを与えます」

「ぐっ」

プロミネンスドラゴンが火球を吐き、俺のライフを減らした。

嵐：LP4000 3500

「俺のターン、ドロー！俺はマッドデーモンを召喚！」

マッドデーモン

星：4

ATK：1800

DEF：0

「マッドデーモンでプロミネンスドラゴンに攻撃！マッドデーモンは貫通能力を持つ！」

マッドデーモンが爪でプロミネンスドラゴンを切り裂いた。

「きゃあー！」

麗華：LP4000 3200

「サファイアドラゴンでダイレクトタック！」

「ああー！」

麗華：LP3200 1300

「ダークシムルグでダイレクトアタック！ダークテンペスト！」

「きゃあああああー！」

試験が終わった俺は十代立ちのところに戻ってきた。
ちなみに麗華はあの後俺を睨んでいたが何も言っていなかった。

「よう！圧勝だったじゃねえか！」

沙耶が駆け寄ってきた。

「手札が良かったからな」

「しかし簡単だが恐ろしいコンボだな。君とやるときはその辺の対処法も考えとかないとな」

大地がそんなことを言ってくるなか、十代が準とデュエルしに会場に行った。

この後、原作通り十代が準を倒した。しかしあそこでフェザーマンを引くとはなんとという鬼引き。

………まあ俺も人のことあんまり言えないけどね。バクラが憑依してるからかドロー力かなり高いし。

第6話 月一試験〜後編〜（後書き）

以上第6話でした。

そして次回！ついにあの方が登場！待ち望んでいた方も多いと思います。

第7話 開幕、闇のデュエル（前書き）

ついにあの男のデュエルが始まる。

結局1キルしちゃったけど………

第7話 開幕、闇のデュエル

〔SIDE: ARASHI〕

月一試験から数日、夕飯を食べ終えた俺は自分の部屋でベッドに寝転がっていた。

「ふわぁ、そろそろ寝るか？」

俺が寝ようかと考えていると突然PDAが鳴った。

(どうした相棒?)

「沙耶からだ」

『嵐、明日香がいねえんだけどなんか知らないねえか?』

ああ、今日はあの廃寮探検の日か……しかたねえ、行くか。

俺は寮を出るときに沙耶に連絡し、廃寮の前で待ち合わせた。

「嵐!」

「沙耶」

「明日香は?」

「多分ここだ」

俺は廃寮を指差すと2人で中に入る。するとそこにはすでに先客がいた。

「十代!？」

「嵐に沙耶じゃねえか」

そこには恐らく廃寮探検に来ていたであろう十代と翔、隼人がいた。

「どうしたんだよ？」

「沙耶が明日香がいなくなったって言ってな、もしかしたらと思っ
てな」

「明日香?だったらさっきこの近くで会ったぜ」

十代の言葉に俺はやっぱり、と思う。すると……

「きゃあああああ!！」

廃寮に明日香の悲鳴が響いた。

「い、いまの!！」

「明日香の声だ!！」

十代たちが明日香の声に反応するなか、俺と沙耶は……

「おい、沙耶？」

「うづうづ……」

沙耶が俺の腕に抱きついて震えていた。どうやら沙耶はこづいづのがダメらしい。

しかし柔らかいものが当たっていたので少し嬉しかったのを記しておく。

「明日香！」

俺たちが明日香の声のしたところに行くところには気を失っている明日香と仮面の大男が立っていた。

「なんだお前は！」

「ふふふふ、私は闇のデュエリスト、タイタン。さあ、私とデュエルをする勇氣のあるものはいるか？闇のデュエルをな！」

(闇のデュエル……ねえ……)

バクラがなにか呟いたかと思うと俺の意識が遠のいた。

〈SIDE END〉

〈SIDE: JUDAI〉

目の前のタイタンって奴が明日香を倒したらしい。

闇のデュエルが何なのかわかんねえけど受けてたつぜ!

「よし、じゃあ俺が「待ちな十代」嵐?」

嵐が俺を手で制していた。

「こいつの相手は俺がする。ここは俺にやらせな」

「なん……!」

俺が文句言おうと嵐を見るとなんかわかんねえけど言葉が出てこなくなつた。嵐の雰囲気が変わつてるような？

「頼む」

「ちえ、わかつたよ」

嵐はそう言うのとタイトンの前に出てデュエルディスクを起動させた。すると今度は黒い何かブヨブヨしたのが出てきて嵐とタイトンを包み込んだ。み込んだ！

「嵐!」

「嵐くん!」

「嵐!」

「嵐!」

俺と翔、隼人、そして沙耶はそのブヨブヨした壁を叩いたけどビクともしねえ!これが闇のデュエルってやつなのか!?

〈SIDE END〉

く???く

「な、なんだこれは!?!」

俺様の目の前では闇のデュエルとかほざいてたおっさんがうるたえてやがる。

「くくく、おいおい……なにうるたえてやがる?せつかく本物の闇のデュエルをやっつてやるうってのによ」

「な、なんだと!?!き、貴様、髪の色が!」

気付いた見てえだな。俺様の髪が相棒の黒から白に変わっていく。

「くくくく、俺様の名はバクラ。さあ、やるうぜ?本物の闇のデュエルをな」

ちなみに俺様たちを包んでる黒い膜は俺様の作ったもんだ。まだ他の連中に俺様の存在を教えるわけにはいかねえからな。

「ほ、本物の闇のデュエルだと!？」

「ああ、おおかた噂に便乗して闇のデュエリストを名乗ったってとこだろうが生憎だったな。俺様は本物だぜ」

俺様はデュエルディスクにセットされてる『相棒のデッキ』を腰のデッキケースに戻すともう1つのケースから『俺自身のデッキ』をディスクにセットした。

「安心しな、俺様に勝てればここから出ることが出来るぜ。もっとも、負けたときは覚悟しろよ?」

「ぬ、ぬう」

「デュエル!」

「俺様の先攻!ドローカード!」

さて、悪くねえな。

「俺様は夢魔の亡霊を攻撃表示で召喚!」

俺様がカードを出すと剣と盾を持った亡霊が姿を現した。

夢魔の亡霊

星：4

ATK : 1300
DEF : 1800

「俺様はこれでターンエンドだぜ！」

バクラ

LP : 4000

手札 : 5

モンスター : 夢魔の亡霊 (攻撃表示)

魔法・罫 : 0

「私のターン、ドロー！私はデーモンソルジャーを召喚！」

デーモンソルジャー

星 : 4

ATK : 1900

DEF : 1500

「さらにフィールド魔法、ハンデイモニウム万魔殿・悪魔の巣窟・を発動！デーモンと名の付くモンスターがスタンバイフェイズに払うライフコストを払わなくて良くなる！」

フィールド魔法……こりゃあ、あれは使えねえか？

「私はさらに二重召喚を発動！このターンもう1度通常召喚することが出来る。私はデーモンソルジャーを生贄に迅雷の魔王・スカルデーモン・を召喚！」

迅雷の魔王・スカルデーモン・

星：6

ATK：2500

DEF：1200

「このモンスターはカードの効果の対象になつたときサイコロを振り、1・3・6が出たときにその効果を無効にすることが出来る！私はスカルデーモンで夢魔の亡霊を攻撃！怒髪天昇撃！」

スカルデーモンの攻撃で俺の夢魔の亡霊が消し去られた。

バクラ：LP4000 2700

奴が攻撃し、俺のライフが減ったところで俺様の足元から闇の膜の一部が俺の足に纏わり付く。

「ぬう！そ、それはいつたい！？」

くくくく、あのおっさんは俺の足に纏わり付いてきた闇の膜を見てびびってやがる。

「こいつはライフが減るにつれて足元から段々と上に向かってくる。そして敗者は完全に闇に吞まれるのさ。言っとくがいまさら逃げらんねえ。せいぜいがんばんな」

「わ、私はターン終了だ（だ、だがまだ私のほうが有利だ。恐れることはない）」

タイタン

LP：4000

手札：3

モンスター：迅雷の魔王・スカルデーモン（攻撃表示）

魔法・罫：万魔殿・悪魔の巣窟（フィールド魔法）

「俺様のターン、ドローカード！」

俺様は今引いてカードを見る。そしたら笑いがこみ上げてきやがった。

「ひやははははは！ テメエも随分不運なやろうだな！ このターンで俺様の勝ちだ！」

「な、何だと！」

「俺様は首なし騎士を召喚！」

俺様がカードを出すとフィールドに霧が発生し、その霧の中から首のない騎士が歩いてきた。

首なし騎士

星：4

ATK：1450

DEF：1700

「さらに手札から儀式魔法、闇の支配者との契約を発動！ 手札の儀

式の供物を生贄にする！

このカードは闇属性の儀式モンスターを特殊召喚するとき、このカード1枚で儀式のために生贄に出来る！」

儀式の供物

星：1

ATK：300

DEF：300

俺様が儀式の供物を墓地に送ると闇からマントを広げ1体のモンスターが現れる。

「さあ、来い！闇の支配者・ゾーク！」

闇の支配者ダークマスター-ゾーク

星：8

ATK：2700

DEF：1500

「ゾークのモンスター効果発動！ダイスを振り、出た目によって異なる効果が発動する！1・2なら相手のモンスターを全て破壊！3・4・5なら相手モンスターを1体破壊！6なら俺様のモンスターを全て破壊する！
おっと、言つとくがこいつの効果は対象をとる効果じゃねえ。よつて、スカルデーモンの効果じゃ無効化できねえぜ？さあ祈りな！運命のダイスロール！」

俺様を取り出したダイスの目が千年アイテムと同じウジャト眼のダイスが中を舞う。そして床に落ちたダイスの目は……………

「ひやははははははははははは！ダイスの目は1！スーパークリティカル！テメエのモンスターを全て破壊だ！ゾークインフェルノ！」

「な、なあああ！」

ゾークの効果によってスカルデーモンが消し飛ばされ、おっさんの顔が恐怖に歪んだ。

「首なし騎士の攻撃！」

「ぐああ！」

タイタン：LP4000 2550

「くくくく。さあ、こいつで闇に沈みな！ゾークのダイレクター
ツク！ダークフェノメノン！」

「ぐあああああああ！！！！！！」

タイタン：LP25500

ゾークの攻撃が直撃すると奴が足元の闇に飲み込まれ始めた。

「た、助けてくれ！」

「くくく、1つ覚えときな。闇のデュエルに負けた奴の末路は……
……永遠の苦痛だ」

「ひあああああああ！！！！」

そして奴は完全に闇に飲み込まれた。さて、俺様も引っ込むか。久々に暴れられたぜ。

I S I D E E N D I

I S I D E : A R A S H I I

俺の意識が戻ると周りの膜がなくなった。バクラの野郎、無理やり表に出てきやがったな。

(いいじゃねえか。たまには俺も暴れてもよ)

これでセブンスターズのとくにどうなるかわかったもんじゃないな。膜が完全になくなると十代たちが驚いた顔をしていた。

「あー、た「嵐！」うおっ！」

俺がただいまって言おうとしたら沙耶が抱きついてきた。

「馬鹿野郎！心配かけやがって！」

沙耶は泣きながら俺の胸に顔を埋めていた。

結局その後、俺は十代たちと一緒に明日香を連れて寮を出た。

沙耶は何とか帰るまでに泣き止んでくれたけど泣かれるのはかなりきつかったなあ。

I S I D E E N D I

第7話 開幕、闇のデュエル（後書き）

第7話でした。ちなみにゾークの1キルは実際にDOTでやられました。あれは泣きそうになった。

バクラのデッキは少々いじってますがほとんどアニメと同じです。

第8話 自覚した想い、勝利を目指して（前書き）

今回はちょっと短いです。……………うそです、今回もです。

第8話 自覚した思い、勝利を目指して

廃寮探検の翌日、十代と翔、沙耶は校長室に呼び出された。

用件は立ち入り禁止の廃寮へ入ったこと。これによりこの3人は数日後に退学をかけて制裁デュエルを受けることとなった。

嵐と明日香が除外されているのは2人とも成績優秀なオベリスクブルーの生徒だからだ。

ちなみに沙耶はオベリスクブルーだが実技以外の成績は低く、女子が自動的にオベリスクブルーでなければレッドの可能性が高いからである。

その結果、十代は翔とタツグ、沙耶はシングルでの制裁デュエルとなった。

〔SIDE：ARASHI〕

制裁デュエルが決まったあと、俺たちはみんなでレッド寮に集まって制裁デュエルのためにデッキを作ることになった。

十代と翔はタッグパートナーなので2人でデッキを作っている。沙耶は俺と一緒にデッキを作っている。

十代たちはなにやら翔がグダグダ言ってるが多分原作通りに進むので問題ないと思う。

問題は……

「沙耶、やっぱりもう少しドラゴンを特殊召喚するカードを入れな
いとな」

「お、おう」

沙耶が顔を真っ赤にして俯いてるんだ。廃寮の一件以来、沙耶は俺の前だとこんな感じになってしまった。なんでだろう？

（いや、めっちゃくちや相棒のことを意識してんじゃねえか）

わかってる。言ってみただけだ。俺は小説の最初のキーワードにもあるように鈍感じゃない。

（メタな発言は止めとけ。作者に怒られんぞ）

お前もな。

SIDE END

SIDE SAYA

うづうづ、どうすりゃいいんだ？嵐の顔がまともに見れねえ。嵐の顔を見るとドキドキしてどうかしそうだ。

初めにこんななったのはあの万丈目とのアンティデュエルのおかげからだ。

あのとき、嵐が女子寮まで送ってくれて、そんなときの別れ際の言葉で「いい女」とか「お姫様」とか……

それから嵐に会ったたびにドキドキして、でもそれが心地よくて……嵐に褒められるとめっちゃくちゃ嬉しくて、頭撫でられると気持ちよ

くて。

この前の廃寮のとき、嵐が黒いブヨブヨしたやつに向かって消えたとき、もう会えないんじゃないかってすげえ胸が苦しかった。

この気持ちを同学年のももえに相談したら……

「昨夜」

「まあ！それは恋ですわ！間違いありませんわ！」

「じ、じじじ恋！？」

オレは恋なんてしたことねえからすつげえ驚いた。

「そ、そんな……恋なんて……」

「間違いありませんわ！これは告白するしかありませんわ！」

「じ、告白！？む、むむむ無理だつて！オレはそんな……」

「では沙耶さんは嵐さんが他の女性と恋人同士になってもいいんですの？」

他の女と嵐が？想像してみる……オレ以外の女の横で楽しそうに笑う嵐。やだ……そんなのやだ。

「やだ……嵐が他の女と一緒になんてやだ」

「ならば頑張りましょう。沙耶さんの性格だと駆け引きなんかは向きそうにありませんからここは直球勝負ですわ！」

なんか今さりげなく失礼なこと言われたような気がする。まあいいか。

そのあとオレはももえにいろいろアドバイスを貰った。

〈SIDE END〉

〈SIDE：ARASHI〉

「な、なあ……嵐？」

「ん？」

俺がカードを見ていると沙耶が話しかけてきた。

「あ、あのよ。制裁デュエルで勝てたら……と、灯台の下に来てくんねえか？」

沙耶が顔を真っ赤にしながら言葉を口にした。これは……

「わかった。じゃあ勝てるようにしっかりデッキ組もうぜ？」

黙って了承だろう。

「おう！」

沙耶が元気よく返事すると俺たちはデッキ作りを再開した。

それからしばらくして、デッキが出来た後に十代から翔がいなくな
ったと聞き、捜索 イカダで島を出ようとしてる翔発見 連れ戻し
たところに亮出現 十代と亮のデュエル 翔が一皮向ける。という
ふうに普通に原作通りに進んだ。

第8話 自覚した想い、勝利を目指して（後書き）

次回は制裁デュエル。相手はたぶん好きな人のいないだろう奴です。

第9話 制裁デュエル、龍の姫と昆虫馬鹿（前書き）

制裁デュエルです。

相手はあの馬鹿です。

第9話 制裁デュエル、龍の姫と昆虫馬鹿

〔SIDE：ARASHI〕

ついに制裁デュエルの日になった。十代と翔は原作通り迷宮兄弟とデュエルし、見事に勝利した。

そして次は沙耶の番だ。だけど沙耶の相手って誰だ？迷宮兄弟みたいに遊戯と戦ったことのある奴か？

「そ、それで、は、次のデュエルを始める〜ノ」

あ、クロノスが動揺してる。まさか迷宮兄弟が負けるとは思わなかったんだな。でもあいつらまだ初心者の頃の克也にも負けたからな。ちなみに克也ってのは城ノ内のことな？俺は基本的に名前で呼ぶからな。

「それでクロノス先生。次は誰が出てくるのですか？」

鮫島校長が年甲斐もなくうきうきしてる。あのおっさんもいろいろと子供っぽいところあるな。

「次〜も、伝説のデュエリスト・武藤遊戯、そして城ノ内克也〜とデュエルしたことのあるデュエリストなの〜ネ」

クロノスがそう言うとデュエル場の扉が開いた。遊戯と克也の2人と戦ったことがある？そうなるかいいところで梶木やマリク、もしくは……

「ひょくひよっひよっひよっひよ」

あの腹立つ笑い声はあいつしかいない……原作で1回しか勝ったシーンのなかった虫野郎。

「元全日本チャンプのインセクター羽蛾なのーネ！」

扉の向こうからはオカツパ頭に眼鏡、昆虫のプリントがされた服。そしてあの嫌な目つき。

最初にダイナソー竜崎に勝って以来、1度も勝つことのなかったインセクター羽蛾だ。

……どうでもいいけどあいつらの下の名前ってなんていうんだろ？

＼SIDE END＼

〈SIDE: SAYA〉

オレの目の前には元全日本チャンプのインセクター羽蛾が立っている。

「ひよひよひよひよ、君が俺の相手かい？可哀想だが手加減はしないよ？これも仕事だからね。でも……………」

羽蛾がオレの身体を嘗め回すように見る。うう、怖気が走るぜ。

「もしこれで負けて退学になったら俺の彼女にやってもらいたいよ？」

気持ち悪い……………

「誰がテメエなんか！御託はいいからさっさと始めようぜ！」

「いいよ、格の違いつて奴を教えてやるよ！」

「デュエル！！！」

「俺の先攻、ドロー！」

先攻は羽蛾にとられちまったけどオレの手札も悪くねえ、これなら。

「俺はアルティメット・インセクトLV3を召喚！」

アルティメット・インセクトLV3

星：3

ATK：1400

DEF：900

「さらにカードを1枚伏せ、永続魔法カード、虫除けバリアーを発動！このカードがある限り、相手フィールドの昆虫族は攻撃できない！俺はこれでターンエンドだ！」

インセクター羽蛾

LP：4000

手札：3枚

モンスター：アルティメットインセクトLV3（攻撃表示）

魔法・罫：虫除けバリアー（永続魔法）、伏せカード1枚

「オレのターン、ドロー！」

よし、まずはこいつで……。「ドローフェイズに罫カード発

動!」なに!?

「ひよひよひよ、俺は永続罨、DNA改造手術!このカードは発動時に種族を1つ選択し、このカードが存在する限りフィールド上のモンスターは全て選択した種族になる!俺が選択するのは昆虫だ!」
くそ、このための虫除けバリアーか!?

「オレは、モンスターをセット。さらにカードを2枚伏せてターン終了」

沙耶

LP:4000

手札:3枚

モンスター:裏守備表示1体

魔法・罨:伏せカード2枚

「俺のターン、ドロ!ひよひよ、スタンバイフェイズに俺のアルティメットインセクトLV3を墓地に送り、デッキからアルティメットインセクトLV5を特殊召喚!」

アルティメットインセクトLV5

星:5

ATK:2300

DEF：900

羽蛾のモンスターが脱皮して姿を変えた。気持ち悪！オレ、基本虫もダメなんだよな。カブトムシや蝶は大丈夫だけど。

「さらにモンスターをセットし、アルティメットインセクトで攻撃
」！
」

羽蛾のモンスターがオレのモンスターを食いやがった。

「オレのモンスターはマスクド・ドラゴン仮面竜！こいつが戦闘で破壊されたとき、デッキからレベル4以下のドラゴン族を特殊召喚する！オレは2枚目の仮面竜を守備表示で特殊召喚！」

マスクド・ドラゴン

仮面竜

星：3

ATK：1400

DEF：1100

「ひよひよひよ、なるほどね。DNA改造手術が影響するのはフィールドのみ。デッキのカードはドラゴンのままだからね。まあいい、俺はカードを1枚伏せてターン終了！」

インセクター羽蛾

LP：4000

手札：3枚

モンスター：アルティメットインセクトLV5、裏守備表示1体

魔法・罫：虫除けバリアー（永続魔法）、DNA改造手術（永続罫）、伏せカード1枚

「オレのターン、ドロー！」

タイラントドラゴン……頼りになる相棒だけど、この状況じゃ……

「オレはさらにモンスターをセットしてターン終了！」

沙耶

LP：4000

手札：3枚

モンスター：仮面竜（守備表示）、裏守備表示1体

魔法・罫：伏せカード2枚

「ひよひよひよひよ、なす術無しかい？俺のターン、ドロー！この

スタンバイフェイズにアルティメットインセクトLV5を墓地に送り、デッキからアルティメットインセクトLV7を特殊召喚！」

アルティメットインセクトLV7

星：7

ATK：2600

DEF：1200

「さらにこのカードはLV5の効果で特殊召喚された場合、このカードが存在する限り相手モンスターの攻撃力・守備力を700ポイントダウンさせる！」

仮面竜

ATK：1400 700

DEF：1100 400

「まずいわ！これじゃあ沙耶のモンスターは！」

明日香たちが慌ててる。確かに少しやばいか？

「俺は裏守備モンスターを生贄に、セイバービートルを召喚！」

セイバービートル

星：6

ATK：2400

DEF：600

「さらに生贄にしたモンスター、代打バッターの効果発動！このカードが墓地に送られたとき、手札の昆虫族モンスターを特殊召喚する！」

代打バッター

星：4

ATK：1000

DEF：1200

「この効果で特殊召喚するのはこれだ！インセクト女王^{クイーン}！」

インセクトクイーン

星：7

ATK：2200

DEF：2400

「まだまだ！女王様はフィールドの昆虫モンスターの数だけ攻撃力を200ポイントアップする！」

インセクトクイーン

ATK：2200 3000

攻撃力………3000！しかもオレのモンスターは攻撃力が700ポイント下がる！

「俺はさらに魔法カード、二重召喚を発動！このターン、もう1度通常召喚を行うことが出来る！俺はコカローチナイトを召喚！」

コカローチナイト

星：3

ATK：800

DEF：900

インセクト女王

ATK：3000 3200

「俺はセイバービートルで仮面竜に攻撃！」

でっかいカブトムシがオレの仮面竜を角で貫いた。

「ぐっ！」

「さらに！セイバービートルは貫通能力を持っている！」

沙耶：LP4000 2000

「くっ、オレは仮面竜の効果で3枚目の仮面竜を守備表示で特殊召喚！」

仮面竜

星：3

ATK：1400

DEF：1100

「だがアルティメットインセクトの効果で攻守ダウン！」

仮面竜

ATK：1400 700
DEF：1100 400

「アルティメットインセクトで仮面竜に攻撃！」

アルティメットインセクトの攻撃が仮面竜を消し飛ばした。くそ、本気でやばい！

「仮面竜の効果発動！ミンゲイドラゴンを守備表示で特殊召喚！」

ミンゲイドラゴン

星：2

ATK：400 0
DEF：200 0

「そんなモンスター、役にたちやしないよ！コカローチナイトでミンゲイドラゴンに攻撃！」

コカローチナイトの剣がミンゲイドラゴンを真っ二つにされた。

「そしてコカローチナイトを生贄にし、インセクト女王でセットモンスターに攻撃！クイーンズヘルプレス！」

インセクト女王

ATK：3200 3000

モンスターを生贄にした？なんで？

「ひよひよひよひよ、女王様は自分のモンスターを生贄にしないと攻撃できないのさ！だが、コカローチナイトは墓地に送られたとき、デッキの一番上に戻る！これで女王様の生贄には困らないぜ！」

……でもそれってドローが進まなくなるよな？

「裏守備モンスターはドル・ドラだ」

ドル・ドラ

星：3

ATK：1500 800

DEF：1200 500

「さらに女王様が相手モンスターを破壊したターンのエンドフェイズにインセクトモンスタートークンを攻撃表示で特殊召喚する！ひよっひよっひよっひよ可愛いベビーの誕生だぜ！さらに昆虫族が増えたことで女王様の攻撃力がアップ！俺はこれでターンエンドだ！」

インセクトモンスタートークン

星：1

ATK：100

DEF：100

インセクト女王

ATK：3000 3200

インセクター羽蛾

LP：4000

手札：0

モンスター：インセクト女王（攻撃表示）、アルティメットインセクトLV7（攻撃表示）、セイバービートル（攻撃表示）、インセクトモンスタートークン（攻撃表示）

魔法・罨：虫除けバリアー（永続魔法）、DNA改造手術（永続罨）、伏せカード1枚

「ドル・ドラは破壊されたターンのエンドフェイズに攻撃力・守備力を1000にして特殊召喚される」

ドル・ドラ

星：4

ATK	：1000	300
DEF	：1000	300

やばい……これじゃあ……負ける？オレが負ける？
負けたら退学……そしたら嵐の傍にいれなくなる？そんなのやだ！

「オレのターン、ドロー！オレは強欲な壺を発動し、さらにカードを2枚ドロー！」

これは……嵐がくれた……よし！

「俺は手札からロードオブドラゴン・ドラゴンの支配者・を攻撃表示で召喚！」

ロードオブドラゴン・ドラゴンの支配者・

星：4
ATK：1200 500
DEF：1100 400

「さらに魔法カード、ドラゴンを呼ぶ笛！フィールド上にロードオ
ブドラゴンが表側表示で存在するとき、この効果で手札から2枚ま
でドラゴン族を特殊召喚することが出来る！手札からタイラントド
ラゴンとトライホーンドラゴンを特殊召喚！」

タイラントドラゴン
星：8
ATK：2900 2200
DEF：2500 1800

トライホーンドラゴン
星：8
ATK：2850 2150
DEF：2350 1650

「ひよひよひよ！させないよ！畏カード、奈落の落とし穴を発動！
召喚・特殊召喚された攻撃力1500以上のモンスターを破壊して

ゲームから除外する！その2体は同時に召喚されたことで2対とも破壊できるぜ！」

「そんな！2体とも！」

奈落の落とし穴の効果に翔が驚きの声を上げる。

「そうだ。奈落の落とし穴は対象を取らない罫。同時に攻撃力1500以上のモンスターが召喚されたらそのモンスターを全て破壊し、除外できる。」

翔の疑問に三沢が答えていた。

させない？そりゃこっちの台詞だ！

「オレはカウンター罠、盗賊の七つ道具を発動！ライフを1000ポイント支払い、奈落の落とし穴の効果を無効にして破壊する！」

「ひよ！？」

沙耶：LP2000 1000

七つ道具の効果で奈落の落とし穴が破壊された。

「ひよひよ、だが攻撃力が下がったそんなモンスターじゃ俺の昆虫たちには届かないぜ！ましてや昆虫族が増えたことで女王様の攻撃力もアップだ！」

インセクト女王

ATK：3200 3800

「へっ」

羽蛾の言葉に思わずにやけちまう。オレは賭けに勝ったぜ。

「ひよ？な、何がおかしい？」

「へへ……」

「何がおかしいんだあ！？」

オレが笑ってるのを見て羽蛾が取り乱す。

「オレは賭けに勝ったぜ。お前が奈落を発動させなけりゃオレは負けてた」

「な！？」

「オレは手札の冥王竜ヴァンダルギオンを特殊召喚！こいつはカウンター罠でカードの効果が無効にしたとき、手札から特殊召喚できる！」

冥王竜ヴァンダルギオン

星：8

ATK：2800 2100

DEF：2500 1800

嵐、お前がくれたカードが活躍してくれたぜ。

「な、なんだ。そんなモンスターじゃ何の役にもたたないよ！」

「そいつはどうか？こいつはカウンター罠で無効にしたカードの種類によって違う効果を発動できる！罠を無効にした場合は相手フイルドのカードを1枚破壊！オレはこの効果でDNA改造手術を破壊！」

「なに！？」

ヴァンダルギオンの咆哮でDNA改造手術が破壊された。

「オレのモンスターがドラゴン族に戻ったことでインセクト女王の攻撃力ダウン！これで攻撃できるぜ！」

インセクト女王

ATK：3800 3000

「ふん！攻撃できようがそいつらの攻撃力じゃ俺の昆虫たちは倒せやしねえよ！」

「そいつはどうか？オレは手札から永続魔法、一族の結束を発動！墓地に存在するモンスターの種族が1種類の場合、自分フイルドのその種族のモンスターの攻撃力を800ポイントアップする！」

タイラントドラゴン

ATK：2200 3000

トライホーンドラゴン

ATK：2150 2950

冥王竜ヴァンダルギオン

ATK：2100 2900

ドル・ドラ

ATK：300 1100

「なあ!？」

羽蛾には伏せカードも手札もねえ!これでオレの勝ちだ!

「まずはタイラントドラゴンでアルティメットインセクトに攻撃!
ブラストファイア!」

「ぐう!」

インセクター羽蛾：LP4000 3700

「これでオレのモンスターの攻撃力は元に戻るぜ！」

タイラントドラゴン

ATK：3000 3700

トライホーンドラゴン

ATK：2950 3650

冥王竜ヴァンダルギオン

ATK：2900 3600

ドル・ドラ

ATK：1100 1800

「ひ、ひ…！」

「さらに昆虫族が減ったことでインセクト女王の攻撃力もダウンだ
「！」

インセクト女王

ATK：3000 2800

「冥王竜ヴァンドルギオンでインセクト女王に攻撃！冥王葬送！」
ヴァンドルギオンの攻撃がインセクト女王を消し飛ばした。

インセクター羽蛾：LP3700 2900

「じよ、女王様〜！」

羽蛾がインセクト女王が破壊されて泣いてるが知ったこっちゃない。

「タイラントドラゴンは相手フィールドにモンスターが存在するとき、2回攻撃が可能となる！タイラントドラゴンでインセクトモンスタートークンに攻撃！行くぜ相棒！ブラストファイア！」

タイラントドラゴンの炎がインセクトモンスタートークンを飲み込んだ。

「ギョエエエエエエエエエエ！……！」

インセクター羽蛾：LP28000

勝った……これで退学しなくて済む。オレが嵐のほうを見ると嵐が笑って手を振っていた。

そ、そういうば……勝ったら灯台に来てくれって言ったんだ。やばい……デュエルよりも緊張する。多分オレの顔真っ赤だろうな。

〈SIDE END〉

第9話 制裁デュエル、龍の姫と昆虫馬鹿（後書き）

という訳で第9話でした。

そして遂に次回、沙耶が嵐に……………

第10話 重なる想い、伝える真実（前書き）

第10話です。デュエルはなしでついに嵐と沙耶が……

第10話 重なる想い、伝える真実

〔SIDE：ARASHI〕

制裁デュエルの終わったその日の夜、俺は沙耶に呼び出された灯台に向かっていた。

（しかしよ、どうすんだよ相棒？呼び出された理由ぐらいわかってんだろ？）

当たり前だ。小説初めにあるように俺は鈍感じゃない。

（だからメタな発言止めるって）

ま、俺の答えはもう決まってるけどな。

それからしばらく歩いていき、灯台の近くに行くとすでに沙耶が待っていた。

「よ、よう。来て…くれたんだな」

「まあ約束したしな」

俺がそう言つと沙耶は顔を真っ赤にして指をもじもじさせている。
やばい、可愛い……

「えと…その…」

俺がここに来てから数分…いまだに沙耶はもじもじしてなかなか喋れないらしい。

「い、1回しか言わないから…よく聞けよ？」

「おっ」

「お、オレは…あ、嵐のことが…その…あ、嵐が好きだ！」

沙耶はそう言うつとさらに顔を真っ赤にした。

「あんとき、万丈目のデュエルの後、お前がオレのこといい女だつて言ってくれて…すげえ嬉しかった。

オレのこと女扱いする奴なんてほとんどいなくて、オレもそんなの興味なかったけど、お前に言われるとすげえ嬉しくて…だから…」

沙耶がそこまで言うつと俺は沙耶を抱きしめた。

「あ、ああああ嵐!？」

俺が抱きしめると沙耶が慌て始める。

「俺も、お前が好きだよ」

「え?ええ!??」

「……なんでそんなに驚くんだよ?」

「だ、だってオレなんて全然女らしくねえし。ガサツだし……」

んなこと気にしてんのか……

「だから？そんなの、俺がお前を好きになんのに関係ないだろ？」

「い、いつから？」

「初めて会ったときからだな……一応、一目惚れだったんだぜ？」

「そ、そうなのか……」

沙耶が俺の腕の中で顔を真っ赤にして胸に顔をうずめてくる。

「お、オレで……いいんだよな？」

「俺は沙耶がいいんだよ」

「そっか……」

こうして俺には彼女が出来た。まあまだ問題はあるが……とりあえず……

「沙耶、しっかり掴まってるよ？」

「へ？うわ！？」

俺は沙耶を抱えて……所謂お姫様抱っこってやつだ……その場を走り去る。

「い、いきなりなにすんだよ！？」

「後ろ見ても」

「え？ってあいつら！」

そう、俺の後方には十代、翔、隼人、明日香、大地、ジュンコ、ももえがいる。どうやら覗いてたらしい。

まあムードを大事にしようと告白が終わるまで放つといたけど。下手にはらすと沙耶が告白を止めかねなかったからな。

結局そのまま沙耶をブルー寮の俺の部屋まで連れてった。

「ん、撒いたみたいだな」

ちなみに沙耶は現在ド緊張中。まあついさっき告白して付き合っことになった彼氏の部屋に連れ込まれりや緊張もするわな。

(んでもなんでわざわざ相棒の部屋に連れてきたんだよ？女子寮の前で降ろしや良かったのによ)

「まあこっちのがちょうど良かったしな」

「ちょ、ちょうどいい？」

あ、口に出たか。まあやましいことじゃないけど……沙耶の奴なに想像してんだ？さらに顔真っ赤になってやがる。

「おい、ちょっとこっち来い」

俺は鏡の前に立つと沙耶を俺の傍に呼ぶ。顔を赤くして近づいてくる沙耶。

「な、なんだよ？」

「ちょっと紹介したい奴がいてな」

俺がそう言つと鏡の中の俺の髪が白く染まり、バクラの姿に変わった。

「よう、初めましてってか？」

そんな軽口を叩くバクラに沙耶は目を見開いていた。

＼SIDE END＼

＼SIDE SAYA＼

さほい、さほいさほいさほい……

オレは制裁デュエルの後、灯台に嵐を呼んだ。もちろん告白するた
めに。

嵐は約束通りに灯台に来てくれて、いざ告白しようと思ったらなか
なかい出せなかった。

オレが言い出せないで数分が経って、オレは嵐に告白した。

もともと断られるのはわかってた。オレみたいなガサツな女が告白
しても迷惑なだけだと思ってた。

でも、オレが告白したら…嵐に抱きしめられた。抱きしめられた瞬
間脳が沸騰するかと思った。

それで嵐は……

「俺も、お前が好きだよ」

オレはしばらく呆然としてた。だって、他の女子から人気のある嵐
がオレのこと好きなんて……

でも嵐はオレが良いって言うってくれて……

その後オレは嵐にお姫様抱っこされてその場を離れた。理由はたん
に明日香たちが告白したところを覗いてやがったからだ。

ちなみに嵐にお姫様抱っこされたときオレはまた脳が沸騰しそうに
なった。

オレは嵐に連れられてブルー寮の嵐の部屋へ。そして今に至る。

やばい、やばいやばい……

嵐は窓の外を見て明日香たちがいないか確認してるけどオレはそれ
どころじゃない。

男……それもか、かか彼氏の部屋に2人きり。か、彼氏で良いんだよな？良いよな、嵐もオレのこと好きだって言ってくれたし。

「まあこっちのがちようど良かったしな」

「ちよ、ちようどいい？」

ちよ、ちようど良いってなんだ？もしかして……このまま……いや、別に嫌じゃない。嫌じゃないけど、こ、心の準備が……

「おい、ちよっとこっち来い」

嵐が鏡のほうにオレを手招きする。や、やっぱりそうなのか？

「な、なんだよ？」

「ちよっと紹介したい奴がいてな」

……は？紹介したい奴？でも、この部屋にはオレと嵐しか……
オレは嵐に促されるように鏡を見る。するとそこに写っていた嵐の髪が白く染まっていた。

「よっ、初めましてってか？」

そこにはオレの隣にいる嵐と髪の色が違うだけのもう1人の嵐が立っていた。

〈SIDE END〉

〈SIDE：ARASHI〉

バクラを見た沙耶が口をあんどりと開けて驚いている。

実は俺は鏡の前に立つと人格を変更しなくても他の人間にバクラの姿を見せることが出来る。

もっとも、バクラがその気にならなきゃ鏡の中の俺がバクラに変化することは無いが。

「あ、嵐？こいつは誰だ？」

沙耶の質問に俺はバクラのことを説明する。バクラは約3000年前のエジプトの盗賊の魂で今は俺の身体に宿っていること。

バクラはかつて決闘王・武藤遊戯と命をかけたゲームの末、消えたはずだがなぜか気が付いたら俺の身体にいたこと。

バクラは本物の闇のゲームを行うことが出来ること。そして俺がこことは違う世界から来たこと。

「じゃ、じゃあ、あの廃寮でのことは……………」

「ああ、ありゃあ俺様がやった」

沙耶の問いかけにバクラが答える。

「マジかよ……………」

「信じられないか？」

俺がそう言つと沙耶は俺のほつを真つ直ぐに見てくる。

「正直信じられねえ話だけど、嵐がこんなことで嘘を言つとも思えねえし。なによりこの眼で見ちまったからな。でも、なんでオレにこのことを教えたんだ？」

沙耶の疑問ももつともだ。いちいちこんなこと話したら俺から離れていく可能性もあったのに話した。その理由は単純だった。

「俺は…………自分の彼女に隠し事はしたくない、それだけだ。俺のこと、嫌いになったか？」

俺がそう言つと沙耶が俺に抱き擦り寄つてきた。

「馬鹿…………そんなわけねえだろ？こんぐらいでオレがお前のこと嫌いになったりするかよ」

沙耶がそう言つと凄く嬉しくなってきた。

「へっ、相棒。俺様は引つ込んでるから2人でゆっくりしろよ」

バクラはそう言つと引つ込んだらしく鏡の中のバクラが俺の姿に戻つた。

そしてそんなバクラの言葉に苦笑いしながら俺と沙耶の唇は重なつた。

それからしばらく後、俺は沙耶を女子寮に送つていった。ちなみに手は出してないぞ？付き合つたその日に手を出すとかはさすがにな。

～SIDE END～

第10話 重なる想い、伝える真実（後書き）

第10話お送りしました。

さて、次回は……………

付き合いだした嵐と沙耶。しかしそんな2人を快く思わない人間が現れて……………

第11話 不純異性交遊？対決、龍の姫と委員長（前書き）

今回はタイトルどおり沙耶と彼女のデュエルです。

最初に言っておく。彼女のが好きな方申し訳ありません。

第11話 不純異性交遊？対決、龍の姫と委員長

嵐と沙耶が恋人同士になってから3日が経過した。

「さて、昼飯にするか」

「お、おい嵐！」

嵐が教室を出ようとするすると沙耶が声をかけてきた。

「どうした？」

「えと、その、これ……」

沙耶は青い布で包まれた弁当箱を差し出した。

「俺に？」

「お、おう。ふ、2人分作ってきたんだ。一緒に食わねえか？」

沙耶は真っ赤になりながら嵐に弁当箱を差し出す。

「いいぜ。一緒に食おう」

嵐がそう言っていると沙耶も顔を赤くしながらも満面の笑顔で嵐についていった。

その光景に女子生徒は嫉妬の視線を沙耶に浴びせ、男子生徒は……

「お、おい。あれがあの加賀見か？」

「加賀見って、あんなに可愛かったか？」

嵐と付き合いだして女らしい姿を見せ始めた沙耶に戸惑っていた。

そして残された翔たちは……

「ぶはあ……」

「翔！どうした！」

「あの甘い空気にやられたんだな……ぶはあ」

「隼人おおおおおおおおおおお！！！！！！」

十代は翔と隼人を保健室へ担いでいった。

一方、嵐と沙耶はアカデミアの校舎の片隅の芝生で並んで座り、沙耶の作ったお弁当を食べていた。

「うまい！沙耶料理できたんだな！」

「お、オレンちは兄貴たちばかりでお袋と親父は共働きだからオレが料理作ってたんだよ」

「特にこの唐揚げとエビフライが絶品だ」

「ほ、ホントか？」

「ああ、これならいつでも嫁に来れるぜ」

嵐がそう言つと沙耶はボンツと音がしそうなくらい赤くなった。

「よ、よよ嫁に来れるってなに言ってるんだよ！」

「んだよ。沙耶は嫌なのか？」

「い、嫌だなんて、そんなこと……ないけど……」

「じゃあいいじゃねえか」

嵐はそう言いながらも弁当に箸を進める。そして食事も食べ終わろうとしたときだった。

「その2人！不純異性交遊は許しませんよ！」

「「ん？」」

嵐と沙耶が声のしたほうを見るとそこには以前、嵐に敗れた原麗華が立っていた。

「んだよ？一緒に飯食ってるだけだろ？」

「お黙りなさい！不純異性交遊は認めませんよ！」

そんな麗華に嵐は溜息を吐いた。

「はあ、でも俺と沙耶は恋人同士だぜ？それにやましいことをしているつもりはないし文句を言われる筋合いもない」

「それが間違いです！学校は勉学の間！そこで色恋沙汰など！」

「おい、テメエさつきから聞いてりゃ好き勝手言いやがって。恋愛は人の自由だろうが！」

麗華の言葉に沙耶が文句を言う。

「加賀見さん、恋愛などデュエルでは何の意味もありません。あなたもそんなものにうつつを抜かしないで勉強したらどうですか？」

「……テメエ「やめろよ沙耶」…嵐……」

さらに文句を言おうとする沙耶を嵐がなだめる。

「わからない奴に何を言っても無駄だ。それよりも他の場所で弁当食おうぜ」

嵐がそう言って沙耶の手を引いてその場を後にしようとする。麗華がさらに食い下がってきた。

「待ちなさい！不純異性交遊をやめない限り逃がしませんよ！」

「ああもうござってえ！テメエになんと言われようとオレは嵐と別れる気はねえ！どうしてもってんならデュエルで決めようぜ！」

沙耶はそう言うとデュエルディスクを起動させた。

「いいでしょう。私が勝ったらあなたたちには不純異性交遊を即刻やめてもらいます」

「オレが勝つたらもう2度とオレたちに口出しすんじゃねえ！」

「おい沙耶！」

「悪い、嵐。でも、オレはお前と一緒にいる時間をこんなことで邪魔されたくねえんだ」

「…ちつ、しょうがねえな。負けんなよ？」

「当たり前だ！」

「デュエル！」

「オレの先攻、ドロー！オレはサファイアドラゴンを攻撃表示で召喚！」

沙耶のフィールドには美しい青いドラゴンが召喚された。

サファイアドラゴン

星：4

ATK：1900

DEF：1600

「さらにカードを2枚伏せてターンエンド！」

沙耶

LP：4000

手札：3枚

モンスター：サファイアドラゴン（攻撃表示）

魔法・罫：伏せカード2枚

「私のターン、ドロー。私は魔法カード、デスメテオを発動！相手ライフに1000ポイントのダメージ！」

すると沙耶を巨大な火球が襲い掛かった。

「させねえ！罨カード、マジックジャマーを発動！手札を1枚捨てることで魔法カードの発動を無効にして破壊する！」

沙耶がカードを墓地に送ると迫っていた火球がかき消される。

「だがまだ終わりじゃねえ！オレはカウンター罨で相手のカードを無効にしたことで手札から冥王竜ヴァンダルギオンを特殊召喚する！」

冥王竜ヴァンダルギオン

星：8

ATK：2800

DEF：2500

「さらにこいつはカウンター罨で魔法カードを無効にして特殊召喚したとき、相手ライフに1500ポイントのダメージを与える！」

「なっ！きゃあ！」

麗華：LP4000 2500

「どつだ！これが嵐から貰った、オレと嵐の絆の竜だ！」

「なるほど、それがあの制裁デュエルで勝利を決めたカードですか。ですがまだ私のターンは終わってません。私は2枚目のデスメテオを発動！あなたに1000ポイントのダメージを与えます」

沙耶：LP4000 3000

「ぐう！」

「さらに！手札から火炎地獄を発動！私は500ポイントのダメージを受け、あなたに1000ポイントのダメージを与える！」

麗華：LP2500 2000

沙耶：LP3000 2000

「そしてカードを3枚伏せてターン終了です」

麗華

LP：2000

手札：0

モンスター：0

魔法・罫：伏せカード3枚

「（モンスターがいねえのか？）オレのターン、ドロロー！よし、オレはサファイアドラゴンを生贄に、マテリアルドラゴンを召喚！」

沙耶のフィールドに金色のドラゴンが姿を現した。

マテリアルドラゴン

星：6

ATK：2400

DEF：2000

「この瞬間、畏カード、自業自得を発動！あなたのフィールドのモンスター×500のダメージを与えます！」

沙耶：LP2000 3000

「な！何故ライフが!?!」

「マテリアルドラゴンの効果だ。こいつがいる限り全てのライフにダメージを与える効果はライフを回復する効果に変わる。そしてマテリアルドラゴンでダイレクトアタック！」

「通しません。速攻魔法、終焉の炎を発動。私のフィールドに黒焰トークンを2体、守備表示で特殊召喚します」

黒焰トークン

星：1

ATK：0

DEF：0

「だが攻撃するには変わらねえ！マテリアルでトークンに攻撃！」

「迂闊ですね。私は罨カード、カオスバーストを発動します。相手の攻撃宣言時、私のモンスター1体を生贄にして攻撃モンスターを破壊し、相手に1000ポイントのダメージを与えます」

麗華の発動したカードに沙耶は笑顔になった。

「へっ、迂闊なのはテメエだろ？マテリアルの効果発動！手札を1枚捨ててモンスターを破壊する魔法・罨・効果モンスターの効果を無効にして破壊する！」

「な、なんですって！」

「これでカオスバーストの効果は無効になるが、コストで払ったトークンは戻らねえ！リバースカードオープン！竜の逆鱗！オレのドラゴン族は全員貫通効果を得る！ヴァンダルギオンでトークンを攻撃！冥王葬送！」

「っ！？きゃあああああ！！！！！」

麗華：LP20000

その後、嵐と沙耶は麗華と別れ、教室に向かっていた。

「沙耶」

「あん？ん！」

そんな中、嵐は沙耶の名を呼ぶ。呼ばれた沙耶は嵐の方を向くと突然キスされた。

「い、いきなりなにを！？」

顔を真っ赤にしながら慌てる沙耶。一方の嵐はどこ吹く風と笑っている。

「頑張った沙耶にご褒美だ」

「~~~~~！！・・・もう1回・・・」

沙耶のおねだりに嵐は再びキスをするのだった。

ちなみにそれを偶然見ていた数人の生徒が砂糖を吐いて保健室に担
ぎこまれたのを嵐と沙耶は知らない。

第11話 不純異性交遊？対決、龍の姫と委員長（後書き）

というわけで第11話でした。麗華の出番はもう無い予定です。麗華好きの皆様、本当にごめんなさい。

デッキレシビ公開（前書き）

今回は嵐と沙耶のデッキの内容を公開です。

デッキレシピ公開

ども、語り部です。今回は主人公である嵐とヒロインの沙耶のデッキレシピを公開したいと思います。

嵐「いきなりな企画だな」

沙耶「ネタがねえんだろ？」

うっさい。では早速嵐のデッキから！

<モンスター25枚>

theアトモスファイア×3
ダーク・シムルグ×2
トーチゴーレム×2
溶岩魔人ラヴァ・ゴーレム×2
邪帝ガイウス×1
神禽王アレクトール×1
サファイアドラゴン×2
ブラッド・ヴォルス×2
アーマード・ビー×2
魔導戦士ブレイカー×2
ランス・リンドブルム×2
キラートマト×2

クリッター×1
幻銃士×1

<魔法8枚>

大嵐×1
大寒波×1
スケープ・ゴート×1
終焉の炎×2
天使の施し×1
強欲な壺×1
ハリケーン×1

<罫7枚>

激流葬×1
聖なるバリア・ミラーフォース×1
奈落の落とし穴×2
魔封じの芳香×2
リビングデットの呼び声×1

計40枚

なんという高レベルの山。

嵐「つーかこれほとんど作者のデッキそのままだろ？」

その通り。ただ強欲と施しが俺のデッキでは手札断殺になってるだけ。

沙耶「これでよく事故んねえよな」

何気に事故率低いんだよ。キラートマトとトーチがくれば一気にアトモスファイアに繋がるし。シムルグ用にほとんど風と闇で構成されてるけど。

嵐「その2属性以外のがラヴァだけだしな」

さて続いては沙耶のデッキだ！

<モンスター25枚>

タイラント・ドラゴン×2

トライホーン・ドラゴン×2

冥王竜ヴァンダルギオン×2

マテリアルドラゴン×1

ストロング・ウィング・ドラゴン×1

バイス・ドラゴン×1
サファイアドラゴン×2
神竜ラグナロク×2
ロード・オブ・ドラゴン・ドラゴンの支配者・×2
ランス・リンドブルム×2
マスクド・ドラゴン
仮面竜×3
ドル・ドラ×1
クリッター×1
ミンゲイドラゴン×3

<魔法8枚>

大嵐×1
強欲な壺×1
天使の施し×1
ドラゴンス・ミラー
龍の鏡×1
ドラゴンを呼ぶ笛×2
融合×2

<罫9枚>

聖なるバリア・ミラーフォース・×1
天罰×2
盗賊の七つ道具×2
マジックジャマー×2
龍の逆鱗×2

<エクストラ4枚>

竜魔人キングドレーン × 2

F・G・D × 2
ファイブ・ゴッド・ドラゴン

計42枚

これもまた上級系のデッキだな。

沙耶「でも結構回るぜ?」

畏がカウンター畏が多いのはヴァンダルのため?

沙耶「おう、嵐に貰ったカードだしな」

おうおうラブラブなことですね。

バクラ「ところで俺様のデッキは紹介しねえのか?」

お前は滅多にデュエルしないからいいんだよ。お前のデッキはアニ

メモリアルが多いからな。

じゃあ今日はここまで。皆様、今後も遊戯王GXの闇纏つ風と盗賊王をよろしく願います。

デッキレシピ公開（後書き）

こんな感じですよ。ちなみにバクラのデッキはしばしお待ちを。
まだバクラも一回しか戦ってないんでデッキを公開するのはあれな
んで。

第12話 嵐の怒り、豚を潰せ（前書き）

今回、再び奴登場。そして一部嵐が壊れます。

第12話 嵐の怒り、豚を潰せ

〔SIDE：ARASHI〕

ついこの間、大地と準のデュエルがあった。これは原作通り大地が勝った。そして準もデュエルアカデミアを出た。多分しばらくしたらノース校に行くだろう。ちなみにSALサルとのデュエルは十代がやった。

「で、どうしたんだよ沙耶？」

俺は今日の前でいかにも悩みありますって顔をしている沙耶がいる。

「いや…別に……」

こいつ、俺がわからないとでも思ってるのか？

「あのなあ、自分の彼女が悩んでるかどうかぐらいわかるぜ？」

「うう……でも……」

「それについては私が説明しますわ」

どこからかもえが現れた。

……説明中……

「なん……だと……？」

俺はももえの説明を聞いて愕然とした。

沙耶が悩んでる理由……それは最近沙耶にストーカーが出たのと……とだった。

「それは、確かなのか？」

「もちろんですわ。しかも犯人がいたと思われる場所になん……」

「なんと？」

「沙耶さんの着替え中の隠し撮り写真が落ちてたんですの」
それを聞いた俺の中から黒い感情が溢れてきた。

「おい十代」

「な、なんだ？」

十代の顔が引きつってる。そんなに悪い顔してるか？

「ちょっと木のバットと釘とトンカチを持ってきてくれ。ああ、チ
エーンソーがあったらそっちのほうが良いな」

俺がそう言つとその場にいた十代たちの顔が真っ青になる。

「あ、嵐くん？い、いったい何をする気っすか？」

翔が聞いてきたので俺は普通に答えた。

「ん？大丈夫だ翔……」

「そ、そっすか……」

俺がそう言つと翔を含む周りの奴らはホッとしたような表情になっ
た。そう、大丈夫だ。

「証拠は残さないから」

「大丈夫じゃないっす!」

結局俺は沙耶のストーカーを捕まえるため女子寮の寮長の鮎川先生に許可を貰い、十代たちと共に女子寮の沙耶の部屋の外に待機した。

「コロスコロスコロスコロスコロスコロス」

俺は待機しながら呪詛の言葉を吐いていた。

「アニキ、嵐くんが恐いつす」

「しかし普段冷静な嵐がな……これが恋か」

翔は十代に泣きつき、大地は冷静に分析していた。

ガサガサ

俺たちが待機してるところの近くの木の上から音が聞こえた。

「来た……」

俺はその木に近づくと……

ドゴォン！

その木を思いっきり蹴った。

「ぶぎゃー！」

木の上から不審者が落ちてきた。すると大地が連絡してたのか寮から沙耶たちが走ってきた。

「お、お前は!?!」

その不審者の正体は……豚……もと以前月一試験で沙耶に負けた豚見和夫だった。

「テメエが犯人だったのか!?!」

「何故こんなことをした!」

沙耶と大地がまくし立てる。

「ぶひひひ、だって沙耶タンはぼきのだもん。ぼきのものを見て何が悪いんだい?」

その言葉に俺は完全に切れた。

「なあ、こいつ挽き肉ミンチにしても良いよな?」

「ぶひ!?!」

「だいたいテメエはなに勘違いしてんだ？沙耶は俺の女だ。勝手にテメエのもんにするじゃねえ！」

俺がそう言つと沙耶が顔を真っ赤にし、ももえとジュンコは「キャー」とか言っている。

「ぶひ！なんだとく、ぼきは中等部の時から沙耶タンを見てたんだぞ！だから沙耶タンはぼきのだ！」

「テメエいい加減にしろ！」

そんな豚の言葉に今度は沙耶が切れた。

「さ、沙耶タン？」

「お、オレは、嵐の彼女だ！だから、テメエなんざお呼びじゃねえんだよ！」

沙耶はそう言つと顔を真っ赤にして俺の後ろに隠れた。どうやらかなり恥ずかしかったらしい。

ちなみに翔と大地、明日香、ももえにジュンコは沙耶の言葉に顔を赤くし、十代は首を傾げていた。

(ホントに十代はガキだな)

久々のバクラの突っ込みを聞き流す。すると豚見がプルプルと震えだした。

「沙耶タン……そんなの認めないぞ！こうなつたらデュエルだ！」

「良いぜ。潰してやる」

「デュエル!!!」

「俺のターン、ドロー!」

先攻は俺だ。手札に切り札はないが十分戦える。

「俺は魔法カード、強欲な壺を発動!カードを2枚ドロー!そしてモンスターを1枚セットし、さらにカードを2枚伏せてターン終了!」

嵐

LP:4000

手札:4枚

モンスター:裏側守備モンスター1枚

魔法・罫:伏せカード2枚

「ぼきのターン、ドロー!ぼきは斬首の美女を攻撃表示で召喚!」

斬首の美女

星：4

ATK：1600

DEF：800

「罨カード発動！奈落の落とし穴！相手が攻撃力1500以上のモンスターを召喚・特殊召喚したとき、そのモンスターを破壊し、ゲームから除外する！」

「ぶひー！」

「テメエにはなにもさせねえ。俺の女に手を出したことを後悔させてやる」

「ぶひひ、まだぼきのターンは終わってないぞ！ぼきはカードを3枚伏せてターン終了！」

豚

LP：4000

手札：2枚

モンスター：なし
魔法・罾：伏せカード3枚

「俺のターン、ドロ。俺は魔法カード、大寒波を発動！互いのプレイヤーは次の俺のターンのスタンバイフェイズまで魔法・罾を使用できずセットすることもできない！」

「ぶひ！」

俺がカードを使うと俺の伏せカードと豚の伏せカードが凍りついた。

「さらに俺は裏守備モンスターをリリースし、邪帝ガイウスを召喚！ガイウスの効果！このカードがアドバンス召喚に成功したとき、フィールド上のカード1枚をゲームから除外する！俺はテメエの真ん中の伏せカードをゲームから除外！」

邪帝ガイウス

星：6

ATK：2400

DEF：1000

「ぶひい！僕のミラーフォースが！？」

おお、大当たりだな。

「そして生贄にしたクリッターの効果発動！デッキから攻撃力1500以下のモンスターを手札に加える！俺はtheアトモスフィアを手札に加える！そしてガイウスの攻撃！ダーククラッシュ！」

「ぶぎいいいいいい！！！」

豚：LP4000 1600

「俺はこれでターン終了だ」

嵐

LP：4000

手札：5枚

モンスター：邪帝ガイウス（攻撃表示）

魔法・罫：伏せカード1枚

「ぼきのターン、ドロ！くそう……ぼきはモンスターを
セットしてターン終了だ」

豚

LP：1600

手札：2枚

モンスター：裏守備モンスター1枚

魔法・罨：伏せカード2枚

大寒波のせいでうまく動けないみたいだな。

「俺のターン、ドロー！俺はリバーズカード、リビングデットの呼び声を発動！墓地からクリッターを特殊召喚！」

クリッター

星：3

ATK：1000

DEF：600

「クリッターを生贄に、神禽王アレクトールを召喚！さらに手札のハリケーンを発動！フィールド上の魔法・罨を全て手札に戻す！俺はリビングデットの呼び声が、お前は伏せカード全てが手札に戻る！」

「ぶぎ！？なんでリビングデットの呼び声が！？」

「このカードは蘇生したモンスターが破壊されたときに破壊される。俺がしたのは生贄だから破壊されずフィールドに残っていた！」

神禽王アレクトール

星：6

ATK：2400

DEF：2000

「クリッターの効果で幻銃士を手札に加える！そしてガイウスで裏守備モンスターに攻撃！」

「ぶぎい！ぼきの剣の女王が！」

「剣の女王の効果はリバーズ時、相手の魔法・罠の数×500のダメージを与える。だがハリケーンの効果で俺の場に魔法・罠は存在しない！」

「ぶひ、ぶひひ……」

「これで終わりだ！アレクトールでダイレクトアタック！」

「ぶひい！い！い！い！い！い！い！い！い！い！い！い！い！い！い！」

豚：LP16000

「俺の勝ちだ。テム工は学園に突き出してやる」

俺が豚に手を伸ばすと豚はその手を払いのけた。

「ぶひい！ぼきに触るな！沙耶タン助けて！」

「うぜえんだよ！寝てる！」

「ぶひい!！」

沙耶が豚を蹴り飛ばし、豚は泡吹いて気絶した。

「空手5段舐めんな!.....あ.....」

この日、沙耶が隠していた真実が明らかになった。

結局、豚は退学になり、ストーカー行為、さらには盗撮で警察に突き出されることになった。

そして俺と沙耶はというと。

「で、なんで隠してたんだ？空手の有段者だって」

「だ、だって…ただでさえガサツな女なのに…こんな怪力女なんて知れたら…」

「嫌われるかもってか？」

俺がそう言つと沙耶は首を縦に振つた。

「バーカ、そんなぐらいで嫌いになるかよ」

「嵐…」

「だから、もう隠し事はなしな？」

「おう…」

そして俺と沙耶はさらに親密になった。

（SIDE END）

くおまけく

嵐と沙耶を除いてた方々……

「「「「「ぶはあ」「」「」「」

砂糖を吐いて倒れていた……

第13話 加賀美沙耶の平凡な1日(前書き)

今回は沙耶視点で沙耶の日常です。デュエルはありません。

第13話 加賀美沙耶の平凡な1日

SIDE: SAYA

「ふわあ〜」

オレの朝は結構早い。まず朝起きたら顔を洗って寝癖を直す。そして制服に着替える。

ちなみに以前、大浴場でももえにオレの下着は色気がないとか言われた。オレの下着は基本無地のスポーツブラと普通の女性物のパンツ。

ももえが言うには彼氏ができたんだからもう少し色気のある下着つけたらどうだとか言われた。

……やっぱり嵐もそう言うのが好きなのかな？ だったら……つと、馬鹿なこと考えてる暇ねえな。

着替えが終わるとオレは2人分の弁当を作る。当然オレと嵐の分。実家にいたときはウチの兄貴たちはたいして味わわずに食ってた。でも嵐はいつも美味そうに食ってくれるから作り甲斐がある。今日は嵐の好きな鳥の唐揚げだ。

「あら、沙耶おはよう」

「おはよ」

オレが部屋を出ると明日香とジュンコとももえに会う。するとジュ

ンコの視線がオレの持つてる弁当に向けられる。

「それ、嵐さんに？」

「おう、もう日課だな。いつも美味そうに食ってくれっからな」

オレがそう言うとジュンコがジト目でオレを見てくる。

「あゝ、もう！なんで私には出会いがないのよ！」

「まあまあ」

暴走するジュンコをももえが抑える。これも結構いつもの光景だ。

「ふん……」

ふと声がするほうを見ると麗華がオレを睨みながら寮を出て行った。あの1件以来、麗華は約束通りオレたちに何も言わなくなった。

まあ……たまに睨んでくるけど……

オレが明日香たちと一緒に寮を出る。そしてしばらく4人で歩いて行くと……

「おゝい、沙耶」

嵐が待っていた。

「じゃあ沙耶、先行ってるわよ」

明日香がそう言うのと3人は先に学園に向かい、オレは嵐と一緒にのんびり歩く。

嵐は付き合い始めたときからこうやって女子寮から少し外れたところで待ってるようになった。

だけど女子寮はブルー男子寮よりも学園から遠い。だからいちいち遠回りするような真似しなくても思ったんだけど嵐は「少しでも一緒にのほうが良いだろ?」とか行ってきた。そんなこと言われたら拒めねえ。オレだって一緒に入れて嬉しいし……

「なんだ、まだ馴れないのか?」

嵐が笑いながらオレのほうを見る。

「しょうがねえだろ。馴れねえもんは馴れねえんだから」

オレの顔が真っ赤になっているのは自分でもわかる。今オレの右手は嵐の左手と繋がっている。しかもただ繋いでるんじゃなく「恋人繋ぎ」ってやつだ。正直恥ずかしいけど……でも、嵐の体温が感じられて嬉しい。

周りの女子から嫉妬の視線を受けながらオレたちは学園に向かう。そしてオレたちは教室に入ってしまった。

「俺はアトモスフィアでダイレクトアタック！テンペストサンクシヨンス！」

「うわああああ！！！」

ブルー生徒：LP21000

「「「「きゃ〜〜〜〜！嵐さん！！」」」」

実技の授業。嵐は当然の如く勝利し、他の女子からは黄色い声がかかる。やっぱり嵐は女子に人気あんなあ……

「ねえ。嵐さん、加賀見さんと付き合ってるって本当？」

「なんであんなガサツな人と……」

陰口が聞こえる。別にオレは気にしねえけど……ただ、ときどきホ

ントにオレが嵐の彼女で良いのかと思う……

「なに辛気臭い顔してんだよ？」

すると嵐がやってきてオレの頭を撫でてくれる。

「別に…なんでもねえよ……」

オレがそう言うと嵐は溜息をついてオレの耳元に顔を寄せる。

「俺が好きなのはお前だけだ。周りがなんて言おうと、俺はお前を離す気ないからな？」

「~~~~~!!」

嵐の言葉にオレの顔に熱が集まる。なんで、こいつは1番欲しい言葉をくれんだろ。

「じゃ、がんばれよ？」

嵐にそう言われたオレはデュエル場に向かう。その日、オレは実技授業を1キルで完勝した。

その後、昼になるとオレと嵐は2人で俺の作った弁当を食う。

「えと、ど、どうだ？」

いつも嵐は美味いって言うってくれるし失敗したつもりねえけどやっぱり聞いちまう。

「美味しいぞ。ほら、お前も食ってみろって」

そうやって嵐はオレの口に唐揚げを近づける。うゝ、なんでこいつはこういうこと平然とできんだよ。これ普通女からやることだろ？

「ほら、美味しいだろ」

馬鹿、わかってるくせに。ドキドキしすぎて味なんてわかんねえよ。

その後、放課後は十代たちと一緒にレッド寮でゲームしたりデッサンを作ったりした。そして女子寮に戻る時間になった。

「んじゃ、ここままで良いぜ？」

嵐は毎回女子寮まで送ってってくれる。まったく、オレは空手5段だから心配することねえのに……心配してくれるのは嬉しいけど。

「じゃ、また明日な？」

嵐はそう言うとオレにキスしてきた。これはいつものことで、オレが嵐が送ってくれるのを拒まない理由だ。

「は、本当に立派ですわ」

女子寮に戻ってからは飯食って明日香たちと一緒に大浴場に行く。するとももえがそんなことを言ってきた。ももえの視線は一直線にオレの胸に向かっている。

「あ、あんま見んなよ」

「でも羨ましいわね。どうやってたらそんなに育つのよ？」

ジュンコまで加わりやがった。

「別に、でかたって良いことねえよ。運動のとき邪魔だし、肩凝るし……」

正直胸がでかくても邪魔なだけだ。

「あら。でも殿方の大半は大きいほうが好みでしょ？」

うっ……そう言われると……嵐もでかいほうが好きなのかな？

風呂から出るとオレは自分の部屋に戻ってベッドに入る。明日の弁当のメニューも考えたし、後は寝るだけだ。

こうしてオレの1日は終わった。

～SIDE END～

第14話 奪われたカードを取り戻せ（前書き）

今回、嵐は別のデッキで戦います。

感想お待ちしております。

第14話 奪われたカードを取り戻せ

〔SIDE：ARASHI〕

俺は今、十代たちとゲーム中。一応言っとくと俺だって毎回毎回沙耶といちゃついている訳じゃない。こうやって十代たちと遊んだりもしてる。

「ソロモンよ！私は帰ってきたー！」

「ああ！嵐くんここで核弾頭は酷いっす！」

「あー！巻き込まれた！」

「今のうちに反撃の準備なんだな」

ちなみに上から俺、翔、十代、隼人だ。今やってるのはわかる人はわかると思うがガンダムVSガンダムだ。

チームは俺と隼人ペアVS十代、翔ペアだ。俺はGPO2で十代と翔のゴツドとノーベルを吹き飛ばした。

ちなみに隼人はヴァーチェという重量級コンビだ。

「うう、嵐くん強すぎっす」

「くそう、嵐相手だと勝てる気しねえ」

圧勝。ふふふふ、この俺にガンガンで勝てると思ったか？この世界にあったのは驚いたが俺はガンガンでは負けたことはない。

(自慢することかよ)

うっさい。

「こつなつたら3対1で勝負っす！」

翔がそんなことを言い出した。普通ならこんな奴はいないだろうが甘い！

「良いだろう！3人で俺に勝てるかやってみるがいい！」

そして戦闘開始。俺の選んだのはDX。一方あいつらは十代がゴツド、翔がストフリ、隼人がプロヴィデンスというチーム。何でもいいけど十代、ゴツド好きだな。

その結果は！？

「うわー！ツインサテライト撃ってきたっす！」

「あー！直撃した！」

「3人揃って喰らったんだな！」

勝利！3人を一直線に誘導してツインサテライトをぶちかましてやった。

「そつえば嵐くん知ってるつか？最近ブルーの生徒がレッドの生徒からカードを奪ってるらしいっす」

「なんだよそれ！？」

翔の言葉に十代が怒る。まあ確かに胸糞悪い話ではあるな。

「……………！！」

「……………！！」

ん？なんか面が騒がしいな。

「なんだ？」

俺たちが部屋を出るとブルーの生徒とレッドの生徒が言い争っている

た。

「返してくれよあ！それは僕の大切なカードなんだ！」

「はっ！屑レッド風情が持つてるには勿体無いだろ？俺様が有効に使ってやるよ！」

どうやらさつき噂をしていたブルーの生徒らしい。

「噂をすればなんとやらだな」

「おい！テメエなにやってやがる！」

俺が止めに入ろうとすると沙耶がやってきてブルー生を怒鳴りつけた。

「テメエ、人のカード奪うなんざぶざけた真似してんじゃねえよ！」

はあ、ホントにそこらの男たちよりも男らしいよな。まあ女らしいところもあるけど。

「んだよ。なんでレッドの肩なんて持つんだよ？ああ、そっか。お前学力レッド並みだもんな？女子じゃなきゃブルーにいられるわけねえもん。っていうかホントにお前女か？その胸が本物か俺が確かめてやるうか？」

そう言ってブルーの……もうめんどくさい。カスで良いや。カスはこともあるうに俺の沙耶の豊満な胸に手を伸ばす。どうやら死にたいらしい。まあ俺が出なくても沙耶ならボコれるけどそれじゃ俺の気がおさまらない。

「おい。テメエ、人の女になにしようとしてんだ？」

俺はレッド寮の2階から飛び降りるとカスの腕を掴んだ。

「げ！紫藤！」

「テメエ、人のカード奪うだけじゃ飽き足らず俺の女にセクハラたあ、いい度胸じゃねえか」

「な、なんだよ！」

カスは俺の手を振り払うと俺を睨んできた。

「し、紫藤くん」

ちなみにこのレッド生とは、というか俺はレッドのほぼ全員と顔見知りだ。ちよくちよく十代のとこに来てるからな。

「なんでだよ！なんでレッドの肩なんか持つんだよ！」

「別にレッドに肩入れしてるわけじゃない。俺は、テメエみたいなカスが許せないだけだ。テメエ、何人もレッド生のカードを奪ってるらしいな？」

「だ、だからなんだよ？こんな雑魚どもが持つっても何の意味もねえだろうが！」

ちっ、本当に虫唾が走るぜ。

(確かにな。雑魚かどうかは置いてこんな馬鹿が俺様たちに吠えんのはきにいらねえ)

「じゃあ賭けるよ。俺が勝ったらお前が今まで奪ってきたカードを返せ。お前が勝ったら俺のメインデッキをくれてやる。さらに俺はハンデにメインデッキは使わねえ。サブデッキで相手してやる」

「……な!?!」「」「」

俺がそう言つと沙耶以外の全員が驚いていた。沙耶は……信頼してくれてんだろ。負けるわけねえって顔してる。

「だ、ダメだよ紫藤くん!そんな、僕たちのために!」

こいつもいい奴だな。だが、だからこそあいつをぶっ潰す。

「沙耶さん!嵐くんを止めないんすか!?!」

「は?嵐があんな奴に負けるわけねえだろ?」

沙耶は俺のサブデッキも全部知ってるからな。やっぱり信頼してくれてる。

「いいぜ!メインデッキの使えない teme なんざボッコボコにしてやる!」

「デュエル!」「」

「俺の先攻、ドロー!俺はデュアル・サモナーを召喚!」

デュアル・サモナー

星：4

ATK：1500

DEF：0

「さらにカードを2枚伏せてターン終了」

嵐

LP：4000

手札：3枚

モンスター：デュアル・サモナー（攻撃表示）

魔法・罫：伏せカード2枚

「へっ！そんな雑魚モンスターで何ができる！俺のターン、ドロ
！」

さて、こいつはどんなデッキだ？

「俺はゴブリン突撃部隊を攻撃表示で召喚！」

ゴブリン突撃部隊

星：4

ATK：2300

DEF：0

「ゴブリンで雑魚モンスターに攻撃！」

嵐：LP4000 3200

ゴブリンが集団でデュアル・サモナーに攻撃した。しかしデュアル・サモナーは破壊されていなかった。

「な！？何故破壊されていない！？」

「デュアル・サモナーは1ターンに1度、戦闘では破壊されない」
もつとも、デュアル・サモナーの効果はこれだけじゃないかな。

「く、ゴブリン突撃部隊は攻撃したバトルフェイズ終了時に守備表示になる。俺はカードを1枚伏せてターン終了」

ブルー生徒

LP：4000

手札：4枚

モンスター：ゴブリン突撃部隊（守備表示）

魔法・罫：伏せカード1枚

「デメエのターンのエンドフェイズにデュアル・サモナーの効果発動！相手ターンのエンドフェイズに手札、またはフィールド上のモンスター1体を通常召喚できる！」

「フィールドのモンスターを通常召喚ってどういうことっすか？」

翔がデュアル・サモナーの効果に首をかしげている。

「あのカードはデュアルモンスターのサポートカードだ。そしてデュアルモンスターには特有の効果がある。そのために必要なのさ」

「三沢くん」

「特有の効果ってなんだ！？」

十代が眼を輝かせて質問する。

「それは見てればわかるさ。加賀見くんはわかってるみたいだがな」

「まあな。一応あいつの持ってるデッキはだいたい把握してるし」

「俺は手札からエボルテクター シュバリエを通常召喚！」

エボルテクター シュバリエ

星：4

ATK：1900

DEF：900

「（攻撃力1900か。なかなかだが俺の伏せカードは最終突撃命令。攻撃してきたらゴブリンを攻撃表示にして振り返ちだ）」

あの伏せカード、なんかあんな。ま、いいか。

「俺のターン、ドロロー！俺は手札から装備魔法、スーペルヴィスをシュバリエに装備！これによってシュバリエは再度召喚された状態になる！」

「再度召喚……だと？」

「デュアルモンスターはフィールドと墓地に存在するとき、通常モンスターとして扱われる。そして通常召喚権を使うことでデュアルモンスターを再度召喚することによって本来の効果を発動できる！そしてこのスーペルヴィスはデュアルモンスターを再度召喚状態にするカードだ！」

もつともスーペルヴィスの効果はこれだけじゃないがな。

「さらに俺は魔法カード、おろかな埋葬を発動！デッキからヘルカイザー・ドラゴンを墓地に送る！」

「おいおい、自分からデッキのカードを墓地に送るなんてトチ狂ったか！？」

「言ってる。シュバリエの再度召喚時の効果発動！自分フィールドの装備カードを墓地に送り、相手フィールド上のカードを1枚破壊する！俺は伏せカードを破壊！」

するとシュバリエの剣がカスの伏せカードを破壊した。伏せカードは最終突撃命令か……

「なにい！だ、だがまだ！」

「さらに墓地に送られたスーペルヴィスの効果発動！自分フィールドに表側表示で存在するこのカードが墓地に送られたとき、墓地の通常モンスターを特殊召喚する！俺はヘルカイザー・ドラゴンを特殊召喚！」

ヘルカイザー・ドラゴン

星：6

ATK：2400

DEF：1500

「通常モンスター……まさかそいつも!?」

「そう、デュアルモンスターだ」

「そしてこのターン、俺はまだ通常召喚を行っていない！俺はヘルカイザー・ドラゴンを再度召喚！シュバリエでゴブリンを攻撃！」

シュバリエは剣でゴブリンを惨殺した。少しグロイ。

「ははは！攻撃するモンスターをミスったな！残った2体じゃ俺のライフは削れないぜ！」

「そいつはどうか？ヘルカイザー・ドラゴンでダイレクトアタック！ヘルブレスバースト！」

「ぐわぁー！」

ブルー生徒：LP4000 1600

「だが残ったモンスターで攻撃しても俺のライフは1000残るぜ！」

「それはない。ヘルカイザー・ドラゴンの再度召喚時の効果！こいつは1度のバトルフェイズ中に2回攻撃できる！」

「な、なんだと！」

するとヘルカイザーの口が開かれた。

「これでトドメだ！ヘルブレスバースト！」

「うわあああああああ！……！」

ブルー生徒：LP1600 0

「ほら、さっさと返せよ」

俺が手を出すとカスはカードを渡さず逃げ出した。

「あ、待て！」

十代が止めようとするがその必要はない。

「テメエ、どこ行く気だよ？おらあ！！」

「へぶっ！」

沙耶が追いつき、カスを蹴り飛ばした。カスは地面に叩きつけられピクピクしている。

「サンキュ、沙耶」

「お前でも逃がさなかっただろ？」

「俺が行く前にお前が蹴り飛ばしたんだろっか」

「だって、少しでも役に立ちたかったから……」

顔を赤くしてそんなことを言う沙耶。可愛いなあ、チキシヨウ。

「じゃ、あとで」褒美な？

「ん……………」

俺が頭を撫でながらそう言つと沙耶は顔を真っ赤にして俯いた。

この後、カスにカードを奪われていたレッド生がまるでハゲタカのように気絶しているカスに群がり、奪われたカードを取り戻していた。

ちなみに「褒美はキスだからな？エロいことは何にもしてないよ？

第15話 クル・エルナの夢 時を司るカード(前書き)

今回はオリカ登場です。かなり特殊な効果ですが。

ちなみに本作ではこれ以外にオリカが登場する予定はありません。

第15話 クル・エルナの夢 時を司るカード

〔SIDE:ARASHI〕

『た、助けてくれ!』

『いぢ!やめて!』

『ぎぢ ああああああ!』

『お…母……ん……』

目の前で、兵士たちがそこに暮らしていた人々を虐殺していく。

女、子供、老人関係なく俺の目の前で死んでいく。

剣や槍で串刺しにされ、次々に命が消える。

そして、殺された人々は巨大な釜の中に投げ込まれ溶かされ、人が焼かれる匂いが鼻を衝く。

やめろ……なんでこんな……やめろ……やめてくれ……やめろおおお
おおおおお!!

「っ!?!」

そんな悪夢を見ながら俺は目を覚ました。目に映ったのはいつもと変わらない俺の部屋。

「はあ…はあ…はあ…う!」

身体中を嫌な汗が流れる。あの光景が忘れられない。

「オエエエエエ!」

俺は洗面所に駆け込むと洗面台に向かって嘔吐する。

「げほっ、げほっ。あれは…あの夢は……」

「相棒も見たのか?」

すると洗面台の鏡に映る俺の姿が変化し、バクラになって俺に話しかけてきた。

「バクラ……あれは……」

「ありゃあクル・エルナの最期だ。千年アイテムの材料にされたク

ル・エルナのな」

あれがクル・エルナの……

「おそらく俺様の記憶だろう。相棒が俺様と同化してるから夢に見ちまったんだ」

確かに、理屈はわかる。だけど……

「今まで、夢に見たことなんてなかったぞ？」

「さあな。もしかしたら、何かの前兆かも知れねえな」

前兆……だが、三幻魔はもう少し後のはずだ。だったら、いつたい何が……

「なあ、嵐。なんか顔色悪いぜ？」

そして昼間、隣に座っていた沙耶が俺の顔を覗き込んできた。

「ん？そうか？」

「確かにそうっすね。今日の授業も上の空だったっす」

「ああ、珍しいこともあるもんだと思ったが」

翔と大地も心配してきた。

「大丈夫だ。少し、夢見が悪かったただけだ」

「そっか……身体には気をつけるよ？」

「ん、心配してくれんのか？」

俺がそう言つと沙耶は頬を染める。

「だ、だって…そりゃあ…オレはお前の…彼女だし…」

沙耶はもじもじしながらも嬉しいことを言ってくれた。

「そっか、ありがとうな？」

なでりなでり

「あう……」

俺が頭を撫でると沙耶は気持ち良さそうに目を細めた。

「おい、嵐？」

「ん？」

んだよ、十代。せつかくの俺の至福の時間を邪魔しやがって。沙耶も邪魔されて睨んでるぞ？

「周り見ろよ」

周り？十代の言葉に周りを見ると十代以外の全員が砂糖を吐いて倒れていた。

十代が大丈夫なのは恋愛ごとに疎いからだな。

その後、俺と十代で男性陣を、沙耶が女性陣を保健室に運んだ。

それから数時間後、俺は沙耶を女子寮に送っていた。

「バクラの夢…か」

沙耶がそう呟く。2人きりになってバクラのことを知っている沙耶には夢のことを話していた。

「バクラは何かの前兆じゃないかって言ってるけどな」

ただ、本当に何かの前兆だとするんなら1番思いつくのは三幻魔だ

よな。

俺たちがそんなことを話しながら歩いて行くと目の前に1人のローブを被った人物が立っていた。ローブの影と夜ということもあり顔は見えないが。

「なんだ、お前？」

「あなたを試すもの……」

声からすると女……か？

「試すだと？」

「そう、いずれあなたたちの前に大いなる災厄が現れる。あなたたちにそれを乗り越える力があるかどうか……試させてもらいます」

女はそう言つとデュエルディスクを起動させた。

「ちっ、やるしかないか」

「デュエル!!」

「俺のターン、ドロ―！俺はキラートマトを守備表示で召喚！」

キラートマト

星：4

ATK：1400

DEF : 1100

「さらにカードを1枚伏せてターン終了！」

嵐

LP : 4000

手札 : 4枚

モンスター : キラートマト (守備表示)

魔法・罫 : 伏せカード1枚

「私のターン、ドロ。私は神獣王バルバロスを受協召喚。ただしバルバロスは妥協召喚した場合、攻撃力が1900になる」

神獣王バルバロス

星 : 8

ATK : 3000 1900

DEF : 1200

「さらに私は二重召喚を発動。このターン私はもう1度通常召喚できる。私は可変機獣ガンナードラゴンを妥協召喚。このカードは妥協召喚したとき、攻撃力・守備力が半分になる」

可変機獣ガンナードラゴン

星：7

ATK：2800 1400

DEF：2000 1000

「ガンナードラゴンでキラートマトに攻撃」

するとキラートマトがガンナードラゴンの砲撃で吹き飛ばされた。

「キラートマトの効果発動！デッキから攻撃力1500以下の閻魔性モンスターを攻撃表示で特殊召喚する！俺はクリッターを特殊召喚！」

クリッター

星：3

ATK：1000

DEF : 600

「私はバルバロスでクリッターに攻撃。スパイラルシェイパー！」
バルバロスの槍で貫かれクリッターが破壊された。

嵐 : LP 4000 3100

「く！俺はクリッターの効果でデッキから攻撃力1500以下のモンスターを手札に加える！俺はTheアトモスフィアを選択する！」
「それがあなたの精霊のカード……私はカードを1枚伏せ、ターン終了です」

謎の女性

LP : 4000

手札 : 2枚

モンスター：神獣王バルバロス（攻撃表示）、可変機獣ガンナード
ラゴン（攻撃表示）
魔法・罾：伏せカード1枚

「俺のターン、ドロー！俺は幻銃士を召喚！その効果により、俺の
フィールドのモンスターの数だけ銃士トークンを特殊召喚する！」

幻銃士

星：4

ATK：1100

DEF：800

銃士トークン

星：4

ATK：500

DEF：500

これで必要なカードが揃った！

「俺は幻銃士と銃士トークン、そして墓地のキラートマトを除外し、アトモスフィアを特殊召喚！」

Theアトモスフィア

星：8

ATK：1000

DEF：800

「アトモスフィア……精霊のカード……」

「そしてアトモスフィアの効果でバルバロスを装備する！」

これで一気に押し切る！

「甘いです。チェーン発動、スキルドレイン。1000ライフを払うことでフィールド上の全てのモンスター効果を無効にします」

な！？やはりそのデッキか……

「迂闊でしたね。スキルドレインだと想定していませんでしたか？」

「さあな……」

別に想定してなかったわけじゃない……ただ、今の手札じゃ押し切

られる可能性の高かったから賭けたんだが……賭けに負けたぜ。

「俺はターン終了……」

嵐

LP：3100

手札：2枚

モンスター：Theアトモスフィア（攻撃表示）

魔法・罠：伏せカード1枚

「私のターン。私は光神機^{ライトニングギア}-桜火を妥協召喚。このカードは妥協召喚した場合、エンドフェイズに破壊されます。ですが……」

「スキルドレインの効果で無効にされる……」

「その通りです」

ライトニングギア

光神機 - 桜火

星：6

ATK：2400

DEF：1400

「そしてバルバロスでアトモスファイアに攻撃。スパイラルシェイパー！」

「ぐああああ！」

嵐：LP3100 1100

「嵐！」

沙耶が心配そうな顔で俺を見てくる。心配すんなよ。そう簡単には負けねえから。

「これで終わりです。ガンナードラゴンでダイレクトアタック」

「させねえ！速攻魔法、スケープ・ゴート発動！4体の羊トークンを特殊召喚する！」

羊トークン

星：1

ATK：0

DEF：0

「ならばガンナードラゴンと桜火で羊トークンに攻撃」

「くっ！」

「私はこれでターン終了です」

謎の女性

LP：3000

手札：2枚

モンスター：神獣王バルバロス（攻撃表示）、可変機獣ガンナード

ラゴン（攻撃表示）、光神機 - 桜火（攻撃表示）

魔法・罫：スキルドレイン（永続罫）

「俺のターン……」

どうする？俺の手札にあの3枚を倒せるカードはない……アトモス
フィアを呼べてもスキルドレインで無効にされる……

「1つ言い忘れましたが、このデュエルの敗者には罰ゲームが待っ
ています」

な……

「なんだと？」

「あなたが負けた場合、このカードに魂を封じさせていただきます。
ようはかつてペガサス・J・クロフォードが海馬瀬人に行ったのと
同じものです」

「な、なんだよそれ!？」

沙耶が声を荒げる。罰ゲームありかよ……

「もっとも、あなたにはもう逆転の手は残されてないでしょうが……
……」

確かにそうだ……今の俺の手札には起死回生の手札はない……

「……」

引いたのは……天使の施し。これなら……

「俺は天使の施しを発動。カードを3枚引き、2枚捨てる」

このドロ―で全てが決まる……

「悪あがきですね」

「嵐……」

沙耶が泣きそうな顔で俺を見ている。ここで俺が負けたら俺は……

（たく、なにウジウジ悩んでやがる！パツと引いちまえよ！テメエらしくねえだろうが！）

バクラの音が頭に響く。大声出すなよ。頭に響くだろうが。けど、吹っ切れたぜ。サンキュ。

「ドローー！」

パアアアアア！

俺は3枚カードを引いた。そしてそのカードのうちの1枚が輝いている。そしてそれと同時に女の懐も何か光ったような気がした。

「これは……」

そのカードはデッキに入れた覚えの無いカードだった。これなら……いける！

「俺は施しの効果で手札をを2枚捨て、魔法カード、大嵐を発動！フィールド上の魔法・罠を全て破壊する！」

これでスキルドレインは破壊できた。

「（やはり、彼は……）いまさらスキルドレインを破壊したところでどうする気ですか？」

「こうすんだよ！俺は手札の時を司る神鳥・ユリウス・の効果を発動！このカードは自分のターンのメインフェイズにのみ、ライフを半分にし、手札から墓地に送ることで発動することができる！このターンの前の自分、もしくは相手のターンに自分フィールド上から墓地に送られたモンスターを可能な限り自分のフィールド上に特殊召喚する！この効果で特殊召喚されたモンスターが破壊されたとき、そのモンスターの元々の攻撃力分ダメージを受ける！」

俺が効果を発動するとフィールドに時計を持った白い小鳥が現れ、小鳥の持つ時計の針が逆時計回りに回った。

時を司る神鳥・ユリウス・

星：1

ATK：100

DEF：100

「俺はライフを半分にし、墓地からアトモスフィアを蘇生させる！
リバース・オブ・タイム！」

嵐：LP 1100 550

すると俺の墓地からアトモスフィアが再び飛び上がった。

「さらにフィールドの羊トークン2体と墓地のクリッターを除外して2体目のアトモスフィアを特殊召喚！そしてこの2体でそれぞれバルバロスとガンナードラゴンを装備する！」

Theアトモスフィア（1体目）

ATK：1000 4000

DEF：800 2000

Theアトモスフィア（2体目）

ATK：1000 3800

DEF：800 2800

「これは……見事です」

「俺はガンナードドラゴンを装備したアトモスフィアで桜火に攻撃！
テンペストサンクションズ！」

謎の女性：LP3000 1600

「これで終わりだ！残ったアトモスフィアで攻撃！テンペストサン
クションズ！」

「……………」

謎の女性：LP1600 0

「嵐！あらしい……」

デュエルに勝った俺に沙耶が抱きついてきた。随分心配させちまったな。

「ふふ、見事でした。あなたの強さ、見せてもらいました」

すると女が俺に近づいてきた。それを見た沙耶は涙目になりながら女を睨んでいる。

「あなたと、そしてその新たな精霊のカードならば災厄も打ち破ることができるとしよう」

「お前は……いったい？」

「私は墓守の末裔の1人です。あとはこれを渡すことで私の役目は終わります」

そう言うと女は俺に何かが入った革の袋を渡してきた。

「それはいずれ来る災厄に対して必要なものになるでしょう。では私はこれで……縁があったらまた会いましょう」

「おい！ま……」

俺が引きとめようとしたが女は闇に消えていった。

「なんなんだ……試すつて……」

「おい、嵐。なに貰ったんだ？」

俺に抱き付いていた沙耶が涙を拭いながら聞いてきた。俺も気になったので袋を開けた。そこには信じられないものが入っていた。

「これは……」

（おいおい。あの女、こいつをどこで手に入れやがったんだ？）

そこにはウジャト眼があり、黄金の針のぶら下がった……すでに失われたはずの『千年リング』が存在していた。

第15話 クル・エルナの夢 時を司るカード（後書き）

以上、第15話でした。オリカはこれ以外には今のところ登場する予定はありません。

オリカの説明は後々書きます。

20万PV記念座談会（前書き）

こんだけ待たせて本編じゃなくてすみません。

来週からはまた本編が更新できると思いますのでしばしお待ちを。

ちなみに今回のみ台本形式となっておりますが本編では台本形式はしません。

20万PV記念座談会

作者「祝20万PV」……」

嵐「テンションが低い！」

バクラ「キツチリやれよ作者」

作者「え〜？」

嵐「え〜、じゃねえ！っていうかなんでバクラが実体化してんだよ！？」

作者「だって本編じゃねえし。今回は座談会みたいな感じだから」

バクラ「つつかこの服なんだよ？」

作者「ん？座談会用の衣装。嵐は現代でのバクラの服装でバクラは古代エジプトの盗賊だった頃の服装ね」

嵐「そついえば沙耶は？」

作者「いま着替えてるはずだけど？」

沙耶「おい作者！なんだよこの服！／＼／」

作者「おお、来た来た」

嵐「おい、作者…あの服って……」

作者「その通り、リリカルな　はのノー　エがVividで着てた
バリアジャケットだ！」

沙耶「うう……これ、少し恥ずかしい……／＼／」

作者「だったらノー　エがStrikerSで着てた戦闘機人のボ
ディースーツにする？身体のラインまるわかりだけど」

バクラ「あんま変わんねえんじゃねえか？」

嵐「確かに……こつちも身体のラインわかるし何より露出度高いし
な。でも似合ってるぜ」

沙耶「え？ほ、ホントか？／＼／だったらこの服でも／＼／」

嵐「ところで沙耶の服があれなのはやっぱり……」

作者「当然沙耶のモデルがノー　エだから。ぶっちゃけ黒目黒髪の
ノー　エだし」

バクラ「つつかさつさと座談会始めようぜ」

作者「はいよ。じゃあまず自己紹介、嵐から」

嵐「この小説の主人公の紫藤　嵐。オベリスクブルーの1年だ」

バクラ「同じくこの小説の裏主人公のバクラだ。一応オベリスクブ
ルーの1年か？」

沙耶「えっと、オベリスクブルー1年の加賀見 沙耶。い、一応この小説のヒロインだ／／／」

作者「一応じゃなくて完全にヒロインだけどね」

沙耶「うっせ。自分でヒロインとか言うのは恥ずかしいんだよ／／／」

嵐「で、今日の座談会の内容は？」

作者「特にない」

嵐「よし、歯食いしばれ」

作者「NO！ジョーク、アメリカンジョーク！あ、いいこと思いついた！最近登場したオリカについての説明しようと思ってたんだ！」

沙耶「いま『思いついた』って言ったよな？」

作者「と、とにかく最近登場したオリカの説明を……」

名前：時を司る神鳥・ユリウス・

星：1

属性：風

種族：鳥獣

ATK：100

DEF：100

効果：この効果は自分のターンのメインフェイズにのみ発動することが出来る。手札からこのカードを墓地に送り、ライフポイントを半分支払う。

このターンの前の自分、または相手のターンに自分フィールド上から墓地に送られたモンスターを可能な限り自分フィールド上に特殊召喚する。

この効果で特殊召喚されたモンスターが破壊された時、自分は破壊されたモンスターの元々の攻撃力分のダメージを受ける。

作者「異次元からの帰還に似てるね。違うのは特殊召喚するのは墓地限定で手札から発動できる点だ」

嵐「でもこれデメリットでかくねえか？特殊召喚できるのもその前の自分か相手のターンに墓地に送られたモンスターだし、破壊されたら攻撃力分のダメージって……」

作者「いや、実はこれ自分のフィールドから墓地に送られたモンスターなら相手の墓地からも復活させられるんだよ。たとえばアトモスファイアが装備したモンスターが墓地に送られてから発動すればそのモンスターを特殊召喚できるのだ！」

バクラ「なるほどな。そう考えるとメリットもでけえな」

作者「ただし、これ使うときは注意しないと。ミラフォでもやられたら死ぬよ？」

沙耶「確かに……でも嵐なら大寒波とか大嵐あるからなんとかできるんだろ？」

作者「まあね。そう言う意味でも嵐のデッキに相性良いんだけどね」

嵐「まあ、デッキから何か抜かないといけないけどな」

作者「まあね。とりあえず嵐と沙耶はちょっとデッキ変わる予定だから」

沙耶「は？オレも？」

作者「そ。嵐はユリウス入れるんで何かしら抜くからちょっと変わ

るしね。そして沙耶なんだけど。最近感想版に沙耶のデッキに相性いいカードが教えられてね。いろいろ考えてみた結果実用的だったことで変えてみようかと」

バクラ「なるほどな。ところでよ、作者。俺様はいつになったらデュエルできんだ？あのタイタンっておっさんとだけじゃねえか」

作者「大丈夫。セブンスターズ編ではかなり出番増えるから」

バクラ「なら良いけどよ……」

嵐「ところでこの後の展開は？」

作者「とりあえず1〜2話ぐらい挟んで冬休み突入かな？冬休みはまた糖分が濃くなると思うけど」

沙耶「えと、それって……」

作者「嵐とのラブラブシーンをいれようかとね」

沙耶「~~~~~//////////」

作者「では今回の座談会はここまで！そして最後に、読者の皆さん。これからも『遊戯王GX』閻纏う風と盗賊王』をよろしくお願いします！」

嵐「ちなみに感想書いてくれると駄作者が喜ぶので気が向いたらお願いします」

20万PV記念座談会（後書き）

というわけで座談会でした。ユリウスは書いたとおり自分のフィールドから墓地に送られていさえすれば相手の墓地からも特殊召喚できます。

第16話 激突、嵐VS十代（前書き）

ついに嵐と十代の対決です。時間かかりましたがどうぞご覧ください。

第16話 激突、嵐VS十代

〔SIDE：ARASHI〕

あの墓守の女とのデュエルの翌日、俺はベッドから起きて制服に着替えると机の上に置いてある革の袋を開ける。そこに入っていた千年リングが昨夜の出来事が夢ではないと証明している。

「なぜ……千年リングが？」

俺の疑問は尽きない。千年リングを含む千年アイテムは遊戯がアテムに勝ち、アテムの魂が冥界に帰った時にエジプトの地底深くに消えて行ったはずだ。

（さあな。あの女、どこでこいつを手に入れたのか知らねえがこいつは本物の千年リングだぜ。前のタイタンのおっさんみてえな紛い物じゃねえ）

あの女の言ってた大いなる災厄つてのは一体何なんだ？俺が知らないことが起きようとしてんのか？

（それこそわかかんねえな。けどよ相棒。こいつは身に付けといたほうがいいんじゃないか？こいつがありゃあ俺様もそれなりに力が使えるしな）

確かに……三幻魔に光の結社……そしてユベル。闇のアイテムの力はないよりはあった方がいいな。

そう考えた俺は千年リングを首から下げる。こりゃ目立ちそうだな。

(今さらだろ？ほら、さっさと行かねえと日課に遅れっそ)

バクラにそう言われた俺は女子寮に向かった。

女子寮の近くについた俺は沙耶を待つ。するとほどなくして沙耶がやってきた。

「おはよ、沙耶」

「おう！」

沙耶と合流した俺は2人並んで歩く。すると沙耶は俺の胸元に目を向けた。

「あ、お前、それ付けてんのか？」

千年リングに気付いた沙耶は俺に聞いてくる。

「ああ。あいつの言ってた大いなる災厄が何なのか分かんない以上、常に身につけてた方がいいからな」

「ふーん」

沙耶が返事をする。ただ、繋いでる手がいつもより強く握られてるような……

「沙耶、なんかあったか？」

俺がそう聞くと沙耶がびくりとする。すると少し目じりに涙がたまつて、顔が赤くなっていた。

「だって……昨夜…嵐がいなくなったらどうしようっっているいる考

えちまっつてたから……こっやって一緒にいられんのが嬉しくて……」
沙耶が顔を真っ赤にしてそう呟く。どうやら昨夜、俺が受けていたかもしれない罰ゲームのことを考えていたらしい。ここまで想われているのにすごく感動した。

「お、嵐！沙耶！」

するとそこにお邪魔虫……もとい十代が来た。

「おはようっす。嵐くん、沙耶さん」

「2人とも今日も仲良さそうなんだな」

「相変わらずだな、2人とも」

そして十代の後ろから申し訳なさそうに翔と隼人、大地が歩いてきた。

「まあな」

「お、嵐、それどうしたんだ？」

十代が千年リングに気付いたのか聞いてきた。

「ん、ちょっとな」

「変ったペンダントだな」

大地も興味津々らしい。

「そつだ！なあ嵐！今日授業終わったらデュエルしようぜ！」

「デュエル？」

ずいぶんいきなりだな。

「そう言えば俺と嵐ってデュエルした事ねえじゃん！だからやろうぜ！」

「面白そうだな。入学以来負けなしの十代と嵐の勝負か。俺もぜひ見たいな」

大地たちもずいぶん乗り気だな。

「まあいいぜ。じゃあ放課後にレッド寮でな」

「おう！」

この発言があんなことになるとは思わなかった。

い。そして放課後……え？展開が早いつて？気にすんな、俺は気にしな

んでもって俺はレッド寮に来ただけど……なんでこんなに混んでんだ？

「しかもなんであんたまでいんだよ、亮」

さらに人混みのはずれにはカイザーと呼ばれる亮までいた。

「明日香からお前と十代がデュエルすると聞いてな」

情報源は明日香か……明日香は一体どっから？

「すまん。つつい同じ寮の仲間に喋ってしまってこうなった」

全ての原因は大地だった。まあいいけど。

「別にいいよ。んじゃいくか」

レッド寮の前では十代が既にスタンバイしている。今回の俺のデッキは改良済みのデッキだ。今までとは少し違うぜ。

「あ、嵐」

俺が十代の前に出ようとするのと沙耶が呼びとめてきた。

「その…頑張れよ?」

頬を少し染めて応援してくれた。そして俺はやる気が漲ってきた。

「さあ、楽しいデュエルにしようぜ!」

「そうだな。十代、俺を楽しませろ」

「「デュエル!!」」

「俺の先攻、ドロー!」

先攻は俺から…悪くはないか。

「俺はモンスターをセットし、さらにカードを2枚伏せてターン終了!」

嵐

LP:4000

手札:3枚

モンスター:裏側守備表示モンスター1体

魔法・罫:伏せカード2枚

「俺のターン、ドロー！俺はE・HEROバブルマンを攻撃表示で召喚！」

E・HEROバブルマン

星：4

ATK：800

DEF：1200

十代の場に青いヒーローが召喚された。あのカード、アニメ効果が強力なんだよな。

「このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功したとき、カードを2枚ドローするぜ！さらにカードを2枚伏せてターン終了！」

十代

LP：4000

手札：5枚

モンスター：E・HEROバブルマン（攻撃表示）

魔法・罨：伏せカード2枚

「互いに伏せカード2枚か。十代が融合してこないのはカードがないからか？」

「でも、嵐相手に迂闊に融合するのは危険よ。下手に攻撃力の高いモンスターを出されたらアトモスフィアの餌食だわ」

大地と明日香が分析してる。確かに十代みたいにモンスターの攻撃力がメインのデッキにはアトモスフィアの効果は厄介だからな。

「俺のターン、ドロー！俺はブラッドヴォルスを攻撃表示で召喚！」

バブルマンが攻撃表示……なにかありそうだが……ここは攻撃だ！

「俺はブラッドヴォルスでバブルマンを攻撃！」

ブラッドヴォルスがバブルマンに向かって斧を振りかぶる。倒したか？

「ただだぜ！リバースカード発動！速攻魔法・バブルシャッフル！フィールドにバブルマンがいるときとき、自分フィールド上の表側攻撃表示バブルマンと相手フィールドの表側攻撃表示モンスターを守備表示に変更する！」

そうか！だからバブルマンを攻撃表示に！

「さらにこいつにはもう1つ効果がある！守備表示にしたバブルマンを生贄にすることで手札のE・HEROを特殊召喚するぜ！来い、E・HEROエッジマン！」

するとバブルマンが消え、十代の場には金色のヒーローが特殊召喚された。

E・HEROエッジマン

星：7

ATK：2600
DEF：1800

「ちっ！厄介な……俺はこのままターン終了！」

嵐

LP：4000

手札：3枚

モンスター：ブラッドヴォルス（守備表示）、裏側守備モンスター
1枚

魔法・罫：伏せカード2枚

「俺のターン、ドロー！（よっしゃ来たぜ！）俺は手札の魔法カー

ド・融合を発動！手札のフェザーマンとバーストレディを融合！E・HEROフレアウイングマン召喚！」

来たか！

「行くぜ！フレアウイングマンでブラッドヴォルスに攻撃！」

「させない！畏カード発動！邪神の大災害！相手モンスターの攻撃宣言時、フィールドの魔法・罫を全て破壊する！更にそれにチェインしてゴッドバードアタック発動！鳥獣族モンスターを生贄にし、フィールド上のカードを2枚破壊する！俺は裏守備のシールドウイングを生贄にする！」

シールドウイング

星：2

ATK：0

DEF：900

「そしてこの効果でフレイムウイングマンとエッジマンを破壊する！」

すると十代の場のフレームウイングマンとエッジマンが爆散し、さらに十代の伏せカードも破壊された。

「うわあ!」

「通さないぜ、十代」

「ちえ、俺はモンスターを裏守備でセットしてターン終了!」

十代

LP:4000

手札:1枚

モンスター:裏側守備表示モンスター1枚

魔法・罫:0

「まだ互いにライフが減らないな」

「でも、ハンドアドバンテージは若干嵐くんが有利っす」

「十代は上級ヒーローを2体と伏せカード破壊されたのが痛いわね」

「俺のターン、ドロ―！俺は天使の施しを発動！カードを3枚引き、2枚捨てる。そして墓地のシールドウイングと魔導戦士ブレイカーをゲームから除外し、ダーク・シムルグを特殊召喚！」

ダーク・シムルグ

星：7

ATK：2700

DEF：1000

「さらにブラッドヴォルスを攻撃表示に変更！ブラッドヴォルスで裏守備モンスターに攻撃！」

ブラッドヴォルスが斧を振り上げてモンスターを破壊した。破壊したのは機械でできた犬だった。あのカードは……

「戦闘で破壊されたフレンドツグの効果発動！このカードが戦闘で破壊されたとき、墓地のE・HERO1枚と融合1枚を手札に戻せるぜ！俺はエッジマンと融合を戻す！」

「ちっ、だがまだだ！ダーク・シムルグで攻撃！ダークテンペスト！」

「ぐああああ！！！」

「そしてカードを1枚伏せてターン終了!」

嵐

LP：4000

手札：2枚

モンスター：ダーク・シムルグ（攻撃表示）、ブラッドヴォルス（攻撃表示）

魔法・罫：伏せカード1枚

「俺のターン、ドロー!へへ、楽しいな!」

「ああ、そうだな」

俺と十代は互いに笑い合う。こんなに楽しいのは久々だな。

「でも俺も負けないぜ！俺は魔法カード、強欲な壺を発動！カードを2枚ドロ！さらに天使の施しで3枚ドロして2枚捨てる！」
冗談きついで。なんというチートドロ。まあ俺も人のことあんまり言えねえけど。

「んでもって今捨てたネクロダークマンの効果発動！こいつが墓地に存在するとき、1度だけ手札のレベル5以上のE・HEROを生贄なしで召喚するぜ！行け、エッジマン！」

再び十代の場に金色のヒーローが姿を現した。

E・HEROエッジマン

星：7

ATK：2600

DEF：1800

「さらに、手札からミラクルフュージョン発動！墓地のネクロダークマンとスパークマンを除外して融合召喚だ！」

墓地にスパークマン……天使の施しか!?

「俺はE・HEROダークブライトマンを召喚!」

E・HEROダークブライトマン

星:6

ATK:2000

DEF:1000

「さらに!H・ヒートハートを発動!エッジマンの攻撃力をエンドフェイズまで500ポイントアップする!行け!エッジマンでダーク・シムルグを攻撃!パワー・エッジ・アタック!」

E・HEROエッジマン

ATK：2600 3100

エッジマンがダーク・シムルグに殴りかかり、ダーク・シムルグが破壊された。

「ぐう！」

嵐：LP4000 3600

「そしてダークブライトマンでブラッドウォルスに攻撃だ！ダーク・フラッシュュー！」

「くっ……」

嵐：LP 3600 3500

「ダークブライトマンは攻撃したダメージステップ終了時に守備表示になる。ターン終了だ！」

「十代のエンドフェイズに俺は速攻魔法・スケープゴートを発動！俺の場に4体の羊トークンを特殊召喚する！」

羊トークン

星：1

ATK：0

DEF：0

十代

手札：2枚

モンスター：E・HEROエッジマン（攻撃表示）、E・HERO

ダークブライトマン（守備表示）

魔法・罠：0枚

「俺のターン、ドロー！俺は羊トークン2体と墓地のブラッドヴォ
ルスをゲームから除外し、Theアトモスフィアを特殊召喚！」

Theアトモスフィア

星：8

ATK：1000

DEF：800

「ついに来たか」

「十代の場には上級ヒーローが2体。どっちを装備されてもまずいわね」

「アトモスファイアの効果発動！エッジマンを装備する！」

Theアトモスファイア

ATK：1000 3600

「さらにハーピー・レディ・サイバーボンテージSBを召喚！」

ハーピー・レディ・SB

星：4

ATK：1800

DEF：1300

このカードは単純に攻撃力を上げてくた入れたカードだ。鳥獣つて攻撃力高いの少ないんだよな。

「行くぜ！アトモスファイアでダークブライトマンに攻撃！テンペストサンクションズ！」

アトモスファイアの巻き起こした嵐でダークブライトマンが破壊された。けど……

「ぐう！けどダークブライトマンの効果が残ってるぜ！こいつが破壊されたとき、相手フィールドのモンスター1体を破壊する！ハーピー・レディ・SBを破壊！」

今度はハーピーが破壊された。

「ターン終了だ」

嵐

LP：3500

手札：1枚

モンスター：Theアトモスフィア（攻撃表示）、羊トークン×2
（守備表示）

魔法・罫：E・HEROエッジマン（装備カード状態）

「俺のターン、ドロー！俺はバブルマンを守備表示で召喚！この効果で俺はカードを2枚ドローするぜ！」

2枚目のバブルマン！？なんて引きの強さだよ。

「へへ……」

十代が笑った。逆転のカードを引いたか！？

「俺は融合を発動！手札のスパークマンとクレイマンを融合し、E・HEROサンダージャイアントを召喚！」

E・HEROサンダージャイアント

星：6

ATK：2400

DEF：1500

「サンダージャイアントの効果発動！手札を1枚捨ててこのカードより元々の攻撃力の低いモンスターを破壊する！アトモスフィアのものとの攻撃力は1000！アトモスフィアを破壊するぜ！ヴェイパーパーク！」

「くう！」

残ったのは羊トークン2体！

「サンダージャイアントで羊トークンを攻撃！ボルティックサンダー！」

これは少しやばいか？

「俺はこれでターン終了だぜ！」

十代

LP：1300

手札：0枚

モンスター：E・HEROサンダージャイアント（攻撃表示）、E・HEROバブルマン（守備表示）

ここでサンダージャイアントを何とかしなきゃやばいな。これで起死回生のカードが引けるか……勝負！

「俺のターン、ドロー！……十代、この勝負……俺の勝ちだ」

十代をチートドローとかいったけど俺も大概チートだな。

「この状況を覆せるカードがあるの！？」

「嵐は手札もわずか2枚しかないんだぞ！」

明日香と大地が騒いでるが沙耶は何を引いたかだいたい分かったらしい。

「嵐の、勝ちだ」

沙耶の口から自然とこの言葉が出ていた。

「俺は手札の時を司る神鳥・ユリウス・の効果を発動！このカードは自分のターンのメインフェイズにのみ、ライフを半分にし、手札から墓地に送ることで発動することができる！」

この前の自分、もしくは相手のターンに自分フィールド上から墓地に送られたモンスターを可能な限り自分のフィールドに特殊召喚する！ただし、この効果で特殊召喚されたモンスターが破壊されたとき、そのモンスターの元々の攻撃力分ダメージを受けるがな」

「ぴー！」

時を司る神鳥・ユリウス・

星：1

ATK：1000

DEF：1000

俺がカードを墓地に送ると時計を持った小鳥が羽ばたく。実はこいつもアトモスファイアと同じ精霊のカードだった。性格はアトモスファイアと同じで甘えん坊だけど。

「お前…それ……」

「俺の精霊のカードだ。さあユリウス！時を巻き戻せ！リバー・オブ・タイム！」

嵐：LP3500 1750

ユリウスの持つ時計が逆回転を始める。すると俺のフィールドにアトモスファイア、ハーピー・レディ・S B、そしてエッジマンが特殊召喚された。

「な、なんでエッジマンが!?!」

「エッジマンは俺のフィールドから墓地に送られた!ユリウスの効果は自分フィールドから墓地に送られていけば相手の墓地からも特殊召喚できる!さらにアトモスファイアの効果でサンダージャイアントを装備!」

Theアトモスファイア

ATK:1000 3400

「ハーピーでバブルマンを攻撃!ウィップバニッシュ!」

ハーピー・レディ・S Bは手に持っていた鞭でバブルマンを破壊した。

「楽しいデュエルだったぜ、十代」

「ああ、俺もだ。ガツチャ」

「アトモスフィアでダイレクトアタック！テンペストサンクションズ！」

十代：LP13000

「「「「「わあああああああああああ………」」」」」

俺と十代がデュエルを終えると大歓声が巻き起こった。

「見事なデュエルでしたよ。遊城十代くん。紫藤嵐くん。2人とも今後も頑張ってください」

校長も来てたのか。

こうして俺と十代のデュエルは大歓声に包まれて終わりを迎えた。

第16話 激突、嵐VS十代（後書き）

というわけで嵐VS十代でした。感想待ってます。

第17話 冬休み前の月一試験 前編（前書き）

今回の月一試験が終わったら冬休み突入です。冬休みにはさらに糖分が濃くなるかも……

第17話 冬休み前の月一試験 前編

〔SIDE：SAYA〕

「むう……どうすっかな」

オレは今自分の部屋でデツキを調整してる。それというのも明日は冬休み前の最後の月一試験だからだ。

筆記に関してはさっきまで嵐に教えてもらってたから問題ねえ。後は実技のためにデツキを万全の状態にしておかねえとな。

「タイラントとヴァンダルギオンは抜けねえな。あとは……こいつを入れるか」

こんなもん……かな？そっいえば嵐はなんか新しいデツキ使うとか言ってたけどどんなん使うんだろ？まあ、嵐なら負けねえだろうけど。

「んじゃ、寝るかな」

そしてオレはベッドに入って寝た。

そして次の日。

「嵐！」

オレが女子寮を出てしばらくするといつも通り嵐が待っていた。

「よう。調子どうだ？」

「問題ねえよ。ちょっとデッキいじっただけだしな。そういう嵐はどうなんだよ？」

オレがそう聞くと嵐は笑いながら予想通りの言葉をくれた。

「俺も問題ねえよ」

そう言くと嵐はオレの手を握ってきた。いつも通りの恋人繋ぎ……

嬉しいけど…やっぱり顔が熱くなる。

「はは、まだ慣れねえのか？」

「馬鹿……お前と一緒にいんのにドキドキしねえわけねえだろ／＼」

「そっか」

嵐はオレがそう答えるとまたオレの手を強く握ってきた。だからオレも……嵐の手を強く握り返した。

んでもって筆記試験終了。ちなみに十代と嵐は寝てた。けどこの

2人は決定的に違うところがあんだよな。嵐は全部解いてから寝てんだけど十代は実技に丸投げして寝てる。まあ十代に勝てる奴なんざそうそういねえけど。

「おい、沙耶。昼飯いこうぜ」

「おう。今日は最後の月一試験だから奮発したぜ」

筆記試験が終わったら嵐が昼飯に誘いが来たから例によって弁当を持って嵐と一緒に校舎の外に出て行く。

すると途中で嵐がトイレに行ったからオレはその場で嵐を待つことにした。

「あなた、ちよつといいかしら？」

嵐を待つてるオレになんか赤い長髪の女が喋りかけてきた。どっかで見たことあるような？

「ん？オレになんか用か？」

「あなた、嵐さんと付き合ってるって本当なのかしら？」

ああ、思い出した。いつも嵐を応援してる女子の先頭に立ってる奴だ。嵐の奴すげーモテるからな……

「ああ、本当だぜ」

オレがそう答えるとそいつは顔を歪めた。ある意味予想通りの反応。けど次の言葉は予想外だった。

「別れなさい。今すぐ!」

「はあ!?!」

いや、いい顔しねえのはわかってたけど……いきなり別れるっていつか普通!?!

「嫌だ!」

勿論即答!そんな当たり前だ!

「別れなさい!あなたなんか嵐さんに相応しくないわ!」

「ふざけんな!」

そんなんわかつてる。釣り合っていないのはわかつてる、だからつて別れるなんてできるか!

「おい、なに騒いでんだ?」

その声にオレとその女が振り向くとトイレから出てきた嵐がいた。

「あ、嵐さん!?!」

嵐が出てきてかなり慌ててる。オレは助かったけど。

「まあ、何でもいいけどさ。俺の女をあんまり苛めないでやってくれよ」

嵐はそう言うとオレを抱き寄せてきた。……また顔が熱くなる……

「っ!?!?」

それを見たあの女は不機嫌になってその場を去って行った。

それから実技試験になって、オレの相手は……

「では、次はセニョール加賀美とセニョール二階堂のデュエルなのネ」

オレの相手はあの女だった。二階堂って言うのか。

「加賀美さん、やはりどう考えても嵐さんとあなたでは釣り合いませぬわ。ですからこのデュエルで私が勝ったら嵐さんと別れてもらいます」

はあ!?

「ふざけんな!んな条件飲めるか!だいたいそんなの嵐の意思を無視して決められるか!」

当然オレは反論する。けど……

「二階堂さんさすがです!」

「そんな人が嵐さんと付き合ってるのが間違いなんですわ!」

観客席の嵐ファンから二階堂に歓声が飛ぶ。

「っ!?!?」

オレは観客席の連中を睨みつける。すると今度は野蛮人だ何だと罵声が飛んできた。

「まあ断るならお父様に頼んであなたを退学にしてもらってもいいんですわよ?」

「な!?!? どういうことだよ!?!?」

するとクロノス先生がやってきて教えてくれた。

「セニョール二階堂の父親は有名な実業家なのよネ。退学になりましたくなかったらここは素直に受けといたほうがいいよ」

まじかよ……

「わかったよ……その代わりにオレが勝ったら二度とオレたちにちよつかい出すんじゃないねえ!」

「いいですわよ。ありえませんが……」

「「デュエル!」!」

〜SIDE…END〜

その頃、観客席では……

「……………」

「（ガクガクガク）」

「（ぶるぶるぶる）」

「（真つ青）」

「あ、嵐……落ち着こう？落ち着いてその黒いオーラをしまつてくれ」

沙耶に向けられた罵声に黒いオーラを垂れ流しにして無表情に怒っている嵐に十代と翔がガクガクぶるぶると凄い勢いで震え、隼人は顔を真つ青にしている。三沢はなんとか嵐の怒りを静めようとしている。

「ん？大地、俺は落ち着いてるぞ？」

「そ、そうか……」

「だからとりあえず釘バットを……」

「落ち着いて危険なことを言っな！っていつか女子にそれをやる気か!？」

「沙耶を侮辱する奴にかける優しさはない」

三沢の突っ込みに冷静に返す嵐だった。

一方、デュエル場では沙耶と二階堂のデュエルが始まっていた。

「オレのターン、ドロー！」

先攻は沙耶。沙耶は手札を確認する。

「（これなら……）オレは天使の施しを発動！カードを3枚引いて2枚捨てる！さらにオレはサファイアドラゴンを攻撃表示で召喚！」

沙耶にフィールドに青い美しいドラゴンが召喚された。

サファイア・ドラゴン

星：4

ATK：1900

DEF：1600

「そしてカードを1枚伏せてターン終了！」

沙耶

LP：4000

手札：4枚

モンスター：サファイア・ドラゴン（攻撃表示）

魔法・罫：伏せカード1枚

「私のターン、ドロー！私はレスキューキャットを召喚しますわ！」

二階堂のフィールドに可愛らしい猫のモンスターが召喚された。

レスキューキャット

星：4

ATK：300

DEF：100

「（か、可愛い／＼／＼）」

レスキューキャットの可愛さに沙耶は顔を赤くする。

「さらに手札から二重召喚デュアル・サモンを発動！私はこのターン、もう一度通常召喚を行えますわ！さらにレスキューキャットの効果を発動！このカードを墓地に送ることでデッキからレベル3以下の獣族モンスター12体を特殊召喚できますわ！私はこの効果でコアラツコとデスウオンバットを特殊召喚します！」

コアラッコ

星：2

ATK：1000

DEF：1600

デスウォンバット

星：3

ATK：1600

DEF：3000

「っ！？上級モンスターの召喚か……」

沙耶は二階堂の場に生贄となるモンスターが並んだことに苦い顔をする。しかし二階堂の狙いはそれだけではなかった。

「それだけではありません。コアラッコの効果発動！自分フィールドに他の獣族モンスターがいるとき、1ターンに1度、相手フィールドの表側表示のモンスターの攻撃力を0にしますわ！」

「な!？」

サファイア・ドラゴン
ATK：19000

「そして私はコアラッコとデスウォンバットを生贄にし、アニマル・キング百獣王ベヒーモスを召喚ですわ！」

二階堂のフィールドからコアラッコとデスウォンバットが姿を消し、紫色の体躯と青いたてがみを持つモンスターが召喚された。

アニマル・キング
百獣王ベヒーモス
星：7
ATK：2700
DEF：1500

「ベヒーモスの効果ですわ！生贄召喚に成功したとき、生贄にした枚数分、墓地の獣族モンスターを手札に戻しますわ！私はコアラッコとレスキューキャットを手札に戻しますわ！」

「く！（やべえの戻しやがった！）」

「ベヒーモスでサファイア・ドラゴンに攻撃！キングファング！」

「っ！？ぐあああああ！」

ベヒーモスがサファイア・ドラゴンを噛み砕くとその余波が沙耶を襲う。

沙耶：LP 4000 1300

「私はこれでターン終了ですわ」

二階堂

LP：4000

手札：5枚

モンスター：百獣王ベヒーモス（攻撃表示）

魔法・罾：0

「オレのターン、ドロー」

沙耶は苦い顔をしながらもカードを引く。

「スタンバイフェイズに墓地のミンゲイドラゴンの効果発動！自分フィールドにモンスターが存在しないとき、墓地からこいつを特殊召喚できる！ミンゲイドラゴンを特殊召喚！」

沙耶のフィールドに黄色い首の長いドラゴンが召喚された。

ミンゲイドラゴン

星：2

ATK：400

DEF：200

「あら、やはり野蛮な人は使うカードも醜いですわね」

「言ってる！オレはミンゲイドラゴンを生贄に、タイラント・ドラ
ゴンを召喚！」

ミンゲイドラゴンが姿を消すと沙耶のフィールドに沙耶の精霊でも
あるタイラント・ドラゴンが姿を現した。

タイラント・ドラゴン

星：8

ATK：2900

DEF：2500

「グオオオオオオオ！」

タイラント・ドラゴンは主である沙耶を侮辱されたことに怒り、雄
叫びを上げる。

「な！？上級モンスターを生贄1体で！？」

「ミンゲイドラゴンはドラゴン族の生贄召喚に使用する場合、2体
分の生贄にできんだよ！さらにオレは永続魔法、一族の結束を発動

！墓地の存在するモンスターの種族が1種類の場合、自分フィールドのその種族のモンスターの攻撃力を800ポイントアップする！」

タイラント・ドラゴン

ATK：2900 3700

「攻撃力………3700ですって!?!」

タイラント・ドラゴンの攻撃力に二階堂は顔を青くする。

「タイラント・ドラゴンでベヒーモスを攻撃！プラストファイア！」

タイラント・ドラゴンの口から紅蓮の炎が放射され、ベヒーモスを焼き尽くした。

「きゃあああああああ!?!」

二階堂：LP4000 3000

「オレはこれでターン終了だぜ！」

沙耶

LP：1300

手札：3枚

モンスター：タイラント・ドラゴン

魔法・罫：一族の結束（永続魔法）、伏せカード1枚

「く、私のターン」

二階堂はカードをドロースるとニヤリと笑った。

「ふふふ、私はコアラッコを召喚しますわ！」

二階堂のフィールドに再びコアラッコが召喚された。

「もつとも、私の場には他に獣族がないので効果は使えませんが……私は手札から2枚目の二重召喚を発動！コアラッコを生贄に、暗黒のマンティコアを召喚！」

するとフィールドに黒い翼を持ったライオンが現れた。

暗黒のマンティコア

星：6

ATK：2300

DEF：1000

「さらに私は魔法カード、野生解放を発動しますわ！フィールド上の獣族・獣戦士族モンスター1体の攻撃力をそのモンスターの守備力分アップしますわ！」

マンティコアは身体が赤く変色し、攻撃力が上がっていく。

暗黒のマンティコア

ATK：2300 3300

「でもそれじゃタイラントには届かないぜ？」

「ふふ、まだですわ。私は速攻魔法、突進を発動！マンティコアの攻撃力をさらに700ポイントアップします！」

暗黒のマンティコア

ATK：3300 4000

「げ！？攻撃力4000！？」

「マンティコアでタイラント・ドラゴンを攻撃！」

「ぐあー！」

沙耶：1300 1000

「うふふふ。マンティコアは野生開放の効果でエンドフェイズに破壊されますが、マンティコアの効果により、手札の獣族、獣戦士族、鳥獣族を手札から捨てることで墓地から復活しますわ。さあ、私はこれでターン終了です」

二階堂

LP：3000

手札：0枚

モンスター：暗黒のマンティコア（攻撃表示）

魔法・罠：0枚

勝利を確信した二階堂は得意気に笑う。

「うふふふふ、これでわかったでしょう？あなたごときは嵐さんには相応しくないのです。約束どおり嵐さんと別れてもらいますわ」

「っ！？（オレ、負けんのか？オレ・・・・・・・・・・）」

「なに諦めてんだよ」

沙耶の顔が絶望に染まろうとしたとき、突然嵐が観客席から話しか

けてきた。

「こんなところで負けんなよ。俺はお前以外の女と付き合う気ねえぞ」
嵐の言葉で沙耶の顔が嬉しそうになる。

「あ、嵐さん？」

一方の二階堂は困惑した顔になった。

「そうだな……オレはまだ負けてねえ！オレのターン、ドロー！」

沙耶はドローしたカードを見て笑みを浮かべた。

「オレはデコイドラゴンを守備表示で召喚！」

沙耶のフィールドには水色の可愛らしいドラゴンが召喚された。

デコイドラゴン

星：2

ATK：300

DEF：200

「そんな雑魚モンスターで何ができますの？」

「見てりゃわかるさ。オレはカードを1枚伏せてターン終了」

沙耶

LP：1000

手札：2枚

モンスター：デコイドラゴン（守備表示）

魔法・罫：一族の結束（永続魔法）、伏せカード2枚

「まずいつすよ。このままじゃ沙耶さん……………」

沙耶の劣勢に慌てる翔。

「いや、まだわかんねえぜ。沙耶はまだ諦めてねえ」

だが十代は笑って沙耶のデュエルを見ている。

「それに、嵐も加賀見くんが負けるとは思っていない見ただしな」
沙耶を信じている嵐を見て三沢も笑っていた。

「私のターン、ドロー！」

「おっと、テムエのスタンバイフェイズに罠カード、バトルマニアを発動！相手フィールドのモンスターを全て攻撃表示にし、相手の攻撃可能モンスターは全て攻撃しなければならない！」

二階堂は自信満々に罠を発動させた沙耶を嘲笑うように笑みを浮かべる。

「うふふ、そんなカードを使わなくても攻撃してあげますわ。私は魔法カード、死者蘇生を発動！私は墓地からマンティコアで墓地に送ったレスキューキャットを特殊召喚！そしてレスキューキャットの効果でデッキのデスウォンバット2体を特殊召喚しますわ」

二階堂の場には2体のデスウォンバットが特殊召喚された。

「さあ、これで終わりですわ。あなたごときが嵐さんと付き合うなど、身の程を知りなさい！私はデスウォンバットでデコイドラゴンを攻撃！そんな雑魚はデスウォンバットで十分ですわ！」

するとデスウォンバットがデコイドラゴンに向かっていく。だが、その攻撃は予想外の存在に阻まれた。

「な………タイラント………ドラゴン？」

そこには墓地にいるはずのタイラント・ドラゴンがおり、デコイドラゴンは姿を消していた。

「ど、どういことですか！？」

「デコイドラゴンの効果を発動したのさ！こいつが攻撃対象になったとき、墓地のレベル7以上のドラゴン族モンスターを特殊召喚し、攻撃対象をそいつに移し変える！タイラント・ドラゴンは蘇生のときにドラゴン族1体を生贄にしなきゃなんねえからデコイドラゴンを生贄にしたぜ」

「そ、そんな………」

「残念だったな。マンティコアで攻撃してりゃ、このターンは生き延びたのにな。タイラント・ドラゴン、デスウォンバットを迎え撃て！ブラストファイア！」

タイラント・ドラゴンの炎がデスウォンバットを飲み込んだ。

二階堂

LP:3000 900

「ぐう！ですがまだ！」

沙耶を睨む二階堂だが沙耶は余裕の笑みを浮かべている。

「おいおい、忘れたのか？テメエのマントィコアはバトルマニアの効果を受けてんだぜ？」

「っ！？ま、待ちなさい！」

二階堂の叫びもむなしく暗黒のマントィコアはタイラント・ドラゴンに向かっていく。そしてマントィコアはタイラント・ドラゴンの炎に包まれた。

二階堂

LP:9000

「そんな……この私が……」

呆然とする二階堂。一方の沙耶は勝利に喜んでいた。

「良かった……これで、嵐と別れなくてすむ……」

喜ぶ沙耶の目元に涙が光る。どうやら安心して涙が出てきたらしい。

「……………認めませんわ。こんなの認めるわけがありません！
あなたなんかが「はいそこまで」「あ、嵐さん!？」」

往生際の悪い二階堂の言葉を観客席から降りてきた嵐が遮った。

「俺さっきも言ったよな？俺はこいつ以外と付き合っ気ねえってよ」

「あ、嵐!?!?!」

嵐は沙耶を抱きしめる。抱きしめられた沙耶は顔を真っ赤にする。

「まあ、とりあえずこのデュエルの前にも言っただけど……………
もう俺たち、特に沙耶にちょっとかい出すなよ？もしやったら次は……………俺が相手になるぜ」

嵐はそう言うと沙耶を連れてデュエル場を後にした。残された二階堂はただうちひしがれていた。

第18話 冬休み前の月一試験 後編(前書き)

ようやく更新です。一ヶ月もお待たせして申し訳ありませんでした。

これからは更新速度を上げたいです。

第18話 冬休み前の月一試験 後編

沙耶の実技試験が終わってからしばらくして……………

『シニヨ〜ル紫藤〜、シニヨ〜ル朝日〜、デュエル場に降りるの〜
ネ』

クロノスの放送が入る。どうやら嵐の相手は朝日というらしい。

「んじゃ行ってくるわ」

「おう、頑張れよ！／＼／」

観客席からデュエル場に降りていく嵐を沙耶が見送る。しかし何故か沙耶は顔を赤くしている。そしてその周りでは……………

「……………ぶはあ……………」

十代を除く全員が砂糖を吐いてぶっ倒れていた。実は見事に二階堂に勝利した沙耶を嵐が沙耶の悪口を言った自分のファンたちに見せ付けるように抱きしめたりキスしたり……………つまりはいちゃつきまくったのだ。

その光景を見た仲間たちは恋愛事に鈍感な十代以外の全員が砂糖を吐いて倒れ、見せ付けられた嵐のファンたちはうちひしがれていた。

「お〜い！これどうすんだよ〜！！」

そして十代は倒れている翔たちの対処に悪戦苦闘していた。

一方、嵐はデュエル場に上がって対戦相手の朝日と向き合っていた。

(今日は昨夜作ってたあれか?)

「（ああ、ちょっと試しにな）」

嵐はバクラと心の中で会話しながらデッキをデュエルディスクにセツトした。

（ところでよ……）

「（ん？）」

（あいつはなに怒ってんだ？）

「（知らん）」

バクラの指摘になんでもないように答える嵐。バクラが言ったあいつとは対戦相手の朝日である。嵐を見つめる朝日の目には明らかに怒りの感情が混ざっていた。

「なあ、さっきから睨んでっけどなんなんだ？」

嵐の問いに朝日は怒りながら荒い口調で答えた。

「五月蠅い！よくも二階堂さんを悲しませたな！」

「は？」

どうやら朝日は二階堂の目の前で沙耶を抱きしめたこと等の、所謂二階堂を振ったことに腹を立てているらしい。

「んなもんあいつが悪いんだろが。俺は沙耶の悪口を言った奴に優しくできるほどお人好しじゃない」

嵐がそう答えると朝日はさらに怒り狂う。

「ふざけるな！あんな男女おとこおんななんか二階堂さんの足元にも及ばないだろうが！あんな奴より二階堂さんを優先するのは当然だ！」

明らかにおかしい理論。恋は盲目というがそれが悪い方向に出ていた。

「二階堂さんに言い寄られてるだけでも腹立たしいのに……よりによってあんな男女おとこおんなの方を優先するなんてどうかしてる！」

次々に怒りに任せて暴言を吐く朝日。一方の嵐は……

「おい……構えろ……叩き潰してやる」

二階堂たちに沙耶を悪く言われたことで燃えていた怒りの炎。沙耶といちやつくことである程度鎮火していたそれが再燃していた。

「デュエル！！」

「俺の先攻、ドロー！」

先攻は嵐。嵐は勢い良くカードをドローする。

「俺はカードを1枚伏せ、雷電娘々（らいでんにゃんにゃん）を攻撃表示で召喚！」

嵐がカードをセットすると嵐の場に虎柄の服を来た女の子が現れた。

雷電娘々

星：4

ATK：1900

DEF：800

「「「「「おお!!」「」「」」」」

その瞬間、周りの男子生徒が騒がしくなる。おおかた可愛い女の子
モンスターの登場に喜んでいるのだろうか。

「いや、やっぱり嵐くんも男の子っすね」

復活した翔は雷電娘々を召喚した嵐を見てしみじみと頷く。

「そつえば嵐はメインデッキにもハーピィレディを入れてたわね」

明日香が嵐のメインデッキにも似たようなモンスターがいることを

思い出す。そして沙耶は……

「嵐……ああいつの好きなのかな？……オレがああいう格好したら喜んでくれるかな？……ってオレはなに考えてんだ！？」

なにやら妄想していた。

「ぬう、いいカードを出してきたな。だが手加減はせんぞ！」

雷電娘々は対戦相手の朝日にもデュエルとは関係ないところで影響を及ぼしていた。

「……俺はこのままターン終了」

(こいつらアホか?)

嵐とバクラが呆れて溜息を吐いた。

嵐

LP:4000

手札:4枚

モンスター:雷電娘々(攻撃表示)

魔法・罫:伏せカード1枚

「僕のターン、ドロー！僕はライオ・アリゲーターを召喚！」

朝日の場にはオレンジ色のたてがみを持つワニが姿を現した。

ライオ・アリゲーター

星:4

ATK:1900

DEF:200

「さらに僕は魔法カード、二重召喚を発動！僕はこのターンもう一度通常召喚を行うことが出来る！ライオ・アリゲーターを生贄にスパウン・アリゲーターを召喚！」

ライオ・アリゲーターが姿を消すと今度は鎧を纏った二足歩行のワニが現れた。

スパウン・アリゲーター

星：5

ATK：2200

DEF：1000

「かなり心苦しいが……スパウン・アリゲーターで雷電娘々を攻撃！」

「……あああああああ！！」「」「」

スパウン・アリゲーターが大口を開けて雷電娘々に突っ込む。それを見たギャラリーからは悲鳴が上がる……が……

「俺はカウンター罠、攻撃の無力化を発動！相手の攻撃を無効にし、

バトルフェイズを終了させる！」

「「「「「よくやったあああああ!!!!!!」」」」」

すると今度は雷電娘々を護った嵐に歓声が上がった。

「そんなにそのカードを護りたいか。僕はカードを2枚伏せ、ターン終了だ。だが、エンドフェイズにスパウン・アリゲーターの効果発動！このカードが爬虫類族モンスターを生贄にして召喚したとき、エンドフェイズに生贄にしたモンスターを特殊召喚する！蘇れ、ライオ・アリゲーター！」

朝日のフィールドに再びライオ・アリゲーターが特殊召喚された。

朝日

手札：1枚

モンスター：スパウン・アリゲーター（攻撃表示）、ライオ・アリゲーター（攻撃表示）

魔法・罫：伏せカード2枚

「いや〜、さすが嵐くん。可愛い女の子を護るとは男っすね〜」

翔が嵐に感心し、周りも頷いてる。

「むう、やっぱり嵐はああいうほうが……」

そして沙耶はいまだになんか悩んでいる。そんなことしてる間に嵐は自分のターンを進めていた。

「俺のターン、ドロ〜。お前ら何勘違いしてるか知らんがこいつは単なる生贄要員だぜ？」

「「「「「なにiiiiiiiiiiiiiiii!!」「「「「「」

嵐の言葉に周りの男子生徒から驚きと怒りの声が上がった。心なしか雷電娘々も『ガン!』とか擬音がつきそうな顔をしている。精霊じゃないのに……唯一沙耶だけはホッとした顔をしている。

「俺は雷電娘々を生贄に、充電池メンを召喚！」

充電池メン

星：5

ATK：1800

DEF：1200

「~~~~~ぶうぶう~~~~~!!!!!!」~~~~~

雷電娘々を生贄にしたことに周りからはブーイングが飛ぶ。実際嵐は単純に攻撃力が高いから入れているだけだった。

「そして充電池メンの効果発動！召喚に成功したとき、手札、またはデッキから充電池メン以外の電池メンと名のつくカードを特殊召喚する！俺は電池メン単三型を特殊召喚！」

電池メン単三型

星：3

ATK：0

DEF：0

「おいおい、攻撃力0の雑魚に何ができるってんだ？」

蔑むように言う朝日に嵐は笑みを浮かべる。

「慌てるなよ。俺は速攻魔法、地獄の暴走召喚を発動！相手フィールドにモンスターが存在し、自分フィールド上に攻撃力1500以下のモンスターの特殊召喚に成功したとき、そのカードと同名のカードを手札、デッキ、墓地から全て攻撃表示で特殊召喚する！ただし、お前も自分のモンスターを1体選択して全て特殊召喚できるぜ。俺は残り2体の電池メン単三型を特殊召喚！」

嵐の場にはさらに2体の乾電池のようなモンスターが特殊召喚された。

「僕はライオ・アリゲーターを2体特殊召喚！そんな雑魚モンスター、何体並べたって無駄さ！」

「そうかな？」

電池メン単三型×3

ATK：0 3000

嵐がそう言っていると電池メン3体の攻撃力が上昇していく。

「な！攻撃力・・・3000！ど、どどういうことだ！？」

「電池メン単三型は自分フィールド上の電池メン単三型が全て攻撃表示なら攻撃力が、全て守備表示なら守備力が電池メン単三型1体につき1000ポイントアップする。俺の電池メンは3体とも攻撃表示、よって3体とも攻撃力3000ポイントアップだ！」

「くー！」

「さらに充電池メンは自分フィールド上の雷族モンスター1体につき、攻守が300ポイントアップする！」

充電池メン

ATK	: 1800	3000
DEF	: 1200	2400

「な！？（だ、だが大丈夫だ。僕の伏せカードはミラーフォースと攻撃の無力化。攻撃してきても防げる）」

「さらに、俺は魔法カード、ショートサーキット漏電を発動！自分フィールドに3体以

上電池メンが存在するとき、相手フィールド上のカードを全て破壊する！」

「な、なんだとお!？」

嵐が魔法カードを発動すると電池メン3体と充電池メンから発生した巨大な雷が朝日のカードを飲み込み、破壊した。

「そ、そんな………そんなあ！」

「電池メン3体と充電池メンの攻撃!サンダーバースト!!」

「うわああああああああああ!!」

朝日:LP40000

「おう、勝ったぜ」

デュエルを終えた嵐は沙耶たちの所に戻ってきた。

「すげえデュエルだったな！嵐！」

戻ってきた嵐を十代が賞賛する。すると沙耶が嵐に近づいてきた。その瞬間、翔たちはその場から離れる。ここが再び甘い空間になると察したのだろう。

「な、なあ嵐？あ、嵐はああいうのが好きなのか？／／／」

顔を赤くして聞いてくる沙耶に嵐は疑問符を浮かべる。

「？ああいうの？」

「その……………雷電娘々みたいな格好……………／／／」

それを聞いた嵐は溜息をつく。

「ばーか、あれは攻撃力高いから入れてるだけだよ。んなこと考え

てない」

「そ、そっか………//」

さらに顔を赤くして俯く沙耶。それを見た嵐は沙耶に耳元に顔を寄せる。

「もっとも、やってくれたら俺は嬉しいけどな？」

「!?!?!?!?!」

結局どこまでもバカツプルだった。ちなみに離れていたために翔たちこそ被害は出なかったがそれを見ていた周りの生徒は砂糖を吐いて倒れていた。

第19話 帰省×紹介×シスコン（前書き）

今回からしばらく冬休み。基本的に糖分が多いです。

そして今回の題名はハンターハンターを真似てみました。

第19話 帰省×紹介×シスコ

〔SIDE：ARASHI〕

さて、冬休みに突入し、俺は今1軒の家の前にいる。ごく普通の軒家。ただ何故か庭にサンドバッグが置いてあるが……

ちなみにここは俺の家ではない。俺の家はここからそう離れてはいないが俺の家じゃないのは確かだ。

そんじゃあ誰の家かって言うと……

「は、早く入ろうぜ？」

沙耶の家だったりする。事の発端は遡ること数日前。

冬休みに入る直前、俺は例によって沙耶の作った弁当を食っていた。

「な、なあ嵐。ふ、冬休み、お、オレんちこねえか？／＼／」

「は？」

俺は沙耶の言葉に固まる。いや、だって……なあ？

「お前の家って、実家ってことで良いんだよな？」

「ほ、他にあんのかよ？／＼／」

実家に招待……いや、これは気を引き締めないとな。

「良いぜ」

「ほ、ホントか！？」

そりゃあ断るわけにはいかんだろ。

「やっぱスーツかなんか着てったほうがいいか？」

「へ？なんでんなもん着てくんだよ？」

まあ……だつてなあ……

「ご両親への挨拶はしっかりしねえとな」

「な、なに考えてんだよ！？／／／」

「ん？『娘さんをください』って言いに行くんじゃないかねえの？」

あ、沙耶の顔がどんどん真っ赤になってく。まあ俺もわかっててやつてんだけどね？

「ば、ばばばばば馬鹿野郎！！た、ただ親父やお袋に紹介したいだけだよ！／／／／／」

「うんわかつてる。冗談だよ」

まあさすがに付き合つて数ヶ月でそれはなあ？

「あゝらゝしゝ……／／／／／」

おや、少しご立腹みたいだな。じゃあちよつと本音言つとくか。

「まだ今はな？あ、でも婚約はできるか？」

「！？／／／／／」

そつだよな。婚約つてことなら大丈夫かも。

「あつあつあつあつ……／＼／＼／＼／＼／」

あ、沙耶の頭から湯気出てる。

「わけで俺は沙耶と一緒に沙耶の実家の前にいるわけだ。ちなみに住所を聞いて驚いたが沙耶の実家は童実野町（こどもじのまち）にあつて俺が海馬から貰った家から少し離れてるが会いに来れない距離じゃなかった。まあ俺はこの世界に来てから海馬KC本社ビルか遊戯の実家に行つてるほうが多かったから街で会つたりしてないんだろくな。

「ただいま」

まず沙耶がドアを開ける。俺はそれに続く形でドアをくぐつた。

「あら、おかえりなさい」

すると奥から優しそうな女性が出てきた。髪が長く、優しげな表情、沙耶の面影もある。っていうかかなり若い。確か沙耶には兄貴が2人いるって聞いたけど。

「沙耶ちゃん、そっちの子がこの前話してた？」

「あ、ああ。オレのか、彼氏の……／＼／＼／＼」

「紫藤嵐です。娘さんとお付き合いさせてもらってます」

俺はちゃんと敬語でお辞儀をする。第一印象は大事だ。主に俺と沙耶の未来のために。

「あらあら、ご丁寧にどうも。私は沙耶の母の綾香（あやか）です。さ、上が

って上がって」

そう言われた俺は綾香さんと沙耶に案内されて居間に進む。そこには新聞を広げた壮年の男性がソファに座っていた。綾香さんが若々しいのに対し、こっちは沙耶の父親としては相応な外見だ。

「おう、お前さんが沙耶の彼氏か？」

「はい、娘さんとお付き合いさせてもらってる紫藤嵐です」

さっきと同じように挨拶する。特に親父さんは1番の障害になる場合が多いからしつかりしないとな。

「ははは、堅苦しい挨拶は良いぜ。ほれ、座れ座れ」

そう言われ綾香さんは親父さんの隣に、俺は沙耶と並んで2人に向かい合った状態でソファに座った。

「俺は沙耶の父親の海人^{かいと}。ところでよ、ウチの娘はどうだ？随分迷惑かけてんじゃねえか？」

「ちよ、親父なに言ってるんだよ！？／＼／＼」

「そんなことないですよ。沙耶はしつかりしていつでも弁当作ってきてくれるし……可愛いところもありますしね」

俺はそういいながら隣に座る沙耶の頭を撫でる。

「んう……馬鹿……／＼／＼」

沙耶はそう言いながらも気持ち良さそうに目を細める。

「わははは！こりゃ惚気られちゃったな！」

「本当に、沙耶は男の子みたいに育っちゃったからどうしようかと思っただけど、これなら心配ないわね。どう？もういっそのこと沙耶と婚約しない？」

「そりゃいい！そうしろそうしろ！」

「お、親父、お袋！？／／／／／／」

おおう、思ってもない言葉。沙耶は案の定顔が真っ赤だ。俺の答えは当然決まってる。

「是非、娘さんを俺にください！」

「~~~~~！！！！！！／／／／／／／／／／／／」

隣で沙耶の顔が『ボン！』と音が出そうなぐらい真っ赤になり、頭から湯気が立ち上る。けど俺だって最初から婚約は提案するつもりだったからな。

「よし！じゃあ決まりだな！」

海人さんが大笑いする。うん、この人たちとならうまくやっていけそうだ。

「「ただいま！」」

すると玄関から2人の男性の声が聞こえた。多分沙耶の兄貴たちだな。

「お、沙耶帰ってきてる！」

「ホントだ！お帰り沙耶！」

2人は双子らしく顔はそっくり。黒髪の短髪に切れ目。やっぱりどこことなく沙耶に似てる。2人は俺を押しつけ沙耶の隣へ。

「沙耶、元気してたか！？沙耶がいなくなって兄ちゃんたち寂しかったぞ！」

……………1番の難敵はここにいたか。この2人……………妹魂と書いてシスコンだ。

「んで、こつちの男は誰だ？」

兄貴のうち1人が俺を睨む。するともう1人も俺を睨んできた。

「え、えつと……………こいつは……………／／／／／／」

「沙耶ちゃんの『婚約者』の紫藤嵐くんよ」

綾香さんが爆弾を投下した。

「あん、綾香さんなんて他人行儀ね。私のことはお義母さんって呼んで」

「人の心を読まないでください。そして喜んで呼ばせていただきま
すお義母さん」

俺がそう言つと2人からの殺気が増した。

「母さん！婚約者つてどういうこと！？」

「どうもこうもねえよ。俺と母さんは嵐が気に入ったからな。つい
さっき決めたんだ。沙耶も了承してるぜ？」

驚いたように2人が沙耶を見ると沙耶は顔を真っ赤にしてコクンと
頷く。

「認めん……認めんぞ！」

2人は沙耶から離れ、俺の前に仁王立ちする。

「俺は加賀見俊平」

「俺は加賀見京平」

「俺達はお前が沙耶の婚約者だなんて認めんぞ！認めて欲しかつ
たら俺達にデュエルで勝つてみる！！」

……やっぱりこうなつたか。ちなみに双子の兄が俊平さんで弟が京
平さんらしい。

こうして俺は双子に婚約を認めてもらうためにデュエルすることに
なつた。

最後の障害が海人さんじゃなくて双子の兄貴たちってどうなのよ？

「俺のこともお義父さんでいいぜ」

だから人の心を読まんでください。

第19話 帰省×紹介×シスコン（後書き）

第19話でした。

ちなみに綾香さんと海人さんのモデルはリリなののクイントさんと
ゲンヤさんです。

第20話 負けられない戦い！婚約を賭けたタッグデュエル（前書き）

今回は嵐とシスコンブラザーズの戦いです。

結局タッグデュエルになりました。タッグルールはわかりにくいかもしれませんが、お許しください。

第20話 負けられない戦い！婚約を賭けたタッグデュエル

〔SIDE：ARASHI〕

沙耶の家の庭で俺は俊平さん、京平さんと向き合っている。

「で、どっちがやるんですか？」

「俺たちだ！！」

は？WHY？今なんつったこの人たち？

「お前が強いのは沙耶から聞いて知っている！」

「俺たちは万が一にも負けるわけには行かない！」

「よつて、俺たち2人でお前を叩き潰す！！」

この兄貴たちそこまで俺を婚約者にしたくないか！？もはや超妹魂と書いてシスコンか……

（どうする？俺様がやってやるつか？）

いや、それは……

「ちょっと待て！兄貴たちなに言ってやがんだ！」

悩んでいると沙耶が乱入してきた。

「兄貴たちがそんな考えならオレは嵐と組む！タッグでデュエルだ！」

「な、なに言ってるんだ沙耶！俺たちはお前と争う気は……」

俊平さんが諫めようとするが沙耶は聞く耳もたねえ。ああなった沙耶を止められんのは俺ぐらいじゃないか？頭撫でるかキスすれば大人しくなるしな。

「うるせえ！ホントは兄貴たちの意見なんざ聞きたくねえんだぞ！なのにデュエルするなんて言い出しやがって…その上2対1なんて言い出しやがって、いいかげんにしやがれ！」

沙耶は一通り怒鳴ると俺の隣に来てデュエルディスクを起動させる。

「ふふ……」

「……んだよ？」

俺が笑ったのを見て沙耶は睨んでくる。

「いや、愛されてるなと自覚してな。そんなに俺と婚約したいのか？」

「~~~~~！！！！……お前は嫌なのかよ……？／／／／／／」

「そんなわけないだろ？」

「……馬鹿……／／／／／」

そんな俺たちを見た4人の感想。

「あらあら、ラブラブね」

「わっはっは！いいじゃねえか！仲が良いのはいいことだぜ！」

「おのれ~~~~~！！！！」

2人は温かい目で見つめていたが他2人は滅茶苦茶睨んでた。

「さっさと構えろ！」

「始めるぞ！」

俊平さんと京平さんがそう言つと俺もデュエルディスクを構える。

「~~~~デュエル！！！！」

『タッグデュエル、ルール説明』

それぞれのプレイヤーのライフは4000ポイント。相手2人を両方倒して始めて勝利となる。

ターンはそれぞれのプレイヤーが交互に行く。例にすると嵐 俊平

沙耶 京平 嵐といった感じ。

出せるカードは全てのプレイヤーがそれぞれ5枚まで、場が完全に埋まると最大40枚のカードがフィールドに出る。

タッグパートナーのフィールドや墓地も自分のフィールド、墓地と

して数える。

ダイレクトアタックは相手のプレイヤー全ての場にモンスターがない場合に可能で例えば1人のプレイヤーの場がから空きでもそのタッグパートナーの場にモンスターがいればダイレクトアタックはできない。

「俺のターン、ドロー！」

先攻は俺だ。タッグでは1ターン目は誰も攻撃できないからな。

「俺は裏守備モンスターをセットし、カードを2枚伏せてターン終了！」

嵐

LP：4000

手札：3枚

モンスター：裏守備モンスター1体

魔法・罫：伏せカード2枚

「俺のターン、ドロー！」

次は俊平さん。どんなデッキだ？

「俺はイエローガジェットを攻撃表示で召喚！」

イエローガジェット

星：4

ATK：1200

DEF：1200

「イエローガジェットの効果発動！召喚、特殊召喚成功時、デッキからグリーンガジェットを手札に加える！」

イエローガジェット………ガジェットデッキか？

「さらに手札から生け贄^い人形^{にえドル}を発動！自分フィールドのモンスターを生け贄にし、手札からレベル7のモンスターを特殊召喚する！俺は手札からリボルバー・ドラゴンを特殊召喚！」

リボルバー・ドラゴン

星：7

ATK：2600

DEF：2200

「やべー！もうきやがった！」

沙耶が驚く。そついや沙耶は2人のデッキ知ってんだつたな。

「リボルバー・ドラゴンの効果発動！相手フィールドのモンスター1体を選択し、コイントスを3回行う！その内2回が表ならそのモンスターを破壊する！俺は泥棒小僧の裏守備モンスターを選択！」

は？泥棒小僧？

「すみません、なんすか？泥棒小僧って……………」

「俺たちの沙耶を奪おうとするお前など！」

「泥棒小僧で十分だ！」

(……………まあ、俺はそう言われても間違っつてねえけどな)

お前は黙ってる。

さて、投げられたコインの結果は……………表・表・裏。

「よし！泥棒小僧の守備モンスターを破壊！ガンキャノンシューター！」

リボルバー・ドラゴンの銃口から撃ち出された弾丸が俺のモンスターを破壊した。

クリッター

星：3

ATK：1000

DEF：600

「破壊されたクリッターの効果発動！デッキから攻撃力1500以下のモンスターを手札に加える！俺が選択するのはTheアトモスファイア！」

「俺はさらに手札のグリーンガジェットとマシンナーズ・フォートレスを墓地に送り、墓地に送ったマシンナーズ・フォートレスを特殊召喚！」

マシンナーズ・フォートレス

星：7

ATK：2500

DEF：1600

まためんどくさいのが出てきやがった。

「俺はこれでターン終了だ！」

俊平

LP：4000

手札：2枚

モンスター：リボルバー・ドラゴン（攻撃表示）、マシナーズ・

フォートレス（攻撃表示）

魔法・罫：なし

「オレのターン、ドロー！オレは裏守備モンスターをセット！さらにカードを3枚伏せてターン終了！」

沙耶

LP：4000

手札：2枚

モンスター：裏守備モンスター1体

魔法・罫：伏せカード3枚

「俺のターン、ドロー！」

今度は京平さんだけど………いつたいどんなデッキだ？

「俺は魔法カード、コストダウンを発動！手札を1枚捨て、自分の手札の全てのモンスターのレベルを2つ下げる！そして切り込み隊長を召喚！」

切り込み隊長

星：3 1

ATK：1200

DEF：400

「さらに切り込み隊長の効果発動！このカードが召喚に成功したとき、手札のレベル4以下のモンスターを特殊召喚することができる！俺はコストダウンでレベルが下がったセイントナイト聖導騎士イシュザークを特殊召喚！」

セイントナイト聖導騎士イシュザーク

星：6 4

ATK：2300

DEF : 1800

「そして装備魔法、デーモンの斧を切り込み隊長に装備してターン終了！」

切り込み隊長

ATK : 1200 2200

京平

LP : 4000

手札 : 1枚

モンスター : 切り込み隊長 (攻撃表示)、 聖導騎士イシユザーク (攻撃表示)

魔法・罫 : デーモンの斧 (切り込み隊長に装備)

俊平さんは機械ビート、京平さんは戦士ビートか………兄妹そろってビートデッキなのか。

「俺のターン、ドロ！俺は天使の施しを発動！カードを3枚ドロし、その後手札を2枚捨てる！この効果で墓地に送られたダンディライオンの効果発動！このカードが墓地に送られたとき、自分フィールドに綿毛トークン2体を特殊召喚する！」

綿毛トークン

星：1

ATK：0

DEF：0

「一気に行くぞ！綿毛トークン2体と墓地のクリッターをゲームから除外し、Theアトモスフィアを攻撃表示で特殊召喚！」

Theアトモスフィア

星：8

ATK：1000

DEF：800

「レベル8で・・・攻撃力10000？」

「そんなモンスターでなにを？」

俊平さんと京平さんはアトモスファイアを見て驚いてるがこいつの効果はビートデッキの天敵だぜ！

「アトモスファイアの効果発動！相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択し、このカードに装備することができる！このカードの攻撃力と守備力は装備したモンスターの攻守分アップする！俺はリボルバー・ドラゴンを選択！」

「なんだと！！」

するとリボルバー・ドラゴンがアトモスファイアの球体の中に吸い込まれた。

Theアトモスファイア

ATK：10000 36000

DEF：8000 30000

「アトモスファイアで切り込み隊長に攻撃！テンペストサンクションズ！」

「クオオオオオオオオオ！」

アトモスファイアの雄叫びと共に翼から生み出された突風が切り込み隊長を吹き飛ばす。

「ぐわああああああ！」

京平：LP4000 2600

「俺はさらにハーピー・レディサイバーボーンテージを召喚してターン終了！」

嵐

LP：4000

手札：3枚

モンスター：Theアトモスファイア（攻撃表示）、ハーピー・レディ
ISB（攻撃表示）

魔法・罫：リボルバー・ドラゴン（アトモスファイアの装備カード状態）

「く、俺のターン・・・ドロー！俺はマシンナーズ・フォートレスでアトモスフィアに攻撃！」

自爆特攻・・・マシンナーズ・フォートレスの効果か。

「マシンナーズ・フォートレスが戦闘破壊されたとき、相手フィールドのカードを1枚選択して破壊できる！これで・・・」

「畏カード、ゴッドバードアタックを発動！自分フィールドの鳥獣族モンスターを生贄にし、フィールド上のカード2枚を破壊する！俺はハーピー・レディSBを生贄に、マシンナーズ・フォートレスとイシュザークを破壊！」

ハーピー・レディが炎に包まれるとマシンナーズ・フォートレスとイシュザークを破壊した。

「おのれ！俺はスクラップ・リサイクラーを守備表示で召喚！」

スクラップ・リサイクラー

星：3

ATK：900

DEF：1200

「スクラップ・リサイクラーが召喚・特殊召喚に成功したとき、自分のデッキから機械族モンスターを墓地に送ることができる！俺はレッドガジェットを墓地に送る！さらにスクラップ・リサイクラーのもう1つの効果発動！墓地の機械族・地属性・レベル4のモンスター2体をデッキに戻し、カードを1枚ドロウすることができる！これでターン終了だ！」

俊平

LP：4000

手札：3枚

モンスター：スクラップ・リサイクラー（守備表示）

魔法・罫：0枚

「オレのターン、ドロウ！オレは裏側守備モンスターを生贄にするぜ！守備モンスターはミンゲイドラゴン！こいつはドラゴン族の生贄にするとき、2体分の生贄にできる！オレはフェルグラントドラゴンを召喚！」

フェルグラントドラゴン

星：8

ATK : 2800
DEF : 2800

「行くぜ！フェルグラントドラゴンでスクラップリサイクラーに攻撃！さらに永続罠、竜の逆鱗を発動！オレのフィールドのドラゴンは貫通効果を得るぜ！ダイレクトブレス！」

「な、なん・・・うわあああああ！！！」

俊平 : LP 4000 2400

「さらにアトモスファイアで俊平兄貴にダイレクトアタック！」

「く、それは通さないぞ！手札から速攻のかかしを墓地に送り、直接攻撃を無効にする！」

防がれたか、おしいな。

「オレはこれでターン終了だ！」

沙耶

LP：4000

手札：2枚

モンスター：フェルグラントドラゴン（攻撃表示）

魔法・罨：竜の逆鱗（永続罨）、伏せカード2枚

「く、ドロー！俺は天よりの宝札（アニメ版）を発動！全てのプレイヤーはカードを6枚になるまでカードをドローする！」

俺たち4人はカードを6枚になるまでカードをドローする。俺は3枚、沙耶は4枚。こっちも手札増えたけど……あっちもかなり増えたな。

「俺は重装武者・ベン・ケイを召喚！」

重装武者・ベン・ケイ

星：4

ATK：500

DEF：800

「さらにベン・ケイに稲妻の剣とデーモンの斧、そして魔導師の力を装備する！」

「させないぜ！魔導師の力発動時にカウンター罠、魔宮の賄賂を発動！相手の魔法・罠の発動と効果を無効にして破壊し、相手はカードを1枚ドロウする！」

「なに！？」

お、この流れは……

「さらにカウンター罠でカードの効果が無効にしたとき、手札から冥王竜ヴァンダルギオンを特殊召喚！」

「グオオオオオオオオオオ！！」

冥王竜ヴァンダルギオン

星：8

ATK：2800

DEF：2500

ヴァンダルギオンが咆哮する。……………ん？なんかヴァンダルギオンがこつち見たような……………まさか……………

「ヴァンダルギオンは無効にしたカードの種類によって違う効果を発動する！魔法を無効にした場合は相手ライフに1500ポイントのダメージを与える！」

「ぐああああ！」

京平：LP2600 1100

「京平！大丈夫か！？」

「さ、沙耶……そのカードはいつたい？アカデミアに行く前は持ってなかった筈……………」

京平さんの問いかけに沙耶は顔を赤くしながら俺のほうを見る。

「こ、これは……嵐から貰った、オレと嵐の絆だ！……………」

「「な、なんだとおおおおおお！！」」

おおつ。沙耶、いろいろと開き直ったな。

「あらあら、つまり2人の愛の結晶ってわけね」

ボン!

あ、何とか耐えてたのにお義母さんの台詞で爆発した。

「ぐう……俺はカードを1枚伏せてターン終了」

重装武者ベン・ケイ

ATK:500 1300 2300

京平

LP:1100

手札:1枚

モンスター:重装武者ベン・ケイ(攻撃表示)

魔法・罫:稲妻の剣(ベン・ケイに装備)、デーモンの斧(ベン・ケイに装備)、伏せカード1枚。

「俺のターン、ドロ―！俺はブラッド・ヴォルスを攻撃表示で召喚
！」

ブラッド・ヴォルス

星：4

ATK：1900

DEF：1200

「さらにアトモスファイアでベン・ケイに攻撃！」

「よっしゃ！これで兄貴1人撃破！」

「させねえ！カウンター罠、攻撃の無力化を発動！相手モンスターの攻撃を無効にし、バトルフェイズを終了させる！」

京平さんの罠カードによってアトモスファイアの攻撃は時空の渦に飲み込まれた。

「ちっ、俺はこのままターン終了」

嵐

LP：4000

手札：5枚

モンスター：Theアトモスファイア（攻撃表示）、ブラッド・ヴォルス（攻撃表示）

魔法・罫：リボルバー・ドラゴン（アトモスファイアの装備カード状態）、伏せカード1枚

「俺のターン、ドロー！泥棒小僧、よく頑張ったがここまでだ！俺は手札から魔法カード、融合を発動！手札の2枚目のリボルバー・ドラゴンとブローバック・ドラゴンを融合！ガトリング・ドラゴン融合召喚！」

ガトリング・ドラゴン

星：8

ATK：2600

DEF：1200

げ！やばい！

「ガトリング・ドラゴンの効果発動！コイントスを3回行い、表の数だけモンスターを破壊する！」

全部裏、もしくは2枚が表ならまだ何とかなる。

コイントスの結果は……表・表・表。なんと3回とも表だった。

「表は3回！よって、アトモスファイア、フェルグラント、ヴァンダ
ルギオンを選択！ガトリングショット！」

ガトリング・ドラゴンが両手と頭のガトリングで俺たちの場のモン
スター3体を破壊した。

「さらにツインバレル・ドラゴンを召喚！」

ツインバレル・ドラゴン

星：4

ATK：1700

DEF：200

「ツインバレル・ドラゴンの効果発動！このカードが召喚・反転召
喚・特殊召喚に成功したとき、コイントスを2回行い、2回とも表
なら相手フィールドのカードを1枚破壊する！俺は泥棒小僧の伏せ
カードを破壊する！」

再びコインが舞う……。結果は表・表。マジか……。
どんだけ運がいいんだよ。

「破壊だ！ツインバレルショット！」

く！リビングゲットの呼び声が破壊された……。コイントスの結果が出た後だからチェーン発動できねえ。

「ガトリング・ドラゴンでブラッド・ヴォルスを攻撃！」

「させるか！オレの伏せカード、攻撃の無力化を発動！攻撃を無効にしてバトルフェイズを終了させるぜ！」

沙耶、ナイスフォロー。

「俺はターン終了だ」

俊平

LP：2400

手札：2枚

モンスター：ガトリング・ドラゴン（攻撃表示）、ツインバレル・

ドラゴン（攻撃表示）

魔法・罫：0枚

「オレのターン、ドロー……。オレは裏守備モンスターを
セットしてターン終了」

沙耶

LP：4000

手札：4枚

モンスター：裏守備モンスター1体

魔法・罫：竜の逆鱗（永続罫）

「俺のターン、ドロ！俺はベン・ケイで裏守備モンスターに攻撃
！」

ベン・ケイの攻撃で沙耶のモンスターが破壊された。

「オレのモンスターは仮面竜^{マスクド・ドラゴン}！その効果で戦闘破壊されたとき、デ
ッキからレベル4以下のドラゴン族を特殊召喚する！オレはデッキ
から2枚目の仮面竜を守備表示で特殊召喚！」

マスクド・ドラゴン
仮面竜

星：3

ATK：1400

DEF：1100

「でも、なんでガトリング・ドラゴンの効果使わなかったんだ？」

沙耶が疑問の声を口にする。まあ、その理由はガトリング・ドラゴンの効果にある。沙耶の疑問に京平さんが答えた。

「ガトリング・ドラゴンはコイントスで表が出た数は絶対破壊しなきゃならない。味方のモンスターもね」

そう、たとえば相手のモンスターが1体しかいないとき、コイントスで3回表が出たら自分のモンスターを2体破壊しなきゃならないからな。

「ツインバレル・ドラゴンで仮面竜に攻撃！」

「く、効果で3枚目の仮面竜召喚！」

「だが、ベン・ケイは装備されているカードの数だけ追加攻撃ができる！ベン・ケイで仮面竜に攻撃！」

「まだまだ！仮面竜の効果でミンゲイドラゴンを守備表示で特殊召喚！」

ミンゲイドラゴン

星：2

ATK：400

DEF:200

「ベン・ケイでミンゲイドラゴンに攻撃！そしてガトリング・ドラゴンで泥棒小僧にダイレクトアタック！」

「ぐわあ！」

嵐:LP4000 1400

「俺はこれでターン終了だ」

京平

LP:1100

手札:2枚

モンスター:重装武者ベン・ケイ

魔法・罠:稲妻の剣(ベン・ケイに装備)、デーモンの斧(ベン・

ケイに装備)

「ふん！目を覚ませ沙耶！この泥棒小僧はこの程度の男だぞ！」

「どの道これで俺たちの勝ちだ！泥棒小僧！金輪際、沙耶には近づかないで貰おう！」

ぼろ糞に言われとる。けど……

「なに言ってるんだよ兄貴たち。何のためにオレが嵐のターンまでもたせたと思ってるんだ？」

「なに？」

「どういうことだ？」

沙耶が笑顔で言葉を続ける。

「嵐が、何の打開策もねえわけねえだろうが！なあ！嵐！」

「まったく、信じてくれんのは嬉しいけど……プレッシャーかかるぜ。」

「当然！俺のターン、ドロ！俺は手札から時を司る神鳥・ユリウス・の効果を発動！このカードを墓地に送り、ライフを半分支払ってこの前の自分、もしくは相手ターンに自分のフィールドで破壊さ

れ、墓地に送られたモンスターを可能な限り特殊召喚する！タッグではパートナーのフィールドも自分のフィールドとして扱う。そしてこの前の相手ターンはタッグデュエルの場合、俺の前のあんた等のターンに破壊されたカードだ！」

もつとも、沙耶のターンに破壊されたのは自分のターンでも相手のターンでもないから復活させられないけどな。だが、相手ターンに破壊されてるなら沙耶の墓地からも復活させられるぜ！

「俺はさっきの俊平さんのターンに破壊されたアトモスファイア、フェルグラントドラゴン、ヴァンダルギオン、そしてアトモスファイアの装備カードになって俺の場に存在したりボルバー・ドラゴン等特殊召喚！」

「「な、なんだとお!?!」」

「さらに京平さんのターンに破壊された沙耶の仮面竜を特殊召喚し、フェルグラントドラゴンの効果！墓地から蘇生したとき、自分の墓地のモンスターを選択し、選択したモンスターのレベル×200ポイント攻撃力をアップする！俺が選択するのは俺の墓地のブラッドヴォルス！」

フェルグラントドラゴン

ATK：2800 3600

「そしてアトモスファイアの効果発動！ガトリング・ドラゴンを装備するー！」

Theアトモスファイア

ATK：1000 3600

「さらにリボルバー・ドラゴンの効果発動！選択するのはベン・ケイ！」

コイントスの結果は……表・裏・表！

「効果成功！ガンキャノンシュート！」

リボルバー・ドラゴンの銃撃でベン・ケイが破壊された。

「こ、こんなことが……！」

「これで2人の場はがら空きだ！アトモスファイアで俊平さんに、ヴァンダルギオンで京平さんにダイレクトアタック！テンペストサンクシヨonz！冥王葬送！」

「「うわああああああああああああああああ……！」」

俊平：LP2400 0

京平：LP1100 0

「嵐！やったな！」

沙耶が俺に抱き付いてきた。

「あらあら、沙耶ちゃん大胆ね」

「あ………//」

お義母さんがそう言うのと沙耶は顔を真っ赤にする。それでも離れないけど。

「や、やっぱり認められない！」

「沙耶から離れろ！泥棒小僧！」

そう言うって俺に近づいてくる俊平さんと京平さん。でも思いもよらないところから攻撃が来た。

「「ひでぶー！」」

「いい加減にしろよ teme いら」

2人を殴り飛ばしたのは修羅のような顔をしたお義母さんだった。

「実はお袋、空手の国体で優勝したことあんだよ。うちで1番強い

んだ」

衝撃の事実だった。どうやら沙耶の腕っ節の強さは遺伝らしい。沙耶もだけどあの細腕のどこにあんな力があんだ？

「あ、そう言えば沙耶。多分ヴァンダルギオン、精霊化してるぜ」

「え、マジで!?!」

お義父さんとお義母さんに説教されている俊平さんと京平さんを尻目に会話する。沙耶が驚きながらヴァンダルギオンを見ると巨大な紫色の竜が現れた。

「グルルルル」

「ヴァンダルギオンも精霊になったんだな」

「これでまさに愛の結晶だな？」

「あう……………馬鹿……………// // //」

こうして俺は沙耶の婚約者として沙耶の両親に認められた。

第21話 初めての夜（前書き）

ついに………嵐と沙耶があああああ!!

今回も甘甘………っっていうか冬休み編は基本甘いです。冬休み終わって少しすればセブンスターズ編になるので………

第21話 初めての夜

SIDE: ARASHI

タッグデュエルの後、俺は沙耶の家のリビングで寛いでいた。ちなみに前回、お義母さんにぶっ飛ばされた俊平さんと京平さんは気を失って庭に簀巻きで放置されている。

「ごめんなさいね？ウチの変態シスコンどもが迷惑かけて」

「いえ、気にしなくていいですよ」

謝ってくるお義母さんだがここまで息子たちに辛辣な母親もいないな。

「しっかしお前さん強いな。沙耶に聞いてたがウチの俊平と京平も大会じゃ早々負けないんだぞ？」

へえ、まあ確かにアカデミアのブルーよりは明らかに強かったけどな。

「ところで、嵐くんは今日泊まっていたの？」

「いや、俺の家はここから近いので…」あら、いいじゃない」「

俺が断ろうとするがお義母さんは俺の腕に抱きついてきた。あ、沙耶の母親なだけあって沙耶よりも大きな胸が腕に当たる。

「婚約祝いに今夜はご馳走にするから泊まって行きなさいよ 私たちは夫婦共働きだから2人揃うことなんてないし」

「わっはっは！そりゃいい！食ってけ食ってけ！」

お義母さんがさらに俺の腕を抱きしめる。

「お、おいお袋！嵐から離れるよ！」

すると沙耶がお義母さんを引き剥がしにかかる。

「え？いいじゃない別に。将来、義息子になるんだからねえ嵐くん？」

「いえ、俺も正直離してけると嬉しいんですが？」

ここは沙耶に味方しとく。だって俺は沙耶の婚約者だしね？

「もー、しょうがないわね」

そう言うとお義母さんは手を離してくれた。するとすぐさま沙耶が俺の腕に抱きついて胸を当ててくる。どうやらまだヤキモチを妬いているらしい。

「安心しろよ？俺は沙耶以外に興味ないから」

「//////////」

俺がそう嘯くと沙耶の顔が真っ赤になった。

「それはそうと泊まっていきなさいよ。そのほうが沙耶も嬉しいだろっし」

「……まあそういっことなら」

沙耶が喜ぶんならいいか。俊平さんと京平さんの襲撃がありそうだが。

「じゃあ沙耶？枕をもう一つ自分の部屋に持って行っておきなさい」

「へ？なんで？」

お義母さんの言葉に沙耶が疑問符を浮かべる。まさか……

「そんなの嵐くんが沙耶の部屋に泊まるからに決まってるじゃない

」

「はあ！？／＼／＼」

やっぱり……

「ちよちよちよつと待て！なんでオレの部屋…しかも枕だけなんだよ！／＼／＼」

「あら、だって沙耶の部屋以外に空いてる部屋ないでしょ？俊平と京平の部屋は嵐くんを闇討ちする危険があるし、私たちの部屋はそんなスペースはないわ。それとも沙耶は婚約者をリビングで寝かせるつもり？」

それから数時間経って夕飯時。さっき気になったことは間違ってたな
かったとわかった。だってお義母さんが猪を担いで戻ってきたのだ
から。あれはさすがにびびった。帰ってきたお義母さんが肩に眉間
から血を流す猪を担いでいた。

「さ、たんと召し上げれ」

そして目の前にはおいしそうに調理された猪鍋がある。：まあ、おいしそうっていうか実際美味いんだが。ちなみに沙耶も料理を手伝っていた。いつもは弁当を作ってきてくれるがエプロン姿は見たことなかったたので新鮮だった。

「あ、嵐。あ〜ん／＼／＼／＼」

沙耶が肉を俺に差し出してくる。例によって顔が真っ赤だが人前でやるとは……お義母さんになにか言われたな？

「」（ギロツ！）「」

そんな俺を俊平さんと京平さんが睨みつける。あの後目を覚ました2人は簞巻きから開放され、食卓についていた。

「えっと、美味いか？／＼／」

「ああ、沙耶が食べさしてくれたから余計にな？」

「あつ……馬鹿／＼／＼／」

うん、やっぱり顔を真っ赤にする沙耶は可愛いな。

（毎日見てんじゃねえか）

「（毎日見ても飽きないもんなんだよ）」

（そついつもんかねえ？）

そついつものだ。沙耶はいちいち反応してくれるから可愛くて愛ら

しい。

「ほら、沙耶もあ〜ん」

「うう……あ〜ん／／／／／」

その後も俺は俊平さんたちに睨まれながら食事を続けた。

それからさらに時間が経って、夜の11時。俺は沙耶の部屋にいた。沙耶の部屋は性格からもわかるようにどちらかというと男の子の部屋って感じた。ただ、ところどころにぬいぐるみが置いてあるのが女の子だって言う感じがする。

「あ、あんま見んなよ／＼／」

部屋を見られて顔を赤くする沙耶。ちなみに沙耶のベッドには2つの枕が並んでいる。

「んじゃ寝るか？」

「ん……………／＼／＼／」

俺の言葉に頷くと2人揃って布団に入る。ちなみにバクラはもう寝てる。バクラ曰く「付き合いきれない」らしい。

「……………」

「／／／／／／／／／／／／／」

俺と沙耶はベッドの中で向かい合いながら転がっている。案の定、沙耶の顔は真っ赤だ。

「え、えっと……………その……………／／／／／／／」

「ん？？」

「な、なんでもねえ！／＼／＼／＼」

もじもじしている沙耶を見てピンと来る。こんな態度をとられるとさすがに我慢が効かなくなる。

「あう／＼／＼／＼」

そう考えた俺は沙耶を抱きしめる。そして沙耶の耳元に口を寄せる。

「いいか？」

なにが……とは言わない。沙耶もわかってるだろうから。

「ん……オレを、完全に嵐のものにしてくれ……ただ、その……優しくしてくれよ？／＼／＼」

「わかってる」

「んん！／＼／＼」

俺は頷くと沙耶の唇を奪い、そして沙耶の胸に手を這わせた。

そして俺と沙耶はその夜、互いを激しく求め合った。

第22話 嵐の家へ（前書き）

前回の翌日。朝起きた嵐と沙耶を衝撃が襲う！

それと沙耶の父親の名前を琢磨から海人に変更しました。以前指摘があったのですが本編に出てくる斎王と同じ名前になってしまつてで。

駄文ですがよろしくです。

第22話 嵐の家へ

〔SIDE：ARASHI〕

「ん……」

俺は窓から差し込む太陽の光を受けて目を覚ます。左手が固定されて動かないので右手で目を擦り、眠気を覚ます。

「あらしい……」

すると俺を呼ぶ声が耳に届く。その方向を見ると俺の左腕に抱きついて眠る沙耶。寝言でまで俺の名前を呼ぶ沙耶に俺は1人悶える。ちなみに俺も沙耶も全裸だ。

「ふっ……」

俺は傍らで眠る沙耶の頭を撫でる。すると沙耶はつつすらと目を開ける。

「んう？」

「あ、悪い。起こしちまったか？」

「嵐？……！！！！！！！！／／／／／／／／／／／／」

沙耶は俺を見た瞬間、顔を紅くして布団で顔を隠す。……そんな可

愛い格好されたらまたムラムラしそうだ。

「身体の調子はどうだ？」

「ん……………まだ変な感じがする……………激しくしすぎだ、馬鹿嵐……………／／／／」

「せがんだのは沙耶だろ？」

「あう……………／／／／／／」

まあ途中から自制効かなくなったのは確かだけどな。

「それに、気持ち良かったろ？」

「うう……………（コクリ）／／／／／／」

顔を紅くして頷く沙耶。やばいなあ……………

「沙耶……………」

我慢できなくなった俺は沙耶に顔を近づける。

「嵐……………／／／」

そして沙耶も眼を瞑り、俺たちの唇が重なった。

それから数分、俺は沙耶に肩を貸しながらリビングに向かう。肩を貸しているのは沙耶がまだ身体の1部に違和感を訴えているからだ。

「あら、2人ともおはよう」

リビングにはすでにお義父さんとお義母さんがいた。俺は沙耶を席に座らせると隣の席に座る。

「ふふふ、昨夜はあなたたちもお楽しみだったみたいね」

お義母さんが笑いながら言うのと沙耶は顔を真っ赤にして俯いてしまふ。っていつか『あたたたちも』って……

「あれ？そう言えば俊平さんと京平さんは？」

すでに朝食の準備が出来ているのに2人の姿がない。どうしたんだ？

「あの2人なら今日は朝早くから出かけてるわ。さあ、冷めないうちに食べましょ？」

お義母さんの言葉に頷きながら俺は箸を進める。

「嵐、あ〜ん／＼／」

さらに昨日と同じく沙耶が食べさせてくれる。

「ところで嵐くん？今日から沙耶をあなたの家に泊めてくれない？」

「ぶっ！」「」

投下された爆弾に俺と沙耶が噴出す。

「い、いきなりなに言い出すんだよ！？／＼／」

沙耶が慌てるけどお義母さんは笑顔を崩さない。

「実は私と海人さんは今日から出張なのよ 勿論大晦日には帰ってくるけどね だからその間嵐くんの家に沙耶を泊めて欲しいの」

「ちょっと待て！そんなん聞いてねえぞ！」

「だって言ってるじゃないもの」

即答だった。

「だいたい、兄貴たちはいるんだろ？だったら……」

「あら、沙耶は嵐くんと2人きりでいたくないの？」

「うえ！そ、それは……／＼／＼／＼／＼」

お義母さんの言葉に沙耶は顔を真っ赤にする。

「今日は2人とも夜までいないわ。さつさと荷物を纏めて嵐くんの家に行けば場所がわからないから邪魔されないわよ」

「……もしかして、沙耶が帰ってくるって聞いた日から考えてました？」

「もちろん」

「おいおい……」

「っていつか昨日会ったばかりの男に娘を預けるってのはどうかと

思ってますけど……」

「あら、もともと嵐くんの人となりは沙耶に電話で聞いてたのよ。ねえあなた？」

「まあな。電話での惚気話はそりゃ凄かったぜ？」

「お、親父！！／／／／／」

なに言ってたんだろう？ 凄い気になる。

「それで昨日会って、この子なら大丈夫って思ったの。問題ないでしょ？ これでも人を見る目はあるのよ？」

いやまあ、信用してくれるのは嬉しいけど。

「まあ、沙耶が良いんなら……」

俺としても断る理由はないしな。

「お、オレは……嵐が迷惑じゃねえんなら……／／／／／」

こうして俺の家に沙耶が滞在することが決まった。

「おい、嵐」

「はい？」

お義父さん？ なんのようだ？

「おめえさんたちも若いからまったくするなたあ言わねえが……避妊はしつかりな？」

「……心配すんのかよ。了解です。俺だって卒業までは避妊するさ。沙耶に負担かけたくないしな。」

〔SIDE END〕

SIDE : SAYA

オレは今、家の玄関で荷物が入ったバッグを持って嵐を待っている。あのあと、お袋と親父は出張で出て行った。嵐はいったん家に帰ってバイクで迎えに来るらしい。本当はオレは歩いて一緒に行きたかったんだけどまだ違和感が抜けきってねえから荷物がある今はちょっと辛い。

でも……昨夜は凄かった……うう~~~~~、思い出したらまた恥ずかしくなってきた…… / / / / /

「オレ……嵐のものになったんだよな / / /」

恥ずかしい……恥ずかしいけど、すげえ嬉しい……幸せすぎて死にそうだ / / / / /

「沙耶、お待たせ」

オレが悶々としてると嵐がバイクに乗ってやってきた。黒のオートバイでサイドカーが付いている。オレはサイドカーに乗り込むと荷物を抱える。基本的に数日分の着替えだけだからそんなに多くない。

「じゃあ行くか」

「おう！」

オレが返事をすると思風がバイクを走らせる。風が気持ちいいな。

こうしてオレはしばらくの間、嵐の家に世話になることになった。

）SIDE END（

第23話 自宅訪問（前書き）

というわけで嵐の家に着いた嵐と沙耶。そこで沙耶が見たものは！？

第23話 自宅訪問

嵐がバイクを走らせること15分。2人は嵐の家の前についていた。

「……………」

目の前にした嵐の家に沙耶は絶句する。それも当然。嵐の家は明らかにでかいのだ。どこの上流家庭だと沙耶は心の中で突っ込みを入れてしまう。

嵐の家がでかいのはある意味当然だった。なにせこの家を用意したのは海馬コーポレーション社長の海馬瀬人である。どんなことにも妥協を許さないあの男は嵐の家に豪邸とまで行かないがそれなりにでかい家を用意していた。

「んじゃ入ろうぜ」

バイクをガレージに入れた嵐が戻ってくる。戻ってきた嵐は鍵を開けて家の中に入る。

「お、お邪魔します」

中に入った沙耶は再び言葉を失う。家の外も凄いが中も凄かった。明らかに自分の家よりもでかくて豪華な家に沙耶はただただ言葉を失う。

「（やばい……顔が良くてデュエル強くて優しくて……その上金持ちじゃ本気で釣り合わないんじゃない……）」

昨夜さんざん愛を確かめ合っておきながらそんな考えが沙耶の頭をよぎる。ちなみに海馬がここまででかい家を用意したのは嵐が海馬の仕事にいろいろと協力しているからなのだが……

「空いてる部屋は結構あるからな、好きな部屋使っていーぜ。それとも、一緒の部屋がいい？」

嵐はニヤニヤしながら沙耶を見る。すると沙耶は顔を真っ赤にして俯いてしまう。

「うう……じゃあ、それで……／／／／／／」

「はいはい」

頭を撫でながら嵐は自分の部屋に沙耶を案内する。

「へえ、結構綺麗なんだな」

沙耶は嵐の部屋を見回す。2人の兄以外、初めて見る男の部屋は予想よりも綺麗だった。清潔感溢れており、白いタンスが置かれている。そして部屋の隅には少し大きめのベッドが置いてある。人2人が並んで寝ても余裕そうな大きさのベッドが……

「~~~~~！！／／／／／／／／」

そこまで考えて沙耶は再び顔を真っ赤にする。

「くく、なに考えてんだ？」

「な、なんでもねえ！／／／／」

嵐の言葉にソツポを向く沙耶。

「とりあえず適当に荷物置いて座れよ」

「お、おう」

沙耶は頷くと嵐の隣に座る。すると嵐はタンスの中から1つの段ボール箱を取り出した。

「お前、これ！」

その段ボール箱の中身を見た沙耶は驚きで顔を染める。そこに入っていたのは大量のデュエルモンスターズのカードだった。中にはかなりレアなカードも入っている。

「向こうに持ってってなかったカードだな。デッキ作りしようぜ？」

「おう！」

こうして2人は数時間かけ、デッキを改良していた。

「ふう、こんなもんかな？」

デッキの改良を終えた2人は伸びをする。するとおもむろに嵐が携帯を取り出した。

「ん？どうした？」

「悪い、電話だ」

嵐は携帯を持って部屋を出る。後に残された沙耶は部屋を見回し、嵐のベッドに目が行く。

「確か、こつういつとこにああ言うの……隠してあんだよな……／＼

／／／／

沙耶が予想するのは男の子なら誰でも持っているであろう1品。意を決して沙耶はベッドの下を覗き込む。

「……やっぱりねえか……」

だが、ベッドの下には当然のように何もなかった。そもそも、そんなベタなところに隠す人間はそうはいない。そここうしてるうちに嵐が部屋に戻ってきた。

「なにしてんだ？」

「べ、別にどうもしねえよ！／／／」

ちょうどベッドの下を覗き込んだときに部屋に戻ってきた嵐に沙耶は顔を赤くして慌てる。

「そっか、それと明日出かけるけど沙耶も行くか？」

「行ってくつて、どこに？」

沙耶の疑問に嵐はニヤリと笑って答えた。

「海馬コーポレーション」

それを聞いた沙耶の驚きの声が家に響いていた。

くおまけく

「ちなみに沙耶、そんなとこに隠してるものなんかねえぞ」

「!?!?!」

沙耶は嵐には隠し事ができないことをよく理解したのだった。

第23話 自宅訪問（後書き）

というわけで23話でした。次回は舞台が海馬コーポレーションに移り、原作キャラ登場の予定です。

第24話 海馬コーポレーション(前書き)

今回海馬が登場します。

そして次回は3回目の奴の登場。

第24話 海馬コーポレーション

海馬からの連絡が来た翌日、嵐と沙耶は海馬コーポレーション本社ビルに来ていた。

「んじゃ行くか」

嵐は何度か来たことがあるため、平然としているが……

「お……おっ……」

一緒にいる沙耶は伝説のデュエリストに会うと言っことでもかなり緊張していた。

「ったく、しょうがないな」

そんな沙耶に姿を見た嵐は苦笑いしながら沙耶の手を握る。

「あ、嵐！？／／／」

「こっすりゃ緊張しないだろ？」

嵐はそのまま沙耶の手を引いてビルの中に入っていった。

「すみません…瀬人…海馬社長います？」

ビルの中に入った嵐たちは受付に行く。

「あ、紫藤さんお久しぶりです。社長からお見えになったら社長室にお通しするよう仰せつかっています」

「ん、了解」

嵐は受付の女性にそれを聞くと歩き出す。

「な、なあ。なんか随分すんなり通してくれんだな？」

沙耶は受付でのやり取りを見て嵐に質問する。それに嵐は何食わぬ顔で答える。

「アカデミアに行くまでしょっちゅう顔出してたからな。少なくとも受付の人たちと瀬人の側近とは顔見知りだぜ」

「気になってただけだよ、海馬コーポレーションでなにやってただ？」

「ん、海馬コーポレーションが開発したデュエルマシンの相手とか……新しいデュエルディスクの開発の手伝いもしたし……」

実は嵐、この世界に来る前は工学系の勉強をしており、機械にめっぽう強いのだ。

「それでいろいろと海馬の手伝いしてたからな。それで生活費稼いでたし」

「………なんかオレ……余計お前と釣り合わないような気がしてきた………」

嵐の完璧超人ぶりに沙耶が若干凹む。

「んなこと気にすんなよ。俺はお前がいいんだから」

「………おう……／／／」

そんな話をしていると2人は社長室に到着した。

「おーい、瀬人。来たぞ」

「入れ」

嵐が部屋の中に呼びかけると即座に返事が返ってきた。

「よう、久しぶりだな」

「し、失礼します」

フレンドリーな嵐に比べ、沙耶は緊張し、普段は滅多に使わない敬語になってしまっていた。

「ようやく来たか……ん？嵐、そっちの女はなんだ？」

社長の椅子に座る茶髪の男性…海馬瀬人が嵐と沙耶を睨む。

「そんなに恐い顔すんなよ。こいつは加賀見沙耶。俺の婚約者だ」

「よ、よろしく……／＼／」

嵐の紹介に沙耶は顔を赤くする。

「ふうん…まあいい。さつそく本題だ」

嵐の答えを聞いて納得し、すぐに海馬は本題を切り出した。

「貴様には明後日、あるデュエリストと戦ってもらおう」

「あるデュエリスト？」

海馬の言葉に嵐が疑問符を浮かべ、首を傾げる。

「実は先日、デュエルアカデミアを買収しようなどという話が出てな」

「はあ？どこの会社だよ？」

「豚見コンツェルンという会社だ。随分な金持ちらしくてな」

「豚見？どっかで聞いたような……」

海馬の言葉に沙耶が考え込む。

「その社長の息子が1学期にアカデミアを退学になったらしくてな。大方、アカデミアを買収して息子を復学させたいのだろう。あの男は大層な親馬鹿だからな」

その言葉に嵐と沙耶はうな垂れた。どうやら思い当たる人物を思い出したらしい。

「あの豚か……」

「マジかよ……」

そして嵐は海馬にその経緯を話し始めた。1学期に沙耶へのストーカー行為や盗撮行為で退学になった豚見和夫。通称『豚』である。

「そこで互いが用意したデュエリストの勝敗によって決めることになったのだ」

「それで俺に白羽の矢が立ったわけね……まあ、確かに瀬人本人が出たらなんか言われそうだしな。遊戯や克也は？」

「何故俺があいつらに頼まねばならん？ましてや凡骨など論外だ」

「ですよね〜」

予想通りの答えに嵐は苦笑いする。実際、海馬が遊戯に頼みごとをするなど考えられないし見下している城之内に頼むなど遊戯に頼む

よりありえないことだった。

「無論、貴様には報酬は前払いで払ってやる。おい」

そう言うと海馬は机の横に置いてあったジェラルミンケースを机の上に置き、それを開けた。

「これって……」

そこには緑と黒のカラーリングにまるで鳥の翼をあしらった様な形のデュエルディスクが入っていた。

「最近開発していた新型デュエルディスクの試作品だ。貴様にくれてやる。アカデミアでも使えるよう、鮫島にも話は通しておいてやる」

「へえ、いいぜ。その話し、乗った」

嵐は了承するとそのデュエルディスクが入ったケースを受け取った。

「ふん。今日の話はそれだけだ」

「ふ、緊張した」

帰路に着いた沙耶は緊張から解放され、溜息をつく。

「んな緊張する必要もないけどな。それよりも……」

嵐は再び豚見に関わることに嫌気が刺していた。

「でも良かったじゃねえか。新しいデュエルディスク貰えたし」

「あ、でも瀬人のことだから始めっから俺に渡すつもりだったんだと思うぞ？」

「は？なんで？」

「デュエルディスクのデザインが緑と黒に翼って、明らかに俺のデッキのイメージと同じだろ？」

「ああ……」

沙耶は嵐の言葉に納得し、頷く。

「つまりあいつはもともとこのデュエルディスクを渡すつもりだったところに今回の話が上がったから報酬ってことにしたんだろ？」

「なるほど……」

「まあ、あの豚が戻ってくるのは勘弁だしな。全力で防ぐさ。アカデミアがあいつの親の会社のものになったら何されるかわかったもんじゃないしな」

嵐には豚見が復学した場合、逆恨みで何かしてくると思っていたため引き受けたのだった。

こうして嵐がアカデミアの買収を防ぐためのデュエルをすることになったのだった。

第25話 激闘！風使いと植物使い（前書き）

今回、再び奴が登場。たぶんこれで最後だと思います。

ちなみにデュエル相手は豚ではありません。

第25話 激闘！風使いと植物使い

嵐と沙耶が海馬コーポレーションを訪れた2日後、沙耶は嵐の家の台所で朝食を作り、嵐は庭である事を行っていた。そのある事とは

……

「クオオオオオ」

「気持ち良いか？」

実体化したアトモスフィアのブラッシングである。嵐の家の庭はかなりでかい為、アトモスフィアを実体化させるスペースがあるのだった。

「ぴいぴい！」

アトモスフィアをブラッシングしているとユリウスも嵐にブラッシングをせがんで来る。ちなみにユリウスは鳩ぐらいの大きさだがアトモスフィアはかなりの巨体だ。

「おい嵐！飯出来たぞ！」

嵐がアトモスフィアのブラッシングを終え、ユリウスのブラッシングをしていると沙耶から声が掛かった。それを聞いた嵐はブラッシングを終わらせ、リビングに向かう。

「お、美味そうだな」

嵐がリビングに入るとテーブルの上には白米に味噌汁、鰯のヒラキ

といった定番の日本食が用意されていた。

「んじゃま、いただきます」

「いただきます」

嵐と沙耶は手を合わせると朝食を食べだす。

「んつと、どうかな？」

若干不安げに嵐に訊ねる沙耶。それに嵐は笑顔で答える。

「美味しいよ。っていつか沙耶の作る飯はいつだって美味しいな」

「そ、そっか… // // // //」

嵐の答えに沙耶は顔を真っ赤にする。

「っていつかあれだな。この会話、まるで新婚みたいだな」

「な！？あううう // // // // // // //」

突然の言葉にさらに顔を真っ赤にする沙耶だった。

「と、ところでよ。今日のデュエルは勝算あるのか？ // //」

話を逸らそうとする沙耶。ニヤニヤ笑いながら嵐もそれに答える。

「まあ、相手によるけど……俺は負けないよ。昨夜も沙耶に元氣貰ったしな」

「……………う~~~~、思い出させんなよバカア……………// // // //」

結局赤面させられる沙耶だった。何をしたのかは想像にお任せします。

それから数時間後、嵐と沙耶は海馬に指定された場所に来ていた。そこはデュエルアカデミアの入試に使われたデュエル場であり、すでに海馬とその弟・モクバの姿もある。

「待たせたな」

「まったくだ。この俺を待たせるとはいい度胸だな」

「相手はもう来てるぜい」

海馬とモクバに連れられ嵐と沙耶はデュエル場に出る。するとそこには赤い髪の美形の男性と豚が2匹いた。

「どうやらあれが相手みたいだな」

嵐が赤い髪の男性を見る。男性は優しくそうに微笑みながら手を振っている。その笑顔は普通の女性ならば落とされるだろう笑みだ。もつとも、沙耶は嵐にしか興味ないので特に問題はないが……

「ぶぎい！沙耶タン！」

すると豚が1匹近づいてくる。体格からして子豚と言ったところだろう。子豚と言っても実際の子豚のような可愛さなど一遍もない。

「沙耶タン！やっぱりボキたちは運命の赤い糸で結ばれプギュ！」

しかし子豚は沙耶に近づくと前に嵐に蹴り飛ばされた。

「テメエは人の婚約者に何しようとしてんだコラ」

嵐は視線だけで人を殺せそうな眼差しをしている。

「し、紫藤嵐！？何故お前がここに！？それよりもお前が沙耶タンの婚約者だと！？」

「なんでも何も俺が海馬コーポレーション側のデュエリストだからな。それと沙耶の両親とも話が付いている」

その言葉に子豚は鳴きながら親豚に縋り付いた。ちなみにその親豚は子豚に髭が生えた程度の違いしかない。

「ぶぎい~~~~！パパ、あいつだよ！あいつがボキを退学にしたんだ！」

もはや見てるだけでキモイ。というか退学になったのは自業自得だろうが。

「おおよしよし。ワシの可愛い息子を酷い目にあわせおつて。覚悟しとれよ！ワシらが勝ってアカデミアを手に入れたら貴様を退学にしてくれるわ！」

息子が息子なら親も親である。なんとも救いようがない。

「っていつかあいつ……プロデュエリストじゃねえか？確か名前は……」

「南野秀一。プロデュエリストでもかなりの実力者だ」

沙耶は男性を見ながら呟き、それに海馬が答える。そして嵐はデュエル場に上がり、秀一と対峙する。

「悪いね。正直こんなのは気が乗らないんだけど……」

「アンタも大変だな」

「まあ、あれでも俺のスポンサーだしね。それがプロの辛いところさ」

すると秀一がデュエルディスクを起動する。

「さあ、始めよう。気乗りはしないけどデュエルをする以上、加減はしないよ」

「望むところだ。プロとやる機会なんてそうそうないからな」

嵐も先日、海馬に貰ったデュエルディスクを起動させる。するとディスクが起動した瞬間、ソリッドビジョンで緑の羽が舞い散る演出がされる。

「……凄いね、そのディスク」

「……俺も無駄なところに凝り過ぎだと思っただけだな……」

「何を言っている！貴様はいずれプロデュエリストになるのだ。それぐらいの演出があって当然だろう？」

秀一と嵐の眩きに海馬が声を荒げる。さすが派手好きな社長。一切妥協しない男である。

「さて、始めるか」

嵐がデッキをセットするとデッキが自動的にシャッフルされる。これも海馬が付けた新たな機能であり、この時代のデュエルディスクにはないものである。

「デュエル!!!」

「俺の先攻、ドロー！俺はローンファイア・ブロッサムを攻撃表示で召喚！」

秀一のフィールドには赤い茎を持つ花が召喚された。

ローンファイア・ブロッサム

星：3

ATK：500

DEF：1400

「（ローンファイア……植物デッキか!?!）」

召喚されたモンスターに嵐がデッキをある程度把握する。

「さらにローンファイア・ブロッサムの効果を発動。自分フィールド上の表側表示の植物モンスターを生贄にし、デッキから植物族モンスターを特殊召喚する。俺はギガプラントを特殊召喚！」

ギガプラント

星：6

ATK：2400

DEF：1200

「そして永続魔法、世界樹を発動。カードを2枚伏せ、ターン終了」

秀一

LP：4000

手札：2枚

モンスター：ギガプラント（攻撃表示）

魔法・罫：世界樹（永続魔法）、伏せカード2枚

「（ギガプラント……厄介だが今の俺にはあれを倒せるカードはない）俺のターン、ドロ。俺は守備モンスターをセットし、カードを2枚伏せてターン終了」

嵐

LP：4000

手札：3枚

モンスター：裏守備モンスター1体

魔法・罫：伏せカード2枚

「俺のターン、ドロ。俺はギガプラントを再度召喚。そしてギガプラントの効果を発動。手札または墓地から植物族モンスターを特殊召喚する！俺は墓地のローンファイア・ブロッサムを特殊召喚！そして再びローンファイア・ブロッサムの効果を発動！このカードを生贄にし、デッキから椿姫ティタニアルを特殊召喚！」

秀一がカードをセットすると赤い花から女性が現れた。

椿姫ティタニアル

星：8

ATK：2800

DEF：2600

「俺はギガプラントで裏守備モンスターに攻撃！」

ギガプラントの鳶が攻撃すると緑色の翼の鳥がその攻撃に耐え抜いた。

「そのカードは……」

「裏守備モンスターはシールドウイング。こいつは1ターンに2度まで戦闘では破壊されない」

「なるほど。ならこれ以上の攻撃は無意味だね。俺はこれでターン終了」

秀一

LP：4000

手札：3枚

モンスター：ギガプラント（デュアル状態・攻撃表示）、椿姫ティ
タニアル（攻撃表示）

魔法・罨：世界樹（永続魔法）、伏せカード2枚

「俺のターン、ドロー！俺は天使の施しを発動！カードを3枚ドロ
ーし、2枚捨てる！」

嵐は新たに引いた3枚のカードを確認する。

「（俺の伏せカードも破壊されるが……仕方ない）そして手札から
大嵐を発動！フィールド上の魔法・罨を全て破壊する！」

フィールドに突風が発生し、魔法・罨を破壊しようとする。しかし

……

「甘いよ。罨カード発動！カウンター罨、アヌビスの裁き！手札を1枚捨てることで相手の魔法・罨を破壊する効果を持つ魔法カードの発動を無効にして破壊し、さらに相手フィールドに表側表示で存在するモンスターを破壊してその攻撃力分のダメージを与えることができる。シールドウイングは攻撃力0だからダメージは行かないけど戦闘耐性は厄介だからね。破壊させてもらうよ」

嵐の発動した大嵐が破壊され、さらにシールドウイングも砕け散った。

「く！俺は墓地のシールドウイングとブラッドヴォールスをゲームから除外し、ダークシムルグを特殊召喚！」

ダーク・シムルグ

星：7

ATK：2700

DEF：1000

「成る程……さっきの天使の施しのおかげか」

「（さて、どうするか……相手には伏せカードが1枚。攻撃反応型の可能性は高いが……だからといってギガプラントを残しておけばさらにモンスターが増えるだけだ。ここは……賭けるしかない！）俺はダーク・シムルグでギガプラントに攻撃！ダークテンペスト！」

ダーク・シムルグの生み出した突風がギガプラントに迫る。しかし

……

「確かにギガプラントを残しておくのは危険だ。賭けに出る気持ちもわかるけど、そううまくはいかないよ。畏カード発動！棘の壁！」
ソーン・ウォール

「やばー！」

「ふふ、どうやらこのカードの効果は知ってるみたいだね。このカードの効果により俺のフィールドの植物族モンスターが攻撃対象に選択されたとき、相手フィールドの攻撃表示モンスターを全て破壊するー！」

茨の棘がダーク・シムルグを縛り上げ、破壊する。

「ちい！俺はターン終了！」

嵐

LP：4000

手札：2枚

モンスター：なし

魔法・罫：伏せカード2枚

「俺のターン、俺はギガプラントの効果で墓地のローンファイア・ブロッサムを特殊召喚し、効果発動！デッキからフェニキシアン・シードを特殊召喚！」

秀一のフィールドに1つ目の種が姿を現した。

フェニキシアン・シード

星：2

ATK：800

DEF:0

「さらにこのカードを生贄にすることで手札からフェニキシアン・クラスター・アマリリスを特殊召喚！」

すると今度はフェニキシアン・シードが消え、ピンク色の巨大な花のモンスターが姿を現した。

フェニキシアン・クラスター・アマリリス

星:8

ATK:2200

DEF:0

「そして手札からボタニカル・ライオを召喚」

ボタニカル・ライオ

星：4

ATK：1600

DEF：2000

「このカードは自分フィールドの表側表示の植物族モンスターの数だけ攻撃力が300ポイントアップする。俺のフィールドには4体よって攻撃力1200ポイントアップ」

ボタニカル・ライオ

ATK：1600 2800

「じゃあ行くよ。まずはフェニシアン・クラストー・アマリリスでダイレクトアタック！」

「ぐう！」

嵐：LP4000 1800

「さらにフェニシアン・クラストー・アマリリスの効果発動！このカードが攻撃したとき、このカードは破壊され、相手ライフに800ポイントのダメージを与える！さらに植物族モンスターが破壊

されたことで世界樹にフラワーカウンターが1つ乗る」

「くっ!?!」

フェニキシアン・クラスター・アマリリスが破壊され、その余波が嵐を襲う。

嵐：LP1800 1000

フラワーカウンター：0 1

「これによってボタニカル・ライオの攻撃力が下がるが……続けてギガプラントでダイレクトアタック!」

さらにギガプラントの茨が嵐に迫る。

「させるか！墓地に眠るネクロ・ガードナーの効果を発動！このカードをゲームから除外し、攻撃を1度だけ無効にする！」

しかしその攻撃はネクロ・ガードナーによって防がれた。

「でも、まだ俺には2体残っている。ティタニアルでダイレクトアタック！ローズウィップ！」

ティタニアルの茨の鞭が嵐に振るわれる。

「まだまだ！速攻魔法、スケープ・ゴートを発動！俺のフィールドに羊トークンを4体特殊召喚！」

羊トークン×4

星：1

ATK：0

DEF：0

「なら、ティタニアルとボタニカル・ライオでスケープ・ゴート2体に攻撃！」

ティタニアルの茨の鞭とボタニカル・ライオの牙で羊トークンが破

壊される。

「エンドフェイズ、俺は墓地のフェニキシアン・クラスター・アマリスの効果を発動。墓地のフェニキシアン・シードをゲームから除外して守備表示で特殊召喚し、ターン終了」

秀一

LP：4000

手札：2枚

モンスター：椿姫ティタニアル（攻撃表示）、ギガプラント（デュアル状態・攻撃表示）、ボタニカル・ライオ（攻撃表示）、フェニキシアン・クラスター・アマリス（守備表示）
魔法・罫：世界樹（フラワーカウンター1）

「嵐！」

追い詰められている嵐を見て沙耶が取り乱す。実際、秀一は無傷で

攻撃力の高いモンスターが4体。それに対して嵐は羊トークンが2体に伏せカードが1枚。ボードアドバンテージは秀一が明らかに有利だ。ハンドアドバンテージも変わらない状況……嵐は圧倒的に不利だった。

「ぶひひひひ！もうこれは勝ったも同然だね！」

「ぶははははは！それも当然じゃ！たかだか学生がプロに勝てるはずはないんじゃない！」

嵐が不利なのを見て親豚と子豚が耳障りな笑い声を浮かべる。

「屑の分際でわしの可愛い息子を退学に追い込んだ罰じゃ！敗北した暁には退学の上で貴様のカードを焼き払ってくれるわ！……ああ、それとその女子にもなにか罰を与えようかのう？」

「な！？」

「わしの息子を振った罰じゃ！拒否は許さんぞ？ワシがアカデミアのオーナーになれば逆らうことなど許されんからの！和夫よ、このデュエルが終わったらあの女子を好きにするがよい！」

沙耶にまで被害が飛び火し、その言葉に子豚は下卑た笑いを発する。

「ありがとうパパ！ぶひひひ 楽しみにしててね沙耶タン」

子豚がいやらしい眼で沙耶を舐めるように見る。それを感じた沙耶は寒気を感じ、自分の身体を抱きしめる。

「……………」

一方、嵐の眼にも怒りの火がともっており、子豚とおや豚を睨んでいる。

「さあ秀一よ！さつさとその屑デュエリストを「黙れ！」：な、なんじゃと？」

親豚の言葉に怒鳴り声を上げたのは誰でもない、秀一だった。

「さつきから聞いていれば随分な言い草だな……戦つてすらいらないものが戦っているものを侮辱するな！」

「き、貴様……わしにそんな口を利いていいと思っておるのか！ワシは貴様のスポンサーじゃぞ！？」

「契約を切りたければどうぞ。俺はデュエリストとしての誇りまで売った覚えはない。相手のデュエリストを貶すような人間真似は許さない」

そう言う秀一の眼には明らかな侮蔑の光が灯っていた。

「安心してください。このデュエルは最後までやりますよ。もっとも、その後はあなたとの契約は無かった事にさせてもらいます」

秀一は嵐に向き直ると微笑を浮かべる。

「さあ、君のターンだ。あそこまで言われてこのまま終わったりはしないだろう？」

その言葉に嵐もニヤリと笑う。

「上等！俺のターン、ドロ！俺は天よりの宝札（アニメ版）を発動！互いのプレイヤーは手札が6枚になるまでカードをドロする！」

「まいったな……大したドロだ」

「まだまだ！伏せカード発動！異次元からの埋葬！ゲームから除外されているモンスターカードを3枚まで選択して墓地に戻す！俺はネクロ・ガードナー、ブラッド・ヴォルス、シールド・ウイングを墓地に戻す！そして手札から神禽王アレクトールを特殊召喚！」

神禽王アレクトール

星：6

ATK：2400

DEF：2000

「このカードは相手フィールド上に同じ属性のモンスターが2体以上いる場合、特殊召喚することができる！」

「だが、そのカードで俺の場のモンスターを破壊しても俺を倒せないよ？」

「まだまだ！俺はお前の場のティタニアルとフェニキシアン・クラスター・アマリスを生贄に、溶岩魔人ラヴァ・ゴーレムをお前の場に特殊召喚！」

ティタニアルとフェニキシアン・クラスター・アマリスが消えると秀一の場に巨大な赤い溶岩で出来たモンスターが現れた。

溶岩魔人ラヴァ・ゴーレム

星：8

ATK：3000

DEF：2500

「く……ラヴァ・ゴーレムの生贄は効果ではなくコスト。特殊召喚をできなくする以外に対処法はない。たとえモンスター効果を受けないモンスターでも対処することはできない」

「その通り！さらにフェニキシアン・クラスター・アマリリスは破壊されたときに効果を発動する！ラヴァ・ゴーレムで生贄にして墓地に送ったことよって効果は発動しない！」

秀一に続いて嵐が宣言する。実際、ラヴァ・ゴーレムはかなり優秀な除去カードであり、特殊召喚を封じるか生贄を封じる以外に対処法は存在しない。

「だ、だけどそれでも強力なモンスターを相手に渡したただけだろ！」

「お前馬鹿か？嵐が何も考えずにそんなことするわけねえだろうが豚！」

子豚の言葉に沙耶が反論する。

「当たり前だ！俺は羊トークン2体と墓地のダーク・シムルグをゲームから除外し、俺の切り札を特殊召喚する！このフィールドを取り囲み制圧しろ！theアトモスファイア！」

「クオオオオオオオオオオオ！！！！！！」

t h e アトモスファイア

星：8

A T K：1000

D E F：800

「アトモスファイアの効果を発動！ラヴァ・ゴーレムを装備し、装備したモンスターの攻撃力、守備力をアトモスファイアに加える！」

ラヴァ・ゴーレムはアトモスファイアの球体に吸い込まれる。するとアトモスファイアの球体が溶岩で赤く染まった。

theアトモスフィア

ATK：1000 4000

DEF：800 3300

「さらに手札からD・D・R（ディファレント・ディメンション・リバイバル）を発動！手札を1枚捨て、ゲームから除外されているモンスターを特殊召喚してこのカードを装備する！俺はダーク・シムルグを特殊召喚！」

次元の裂け目からダーク・シムルグが現れた。

「そしてアレクトールの効果発動！フィールド上に表側表示で存在するカード1枚の効果を無効にすることができる！この効果でボタニカル・ライオの効果を無効！」

ボタニカル・ライオ

ATK：2200 1600

「神禽王アレクトールでボタニカル・ライオに攻撃！飛翔斬！」

「くっ！」

アレクトールがボタニカル・ライオに向かって突撃し、その翼でボタニカル・ライオを切り裂く。

秀一：LP4000 3200

「続けてダーク・シムルグでギガプラントに攻撃！ダークテンペスト！」

秀一：LP3200 2900

秀一のフィールドのモンスターが全滅し、アトモスファイアがその翼を広げる。

「う、嘘だ！嘘だ！プロが負けるはずが！」

「しゅ、秀一！なんとかせい！」

秀一のフィールドがから空きになったのを見て豚2匹が慌てふためく。一方の秀一はいたって平静だった。

「凄いな、君は。あそこから逆転するとは……でも、次は負けないよ？」

「いつでも掛かって来い。アトモスファイアでダイレクトアタック！テンペストサンクションズ！」

秀一：LP29000

「嵐くん、楽しかったよ。しかし、まさか学生に負けるとは思わなかった」

デュエルを終えた秀一は嵐と話をしていた。

「俺も楽しかった。まあこれで………「おい！秀一！」…豚がいなかったら文句ないんだが……」

嵐の言葉に2人は溜息を吐いた。

「貴様！負けるなどどういうことだ！？さっきの暴言も加えたただはおかん！貴様との契約はなしだ！それだけで済むと思うなよ！貴様などプロで戦えなくしてやる！」

2人のもとにやってきた親豚と子豚。親豚はすぐに秀一に詰め寄り、

文句を言ってきた。

「ふうん。貴様が契約を切るといふなら俺が南野秀一と契約を結ばせてもらおう」

しかし、そこに海馬が割って入ってきた。モクバと沙耶もそれに付いて来ており、沙耶はすぐに嵐に抱きつく。

「あ！沙耶タぶぎい！」

沙耶に近づこうとした子豚は沙耶に蹴り飛ばされ、デュエル場から落とされた。

「どついう風の吹き回しだ？」

「なに、先程のデュエル。貴様のデュエリストとしての誇りは見せてもらった。豚には実に惜しいからな。どうだ？」

嵐の質問に答えた海馬は秀一のほうを見る。秀一はそんな海馬を見て微笑む。

「喜んで契約を結ばせてもらいます」

「ふうん。というわけだ。海馬コーポレーションのプロデュエリストに手を出すならば相応の覚悟をしておけ」

海馬は満足気な笑みを浮かべ、親豚を見る。

「ぬぬぬぬ！おのれ！覚えておれよ！！」

「待つてよパパ〜」

それだけ言い残し親豚と子豚は去っていった。こうしてアカデミアの買収デュエルは嵐の勝利で幕を閉じた。

〜おまけ〜

「ん…んふ……ん…… / / /」

その後、家に帰った嵐は沙耶に深い方のキスをされていた。部屋に戻った瞬間に沙耶がキスしてきたのである。部屋にはピチャピチャと水音が響いている。

「どうしたんだ？」

「えっと……オレからのご褒美……プロに勝つなんてすげえって思ったから……／＼／」

「なるほど……じゃあ、もう少しご褒美貰おうかな？」

「……お、おう……ん／＼／＼／」

結局最後は甘々な2人だった。

第26話 新婚？さんの家に訪問者（前書き）

今回の最後のあのお二方が登場します。デュエルは次回になるかと。

第26話 新婚？さんの家に訪問者

朝日が差し込む部屋の中のベッドの上。白いシーツがこんもりと膨らんでいる。

「ん……んふぁ……………」

そのシーツがもぞもぞと動き、中で寝ていた沙耶が目を覚ます。隣には嵐が寝ており、2人とも一糸纏わぬ状態である。

「んん……………」

沙耶は嵐を起こさないように布団を抜け出し、シャワーを浴びて目を覚ます。シャワーも浴び終わるとこの家に住み始めてから使い始めたタンスの中から着替えを出し、着替える。服は黒いトレーナーとジーンズ。やはり私服も男っぽい。

「よつと」

着替え終えた沙耶はベッドの周りに脱ぎ散らかされた服や下着を回収する。ちなみに沙耶の下着、以前ももえから色気がないと言われたスポーツブラなのだが嵐は『沙耶らしくて好き』と言われて特に新しい下着は買っていない。

洗い物を洗濯籠に入れ、洗濯機の所まで持っていく。洗濯機に洗い物を放り込み、ボタンを押す。そして洗濯機が回り始めたのを確認すると再び嵐の部屋に戻る。

「へへ……………」

嵐の部屋に戻った沙耶が何をするかと言うと……嵐の寝顔の観賞である。嵐は意外と朝に弱いらしく、夜に激しい運動をした翌日は中々起きない。そんな嵐の寝顔を見るのは沙耶の楽しみだったりする。ちなみに最近で番のないバクラは心の中にある自分の部屋に閉じこもっていてあまり出てこない。これは以前の遊戯とアテムの関係と同じで嵐とバクラはそれぞれ心の部屋を持っている。その部屋に閉じこもることで嵐と沙耶の甘い生活を見ないで済むのだった。

嵐の寝顔観賞を追い、沙耶は洗濯機から洗い物を取り出すと庭の物干し竿に干していく。沙耶は両親共働きの家庭に育ったため、男っぽい性格とは裏腹に家事が得意なのだ。

コポコポ

洗濯物を干し終わると今度は朝食の準備である。嵐の好きなものは肉料理だが流石に朝からそんなものを作るわけにも行かないため、献立は白いご飯と豆腐の味噌汁。そして焼き鮭である。

「ん、こんなもんだな。そろそろ嵐の奴を起こすか」

味噌汁の味見をしてからテーブルに2人分の朝食を準備し、嵐を起こすために部屋に向かおうとする。もはや恋人同士すっ飛ばして夫婦のような状況である。

「へへ、こうなの……やっぱいいな」

どうやら本人も満更ではないらしい。

ピンポン

すると呼び鈴が鳴る。

「ん？誰だ、こんな朝早く」

朝早くといってももう朝の10時である。起きてる人は起きているし出かける人は出かけている時間帯である。沙耶はそのまま玄関に向かい、扉を開けた。

それから数分遡り、嵐の家に向かう2人の人物がいた。

「つたく、何でお前まで付いてくんだよ」

「あら、別に良いじゃない。私だって久しぶりに会いたいし」

その2人は互いに金髪の男女。1人は金髪に黒いジャケットを着たいかにもバカ：失礼、単純そうな男性。そして1人は金髪の長い髪に露出度の高い服を着たグラマーな女性。2人は目的地である嵐の家に着くと玄関先の呼び鈴を鳴らす。

「でも嵐は起きてるのかしら？」

「大丈夫だろ？さすがにこの時間まで寝てねえって」

「まあそうね。アンタでも起きてるんだもんね」

「んだと！そりゃどっいう意味だ！」

「2人で出かけるときしよっちゆう遅れてくるアンタが悪いんでし
よ」

そんな感じで軽く言い合いをしていると扉が開く。だが、その扉の向こうにいたのは2人が予想してはいない人物だった。

「誰？」

扉から顔を出した沙耶に2人は声を揃えてそう言った。

「んん……ふあ……よく寝た」

一方嵐はちょうど眠りから覚めており、寝ぼけ眼で服を着て部屋を

出て階段を下りていく。すると玄関の前で見知った顔が3人、固ま
っているのを見つけた。1人は当然恋人で冬休み限定で同棲してい
る沙耶である。そして残り2人の男女も嵐にとっては顔見知りであ
った。

「あれ？克也に舞じゃねえか。どうしたんだ？」

そう、そこにいたのは嵐の友人であり、決闘王・武藤遊戯の仲間であ
る『城之内克也』と『孔雀舞』だった。

バレンタイン記念小説（前書き）

久々の投稿です！お待たせして申し訳ありませんでした！

さらに待たせたくせに本編でなくさらに申し訳ありません！2日過ぎましたがバレンタイン小説です。

そして今回、例によって甘いです。コピー片手に読むことをお勧めします。

バレンタイン記念小説

2月13日、バレンタインデー前日……翌日は女の子がチョコを他者に渡す日であり、義理チョコや友チョコ等と言つものもあるが最もメジャーなのは好きな異性に渡すことだろう。

そして、ここにも好きな男性に渡すために丹精込めてチョコを制作する少女がいた。

「えっと……こうやって……」

恋するオレっ娘、加賀美沙耶である。彼女もまた大好きな彼氏にプレゼントするためのチョコを作っていた。

現在沙耶は溶かしたチョコレートを型に入れている真っ最中である。実は沙耶はチョコを作るのがこれが初めてだったりする。

家では家事をこなし、料理が得意な沙耶だが今までバレンタインのチョコは父親と2人の兄に市販の義理チョコを渡していたぐらいであつた。

だが今の沙耶は彼氏持ちであり、しかもその彼氏とは周りが砂糖を吐くほどにラブラブである。そんな彼女が付き合い始めて初めてのバレンタインにチョコを渡さないなどと言う選択肢は初めから存在せず、初めての手作りチョコに挑戦したのである。

「よし……これで完成つと」

そうこうしてるうちにチョコは完成したらしい。普通ならいろいろ

失敗しそうなもんだが元から料理が得意な沙耶である。最初は少々手間取ったが問題なくチョコを完成させた。

「……嵐の奴、喜んでくれっかな？」

チョコを作り終え、考えるのは大好きな彼氏の姿。沙耶の頭の中ではもはや嵐の笑顔でいっぱいである。

「……けど、嵐がチョコだけじゃなくて……お、オレのことも食べたいなんて言ってきたらどうしよう？そ、そりゃ嫌じゃないし……むしろ望むところだけ……／＼／＼／＼／」

……色々と妄想を繰り広げながら乙女の夜は更けて行った。

翌日、バレンタインデー本番。アカデミアの男子生徒はその大半がソワソワしていた。理由は言わずもがな女子からのチョコを期待しているのである。

「おかしいところはないっすよね？」

そんな1人、レッド生の丸藤翔は鏡で自分の姿を確認している。

「はあ……今更そんなことしても無駄だろうが」

(夢ぐらい見させてやれよ相棒)

そんな翔を横目に我らが主人公、紫藤嵐が呟く。ちなみにバレンタインにも関わらず自然体なのは嵐と十代、それに3年生の為にこの場にはいないが翔の兄の丸藤亮ぐらいのものである。

そもそも十代は色恋沙汰にまるで興味なし、亮もデュエル一筋で嵐はそもそも沙耶以外の女性に興味がない。もつとも、嵐と亮は教室に来る前に下駄箱に大量にチョコが詰められていた。

「嵐くんみたいに貰えるのが確定してる人はいいいじゃないっすか！
つていうかなんなんすかそのチョコの量は!？」

翔が指差す先には紙袋いっぱい敷き詰められたチョコの山。

「ん、お前も食うか？」

チョコの山から翔にチョコを1つ差し出す。ちなみに十代はすでに

好き勝手にチョコを食べている。

「いや……それ、女の子が嵐くんの為に作ったチョコっすよね？食べちゃっていいんすか？」

「俺が沙耶一筋なのは知ってたんだろ？そりゃあいくつか食うがさすがにこの量は無理だ」

呆れながら嵐は翔に答える。実は嵐は甘いものはそれほど好きではない。チョコも食べられないことはないがこの量を全部食べるのは無理なのである。

そして時は過ぎ放課後……

「……………」

翔は屍となって机に突っ伏していた。理由は言わずもがな、ずっと待っていたにもかかわらずチョコを貰えなかったのだ。

それだけならまだしも十代は明日香にチョコを貰い、さらに大地も何人かの女生徒からチョコを貰った。

そしてあるうことか隼人もたった1つではあるがチョコを貰ったのである。ちなみに隼人がチョコを貰った理由は『コアラみたいで可愛い』という理由だった。

「じゃあな」

屍となった翔を残し、嵐は教室を出て行った。

「あ、嵐！」

教室を出ると嵐は沙耶と一緒に校舎から少し離れた森の中に入った。理由は……沙耶がチョコを渡すのを人に見られるのが恥ずかしいという理由である。

「こ、これ……一生懸命作ったから……美味くねえかもしれないけど……貰ってくんねえかな？／＼／＼／＼」

嵐は沙耶から可愛くラッピングされた袋を受け取り、その場で開ける。そこには一口サイズのチョコが入っていた。

「ん、どれ……」

嵐は1つ手に取ると口に放り込む。すると嵐の口の中に程よい苦みが広がる。

「その……嵐は甘いのがそんなに好きじゃないって言ってたから、ビターチョコにしたんだけど……駄目だったか？／＼／＼／＼」

不安そうに上目遣いで見てくる沙耶。彼氏の好みまで熟知している沙耶は他の女生徒とは違い、少々苦いビターチョコを作ってきていた。

「美味しいよ、ありがとな」

嵐が沙耶の頭を撫でながら笑顔で答える。

「ほ、ホントか！？／＼／＼／＼」

一方の沙耶は嵐に美味しいと言われたことで不安そうな表情が一変、眩いばかりの笑顔になった。

「んじゃ、沙耶も食べてみるか？」

そう言つと嵐はチョコを1つ口に含み……そして……

「んむ！？／／／／／」

沙耶にキスをした。

「ん…んむ……」

「っ……ぷは…ん……／／／／／」

嵐は巧みに自分の口の中のチョコを沙耶の口の中に入れる。しかし、それだけでは終わらず、さらに自分の舌を差し込んで沙耶の口の中でチョコを溶かしていく。さらに舌でチョコを溶かしながら沙耶の唾液の味も堪能する。

「はふう／／／／／」

嵐が口を離すと顔を真っ赤にした沙耶は蕩けたような表情で嵐に擦り寄る。その行動はまるで甘えるような、動物の求愛行動のようであった。

「ん…我慢できなくなった？」

「っ！？……馬鹿野郎……／／／／／」

嵐の言葉に拗ねるように口を尖らせる。

「じゃ、続きしようか？」

「な！こ、ここでふむう！？／／／／／／」

文句を言おうとした沙耶は口を塞がれる。結局沙耶は妄想通り、チヨコと一緒に美味しく頂かれたのであった。

唯一妄想と違ったのは野外であったことだった。

バレンタイン記念小説（後書き）

というわけでバレンタイン小説でした。次回からは本編をお送りいたします。

第27話 美しき鳥獣使いVS龍の姫(前書き)

今回は沙耶と舞のデュエルです。

沙耶のデッキがまた少々変更されています。

第27話 美しき鳥獣使いVS龍の姫

城之内克也と孔雀舞の訪問から数分、2人はリビングに通され、2人も朝食がまだだったので4人で朝食を食べていた。

「で、嵐。その子は誰なのかしら？」

すると舞が嵐に沙耶のことを聞く。友人の家に初対面の女の子がいれば気になるのも当然だ。

「ああ、こいつは加賀美沙耶。俺の彼女だ」

嵐が紹介すると沙耶は緊張しながら頭を下げる。城之内も舞も決闘王の武藤遊戯に並んで有名なデュエリストであるため、沙耶は先日海馬と会ったとき同様に緊張していた。

「へへ、お前に彼女ねえ」

城之内が物珍しそうに沙耶を見る。

「あら、別におかしいことじゃないわよ。特に嵐は顔もいいしどっかの誰かさんと違って鈍感の朴念仁じゃないから今までできなかった方がおかしいわ」

「おい、鈍感の朴念仁って誰のことだよ？」

「あら、去年まで人のアプローチに全く気付かなかった癖によく言うわ」

「んだと！」

城之内と舞はそのまま言い争いを始め、沙耶はこっそりと嵐に訊ねる。

「なあ嵐、あの2人ってなにがあつたんだ？」

「ああ、あの2人一応去年から恋人同士なんだが克也のほうアホみたいに鈍感で何年間も舞からのアプローチに気付かなくてな」

嵐もこの世界に来て数年だが舞が城之内に気があるのはすぐにわかった。つとというか嵐自身は『どうして気付かないんだらう？』と本気で首を傾げていた。

「あゝ、2人とも。痴話喧嘩ならよそでやってくれ」

いい加減見かねた嵐が仲裁し、なんとか2人も喧嘩を止める。ちなみにこの2人がどれくらいでくつつくか仲間内で賭けをして嵐が1人勝ちしたのは内緒だ。

「まったく、相変わらず騒がしい連中だぜ」

すると窓ガラスに映っていた嵐の姿が変化し、バクラに変わった。

「うっせー！つつつかテメエまだ嵐の中にいやがんのかよ！」

城之内がバクラを睨みつける。嵐がこの世界に来て数年経ってもバクラにいい感情を持っているわけがなかった。というかバクラがしてきたことを考えれば当然なのだが。

「けっ、こんな相性のいいのは相棒が初めてだからな。最近じゃ千年リングも戻ってきたしいいこと尽くめだぜ」

するとバクラの言葉に城之内と舞が驚き、嵐に詰め寄る。

「おい！どういうことだよ！千年リングって……あれはアテムが冥界に帰った時に！」

千年アイテムがエジプトの地下深くに消えたことを知っている城之内は慌てだし、舞も城之内たちから話を聞いていたので驚いている。

その後、嵐は突如アカデミアに現れた謎の女性とのデュエルに勝ち、渡されたことを説明した。

話し終わった後、城之内が『捨てたほうがいい』と喚いていたし、以前のバクラの宿主である獺良了ほくろうりょうが散々バクラに利用されたからこそその助言だった。

もつとも、嵐はバクラともそれなりに仲良くやっているので捨てる気など毛頭ないのだ。そのことを城之内に伝えると渋々ながらも納得した。

「しかし嵐に彼女が出来たってことはあと1人ものなのは本田だけか」

「ん……そういえばそうだな」

城之内の言葉に嵐が納得する。嵐の仲間であり、伝説のデュエリストである遊戯を始め、仲間内には彼女持ちが多いのだ。

遊戯は幼馴染だった真崎杏子まきあんずと付き合っているし、城之内は舞と付

き合っている。他にも御伽龍児おとぎりゅうじは城之内の妹である川井静香かわいしずかと付き合っている。そして何故か獺良了とレベツカが付き合っているのだ。ちなみに静香が御伽と付き合う時は御伽と城之内の間で壮絶な戦いがあったことをここに記しておく。

そしてその結果、現在遊戯たちの仲間内で彼女がいないのは本田だけという悲惨な状況になっていた。ちなみに海馬は城之内は仲間と認識していないので除外している。

「まあ、あんまりからかってやるなよ」

多分無理だろうが……嵐はそう心の中で付け加える。そもそもすでに20歳超えているくせに子供っぽい城之内にそんな期待はするだけ無駄だ。

「ねえ、あなた。私とデュエルしない？」

すると舞が突然沙耶に語りかける。

「へ？お、オレと？」

「そう、あなたがどれぐらい強いに興味あるし。どう？」

舞の質問に沙耶はニヤリと笑う。

「いいぜ、オレも伝説のデュエリストの仲間とは戦ってみたかったんだ！」

そう言いながら沙耶は自分のデッキをディスクにセットする。

「じゃあ嵐、庭を借りるわよ？」

「好きにしる」

そして4人は庭に移動した。

「それじゃあ準備はいいかしら？」

「おう！いつでも来い！」

「デュエル！！」

「オレの先攻…ドロー！」

沙耶は勢いよくカードをドローすると手札からモンスターを召喚した。

「オレはホルスの黒炎竜LV4を召喚！」

沙耶のフィールドに銀色の身体の小さな竜が現れる。

ホルスの黒炎竜Lv4

星：4

ATK：1600

DEF：1000

「レベルモンスター……進化されると厄介そうね」

「さらにオレはカードを2枚伏せてターン終了！」

沙耶

LP：4000

手札：3枚

モンスター：ホルスの黒炎竜Lv4（攻撃表示）

魔法・罫：伏せカード2枚

「私のターン、ドロ。私は手札のハーピィ・クイーンを捨ててデッキからハーピィの狩場を手札に加える。そしてそのままフィールド魔法ハーピィの狩場を発動！」

すると周りの光景が巨大な狩場へと変化する。

「さらに手札からバード・フェイスを攻撃表示で召喚！」

バード・フェイス

星：4

ATK：1600

DEF：1600

「そしてフィールド魔法ハーピイの狩場の効果によりフィールド上の鳥獣族モンスターの攻撃力・守備力を200ポイントアップするわ！」

バード・フェイス

ATK：1600 1800

DEF：1600 1800

沙耶のホルスの黒炎竜を上回るモンスターを出した舞だが内心では迷っていた。その原因は沙耶の場に伏せられた2枚の伏せカードである。

「（あの2枚……おそらくはモンスター迎撃用の罠カード……でも

私には伏せカードを破壊するカードはない……) 私はカードを1枚
伏せてターン終了!」

舞

LP:4000

手札:3枚

モンスター:バード・フェイス(攻撃表示)

魔法・罫:ハーピイの狩場(フィールド魔法)、伏せカード1枚

「オレのターン、ドロー!オレはミラーリュ・ドラゴンを攻撃表示
で召喚!」

沙耶のフィールドに黄色いドラゴンが姿を現した。

ミラーリュ・ドラゴン

星:4

ATK:1600

DEF:1000

「こいつがいる限り相手はバトルフェイス中には罫カードを発動で
きねえ!ホルスの黒炎竜でバード・フェイスを攻撃!」

ホルスの黒炎竜はその口に黒い火球を作り出し、バード・フェイスにぶつける。

「でも攻撃力ではバード・フェイスの方が上よ」

「そんなのはわかってるぜ！速効魔法、突進発動！エンドフェイスまでモンスターの攻撃力を700ポイントアップする！これでホルスの攻撃力を700ポイント上げる！」

ホルスの黒炎竜Lv4

ATK：1600 2300

ホルスの黒炎竜の火球によりバード・フェイスは破壊された。

舞：LP4000 3500

「くっ！なるほど……攻撃反応型の罠じゃなく魔法カードだったってわけね。けどバード・フェイスの効果が発動するわ。このカードが戦闘で破壊されたとき、デッキからハーピィ・レディを手札に加えることができる！この効果でデッキからハーピィ・レディ1を手札に加えるわ」

「まだオレの攻撃は終わってねえ！続いてミラージユ・ドラゴンでダイレクトアタック！」

今度はミラージユ・ドラゴンの口から黄色い熱線が舞に向かって放たれた。

舞：LP3500 1900

「さらにエンドフェイズ時に相手モンスターを戦闘で破壊したホルスの黒炎竜Lv4を墓地に送り、デッキからホルスの黒炎竜Lv6を特殊召喚！」

ホルスの黒炎竜Lv6

星：6

ATK：2300

DEF：1600

沙耶のフィールドに進化したホルスの黒炎竜が現れる。

「オレはこれでターン終了だ！」

沙耶

LP：4000

手札：3枚

モンスター：ホルスの黒炎竜Lv6（攻撃表示）、ミラーリュ・ドラゴン（攻撃表示）

魔法・罫：伏せカード1枚

「へえ、あいつやるなあ」

「まあな」

沙耶の強さに感心する城之内。一方の嵐もどこか誇らしげである。

「っていつかよ、あのホルスってモンスター渡したのお前だろ？」

「わかるか？」

そう、沙耶が使っているホルスの黒炎竜は実は嵐が沙耶に譲ったモンスターであった。それに合わせて沙耶のデッキもヴァンダルギオン用のカウンター罫と一緒にホルス用の速効魔法が入れられたのである。実はこのデッキはわりと回る（実話）。

「そりやな。Lvモンスターはかなりのレアカードだぜ？そう簡単に手に入るもんでもねえだろ？」

ちなみにこの世界ではLvモンスターのレア度は比較的高い。特に強いモンスターともなれば尚更だ。もつとも、城之内の持つ『真紅眼の黒竜』に比べれば安いものだが……

「私のターン、ドロ……なかなかやるわね。でも残念だけどこのターンで終わらせるわ」

「っ!？」

デュエリストとしての直感か沙耶にはこの言葉がハツタリでないことはすぐにわかった。伊達に嵐と何度もデュエルしていないのである。

「私は魔法カード、手札抹殺を発動するわ！互いのプレイヤーは手札を全て捨て、捨てた枚数カードをドロする」

沙耶と舞は互いに手札が3枚だったので捨てた後に同じ枚数カードを引く。

「さらに天使の施しを発動！カードを3枚引き、2枚捨てる!……

ふふふ、これで役者は揃ったわ。私は永續罫、ヒステリック・パーティー発動！手札を1枚捨てることで墓地からハーピー・レディを可能な限り特殊召喚する！私は2枚のハーピー・レディ1とハーピー・クイーンを特殊召喚！」

舞のフィールドに腕が翼になった女性モンスターが姿を現す。

「ハーピー・クイーンはフィールドと墓地ではハーピー・レディとして扱われるわ」

ハーピー・レディ1

星：4

ATK：1300

DEF：1400

ハーピー・クイーン

星：4

ATK：1900

DEF：1200

「この瞬間フィールド魔法、ハーピーの狩場の効果発動！ハーピー・レディが召喚、特殊召喚されるたびにフィールド上の魔法・罫カードを1枚破壊する！私はあなたの伏せカードを破壊！」

「く！」

2体のハーピー・レディ1とハーピー・クイーンが羽根を飛ばし、それによって沙耶の伏せカードが破壊される。

「ちい！オレは速効魔法、収縮を発動！ハーピー・クイーンの攻撃力を半分にする！」

ハーピー・クイーン

ATK：1900 950

ハーピー・クイーンの大きさがみるみる小さくなっていく。

「ふふ、そんなのは関係ないわ。私のハーピーたちはフィールド魔法の効果で攻撃力・守備力が200ポイントアップ！さらにハーピー・レディ1の効果でフィールドの風属性モンスターの攻撃力を300ポイント上げる！私の中にはハーピー・レディ1が2体。よってフィールド魔法と合わせて800ポイント攻撃力がアップ！」

ハーピー・レディ1×2

ATK：1300 2100

DEF：1400 1600

ハーピー・クイーン

ATK：950 1750

DEF：1200 1400

「そして私は手札からハーピースペット仔竜ヘビードラゴンを召喚！」

次に舞のフィールドに小さなドラゴンが姿を現した。

ハーピースペット仔竜ヘビードラゴン

星：4

ATK：1200

DEF：600

「この子は自分フィールドにいるこのカードを除くハーピーの数に応じて特殊能力を得るわ。1体以上ならこのカードが存在する限りハーピースペット仔竜以外のハーピーと名のつくモンスターを攻撃対象にできない。2体以上ならそれに加えてこのカードの元々の攻撃力と守備力が倍になる。3体以上なら1ターンに1度、相手フィールド上のカードを1枚破壊できる」

「な!？」

ハーピイズペット仔竜

ATK：1200 2400

DEF：600 1200

「さらにこの子も風属性……よってハーピィ・レディ12体の効果で攻撃力が600ポイントアップ!」

ハーピイズペット仔竜

ATK：2400 3000

「もつともこの子はドラゴン族だから狩場の効果ではパワーアップできないけどね。でもこれで十分よ!ハーピイズペット仔竜の効果でホルスの黒炎竜を破壊!」

ハーピイズペット仔竜の咆哮によってホルスの黒炎竜が破壊される。

「さらにハーピィ・レディ1でミラージュ・ドラゴンを攻撃!スクラッチ・クラッシュ!」

ハーピィ・レディ1の足の爪でミラージュ・ドラゴンが破壊される。

「くっ!ちえ、オレの負けか……!」

沙耶：LP4000 3500

「そう悲観することないわ。今回は私の運が良かっただけ……あなたには十分強いわよ」

そして沙耶は舞のモンスターの総攻撃をくらい、LPがゼロになった。

「じゃあな！今日は楽しかったぜ！」

それから数時間後、城之内と舞が帰ることになった。

「今度は遊戯たちも連れてみんなで遊びに来るわね」

ちなみにデュエルを経て仲良くなったのか舞と沙耶はしばらくガールズトークをしていた………といっても舞が問い詰めて沙耶が顔を真っ赤にして答えると言う半ば尋問のような事になっていたが……

そして城之内と舞は帰って行った。

第27話 美しき鳥獣使いVS龍の姫（後書き）

どうぞじょうず？

いつか遊戯たちも出せたらなあと思っていたりします。

第28話 お姉さまは渡さない？百合っこ少女登場（前書き）

更新です。今回が冬休み最後の話になります。

第28話 お姉さまは渡さない？百合っこ少女登場

城之内と舞の訪問から数日。冬休みも残り僅かになったある日、嵐と沙耶はある場所に向かっていた。

「お、ここだ！」

沙耶がある建物の前で止まる。そこには『斉藤空手道場』という看板が掛かっていた。そう、ここは沙耶がデュエルアカデミアに来る以前まで通っていた空手道場である。

この空手道場は沙耶の母親である綾香も通っていた道場で沙耶はここに幼少のころから中学3年まで通っていた。そこで沙耶はこっちに戻ってきた機会に顔を出そうと考え、嵐もそれにくっついてきたのだ。

「ちわーす！」

沙耶が元気よく道場の門を開けるとそこでは数十人の門下生が稽古をしていた。

「お、沙耶じゃん！」

「沙耶先輩！」

するとすぐに沙耶は門下生たちに囲まれた。これだけでもどれだけ沙耶が慕われているかよくわかる。もともと男っばい沙耶はこういう体育会系の人たちに慕われやすかった。

「おう沙耶、久しぶりじゃないか」

奥のほうから黒髪に髭を生やした威つい男性が歩いてきた。

「あ、館長。久しぶりっす」

「はっはっは！沙耶もな。どうだ、アカデミアでの生活は？」

「いいところっすよ。……まあむかつくのもいるけど」

沙耶がそういうと館長と沙耶の様子を笑顔で見守っていた嵐の目が合った。

「沙耶、そっちの男は誰だ？」

その言葉に沙耶の周りにいた門下生たちもいっせいに嵐を見る。

「あ、えつと……／＼／＼／＼」

いざ嵐を紹介しようとなると沙耶は顔を真っ赤にしてしまう。やはりこうやって改めて紹介するのはいまだに恥ずかしいらしい。

「お、オレの……こ、婚約者の……嵐だ／＼／＼／＼」

顔を真っ赤にして声を振り絞るように出す。そしてそれに続くように嵐も自己紹介する。

「沙耶の婚約者の紫藤嵐です。初めまして」

それを聞いた館長と門下生たちの驚きの声が響いた。

「いやあ、すまんすまん。まさか沙耶に恋人ができるとは思わんかったからな」

道場に設置された座敷で嵐と沙耶はお茶を飲みながら話をしている。ちなみに門下生の女子たちが嵐のことを見ながら「カッコいいね」「沙耶先輩いいなあ」「ウホッいい男」とか言っている。最後のはいろいろおかしいが基本嵐がアカデミアで言われ馴れてるのでスル

—である。

「しっかしなあ、いつも男を蹴り1発で薙ぎ倒して1番男つ気がないと思つてた沙耶に恋人ができるとは。世の中わからんなあ」

「でも沙耶には可愛いところ多いですよ」

「／／／／／／／／／／／／／／／／」

平然と沙耶を褒める嵐に沙耶は顔を真っ赤にしている。ちなみに嵐が本気で惚気始めたら凄まじいことになる。以前沙耶はそれで褒め殺されそうになった。

「なんならアルバム見るか？沙耶の子供のころの稽古中の写真とかあるぞ？」

館長は沙耶の母親がここに通っていたこともあり、沙耶の家族とは家族ぐるみの付き合いがあるらしい。館長の言葉に嵐は……

「是非」

即答であつた。

「だが沙耶よ。恋人ができたとなるとあいつが五月蠅いのではないか？」

「あゝ……」

館長の言葉に沙耶は納得する。

「ただいま！」

すると道場に1人の少女の音が響いた。

「……来た……」

沙耶が沈んだような表情をする。するとドタドタとこちらに近づいてくる音が聞こえた。

「お姉さま！おかえりなさいませ！美奈は、美奈はお待ちしております！」

茶髪にツインテールの沙耶よりも少しだけ小柄な少女が現れた。沙耶も身長は150cm後半のため少女は140ぐらいか……ちなみに嵐は170cmはある。さらにスタイルは沙耶と違って凹凸が少ない。

「み、美奈……」

一方の沙耶は満面の笑顔の少女……美奈に対して引きつったような顔をしている。

「お姉さま~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~!!」

そう言いながら沙耶に抱きつこうとする美奈。……だが……

「大丈夫か？」

嵐が間に入って美奈の頭を押さえた。結果、美奈の沙耶への抱き着きは阻止された。

「お、おう。サンキュ」

沙耶は咄嗟に嵐に抱きついており、沙耶は嵐の腕の中にいる。それに気づいた沙耶は瞬時に顔を赤くしたのは余談である。

それから数分後、美奈は嵐と沙耶に対面するように館長の横に座っている。その頭には館長に殴られたのかマンガのようなタンコブがあった。

「この馬鹿者はわしの娘で斉藤美奈というんだ。よろしくな」

館長が美奈の紹介をする中、美奈は不機嫌そうに嵐を睨んでいる。

「納得できませんわ！こんな男がお姉さまの婚約者だなんて！」

この調子である。この美奈は沙耶の1つ年下の幼馴染であり、昔から沙耶のことを恋い慕っている同性愛者……いわゆるレズビアンだったりする。

きっかけは下手な男よりも男らしくてカッコいい沙耶に惚れたということらしい。

「テメエが納得しなくても嵐はオレの婚約者なんだよ／＼／＼／＼」

沙耶は呆れながらも嵐の腕に抱きつく。普段はこんなことしないがやはり嵐との仲をアピールしたい乙女心はあるらしい。

「キイイイイイイイイイイイ！！表に出なさい！ギッタギタにして差し上げます！」

そして何故か嵐と美奈が空手で対決することになった。

「おい、止めなくていいのか？」

「え？だって……」

「はじめー！」

館長が沙耶と話していると審判が合図をし、試合が始まる。

「嵐、オレより強いし」

沙耶がそう言うと歓声上がる。そこには嵐のローキックを軸足に叩き込まれ、悶え苦しむ美奈の姿があった。

さて、どうしてこうなったかというところ……美奈が嵐を殴ろうとラッシュを仕掛け、嵐はその攻撃を悉く受け流していた。しかしそれは囿で嵐の足にローキックを叩き込もうと攻撃した美奈だったが、それを嵐に防御され、カウンターで逆にローキックを叩き込まれたのである。

ちなみに嵐は基本的に沙耶以外には一切興味がない男である。ましてやこういう試合となれば基本加減はなしだ。

「く~~~~~~~~……こうなったらデュエルで勝負ですわ！」

試合で負けた美奈は嵐にデュエルを申し込んだ。美奈も沙耶の幼馴染だけあって昔からデュエルをしてきたのである。

そして道場内で門下生が見守る中、嵐と美奈がデュエルディスクを起動させる。お前ら練習どうしたとかの突っ込みはなしである。

「嵐、その……頑張れよ？／／／／／」

「わかってるよ」

「ば、馬鹿！こんなところで恥ずかしいことすんなよ！／／／」

どんな理由があれ嵐を応援する沙耶。顔を真っ赤にしながらエールを送り、嵐に頭を撫でられ恥ずかしがっているが拒絶してはいない。

「キイイイイイイアアアアアアアアアア！……！妬ましい！あんな簡単にお姉さまを可愛くするあやつが妬ましいiiiiiiiiiiiiiiiiiiii！……」

一方の美奈は奇声を発しながら嫉妬に燃えていた。

「「デュエル……」」

「俺のターン、ドロー！俺は霞の谷のファルコンを攻撃表示で召喚
「！」

霞の谷のファルコン

星：4

ATK：2000

DEF：1200

「さらにカードを2枚伏せてターン終了！」

嵐

LP：4000

手札：3枚

モンスター：霞の谷のファルコン（攻撃表示）

魔法・罫：伏せカード2枚

「私のターン、ドロー！私は天使の施しを発動！カードを3枚引き2枚捨てる！そしてこの効果で捨てた暗黒界の軍神シルバ、暗黒界の武神ゴルドの効果を発動！他のカードの効果によってこのカードが墓地に捨てられたとき、墓地からこのカードを特殊召喚します！」

暗黒界の軍神シルバ

星：5

ATK：2300

DEF：1400

暗黒界の武神ゴールド

星：5

ATK：2300

DEF：1400

「シルバで霞の谷のファルコンに攻撃！」

シルバの持っていた剣がファルコンを切り裂く。

「く……」

嵐：LP4000 3700

「さらにゴールドで攻撃ですわー！」

金色の魔神の攻撃が嵐に迫る。

「罨カード、魔法・の筒を発動！相手モンスターの攻撃を無効にし、そのモンスターの攻撃力分のダメージを相手に与える！」

「きゃあー！」

美奈：LP 4000 1700

「小癩な……私はカードを2枚伏せてターン終了！」

美奈

LP：1700

手札：4枚

モンスター：暗黒界の軍神シルバ（攻撃表示）、暗黒界の武神ゴルド（攻撃表示）

魔法・罨：伏せカード2枚

「俺のターン、ドロ！俺も魔法カード天使の施しを発動！カードを3枚引き、2枚捨てる！」

そして伏せカード発動！永續罾、リビングゲットの呼び声！墓地のモンスター1体を攻撃表示で特殊召喚する！俺は女忍者ヤエを特殊召喚！」

女忍者ヤエ

星：3

ATK：1100

DEF：200

「そんな雑魚モンスターで私のモンスターは倒せませんわ！」

「どうかな？女忍者ヤエのモンスター効果を発動！手札の風属性モンスターを墓地に送り、相手フィールド上の魔法・罾を全て手札に戻す！風遁の術！」

するとフィールドに突風が吹き荒れ、美奈のフィールド上の魔法・罾が吹き飛ばされる。

「あ、決まったかな？」

嵐の行動に沙耶が察知する。沙耶は嵐と一緒にデッキを組んでいたので今の嵐のデッキはだいたい把握している。

「さらに俺はお前のフィールドのモンスター2体を生贄に溶岩魔神

ラヴァ・ゴーレムを特殊召喚！」

嵐がカードをデュエルディスクにセットした瞬間、シルバとゴルドが消え、美奈のフィールドに溶岩でできたモンスターが現れる。

溶岩魔神ラヴァ・ゴーレム

星：8

ATK：3000

DEF：2500

「ちょっと！これはなんなんですよー！」

美奈がラヴァ・ゴーレムの檻の中に捕らわれ、叫んでいる。

「安心しろよ、すぐ終わるから。俺は魔法カード、所有者の刻印を発動！フィールド上の全てのモンスターのコントロールは本来の持ち主に戻る！」

その瞬間ラヴァ・ゴーレムは嵐のフィールドに移動し、嵐がラヴァ・ゴーレムの檻に捕らわれた。

「え？あ……」

「これで終わりだ。ラヴァ・ゴーレムでダイレクトアタック！ゴー

レムボルケーノ！！」

「きゃあああああああああ！！」

美奈：LP17000

「ふう、まさか空手道場でデュエルする目に合うとは思わなかったな」

デュエルを終え、道場を後にした嵐と沙耶は並んで家路についていた。

「悪いな、美奈が迷惑かけちゃって」

美奈は沙耶の幼馴染であるためか少々ばつが悪そうな顔をする。

「別に沙耶が気にする必要ないだろ？それに……あいつがお前のこと好きになる気持ちは解るしな」

そう言いながら嵐は沙耶の頭を撫でる。

「ん…………馬鹿…………／／／／／」

沙耶は気持ちよさそうに目を細めている。

「でももうすぐ冬休みも終わりだな」

沙耶が少々名残惜しそうにしている。大方嵐との同棲生活が終わるのが名残惜しいのだろう。

「まあ、確かにな…………じゃあ、残りの数日思いっきり甘えていいぜ

」

「むう…………馬鹿…………／／／／／」

結局ラブラブなまま冬休みを終えた嵐と沙耶であった。

第28話 お姉さまは渡さない？百合っこ少女登場（後書き）

どうでしたか？ちなみに美奈は再登場するかもしれません。

第29話 寝不足と悪い意味での熱血野郎（前書き）

更新です。

一言言わせて貰おう……………どうしてこうなった？

冬休み編が終わったので多少糖分が収まるかと思った……………そんなことはなかった。

っていつかなにかしら恋愛が絡むと糖分が多くなる。この時期は恋愛関係の話が多いからな〜

そしてデュエルは短いです。まあ、うん。相手はモブだから仕方ない。色々とあれですがあまり深く考えないで読みください。

感想お待ちしています。

第29話 寝不足と悪い意味での熱血野郎

新学期が始まってから数週間。冬休み明けには沙耶がジュンコやももえに尋問され、冬休み中に嵐と正式に婚約したことを喋ってしまふというハプニングもあつたが冬休み前には嵐が沙耶とのラブラブぶりを披露していたので沙耶が嫉妬の視線で見られるだけで突っかかってくる人間はいなかった。

さて、そんな嵐たちは体育のテニスを受けていた。

「嵐！くらえ！」

授業の中で嵐は三沢とシングルの試合をしていた。三沢がスマッシュで決めにかかるが……

「甘いぞ大地！三種の返し技……トリプル・カウマキ『カウマキ 熊落とし』！」

三沢の打った球は嵐によって返され、後方に落ちて行った。

「アニキ、いつも思うんですけど嵐くんって何者なんでしょうね？」

「だよなあ……」

「あんまり深く考えないほうがいいんだなあ」

嵐の姿に翔、十代、隼人は目を丸くしていた。そりゃあどこぞのテニス漫画の技を平然と使ってたならそう思うのも無理はない。

「沙耶、行ったわよ！」

「ふえ？つわ！」

一方、隣のコートでダブルスの試合をしていた沙耶は自分のほうに飛んできたボールに驚き、転倒していた。

「珍しいわね、沙耶は体育の成績は女子で一番良いのに」

「そういえば最近すごく眠たそうにしましたわ」

「授業中も寝てることが多いし……どうしたのかしら？」

明らかに動きが悪い沙耶の姿に明日香たちが心配した視線を向ける。沙耶はデュエルの実技の授業以外では体育は唯一得意な授業である。尋常じゃない運動神経を持つ嵐は別として体育に関しては沙耶は種目を問わずに得意でテニスが苦手というわけではない。

にもかかわらず、冬休みが始まってから沙耶はことあるごとに眠そうにしている。嵐も普段から結構気にしている。

さて、そうこうしているうちに十代と明日香がテニスコートに入る。

「勝負よ十代！」

「行くぜ明日香！」

十代と明日香がダブルスで試合を始めたころ、試合を終えた嵐は同じく試合を終えた沙耶のもとに来ていた。沙耶はコックリコックリと今にも寝そうになっている。

「沙耶、二ことと眠そうだけどどうかしたのか？」

「え？な、なんでもねえよ。気のせいじゃねえか？」

嵐に訊ねられ、慌てて取り繕う沙耶。しかし眠そうにしているのは明らかだったため、嵐は沙耶の眼を真っ向から見つめる。

「あう……えつと……その……／／／／／／」

嵐から見つめられた沙耶は惚れた弱みか顔を紅くして喋ろうとする。沙耶は嵐のこういった行動に非常に弱かったりする。しかし……

「マンマミーヤー!!」

どこからか変人……失礼、クロノスの悲鳴？が上がった。どうやら十代が打ったボールがクロノスの脳天に直撃したらしい。これによってこの話はここで切り上げられてしまった。

その放課後、十代と翔はクロノスにボールをぶつけた罰としてテニス部への1日入部を申し付けられていた。

嵐と沙耶は授業終了後、テニス部が終わる時間を見計らってテニス場へと足を進めていた。

「沙耶、さっき聞きそびれたけどホントにどうしたんだ？確か冬休み終わってからだよな？やけに眠そうにしてんのって……」

「えっと……そうだったか？」

「なんかあったのか？」

沙耶は体育の後の午後の授業も寝ていたため、今はもう眠気が覚めているらしい。嵐は今度こそ聞き出そうと沙耶に訊ねるが、ちょうどテニス場に入る直前だったのが悪かった。

「のおおおお！この僕が負けるなんて……」

そこにはテニス場で絶叫しているテニスウェア姿の男と同じくテニスウェア姿の十代がいた。

「あ、嵐くん」

「翔、なにがあっただんだ？」

嵐が翔のこのあらしを訊ねるとあの絶叫している男の名前はテニス部部長の『綾小路ミツル』。

最初は十代と翔をテニスで扱っていたらしいのだが途中から十代たちの様子を見に現れた明日香に対し、『どちらが明日香の婚約者か』^{ファイアンセ}という事になってデュエルに発展したらしい。結果は見ての通り、十代の勝利で終わった。

「（そういえばあったなこんなの。っていつか確か十代はファイアンセの意味を知らなかったような……）」

（あいつもどんだけガキなんだよ）

嵐がそう思っているとバクラも呆れたように声を出す。実際、嵐の言う通りで十代はファイアンセの意味を解っていなかった。

「まあ、終わったんならさっさとともど」おお！僕のことを慰めに来てくれたのかい！？」んん？」

やけに場違いな言葉に嵐がその方向を見る。するとそこにはあるうことが沙耶の手を握っている綾小路の姿が……

その光景を見た嵐以外の全員……嵐の中から状況を見ていたバクラや恋愛事に疎い十代ですら同じことを考えていた。

「……………（あ、こいつ死んだな）……………」

「ってなんだよお前！オレは「アカデミアに君みたいな可憐な子がいたなんて！ぜひ僕の婚約者^{ファイアンセ}に！」話を聞けよ！」

綾小路にいきなりの行動に呆然としていた沙耶だったがすぐに正気

に戻って手を振り払おうとする。しかし、その前に綾小路の手は嵐によってふり払われた。

「綾小路……先輩？沙耶は俺の婚約者ものなんで手を出さないで貰えますか？」

顔は笑顔である。しかしその背後には黒い炎と不動明王の姿が浮かび上がっていた。その姿に十代たちは言い知れぬ恐怖に駆られていた。

「（……お、俺のもの………／／／／／／／／／／）」

一方、沙耶は嵐の言葉がかなり嬉しかったのか顔を真っ赤にしていた。

「な、なんだ君は！？」

「俺は紫藤 嵐。ここにいる加賀美 沙耶とは両親も認めた婚約者フィアンセです」

嵐は笑顔で背中に沙耶を隠しながら綾小路を威嚇する。嵐は非常に独占欲が強い。沙耶が十代や翔といった友人の男性陣と触れ合っても機嫌が悪くなる。それが見ず知らずの男となるとさらにひどいことになる。

「き、君が彼女の婚約者フィアンセだと！？」

「そうです。だから沙耶には手を出さないでください」

嵐は終始黒い笑顔である。その笑顔に十代たちの震えは次第に大き

くなっていた。

「認めない……認めないぞ！紫藤くん、沙耶くんの婚約者フィアンセの座をかけて僕とデュエルだ！」

「まったく、沙耶は俺の婚約者だったのに……まあいいや。いいぜやっつてやるよ」

綾小路の言葉に呆れながらも嵐はデュエルディスクを起動させる。

「デュエル！！」

「俺の先攻、ドロー。俺はクリッターを守備表示で召喚」

嵐のフィールドには黒い毛で覆われた三つ目のモンスターが召喚された。

クリッター

星：3

ATK：1000

DEF：600

「さらにカードを1枚伏せてターンエンド」

嵐

LP：4000

手札：3枚

モンスター：クリッター（守備表示）

魔法・罾：伏せカード2枚

「僕のターン、ドロー！」

「この瞬間、伏せカードオープン！永続罾、魔封じの芳香！互いのプレイヤーは魔法カードを1度セットしなければ発動できず、次の自分のターンまで発動できない！」

嵐が伏せカードを発動させると嵐の場に妖しげな煙を上げるお香が出現した。

「なに！？」

一方、綾小路は発動されたカードに顔を顰める。

「うまいわね。綾小路先輩のデッキはバーンデッキ。これで魔法カードは1ターン経つまで使えないわ」

「それに嵐のデッキはどっちかっていうとモンスター効果と罠のほうが強力だしな」

明日香が嵐に感心し、沙耶が嵐のデッキを補足する。

「ならば僕はメガ・サンダーボールを攻撃表示で召喚！」

綾小路の場には雷をまとった棘付きボールが現れた。

メガ・サンダーボール

星：2

ATK：750

DEF：600

「さらにメガ・サンダーボールでクリッターに攻撃！サンダー……スマッシュユー！」

メガ・サンダーボールは雷を纏ったままクリッターに特攻し、クリッターを貫く。

「破壊されたクリッターの効果を発動！このカードがフィールドから墓地に送られたとき、デッキから攻撃力1500以下のモンスターを手札に加える！俺はデッキから攻撃力1000のTheアトモスフィアを手札に加える！」

「そして僕はカードを3枚伏せてターン終了！」

綾小路

LP：4000

手札：2枚

モンスター：メガ・サンダーボール（攻撃表示）

魔法・罫：伏せカード3枚

「俺のターン、ドロ！。俺は伏せカード発動！ハリケーン！フィールド上に存在する全ての魔法・罫を手札に戻す！」

「なんだと!？」

フィールドを突風が襲い、伏せられていた綾小路のカードと嵐の魔封じの芳香が吹き飛ばされて手札に戻る。

「さらに自分フィールド上にトーチトークンを2体特殊召喚し、相手フィールド上にトーチ・ゴーレムを特殊召喚！」

嵐のフィールド上に小さな灰色のゴーレムが召喚され、さらに綾小路にフィールドに巨大な灰色のゴーレムが現れた。

トーチトークン

星：1

ATK：0

DEF：0

トーチ・ゴーレム

星：8

ATK：3000

DEF：3000

「僕の高レベルモンスターを呼んでどうする気だい？僕に沙耶くんを渡す気になったのかな？」

「けっ、冗談言ってんじゃねえよ。俺はお前のフィールドのトーチ・ゴーレムとメガ・サンダーボールを生贄に、溶岩魔神ラヴァ・ゴー

レムを特殊召喚！」

さらに綾小路の場の2体のモンスターが高熱で溶かされ、現れたラ
ヴァ・ゴーレムの檻に綾小路が捕らわれる。

溶岩魔神ラヴァ・ゴーレム

星：8

ATK：3000

DEF：2500

「さあ……これで決める！俺のフィールド上のトーチトークン2体
と墓地のクリッターをゲームから除外し、こいつを特殊召喚する！
フィールドを取り囲み制圧しろ！Theアトモスファイア！」

「クオオオオオオオ！」

Theアトモスファイア

星：8

ATK：1000
DEF：800

「そしてアトモスファイアの効果を発動！相手フィールド上のモンスター1体を装備カードとして装備し、アトモスファイアの攻撃力を装備したモンスターの攻守分アップする！俺はラヴァ・ゴーレムを装備！」

嵐の宣言と共にラヴァ・ゴーレムがただの溶岩の塊になってアトモスファイアのカプセルに吸い込まれる。

Theアトモスファイア
ATK：1000 4000
DEF：800 3300

「な、なにiiiiiiii!!」

「人の女に手を出す奴は……風に吹かれて飛んで行け！アトモスファイアでダイレクトアタック！テンペストサンクションズ!!」

「うわああああああ!!!!!!!!!!」

綾小路：LP40000

「ぼ、僕が……僕が2回も負けたあああああああ……!!」

嵐に負けた綾小路は泣きながらテニスを去って行った。

「ふう、さて帰るか」

「そつだな」

嵐の言葉に十代たちが同意する。そして嵐たちはテニスを後にした。

それからしばらくして……嵐と沙耶は十代たちと別れ、2人で歩いていた。

「なあ沙耶、結局いつも眠そうにしてる理由はなんなんだ？」

嵐はずっと聞けなかったことを訊ねる。沙耶もさすがにこれ以上誤魔化せないと思ったのか真っ赤な顔で嵐を見る。

「……………だよ……………」

「ん？なんだって？」

沙耶の声があまりに小さく、嵐は聞き返す。すると沙耶はさらに顔を真っ赤にした。

「……………！！だから、お前と一緒にじゃないから寂しくて寝れないんだよ！！……………」

その言葉に嵐はしばし呆然とし、すぐにニヤリと笑う。それは沙耶をからかうときの表情だった。

「へえ、そうだったのか」

嵐はニヤニヤ笑いながら沙耶を抱きしめる。

「うう……しょうがねえだろ。冬休み中ずっと一緒に寝てたから……
……」

沙耶は恥ずかしがりながら嵐の胸に顔を埋める。

「よし、じゃあまかせとけ。これ以上お前を寝不足になんてしないからさ」

「？」

その日はそれで終わりになったが翌日、嵐は鮫島校長のもとに行き、沙耶が嵐の部屋で生活する許可をもぎ取ってきた。

もともとブルー男子寮はベッドも大きく、部屋にはトイレ、風呂も完備されており、壁も防音仕様である。明らかに無駄に設備が充実しているわけだが……

ちなみに最初こそ当然鮫島校長も難色を示した。当然である。年頃の男女が一緒の部屋で生活するのだから。

しかしここでまず嵐と沙耶が正式な婚約者同士であること。そして嵐がアカデミアのオーナーである海馬に連絡を取り、どうにかこうにか鮫島校長を説得し、沙耶のほうも本気で健康に支障が出かねな

いたため特例として許可されたのだ。

嵐が鮫島校長を説得した翌々日には生徒たちにもそのことが教えられ、沙耶が顔を真っ赤にしていた。

ちなみに当初は男子生徒から男らしい性格のため避けられていた沙耶だが、嵐と付き合い始めてから見せ始めた女らしい姿に悶え、同じ寮に住むことに喜んだらしい……しかし、それを聞いた嵐の発する圧倒的な黒い威圧感にすぐに沈静化した。

余談だが嵐は海馬に鮫島校長を説得してもらった代わりに次の長期休暇には海馬の仕事を手伝うことを確約されていた。

第30話 盗まれた友のデッキ（前書き）

改定しました。

と言っても変わったのは最後の神楽坂への対応ぐらいですが。

第30話 盗まれた友のデッキ

沙耶が特例としてブルー男子寮の嵐の部屋で暮らすようになってから数日が経過した。沙耶はあの寝不足な表情が嘘のように消え、夜は快眠できるようになっていた。

ブルー男子寮は大浴場の他にもそれぞれの個室に風呂が完備されており、沙耶の生活は不便どころか女子寮にいる頃よりも充実していた。

「ほれ、嵐起きろよ」

そんな沙耶がすでに制服に着替え、まだベッドで寝ている嵐を起す。部屋の机の上には弁当箱が2つ置かれている。いつまでもなく沙耶の手作り弁当だ。

「ん……おっ……」

何かと朝に弱い嵐は沙耶に揺さぶられて目を覚ます。目を擦りながら起き上がるその姿は裸だった。

「ほら、さっさとシャワー浴びて着替えろよ／＼／」

沙耶は多少顔が赤くなりながらも嵐にタオルと着替えを渡す。何度も見ているもののやはり嵐の裸を見るのは恥ずかしく、自分の裸を嵐に見られるのも恥ずかしい沙耶だった。

「ん？なんだありや？」

登校した嵐と沙耶は校舎にできている人だかりを見つけていた。ちなみに嵐と沙耶の手はしっかりと恋人繋ぎで繋がっている。

「あ、嵐くん！沙耶さん！」

するとそこに翔が駆け寄ってきた。

「翔、何の騒ぎだ？」

「なんでもあの『決闘王』武藤遊戯のデッキが展示されるらしいっすよー！」

沙耶の問いかけに翔が答えると嵐は1人で思い出す。

「（ああ、あれか……）」

「それでそこで整理券配ってるっすよ！」

翔が手に持っている整理券を見せる。すると嵐の中のバクラが問いかけてきた。

（相棒、見に行くのか？）

「（ん）、俺は遊戯と何度もやったから別にいいんだけどな）」

嵐は遊戯とは友人関係であり、遊戯とも何度かデュエルしたことがあるので今更展示されるものを見る必要はないのだが……

「（けど……原作通り盗難事件が起きるなら黙ってらんないな）」

（へっ、俺様はどうでもいいけどな）」

遊戯を敵としてみているバクラはともかく、遊戯の友人である嵐は遊戯の魂のデッキが盗まれるのは嵐としても黙ってられることではない。

「で、沙耶はどうする？」

「え、オレは……見たい……かな」

沙耶も嵐が遊戯の友人だとは知っているがやはり遊戯のデッキは見てみたいらしい。そして2人とも整理券を貰うために並ぶのだった。

その夜、嵐と沙耶はアカデミアの校舎に来ていた。

「どうしたんだよこんな時間に校舎に行くなんてさ？」

嵐の横を歩く沙耶は疑問符を浮かべながら嵐に問いかける。

「ん〜、この時間帯なら校舎に入る前に遊戯のデッキ見れるかもしれないだろ？」

嵐はそう言いながら沙耶と共に歩いていく。沙耶が寝ていれば嵐だ

け抜け出すのもいいと思ったのだが……どうも沙耶は嵐が隣にいないと本気で眠れなくなったらしい。さり気なくそのことに責任を感じてる嵐だったりする。

「あれ？十代？」

そしてしばらく歩くと十代と翔、隼人さらには明日香に三沢までいた。どうやら考えることは皆同じらしい。

「よう！お前たちも遊戯さんのデッキ見に来たのか？」

「まあな」

十代の言葉に嵐は頷く。すると……

「ペ〜ペロンチ〜ノ〜!!」

変人……失礼、クロノスの悲鳴が響いた。

その場に急行した面々が見たのは割られた展示ケースと驚愕の表情に染まったクロノスの姿だった。

しばらくクロノスが盗んだんじゃないかという話になったが一応嵐が弁護しておいた。その結果、嵐たち全員で犯人を捜すことになった。

「つーかどこにいんだ？デツキだけじゃ内容見ないとわかんねえしな」

沙耶が嵐と共に犯人を捜しながら愚痴をこぼす。実際、犯人がすでに寮に戻ってしまっていたらデツキの中を確認しないとわからない。しかし……

「うわあああああああ！！」

翔の叫び声が夜の闇に木霊した。

「あつちだ！！」

嵐と沙耶が声のした方向に行くと翔とライエローの生徒の姿があった。

「凄い……俺がこんなに強い！わはははははは……！」

一方、犯人と思われる生徒は歓声を上げている。

「翔！！」

するとそこに十代たちも駆けつけてきた。

「あいつは神楽坂！あいつが犯人だったのか!？」

同じイエローの三沢が犯人の名前を口にする。

「三沢、知ってるのか？」

「ああ、デュエルの腕はそれなりなんだが無意識のうちにデッキ構成が別の誰かのものに似てしまう奴なんだ」

十代の疑問に三沢が答える。

「流石は決闘王のデッキ！これで俺は最強だ！」

「面白い、おい！俺と勝負」待て十代！」「って、嵐？」

さっきまで沈黙していた嵐が十代の言葉を遮る。そして嵐の顔を見て十代は驚いた。嵐の眼が怒りに燃えている。隣にいた沙耶はずっとそのことを気にかけていた。

「こいつの相手は俺がする。お前は下がっててくれ」

「え〜〜、そりゃないぜ」

「十代……頼む」

不満の声を上げる十代だが嵐は真剣な目で十代に頭を下げる。

「う……わかったよ。その代り絶対勝てよな!？」

「当たり前だ!」

十代の言葉に嵐が応えるとデュエルディスクを起動させる。十代は沙耶たちのもとに戻りながら嵐を見る。

「しかし珍しいな。嵐が加賀美くんのこと以外であそこまで真剣になるとは」

嵐の姿を見た三沢が浮かべる疑問符。それに沙耶が答える。

「遊戯さんは嵐の仲間なんだよ」

「……は?」「……」

沙耶と嵐以外の全員の声がハモった。沙耶はそのことに内心苦笑いしつつ続ける。

「冬休みにあいつと一緒にいて知ったんだけどよ、嵐は遊戯さんやその仲間たちと仲が良くってさ。オレも冬休み中に海馬さんや城之内さんに会ったんだよ」

「……なにiiiiiiiiiiiiiiii!!!!」「……」

沙耶から明かされる真実に十代たちの驚きが天を衝く。さすがに伝説のデュエリストと呼ばれる人物たちと知り合いだとは思わなかったらしい。

「だから嵐は許せねえんだよ。仲間のデッキを盗んで……勝手に使

って最強気取ってる神楽坂が」

沙耶の説明をよそに嵐は神楽坂と対峙する。

「神楽坂、俺が勝ったら遊戯のデッキを返してもらっぜ」

「いいだろう！今の俺は最強だ！このデッキさえあれば……」やめとけよ「なに？」

神楽坂の言葉を嵐は冷静な声で遮る。

「お前に……そのデッキは重い」

「「デュエル！」」

「俺の先攻、ドロー！俺はハーピー・クイーンを攻撃表示で召喚！」

先攻は嵐。カードをドローするとディスクにセットする。

『はあ！』

嵐のフィールド上に掛け声と共に両腕が翼の女性が現れる。

ハーピー・クイーン

星：4

ATK：1900

DEF：1200

「さらに俺はカードを2枚伏せてターン終了！」

嵐

LP：4000

手札：3枚

モンスター：ハーピィ・クイーン（攻撃表示）

魔法・罫：伏せカード2枚

「俺のターン、ドロー！さあ、決闘王の力を見せてやる！俺は手札の幻獣王ガゼルとバフォメットを手札融合！こい、有翼幻獣キマイラ！」

有翼幻獣キマイラ

星：6

ATK：2100

DEF：1800

「行くぜ！キマイラでハーピー・クイーンを攻撃！キマイラ・インパクト・ダッシュ幻獣衝撃粉碎！」

神楽坂のキマイラが嵐のハーピー・クイーンに迫る。

「甘い！畏カード、風霊術-雅-を発動！自分フィールドの風属性モンスターを生贄にし、相手フィールド上のカード1枚をデッキの一番下に戻す！融合モンスターはデッキには戻らず融合デッキに戻る！」

「なに！？」

ハーピー・クイーンが姿を消し、その瞬間発生した突風がキマイラを吹き飛ばした。

「キマイラの効果は破壊されたときに初めて発動する。バウンスには対応していない」

「くう……」

嵐の説明に神楽坂は悔しそうな顔をする。

「まだまだ！俺は手札から死者転生を発動！手札を1枚捨てて墓地のモンスターを手札に戻す。俺は墓地から幻獣王ガゼルを回収し、攻撃表示で召喚！」

幻獣王ガゼル

星：4

ATK：1500

DEF：1200

「さらにカードを1枚伏せてターン終了」

神楽坂

LP：4000

手札：1枚

モンスター：幻獣王ガゼル（攻撃表示）

魔法・罫：伏せカード1枚

「俺のターン、ドロ。俺はクリッターを守備表示で召喚」

クリッター

星：3

ATK：1000
DEF：600

「この瞬間罨カード発動！黒魔族復活の棺！相手がモンスターを召喚したとき、そのモンスターと俺のモンスター1体を生贄に墓地の魔法使いを特殊召喚する！」

「墓地の魔法使い！？神楽坂の墓地にはバフォメットしかないはずじゃ！」

黒魔族復活の棺の効果に三沢が驚く。しかし嵐は至って冷静だった。

「……さっきの死者転生か……」

「その通り！蘇れ、最上級魔術師……ブラック・マジシャン！！」

神楽坂のフィールドに紫色の棺が現れ、ゆっくりと開く。そしてそこから漆黒の法衣に身を包んだ魔術師が現れた。

ブラック・マジシャン

星：7

ATK：2500
DEF：2100

「すげえ……あれが決闘王の愛用した……」

「ブラック・マジシャン……」

十代や翔は呼び出された黒い魔術師に目を奪われる。しかし一番近くで見ている嵐は悲しそうな顔でブラック・マジシャンを見ていた。以前、何度か遊戯と戦ったときもブラック・マジシャンと対峙している。

「やっぱりな……お前じゃそのデッキは使いこなせない。カードが泣いてるぜ」

最も近くにいる嵐の眼には召喚されたブラック・マジシャンが悲しそうな眼をしているのに気が付いていた。

「なに!？」

「俺は黒魔族復活の棺で墓地に送られたクリッターの効果を発動。デッキからTheアトモスファイアを手札に加える。さらに俺は手札からデビルズ・サンクチュアリを発動。俺のフィールドに攻撃力、守備力0のメタルデビルトークンを攻撃表示で特殊召喚する」

嵐の場におかしな形のトークンが現れ、その顔の部分に神楽坂の顔が写される。

メタルデビルトークン

星：1

ATK：0

DEF：0

「攻撃力0のトークンを攻撃表示？」

「さらに俺はカードを1枚伏せてターン終了」

嵐

LP：4000

手札：2枚

モンスター：メタルデビルトークン（攻撃表示）

魔法・罫：伏せカード2枚

「俺のターン、ドロー！俺は強欲な壺を発動！デッキからカードを2枚ドロー！そして手札のワタポンの効果を発動！魔法・罫・モンスター効果によってデッキから手札に加わった場合、このカードを手札から特殊召喚できる！」

神楽坂の場に毛玉のモンスターが現れる。

ワタポン

星：1

ATK：2000

DEF：3000

「そしてワタポンを生贄に……ブラック・マジシャン・ガールを召喚！」

ブラック・マジシャン・ガール

星：6

ATK：2000

DEF：1700

「うわ〜、ブラック・マジシャン・ガールだ！僕、嵐くんには勝ってほしいけどブラマジガールだけは応援しちゃおっかな〜」

「おい、翔なに言っただよー！」

翔の言葉に十代が反論するが……

「だってブラマジガールは遊戯さんのデッキにしか入ってないんだよ！今夜限りの恋かもしれないんだ！」

「そ、そうか……」

翔の剣幕に十代もタジタジになる……のだが……

ガシッ

翔の頭が誰かに掴まれた。

「テメエ……あんまいい気になんなよ？」

冷や汗を流しながら翔が後ろを見ると背後に黒いオーラを纏った沙耶がいた。どうやら翔の態度が逆鱗に触れたらしい。翔の頭がミシミシと嫌な音を立てている。

「あああああああ！！ごめんなさいごめんなさい！！！！！」

翔は涙目になりながら沙耶に平謝りしていた。

そうしているうちにも神楽坂が次の行動に移る。

「行くぞ！ブラック・マジシャンでメタルデビルトークンに攻撃！」

ブラック・マジック
黒魔導！」

ブラック・マジシャンがメタルデビルトークンに攻撃し、トークンは破壊される。

「これで……なに!？」

だがブラック・マジシャンの攻撃の衝撃は嵐ではなく神楽坂に襲い掛かった。

神楽坂：LP4000 1500

「ど、どういふことだ!？」

自分のライフが削られたことに神楽坂が動揺する。

「メタルデビルトークンの戦闘によるコントローラーへの超過ダメージは代わりに相手が受ける。ブラック・マジシャンとの戦闘で発生した戦闘ダメージはお前に跳ね返される」

「く!ならブラック・マジシャン・ガールでダイレクトアタック!
ブラック・バーニング
黒魔導爆裂破！」

ブラック・マジシャン・ガールの攻撃が嵐に迫る……が……

「させるかよ！速攻魔法スケープゴート！俺の場に4体の羊トークンを特殊召喚する！」

羊トークン

星：1

ATK：0

DEF：0

「なら羊トークン1体に攻撃！」

対象を変更したブラック・マジシャン・ガールがトークンを破壊する。

「俺はこれでターン終了」

神楽坂

LP：1500

手札：1枚

モンスター：ブラック・マジシャン（攻撃表示）、ブラック・マジシャン・ガール（攻撃表示）

魔法・畏：なし

「俺のターン、ドロー……神楽坂、こんな話を知ってるか？」

「なに？」

カードを引いた嵐は神楽坂に話しかける。

「遊戯はかつて、ペガサスが開催した決闘王国デュエル・キングダムで1人のデュエリスと戦った……そいつの名は死の物真似師……遊戯のライバルである海馬瀬人のデッキを盗み出して使った男だ。

今のお前はそいつと大して変わらない！……遊戯のデッキを盗んだことも……そのくだらない猿真似もな！」

「な、なんだと!?!」

「俺は羊トークン2体と墓地のクリッターをゲームから除外し、Theアトモスファイアを攻撃表示で特殊召喚！」

『クオオオオオオオオオオ!!!』

高々とアトモスファイアが咆哮する。アトモスファイアも盗んだカードを使う神楽坂に怒っていた。

Theアトモスファイア

星：8

ATK：1000

DEF：800

「アトモスファイアの効果発動！相手フィールドのモンスター1体を装備カードとして装備する！俺はブラック・マジシャンを選択！」

その言葉と共にブラック・マジシャンがアトモスファイアのカプセルに吸い込まれる。

Theアトモスファイア

ATK：1000 3500

「喰らえ！アトモスファイアでブラック・マジシャン・ガールに攻撃！テンペスト・サンクシヨンス！」

「ッ！まだまだ！手札のクリボーを墓地に送り、ダメージをゼロにする！」

ブラック・マジシャン・ガールが破壊され墓地に送られるが神楽坂

へのダメージは0になった。

「クリボー、ありが「やめろ……小芝居はもう見飽きた」…なんだと!？」

一方、ブラック・マジシャン・ガールが破壊されたのを見た翔は……

「ああ!ブラマジガールが「ああ?」「ごめんなさい!！」

残像ができるほどの土下座で沙耶に頭を下げていた。

「俺はカードを1枚伏せてターン終了」

嵐

LP:4000

手札:2枚

モンスター:Theアトモスフィア(攻撃表示)

魔法・罫:ブラック・マジシャン(アトモスフィアの装備カード状態)、伏せカード1枚

「俺のターン、ドロー!よし!俺は魔法カード、天よりの宝札(アニメ版)を発動!互いのプレイヤーは手札が6枚になるまでカードをドローする!さあ、行くぞ!墓地の光属性と闇属性のモンスターをゲームから除外し、このカードを特殊召喚する!」

「光属性と闇属性？そんな召喚条件のモンスター……」

「いや、いる。一方はその強力な効果により禁止カードとなり……
もう1枚は武藤遊戯のデッキに入っている最強の戦士……」

翔の疑問に三沢が答える。

「その通り！俺は墓地のワタポンとバフォメットをゲームから除外し、カオスソルジャー - 開闢の使者 - を特殊召喚！」

神楽坂の場に、黄色と青の鎧を着こんだ戦士が現れる。

カオスソルジャー - 開闢の使者 -

星：8

ATK：3000

DEF：2500

「けど攻撃力はアトモスファイアのが高いぜ！」

「そんなの関係ない！さらに俺は手札から翻弄するエルフの剣士を攻撃表示で召喚！」

翻弄するエルフの剣士

星：4

ATK：1400

DEF：1200

「さらにカオスソルジャーの効果を発動！攻撃を放棄する代わりに、相手フィールド上のモンスターを1体ゲームから除外する！」

カオスソルジャーの剣に光が集まり、その光がアトモスフィアを消し去る。

「これでがら空きだ！翻弄するエルフの剣士でダイレクトアタック！精・剣・斬！」

そしてエルフの剣士の攻撃が迫る……しかし……

「やっぱりお前は三流だよ。遊戯には遠く及ばない、畏カード発動！聖なるバリア・ミラーフォース――！相手の攻撃宣言時、相手の攻撃表示モンスター全てを破壊する！」

「な、なにに！」

エルフの剣士の剣がバリアに当たった瞬間、バリアから光弾が出現し、カオスソルジャーとエルフの剣士を破壊する。

「ぐ…うう…」

「遊戯なら伏せカードがある状態で無理に攻撃したりしない。何らかの対抗策をとってくる。やはりお前にそのデッキは重い」

「黙れ！俺はカードを2枚伏せてターン終了！」

神楽坂

LP：1500

手札：2枚

モンスター：なし

魔法・罫：伏せカード2枚

「俺のターン、ドロ！これで終わりだ！魔法カード、ハリケーン！フィールド上の魔法・罫を全て手札に戻す！」

「なっ！」

突如発生した突風で神楽坂の伏せカードが手札に戻る。

「止めを刺す！俺は魔法カード、死者蘇生を発動！墓地のモンスターを特殊召喚する！」

「っ！？この状況でアトモスフィアを呼んでも意味はない……まさ

「か俺のあのカードを!?!」

神楽坂の言葉に嵐は首を横に振る。

「違う、俺が蘇らせるのはお前のカードじゃない……遊戯のカードだ! 出でよ、ブラック・マジシャン!」

『はあ!』

死者蘇生の効果により嵐の場に漆黒の魔術師が呼び出される。心なしかその表情も神楽坂に召喚されたときよりも晴れ晴れとしている。

「喰らえ、ブラック・マジシャンのダイレクトアタック! ブラック・マジック黒魔導!」

『はあああああああ!?!?!?!』

ブラック・マジシャンの咆哮と共に杖の先から魔法が放たれる。

「うわあああああああ!?!?!?!」

神楽坂：LP15000

「遊戯のデッキは返してもらおう」

「……お…俺はこんなに強いデッキを使っても勝てないのか！」

嵐が遊戯のデッキを回収すると神楽坂が地面に手をついて悔しがる。

「当たり前だ。このデッキは遊戯が試行錯誤して組み上げたデッキ……お前にこのデッキを使いこなすことはできない。人の作ったデッキを使っても本当に強くはなれない」

「く……」

「強くなりたければ自分で試行錯誤してデッキを作ることだ。遊戯も、瀬人も、みんなそうしてデッキを作った。そうすれば必ずデッキは答えてくれる」

「中々見事でしたよ神楽坂くん」

するとそこに鮫島校長が現れる。他にもカイザー亮やアカデミアの

生徒たちがわらわらと出てくる。どうやら今のデュエルを見ていたらしい。

「神楽坂くん。デッキを盗んだことは今のデュエルに免じて不問とします。これからも頑張つて「それは無理だな」…どういふことですか?」

嵐が鮫島校長の言葉を遮ると鮫島校長は疑問符を浮かべる。

「今回の件は立派な盗難事件だ。さすがに不問にする…なんてことはできないだろう?それこそ問題だ」

「ふむ…確かにそうですね…」

嵐の言葉に納得するものがあつたのか鮫島校長も顎に手を当てて考える。結局、神楽坂はオシリスレッドへの降格の上、1週間の自宅謹慎が言い渡されたのだった。

こうして本来とは違う形で遊戯のデッキ盗難事件は幕を閉じた。

第30話 盗まれた友のデッキ（後書き）

第31話 来訪、恋する乙女（前書き）

更新です。今回はあの子が登場です。

原作崩壊です。具体的には彼女が好きな人物が原作と違います。

感想お待ちしています。

第31話 来訪、恋する乙女

「今日は編入生を紹介するにや〜。編入生の早乙女レイくんだけにや〜」

あの神楽坂の事件から数週間、レッド寮には編入生が来ていた。寮長である大徳寺が紹介しているのは赤い帽子をかぶった小柄の少年だった。

「……………」

レイは無言になっており、十代や翔、隼人も彼を見ている。

「女の子みたいに綺麗な子なんだなあ」

「編入先がオシリスレッドだったから落ち込んだのかな？」

隼人と翔がそれぞれレイを見て一言漏らす。隼人はとにかく翔はいろいろ失礼な気もするが。

「よし!」

すると十代は何か思いついたのか突然立ち上がる。

「フレ、フレ、レイ!」

立ち上がった十代はいきなりレイを応援し始める。その姿に当のレイも啞然としている。

「なあに、成績悪くても気にすんな。俺たちと一緒に楽しくやろ
ぜ」

十代はレイの隣に行くと肩を組む。

「十代くん、何を勘違いしてるのじゃ？早乙女くんは成績が悪くて
オシリスレッドに入ってきたわけじゃないのじゃ」

「へ？」

大徳寺の台詞に十代は呆然と固まる。

「途中編入生はまずこの寮に入るんだじゃ。早乙女くんの成績なら
すぐにライイエローに移るじゃ」

「え……いや、はは……まあとにかく、オシリスレッドの仲間
が増えるのは大歓迎だぜ。なあ、翔、隼人？」

「「勿論（なんだな）」」

十代が翔と隼人のほうを見ると2人とも笑顔で答える。

「いや、良かったじゃ。部屋が足りなくてどうしようかと思っ
たじゃ。しばらく十代くんたちの部屋を使わせてもらいなさい」

「はい」

こうしてレイは十代たちの部屋へと移動していった。

その翌日、十代たちは嵐と沙耶に編入生のことを話していた。

「へえ、そーいや編入生って基本オシリスレッドからだっけ」

沙耶は多少興味があるがそれほどではない。嵐は……

「（そーいえばレイがくるのってこの時期だっけか……まあレイのやってることはいろいろあれだが小学生相手にそこまで目くじら立てることもないな）」

知識でレイのことを知っているのですこまで気にしていない。基本的に嵐は子供には甘いので今回のことは後々レイに厳重に注意すればいいぐらいの気持ちであったのだが……

その数時間後、嵐と沙耶はブルー男子寮の中を歩いていた。ブルーの男子はもう沙耶のことには慣れたので大して問題がなくなっている。下手なことをすれば嵐に何されるかわからないので必死に慣れたのだ。

「なあ、嵐。明日の弁当何がいい？」

「ん…肉……」

沙耶の質問に嵐はしばし悩むとそう答える。基本的に肉料理を好む嵐は弁当のリクエストには大概こう答える。

「またかよ…明日は野菜多めにするからな」

そんな嵐のリクエストを沙耶がバツサリと切り捨てた。ちなみにこの日の弁当は焼き肉であった。

「え、いいじゃねえかよ」

「駄目だ。お前、そんな肉ばかり食ってたら栄養偏るだろ？……オレは嵐が体調崩すなんてヤダからな」

いろいろと嵐の身体に気を使っている沙耶である。っていうかもはやお前ら夫婦だろ、と言えなくもない。

沙耶にそう言われてしまつと嵐は何も言えなくなる。自分の身体を心配してくれてるので文句など言えるはずもないのだ。

そんなことを話しているうちに沙耶が先頭になって2人の部屋に入る。すると……

「え!?!」

そこには嵐のデッキをウツトリとみている赤い帽子を被つた少年……レイがいた。

「……誰だデメエ!それ嵐のデッキだろうが!」

それを見た瞬間、沙耶の顔が怒りに染まる。ちなみにいうとレイが見ていたのは嵐のサブデッキであるデュアルデッキである。

「そ、そつちこそなんで男子寮に女子が!?!」

レイの方も沙耶がブルー男子寮にいるのに気付いて驚愕する。

「あゝ、はいはい。2人とも落ち着けつて」

「嵐……」

「嵐様……」

「つて『嵐様』!?!」

嵐が2人を宥めていると沙耶がレイの言葉にさらに声を荒げる。ち

なみに嵐自身もレイが亮の部屋ではなく自分の部屋にいたことに少々困惑している。

「レイ！なにやってんだ！」

すると今度は窓から十代までやってきた。そしていったん男子寮の外に出てレイによる事情説明が始まった。

レイが言うには1年ほど前、偶然にも見たデュエル大会で優勝した嵐の姿に一目惚れしたらしい。その後、嵐がデュエルアカデミアに入っていることを知って彼を追ってきたのだった。

「なんつーか……すげえ行動力だな」

話を聞いていた沙耶が呆れて溜息を吐く。さすがに嵐1人を追ってここまで来るとは思わなかったのだろう。

「（どうしてこうなった？）」

一方、当の嵐は頭を抱えていた。デュエル大会で優勝したというのは嵐にも身に覚えがある。こちらの世界に来てから約2年、嵐はいくつかのデュエル大会に出場して優勝していた。そこまで規模の大きいものではなかったのでそれほど有名にはならなかったが……

嵐も一応こちらの世界がもとの世界で見たGXと同じだとは思っていない。原作には登場しなかった沙耶がいるし消えたはずのバクラも自分の中にある。何より自分がいることで変わるものもあるだろうと考えていた。

……のだが、まさかGXの主要キャラである早乙女レイがまさか亮

ではなく自分に惚れているというのは予想外だった。

(別にいいじゃねえか。相棒はあいつ以外に興味ねえんだろ?)

頭を抱える嵐にバクラがため息交じりに声をかける。

「(まあ、確かにそうなんだが……)」

「嵐様！」

悩んでいるとレイが顔を真っ赤にして嵐を見ている。その背後で沙耶の顔がだんだん怒りに染まっているが……

「ボク、嵐様のことがずっと好きでした！／＼／」

顔を真っ赤にして嵐に告白するレイ。だが、やはり嵐の答えは初めから決まっている。

「あゝ、悪い……気持ちは嬉しいが……俺、彼女いるからお前の気持ちに答えられない。ごめん……」

バツの悪そうな顔で、それでもしつかりとレイの眼を見て喋る嵐。一方のレイは断られてしばし呆然としている。

「えと……その彼女さんって……」

「ん、そこにいる沙耶だ」

レイの言葉に嵐は沙耶の方を見てしつかりと教える。するとレイは沙耶の方に向き直る。

「むう、沙耶さん！ボクとデュエルだ！どっちが嵐様に相応しいか！」

レイはデュエルディスクを付けて沙耶に宣言する。それを受けた沙耶もデュエルディスクを起動させる。

「いいぜ、こいよ！ぶっ潰してやる！」

「デュエル！！！」

そして2人の少女のデュエルが始まった。

「ボクの先攻、ドロー！ボクは恋する乙女を攻撃表示で召喚！」

恋する乙女

星：2

攻撃力：400

守備力：300

「ボクはこれでターン終了！恋する乙女は強いんだってことを思い知らせてあげるんだから！」

レイ

LP：4000

手札：5枚

モンスター：恋する乙女（攻撃表示）

魔法・罠：なし

「なあ、嵐。よくわかんねえけど沙耶も恋する乙女だよな？」

「……確かに……」

恋愛事に疎いはずの十代にしては珍しく的を射た台詞である。嵐もその十代の的を射た発言に若干目を丸くしていた。

「オレのターン、ドロ！オレは天使の施しを発動！カードを3枚ドロして2枚捨てる！さらに仮面竜を攻撃表示で召喚！」

沙耶のフィールドに白い仮面のような頭部をしたドラゴンが現れた。

マスクド・ドラゴン
仮面竜

星：3

ATK：1400

DEF：1100

「行くぜ！仮面竜で恋する乙女に攻撃！」

仮面竜が口を開けて恋する乙女に向かって火の玉を撃ち出す。

「きゃあああ!」

レイ：LP4000 3000

しかしレイのフィールドの恋する乙女は破壊されていなかった。

「っ!?!……まさか、破壊耐性モンスターか!」

破壊されていない恋する乙女に沙耶はすぐに1つの結論に達する。

「その通りだよ!恋する乙女が攻撃表示で存在する限り、戦闘では破壊されない。そしてこのカードを攻撃したモンスターに乙女カウンターを1つ乗せるよ!」

『ん〜……チュ!』

仮面竜に攻撃された恋する乙女は仮面竜に向かって投げキッスを送る。すると仮面竜の眼がハート形になる。

「乙女カウンター?なんだそりゃ?」

「すぐにわかるよ。さあ、まだあなたのターンだよ」

「……オレはカードを1枚伏せてターン終了」

沙耶

LP：4000

手札：4枚

モンスター：仮面竜（攻撃表示）

魔法・罾：伏せカード1枚

「ボクのターン、ドロロー！さあ、行くよ！私は装備魔法、キューピッド・キスを恋する乙女に装備！そして恋する乙女で仮面竜に攻撃
！」

「はあ！？」

いくら破壊耐性のあるモンスターとはいえ明らかに攻撃力に差があるモンスターに攻撃したら逆にダメージを受けるだけだ。

「（さっきの乙女カウンターが関係してんのか？もしくはあの装備魔法？ちっ、攻撃を防ぐカードがねえ）」

沙耶が伏せているカードは自分フィールドのドラゴン族全てに貫通効果を与える永続罾『竜の逆鱗』。攻撃を防ぐタイプの罾ではない。

「行くよ！恋する乙女の攻撃！一途な想い！」

『仮面竜ちゃん！』

恋する乙女は仮面竜に駆け寄っていくと抱きつく。

「これで私はダメージを受ける……けど！」

レイ：LP3000 2000

『がう~~~~』

仮面竜は目をハートにしたままレイのフィールドに移動し、まるで恋する乙女を護るように寄り添う。

「って、なんで仮面竜が!?!」

「キューピッド・キスの効果だよ! 装備モンスターが乙女カウンターに乗ったモンスターを攻撃してダメージを受けたとき、そのモンスターのコントロールを得られるよ!」

「ちっ、そういうことかよ……要は色仕掛けじゃねえか」

沙耶は恋する乙女とキューピッド・キスの効果に舌打ちする。

(なあ相棒)

「ん?」

一方、嵐を通してデュエルを見ていたバクラが嵐に話しかける。

（あの小娘のモンスターってよぉ、あの女の切り札が出たら終わりじゃねえか？）

「（確かに……）」

ちなみにバクラが言う小娘とはレイ、あの女とは沙耶のことである。基本的にバクラは沙耶のことを名前では呼ばないのだ。

「ボクはさらに装備魔法、ハッピー・マリッジを恋する乙女に装備する！このカードの効果でコントロールを得たモンスターの攻撃力分装備モンスターの攻撃力をアップするよ！」

恋する乙女

攻撃力：400 1800

「そして仮面竜でダイレクトアタック！」

『がっう~~~~~』

目がハート状態のまま仮面竜が沙耶に火の玉を吐いて攻撃する。

「ぐう……あの野郎……」

沙耶：LP4000 2600

沙耶もさすがに目がハート状態の仮面竜に若干イラついている。

「ボクはこれでターン終了だよ！」

レイ

LP：2000

手札：4枚

モンスター：恋する乙女（攻撃表示）、仮面竜（攻撃表示）
魔法・罫：キューピッド・キス（装備魔法、恋する乙女に装備状態）
、ハッピー・マリッジ（装備魔法、恋する乙女に装備状態）

579

「さあどう？ボクの方が嵐様に相応しいよ！」

ボードアドバンテージを得たレイは沙耶に勝ち誇ったような顔になる。しかし、この程度で諦める沙耶ではない。

「ぎげんな！お前なんかオレと嵐の間に入れるかよ！オレのターン、ドロー！」

沙耶が勢いよくカードをドローすると引いたカードを見てニヤリと笑う。

「……オレの勝ちだ！」

「え！？」

沙耶の言葉にレイは啞然とする。

「スタンバイフェイズに墓地のミンゲイドラゴンの効果を発動！オレのフィールドにモンスターが存在しないとき、フィールド上にこいつを特殊召喚する！」

ミンゲイドラゴン

星：2

ATK：400

DEF：200

「ただしこの効果は墓地にドラゴン族しか存在せず、この効果で特殊召喚されたこいつがフィールドから離れたとき、ゲームから除外されるけどな」

「そんなカードいつの間……」

「1回だけあんだろ？最初のターンにオレが使った天使の施しだよ」

「あっ！？」

沙耶の説明を受け、レイは納得がいったように声を上げる。

「さらに、こいつはドラゴン族モンスターを生贄召喚するときには自分の生贄にできる！オレはミンゲイドラゴンを生贄に、タイラント・ドラゴンを召喚！！」

『グオオオオオオオオ！！！！！！』

タイラント・ドラゴン

星：8

ATK：2900

DEF：2500

『グルルルルル………』

『ぎゃぴい！？』

フィールド上に召喚されたタイラント・ドラゴンの眼光にレイのフィールドの仮面竜が震え上がる。

「なあ、嵐………沙耶のタイラント・ドラゴン……怒ってないか？」

「怒ってるな。まあ気持ちは解らんでもないが。（そういえば原作でも十代のフェザーマンとスパークマンがバーストレディに怒られてたな）」

『ぴい………』

『クリ〜…………』

嵐と十代。2人ともタイラント・ドラゴンの怒りを感じ取っていた。しかもユリウスとハネクリボーはタイラント・ドラゴンの怒りに震えている。

そう、2人の言う通りタイラント・ドラゴンは仮面竜に対して怒っていた。要約するとこんな感じである。

『グルルルル…………（貴様、誇り高きドラゴン族でありながら小娘の色香に惑わされて我らの姫君を裏切るとは何事だ？）』

『ぎゃ、ぎゃびい…………（じ、これは…そのう…………）』

さすがは暴君タイラントの名前を持つドラゴン。仮面竜はもはやタジタジである。

『ガアアアアアア！！（言い訳無用！！我自ら手討ちにしてくれるー！！）』

『ぎゃ、ぎゃびいいいいい！！（お、お助けええええええ！！）』

…………と、仮面竜がタイラント・ドラゴンに怒られている。沙耶と付き合いの長いタイラント・ドラゴンは大変ご立腹であった。

「行くぜ！タイラント・ドラゴンで仮面竜に攻撃！ブラストファイア！」

『グオオオオオオオ！！（覚悟しろおおおおお）』

『ぎゃぴiiiiiiiiii!! (ひiiiiiiiiii!!)』

仮面竜のそれとは比べ物にならないタイラント・ドラゴンの吐き出した炎が仮面竜を飲み込み、その余波がレイを襲う。

「きゃああああ!!」

レイ：LP2000 500

「まだ行くぜ!お前の場で破壊された仮面竜の効果発動!こいつが戦闘破壊されたとき、デッキから攻撃力1500以下のドラゴン族を特殊召喚する!

コントロールが変更されてても本来の持ち主はオレだ!この効果はオレが使用する!オレはデッキから2体目の仮面竜を特殊召喚!」

沙耶の場に破壊されたのは別の仮面竜が特殊召喚される。

「さらにお前のコントロール下にあった仮面竜が消えたから恋する乙女の攻撃力も元に戻るぜ!」

恋する乙女

ATK：1800 400

「まあ、こいつは正直おまけだけだな。タイラント・ドラゴンは相手フィールドにモンスターがいるとき、もう一度攻撃することができるぜ！」

「っ！？そ、そんな！」

「これで終わりだ！タイラント・ドラゴンで恋する乙女に攻撃！ブラストファイア！」

「きゃあああああああ！！！！！！」

レイ：LP4000

「嵐、勝ったぞ！」

沙耶は嵐に近付いてくる。その表情は満面の笑顔だった。

「ああ、お疲れ。レイもいいデュエルだったぜ？」

「嵐様……」

レイは上目使いで嵐を見上げる。普通の男なら保護欲を駆りたてられるだろう眼差しだが……

「なあ、十代と沙耶もそう思うだろ？」

「おう！すげえわくわくしたぜ！お前強いな！」

「確かに、今回はオレのデッキとの相性が悪かったしな。もうちょっと改良すればもっと強くなると思うぜ」

ここにいるのは沙耶以外の女性に一切興味がない嵐と恋愛関係に超疎い十代。そんな反応など一切ない。

「……ごめんな、レイ。確かにお前の気持ちは嬉しいけど、俺は沙耶以外と付き合う気はないからさ……」

「……はい……」

嵐は子供をあやすようにレイの頭を撫でる。レイも嵐に頭を撫でられて大人しくしている。だが……

「……………」

沙耶は黒いオーラを出しながら嵐を睨んでいる。嵐が自分以外の女の頭を撫でているのが面白くないらしい。

それに気付いた嵐は一旦レイから手を離し、沙耶に耳打ちする。

「…あとでいっぱい可愛がってやるから機嫌治せ、な？」

「~~~~~！！ば、バカ野郎！な、なに言ってるんだ！！／／／／／／／」

嵐がそう言うと沙耶は反論する。しかし内心ではかなり喜んでいたりすると嵐は再びレイに向き直る。

「それと、今回のことで家族とかに迷惑かけただろ？ちゃんと謝らないとな？」

「あ…はい…次の定期船で帰ります…」

嵐の言葉にレイはまるで借りてきた猫のように大人しく頷く。そこに沙耶と十代が疑問符を浮かべる。

「ん？どういうことだ？」

「なんで帰んなきゃならないんだ？」

沙耶と十代は首を傾げる。

「あのなあ、わざわざ性別を偽って編入してきたってことはまとも編入できない理由があるってことだろ？」

その説明に沙耶と十代は「ああ……」と納得する。

「じゃあレイって……」

質問してくる沙耶にレイはおずおずと答える。

「えっと、ボクは小学5年生なんです」

そして辺りに沙耶と十代の驚きの声が響いた。

それからしばらくして、レイが定期船で帰る日が来た。見送りには嵐と沙耶、十代に事情を聞いた翔と隼人も来ていた。

「じゃあ来年はちゃんと受験して入学しますね！」

レイが船の上から嵐たちに大声を上げる。

「おう！頑張れよ！」

レイの言葉に嵐も笑顔で答える。

「お姉様も嵐様と仲良くしてくださいね！」

「ぶっ！」

レイが発した言葉に沙耶は噴出した。恐らく『お姉様』と呼ばれたことに対してだろう。

「な、なんで『お姉様』なんだ？」

「あのデュエルで沙耶に憧れたんじゃないの？」

嵐の言葉に沙耶は呆然としている。その沙耶の頭の中には地元にいる百合少女のことが浮かんでいた。

「まさか…美奈みたいになんねえだろうな？」

沙耶は少しだけ不安になった。

第32話 代表決定戦前日（前書き）

更新です。

今回はデュエルなしで短いです。

感想お待ちしております。

第32話 代表決定戦前日

ある日の全校集会のとき、あることが発表された。

それはデュエルアカデミア本校とデュエルアカデミアノース校との友好デュエルで本校代表となる生徒のことであった。

原作を知っている嵐は恐らく十代と三沢、そしてもけもけ使いの茂木もけ夫という生徒が争うのだと思っていたが少々甘かった。

確かに前述の3人は推薦されたのだが、さらにそこに嵐も推薦されたのだ。結果、この4人がトーナメント形式でデュエルをして最後の勝者が代表になるということだ。

……だが、ここでもう1つ嵐が知らないことが起こった。

「では女子の代表候補を発表する〜ノ」

「（女子の代表？）」

それを聞いた嵐は首を傾げた。本人の知識にはそんなことはなかった。まあ、自分がいる時点で変わっているところもあるのでそのまま問題には考えなかったが。

「今年〜ノ、ノース校の1年に〜ハ、女子もいる〜ノ。そこ〜で、こちらも女子の代表を出して男子女子それぞれで代表を出すことになった〜ノ」

クロノスが今回の代表デュエルに関して補足説明をする。そして代

表候補の紹介に入った。

「まず〜ハ、セニョーラ天上院なの〜ネ」

明日香が紹介され、ブルー女子やブルー男子の一部から歓声が上が
る。確かにブルー女子で『女王』と呼ばれる彼女なら腕前にも問
題はないだろう。

「そして、もう一人は非常に遺憾なのですが、セニョーラ加賀
美なの〜ネ。」

「え、オレ？」

クロノスの紹介にブルー女子からは今度は疑問の声が上がる。沙耶
はブルー女子からは嵐の彼女ということもあって一部の女子からは
嫌われている。クロノス自身も沙耶はデュエルの実技と体育以外の
成績は悪いのであまり代表にはしたくないらしい。

「校長が推薦してしまったので、仕方がない〜ノ。そこで、セ
ニョーラ天上院とセニョーラ加賀美に〜は、デュエルをしてもら
い、勝った方が女子の代表になるの〜ネ。そしてその翌日に、男
子の代表決定戦を行うの〜ネ」

その後、昼休みになつて嵐は沙耶と十代、隼人、翔、三沢、明日香と集まっていた。話題は勿論先程の代表決定戦の話である。

「代表決定戦か〜どんな奴がくるんだらうな〜。く〜、楽しみだぜ！」

「アニキはそればっかりっす」

「だが十代。ノース校の代表と戦えるかどうかは代表決定戦で最後まで勝ち上がらなければいけないんだぞ？」

「それだつて楽しみじゃねえか！代表になるような強い奴と戦えるんだぜ！」

三沢の言葉にも十代は笑顔で答える。そんな十代に周りの人間たちは『十代らしい』と笑顔になる。

「でもオシリス・レッドから代表は出たことがないから代表になつたら快拳なんだな〜」

「だが十代、俺も代表の座は譲る気はないぞ？」

「大地、それは俺も同じだぞ？十代と戦うなら俺に勝たないとな？」
そう言つて三沢に笑顔を向けるのは最初に三沢と戦う嵐である。自分が代表候補になるとは思つてなかつた嵐だが代表候補になつた以上、負けるつもりはなかつた。

「勿論わかっているさ。俺もお前とは戦いたいと思つていたところだ。幸いにも十代の対HEROデッキ以外にも対アトモスファイアのデッキも代表決定戦までには完成の予定だしな」

「そうか、じゃあ楽しみにしてるぜ」

嵐は笑顔で三沢を見る。実はこの2人結構仲が良い。普段、嵐は沙耶耶といるとき以外は三沢といることが比較的多いのだ。

「でも三沢くと嵐もそうだけど私たちも1度も対戦したことないわよね？」

すると明日香が沙耶耶の方を見る。明日香の言う通り、明日香と沙耶耶は今まで実技授業や月一試験で対戦したことが1度もないのだ。それでもアカデミアで公式には2人とも今まで負けなしである。まあ、実際には明日香は女子寮の一件で十代に負けているし、沙耶耶は明日香と同じく女子寮の一件で嵐に負け、学外では冬休みに孔雀舞に負けているわけだが。

「そついやそうだな。代表とかあんまり興味ねえけど明日香と勝負すんのは楽しみだぜ」

沙耶耶も今まで対戦経験のない明日香と勝負するのは楽しみようだ。

「あ、でもよ！嵐と沙耶が一緒に代表になったらなっただ面白いな！」

「っ！？馬鹿十代！」

「せっかく言わないようにしてたのに！」

十代の言葉に三沢と明日香が怒鳴る。しかしそれはすでに遅かった。

「あゝ、それもいいな……恋人同士と一緒に代表つても……」

「そ、そうか？オレはなんかこっ恥ずかしいけど……／＼／＼／＼」

沙耶は顔を赤くして照れている。相変わらずこっつという話題に弱い。

「沙耶は嫌か？」

「そ、そんなことねえよ……どうせ代表になるなら嵐と一緒に出てえし……／＼／＼／＼」

最後の方は小声になってしまっていたが嵐にはバツチリ聞こえていた。

「じゃあ2人で勝って一緒に頑張ろうな？」

「お、おう／＼／＼／＼」

嵐は笑顔で沙耶の頭を撫でる。沙耶は顔を真っ赤にして俯いていた。

第33話 女子代表決定戦 女王VS龍の姫君（前書き）

更新です。今回は最初だけ甘いです。

明日香のアニメオリカを書くのが大変だった。

感想お待ちしております。

第33話 女子代表決定戦 女王VS龍の姫君

女子代表決定戦当日、デュエル場の観客席にはアカデミアの生徒たちが観戦している。もっともその中のブルー生徒の大半は明日香の応援である。

一方、沙耶の応援は例によって嵐、そして沙耶に何度かオベリスブルーに絡まれているところを助けられているオシリスレッドの生徒たちだった。

沙耶は普段から何かとオシリスレッドの生徒を見下し、最悪カードを奪おうとするものもいるオベリスブルーを時にデュエルで、時に物理的に叩きのめしているのでオシリスレッドからはヒーロー的な扱いを受けており同年代でありながら『沙耶さん』と敬語で呼ばれていた。

その頃、沙耶はデュエル前の充電中であつた。とどのつまり……

「ん……んんう……あらふい……／／／／／／」

嵐と絶賛イチヤつき中であつた。幸い、生徒は全員デュエル場に移動しており、十代や翔たちは1度沙耶に激励するとすぐに明日香の方に移動した。彼らは明らかに砂糖を吐くのを回避するために避難したのだ。ちなみに唯一砂糖を吐かない十代は頭に疑問符を浮かべながら三沢に引きずられていった。

「ん……バカ……こんなところで……／／／／／／」

「沙耶がして欲しそうにしてたからな」

「むう……バカ……（確かに嬉しいけど）／／／／／」

口を尖らせて拗ねる沙耶に嵐は笑顔で頭を撫でる。

「…んじゃ、行ってくるな？／／／／／」

「ああ、頑張れよ？」

しばし拗ねていた沙耶は1度嵐に抱きしめられるとデュエル場に向かう。嵐も沙耶を見送ると観客席に戻って行った。

もらっぜ?」

「それはどうかしら? 私も負けないわよ?」

2人は互いに笑い合う。そしてクロノスがデュエル開始の号令をかける。

「それでーハ! 女子の代表決定戦を開始するのーネ!」

「デュエル!」

「オレの先攻、ドロー!」

沙耶は勢いよくデッキからカードをドローする。

「オレは魔法カード、苦渋の選択を発動! デッキからカードを5枚選択して相手に見せ、相手にその中からカードを1枚選ばせて手札に加え、他の4枚を全部墓地に送る! さあ、明日香! 選べ!」

OCGではあまりにも強力なデッキ圧縮&墓地肥やしで禁止カードになった『苦渋の選択』だが、この世界ではデッキ圧縮や墓地肥やしの重要性が分かっていないものが多く、制限カードで留まっていたりする。

沙耶が選択したカードはミンゲイドラゴン×3、ミラーージュ・ドラゴン、マテリアル・ドラゴンであった。

「(ミンゲイドラゴンが3枚……できるだけ墓地には送りたくないわね……) 私はミンゲイドラゴンを選択するわ」

明日香がカードを選択すると沙耶はミンゲイドラゴンを手札に加え、他の4枚を全て墓地に送る。

「おい、あいつ自分のデッキから5枚も墓地に送ったぞ？」

「馬鹿じゃねえの？」

「なんであんな人が代表候補なのかしら」

苦渋の選択を発動させた沙耶に観客席で見ている生徒たちが次々に陰口を叩く。

「(つたく、好き勝手言ってくれるな……まあ、オレも嵐に教えてもらうまで墓地肥やしとデッキ圧縮の重要性わかってなかったけどよ)」

600

実は沙耶が苦渋の選択をデッキに入れているのは嵐からアドバイスがあつたことが原因だつた。ドラゴン族なら他にもF・G・Dを召喚できる未来融合・フューチャーフュージョンも候補に挙がるのだが、こちらの世界ではF・G・Dはかなりのレアカードで沙耶も嵐も持っていないからだ。

「オレは永続魔法、一族の結束を発動！自分の墓地に存在するモンスターの種類が1種類の場合のみ、自分フィールド上のその種族の攻撃力を800ポイントアップする！サファイアドラゴンを召喚！」

沙耶のフィールドには青く美しいドラゴンが呼び出される。

サファイアドラゴン

星：4

ATK：1900

DEF：1600

「当然オレの墓地にあるモンスターの種族はドラゴン族だけだ！そしてサファイアドラゴンもドラゴン族！よって攻撃力が800ポイントアップ！」

サファイアドラゴン

ATK：1900 2700

「っ！？低レベルモンスターで上級モンスタークラスの攻撃力！？さっきの苦渋の選択はミンゲイドラゴンを墓地に送るだけが目的じゃなかったのね」

「当たり前だろ？オレはさらにカードを2枚伏せてターン終了だ！」

沙耶

LP：4000

手札：2枚

モンスター：サファイアドラゴン（攻撃表示）

魔法・罨：一族の結束（永続魔法）、伏せカード2枚

「私のターン、ドロー！」

明日香はカードを引くとフィールドの状況を見ながら考える。

「（沙耶のフィールドには上級クラスの攻撃力のモンスターが1体と伏せカード……厄介ね）私はマンジユ・ゴッドを攻撃表示で召喚！」

マンジユ・ゴッド

星：4

ATK：1400

DEF：1000

「このカードが召喚・反転召喚に成功したとき、デッキから儀式魔法、または儀式モンスターを手札に加えるわ。私は機械天使の儀式を手札に加える」

デッキから選択した魔法カードを沙耶に見せると明日香はそのまま手札に加える。

「そして私は手札に加えた機械天使の儀式を発動！『サイバー・エンジンジェル』と名のつく儀式モンスターの降臨に必要。手札かフィー

ルドからレベルの合計が同じになるようにモンスターを生贄にして
『サイバー・エンジェル』を特殊召喚するわ！

私は手札からエトワール・サイバーとブレード・スケーターを生贄
に、サイバー・エンジェル・茶吉尼 - を特殊召喚！現れなさい、サ
イバー・エンジェル - 茶吉尼 - ！！」

明日香のフィールドに複数本の腕を持ち、その腕に剣や槍など様々
な武器を持った女性の機械天使が現れる

サイバー・エンジェル - 茶吉尼 -

星：8

ATK：2700

DEF：2400

「けど攻撃力は同じだぜ？」

「問題ないわ。サイバー・エンジェル - 茶吉尼 - の効果を発動！こ
のカードが特殊召喚に成功したとき、相手モンスター1体を破壊す
る！」

サイバー・エンジェル - 茶吉尼 - が持っていた槍を投擲し、サファ
イアドラゴンを貫く。

「さらにサイバー・エンジェル - 茶吉尼 - は貫通効果を持っている
わ。まあ、今は関係ないけれどね……マンジュ・ゴッドでダイレク
トアタック！」

「うわー！」

沙耶：LP4000 2600

「これで止めよ！サイバー・エンジェル・茶吉尼でダイレクトアタック！」

サイバー・エンジェル・茶吉尼が沙耶に向かって武器を振り上げる。

「させつかよ！リバースカードオープン！速攻魔法、収縮！エンドフェイズまで茶吉尼の攻撃力を半分にするぜ！」

サイバー・エンジェル・茶吉尼
ATK：2700 1350

「それでも攻撃は続行されるわ！」

「ぐうー！」

沙耶：LP2600 1250

「そして私はカードを1枚伏せてターン終了よ」

明日香

LP：4000

手札：1枚

モンスター：サイバー・エンジェル・茶吉尼・（攻撃表示）、マン
ジユ・ゴッド（攻撃表示）

魔法・罫：伏せカード1枚

「こりゃ加賀美も終わったな」

「あんな人が明日香さんに勝てるわけないのよ」

現在の状況を見て観客たちが口々に沙耶が負けるといふ考えを口に
する。彼らは沙耶の残りライフやモンスターの攻撃力、茶吉尼の貫
通効果を考えて口に行っているのだろうが……

「あゝ、これは沙耶さんの負けっすかね？」

さらには翔までも沙耶が負けると思い込む。すると……

「アホか、まだ沙耶にはチャンスが残ってるだろうが」

嵐が自信満々な表情で言い放つ。

「確かに…加賀美くんの墓地にはまだあのカードがある。逆転の芽は十分あるな」

「なんにしる沙耶はまだ諦めてねえだろ？どうなるか楽しみだぜ！」

三沢も最初の沙耶のターンを思い出し、十代は次に何が起こるか楽しみにしていた。

「オレのターン、ドロロー！スタンバイフェイズにオレは墓地のミンゲイドラゴンの効果を発動！自分フィールドにモンスターが存在せず、墓地のモンスターがドラゴン族のみの場合、スタンバイフェイズにこいつをフィールドに特殊召喚する！こい、ミンゲイドラゴン！」

沙耶のフィールドには蛇のような細長い黄色い身体をした小さいドラゴンが姿を現す。

ミンゲイドラゴン

星：2

ATK：400

DEF：200

「その代りこの効果で特殊召喚したこいつはフィールドから離れたらゲームから除外されるけどな。一応ミンゲイドラゴンも一族の結束の効果を受けるぜ」

ミンゲイドラゴン

ATK：400 1200

「まだまだ！ミンゲイドラゴンはドラゴン族を生贄召喚するとき、2体分の生贄にできる！行くぜ、オレはミンゲイドラゴンを生贄にタイラント・ドラゴンを攻撃表示で召喚！！」

『グオオオオオオオオ！！！！』

雄々しい雄叫びと共に沙耶のフィールドに赤いドラゴンが召喚される。

タイラント・ドラゴン

星：8

ATK：2900

DEF：2500

「当然タイラント・ドラゴンの攻撃力は一族の結束で攻撃力が800ポイントアップする！」

タイラント・ドラゴン

ATK：2900 3700

「攻撃力…3700……」

「知ってっと思うけどタイラント・ドラゴンは相手フィールドにモンスターが存在すれば2回攻撃ができるぜ！」

タイラント・ドラゴンの口から紅蓮の炎が吐き出されようとする。

「させない！バトルフェイズに入る前に畏カード発動、威嚇する咆哮！このターン、相手は攻撃宣言することができないわ！」

マンジユ・ゴッドの顔が凄い形相になってタイラント・ドラゴンを威嚇する。

「ちっ、オレはカードを1枚伏せてターン終了」

沙耶

LP：1250

手札：1枚

モンスター：タイラント・ドラゴン（攻撃表示）
魔法・罾：一族の結束（永続魔法）、伏せカード2枚

「私のターン、ドロー！私は手札から地割れを発動！相手フィールド上のもっとも攻撃力の低いモンスターを破壊するわ！沙耶、貴女のフィールドにはタイラント・ドラゴンが1体のみ。必然的にタイラント・ドラゴンが破壊されるわ！」

「させねえ！カウンター罾発動、魔宮の賄賂！相手が発動した魔法・罾の効果を無効にして破壊し、相手はカードを1枚ドローする！」

沙耶がカウンター罾で地割れを防いだことに明日香は若干悔しそうな顔をする。

「くっ、私は魔宮の賄賂の効果で1枚ドロー！」

「まだ終わんねえぜ！カウンター罾で効果を無効にしたことにより、手札の冥王竜ヴァンダルギオンを特殊召喚！」

フィールドに漆黒の闇が現れ、そこから紫色のドラゴンが姿を現す。

冥王竜ヴァンダルギオン

星：8

ATK：2800

DEF：2500

「ヴァンダルギオンは無効にしたカードの種類によって別々の効果を発動する！魔法を無効にした場合は相手ライフに1500ポイントのダメージを与える！」

「きゃあ！」

明日香：LP 4000 2500

「さらにヴァンダルギオンもドラゴン族。よって一族の結束で攻撃力が上がるぜ！」

冥王竜ヴァンダルギオン
ATK：2800 3600

「…私はモンスター1体を裏守備でセット。そして荼吉尼とマンジユ・ゴッドを守備表示にしてターン終了よ」

明日香

LP：2500

手札：1枚

モンスター：サイバー・エンジェル・茶吉尼 - (守備表示)、マン
ジユ・ゴツド (守備表示)、裏守備モンスター1体
魔法・罫：なし

「オレのターン、ドロー！行くぜ明日香！オレは永続罫、竜の逆鱗を発動！オレのフィールドのドラゴン族は全て貫通効果を得る！」

沙耶が竜の逆鱗を発動した瞬間、明日香の顔に諦めの色が見えた。

「さすがね、沙耶。やっぱり強いわ、でも次は負けないわよ？」

「おう！楽しみにしてるぜ！タイラント・ドラゴンでマンジユ・ゴツドに攻撃！ブラストファイア！」

タイラント・ドラゴンの炎がマンジユ・ゴツドを飲み込み、それがデュエルの決着となった。

明日香：LP2500 0

「しょ、勝者セニョーラ加賀美なの〜ネ〜！」

クロノスが信じられないものを見るような目で沙耶の勝利を告げた。

「嵐、勝ったぞ！」

明日香に勝利した沙耶はいの1番に嵐のもとにやってきた。

「オレは勝ったんだから嵐も勝たねえと承知しねえぞ？」

「わかってるよ。というわけだ、大地。絶対に代表決定戦は俺が勝つぜ？」

嵐は視線を三沢に向ける。

「望むところだ。加賀美くんには悪いが俺が勝たせてもらう」

男子代表決定戦、嵐の初戦の相手は……三沢大地。

第34話 絶体絶命！？三沢の嵐封じ（前書き）

更新です。今回の三沢のデッキは実際に使われたらかなり鬱陶しいデッキです。

感想お待ちしております。

第34話 絶体絶命！？三沢の嵐封じ

女子代表決定戦の翌々日、デュエル場には嵐と三沢の姿があった。この日の前日には十代が代表決定戦1回戦を行っており、本来は昨日に嵐と三沢のデュエルも行われるはずだったのだが。

十代の相手になった茂木もけ夫と言う生徒が使ったもけもけによって大半の生徒が脱力状態にされてしまい、1日延期にされたのだ。ちなみに十代と嵐、沙耶にはもけもけの脱力効果は通用しなかった。

「さて、ついにこの日が来たな。嵐、今日俺がお前を倒してアカデミア1年最強になる！」

三沢が嵐を指さして宣言する。これまで嵐はアカデミアで負けなしであり、実質アカデミア1年最強とされている。まあ確かに十代や万丈目にも勝っているので間違いではない。しかし高等部からの編入で1年最強と呼ばれていることにエリート意識の強いブルー生は不満タラタラであるが。

「やってみろ、大地。俺もただじゃ負けない」

嵐は三沢の宣言に笑みを浮かべながらデュエルディスクを起動させる。

「嵐！負けんじゃねえぞ！！」

そんな嵐を一足先に女子代表になった沙耶が観客席の最前列から応援する。他にも女子生徒の大半が嵐を応援している。やはり彼女ができて嵐は人気があるのだ。さらには結構親しいレッド生からも

応援が来ている。

しかしその一方でモテる嵐への嫉妬からイエローとブルーの男子はほとんどが三沢の応援である。もっとも、三沢も結構モテるのだが。

「行くぞ嵐！お前対策に作ったデッキの力を見せてやる！」

「来い！捻じ伏せる！」

「「デュエル！！」」

「俺の先攻、ドロー！」

先攻は三沢。勢いよくデッキからカードをドローする。

「俺は手札からテラ・フォーミングを発動！デッキからフィールド魔法を1枚手札に加える！俺はデッキから死皇帝の陵墓を手札に加え、そして発動！」

発動されたフィールド魔法によって三沢の背後に巨大な陵墓が出現する。

「死皇帝の陵墓？聞いたことないっすね？」

「あれは……」

翔は疑問符を浮かべているが沙耶はどうやら知っているらしい。沙耶は嵐の家でいろんなカードを見せてもらったので何気にカードの知識は多いのだ。

「死皇帝の陵墓の効果発動！生贄召喚に必要なモンスターの数×1000ポイントのライフを払うことでモンスターを生贄なしで召喚できる！」

「（死皇帝の陵墓………いつたい何を？）」

死皇帝の陵墓は簡単に最上級モンスターが出せる反面、ライフ4000のこの世界では一気にライフを減らすことになる。

「俺はライフを2000支払い、手札からレベル8の虚無の統括者ヴァニティ・ルーラーを召喚！」

三沢：LP4000 2000

616

三沢のライフが半減し、フィールドには白い衣を纏った男性が現れる。

ヴァニティ・ルーラー
虚無の統括者

星：8

ATK：2500

DEF：1600

「っ!?!」

召喚されたモンスターに嵐は顔を顰める。嵐のデッキにとってこのモンスターは間違いなく天敵だった。

「その顔を見るとこのカードの効果は知っているようだな? 虚無の統括者がフィールド上に存在する限り、相手はモンスターを特殊召喚することはできない! 嵐、お前の切り札であるアトモスフィアやラヴァ・ゴーレムは特殊召喚によって呼び出されるモンスター。このカードの前には無力だ!」

「くっ」

「さらに俺はカードを2枚伏せてターン終了!」

三沢

LP:2000

手札:2枚

モンスター:虚無の統括者(攻撃表示)

魔法・罫:伏せカード2枚

「俺のターン、ドロー!」

嵐は勢いよくカードを引くと手札を確認する。

「(虚無の統括者は厄介だが、手札にはゴッド・バード・アタック

がある。これで……）」

「嵐のドローフェイズにリバースカードオープン！永続罫、生贄封じの仮面！」

「なに！？」

今度は三沢のフィールドにさらに奇妙な形の仮面が現れる。

「生贄封じの仮面がフィールドに存在する限り、互いのプレイヤーは如何なる場合においてもカードを生贄にすることはできない！嵐、お前のデッキは分析済みだと言っただろう？お前のデッキの主なモンスター除去カード、ゴッド・バード・アタックと風霊術・雅、そしてガイウスは生贄にできなければ何もできん！」

「ちい……俺は守備モンスターをセット！そしてカードを1枚伏せてターン終了」

嵐

LP：4000

手札：4枚

モンスター：裏側守備モンスター1体

魔法・罫：伏せカード1枚

「さすがは三沢くんね。完全に嵐のデッキの弱点を突いてるわ」

三沢のプレイングを見て明日香が感心する。

「嵐くんのデッキの弱点つすか？」

疑問符を浮かべる翔に今度は沙耶が口を開く。

「嵐のデッキは基本的に特殊召喚がメインだ。特殊召喚自体を封じられたら一気に戦力が半減する。しかも生贄が使えないんじゃゴツド・バード・アタックみたいな強力な除去カードが使えねえ」

「俺のターン、ドロー！」

沙耶が説明していると三沢がデッキからカードをドローし、ニヤリと笑う。

「俺はライオウを召喚！」

ライオウ

星：4

ATK：1900

DEF：800

「ライオウがフィールドに存在する限り、互いのプレイヤーはドロー以外の方法ではデッキからカードを加えることはできない。これで俺の勝利への方程式はほぼ完成した！」

「くっ、面倒なカードばかり……」

新たに召喚されたモンスターに嵐は舌打ちする。

「ライオウで守備モンスターに攻撃！ライティングキャノン！」

ライオウが放った雷の弾が裏守備になっていたクリッターを貫いた。

「守備モンスターはクリッターか。しかしライオウの効果でサーチすることはできない！さらに虚無の統括者でダイレクトアタック！虚無の爪！」

虚無の統括者がその爪で嵐に迫る。

「させるか！罠カード発動、魔法の筒マジック・シリンダー！相手モンスターの1体の攻撃を無効にしてその攻撃力分のダメージを相手に与える！」

「これが決まれば嵐の勝ちなんだな！」

嵐が発動させた罠に隼人が声を上げる。だが……

「甘い！罠カードオープン、トラップ・スタン！このターンのエンドフェイズまでフィールド上の罠の効果は無効にする！」

嵐が発動させた魔法の筒はトラップ・スタンによって無効化され、虚無の統括者の攻撃はそのまま嵐に直撃する。

「ぐっ！」

嵐：LP4000 1500

「トランプ・スタンの効果によって生贄封じの仮面の効果もエンドフェイズまで無効になるが、問題はない。俺はこれでターン終了だ」

三沢

LP：2000

手札：2枚

モンスター：虚無の統括者（攻撃表示）、ライオウ（攻撃表示）

魔法、罫：生贄封じの仮面（永続罫）

「くっ……」

嵐はフィールドの状況を見て苦悶の表情を見せる。

「こりゃ終わったな」

「へっ、所詮アイツもこの程度なんだよ」

圧倒的不利な嵐に嵐を良く思っていないブルー生徒たちが陰口を叩く。

（おいおい、あんなこと言われてるぜ相棒。どうすんだよ、諦めん

のか?)

現在の不利な状況にバクラが笑いながら嵐に話しかける。

「(冗談だろ?俺は最後まで諦めない!)俺のターン、ドロー!」

「(あの眼、嵐はまだ諦めていない。それでこそ嵐だ!)」

圧倒的不利にもかかわらずその瞳に諦めの色が見えない嵐に三沢も嬉しそうに笑う。

「……行くぜ、大地!俺は魔法カード、天使の施しを発動!3枚ドロし、2枚捨てる。そしてお前が出したフィールド魔法、死皇帝の陵墓の効果を発動!ライフを1000支払って手札から神禽王アレクトールを召喚!」

嵐はたった今、ドロしたばかりのモンスターをフィールドに召喚する。

嵐：LP1500 500

神禽王アレクトール

星：6

ATK：2400

DEF：2000

「だが攻撃力では虚無の統括者には勝てないぞ？ライオウを倒しても俺のライフは削りきれない」

「それはどうかな？アレクツールのモンスター効果を発動！これによつてフィールド上に表側表示で存在するカードの効果をエンドフェイズまで無効にする！これによつて虚無の統括者の効果を無効！」

アレクツールが翼を羽ばたかせ、虚無の統括者が光に包まれるとその効果が無効にされる。

「なに！？」

「さらに墓地のキラァ・トマトとシールド・ウイングをゲームから除外し、ダーク・シムルグを特殊召喚！」

「っ！させるか、ライオウを墓地に送つてダーク・シムルグの特殊召喚を無効にする！」

三沢のフィールドのライオウが姿を消し、ダーク・シムルグの特殊召喚が無効にされる。ライオウの特殊召喚無効化の効果は生贄ではなく墓地に送ることで発動するので生贄封じの仮面で制限されない。

「ふっ、残念だったな」

「そうでもないぜ。墓地のダーク・シムルグの効果を発動！手札の風属性と闇属性をゲームから除外し、墓地から特殊召喚する！俺は手札のアトモスフィアとトーチ・ゴーレムをゲームから除外する！」

「っ!？」

「蘇れ、ダーク・シムルグ!」

嵐の墓地から漆黒の翼をはためかせ、ダーク・シムルグが飛び立つ。

ダーク・シムルグ

星：7

ATK：2700

DEF：1000

「ダーク・シムルグは墓地からも特殊召喚できるモンスターだ。これで俺の勝ちだぜ、大地!ダーク・シムルグで虚無の統括者に攻撃!ダーク・テンペスト!」

「ぐう!」

三沢：LP2000 1800

「神禽王アレクトールでダイレクトアタック!烈風破!」

アレクトールが翼を広げ、激しい突風を巻き起こした。

「うわあああああああ！……！」

「勝者〜ハ、セニョール嵐なの〜ネ！」

クロノスの勝者宣言がデュエル場に響き渡り、歓声に包まれる。

「はあ、さすがだな嵐。俺の分析もまだまだだったってわけか」

「そうでもない。あそこでアレクトールが来なきゃ俺が負けてた」

三沢の言葉に嵐は苦笑い気味に答える。

「次はいよいよ十代だな？」

「ああ………」

頷きながら嵐は観客席の十代を見る。

「嵐！次のデュエルは俺が勝つからな！」

「望むところだ。吹き飛ばしてやる！」

男子代表決定最終戦。それは十代の嵐へのリベンジマッチである。そのデュエルに嵐も十代も胸を躍らせていた。

第35話 再戦のとき、闇纏う風とヒーロー（前書き）

更新です。

次回から友好デュエルにはいります

感想お待ちしております。

第35話 再戦のとき、闇纏う風とヒーロー

「それで〜ハ：代表決定戦決勝戦、セニョール嵐VSセニョール十代のデュエルを始めるの〜ネ！」

デュエル場にクロノスの声が木霊し、舞台に嵐と十代が上がる。

「へへ、嵐！今回は俺が勝たせてもらっぜ」

「やってみる、今回も俺が勝つ。なにより、一緒に代表になるって沙耶と約束したからな」

嵐が観客席の方を見るとそこにはいつものメンバーがそれぞれ嵐と十代を応援していた。

「嵐！絶対負けんなよ！」

「兄貴ー！頑張るっす！」

「2人とも気張れ〜！」

「嵐！勝てよ！」

「十代、頑張りなさい！」

ちなみに上から沙耶、翔、隼人、三沢、明日香である。沙耶と翔は当然それぞれ嵐と十代を応援し、三沢は自分を負かした嵐を応援している。隼人は2人とも平等に応援しており、明日香は何故か十代を応援していた。

「さあ、始めようぜ？」

「おう！」

2人とも仲間たちの応援を受け、嵐と十代は互いにデュエルディスクを起動させる。相変わらず嵐のデュエルディスクはソリッドビジョンによる緑色の羽が舞い散る派手な演出が出る。

「やっぱりそのディスクカッコいいよな！」

「…俺はもう少し地味でもいいんだけどな……じゃあ始めるか」

「デュエル！」

「俺の先攻、ドロー！」

先攻は嵐。勢いよくカードをデッキからドローする。

「俺は霞の谷のファルコンミスト・バレーを攻撃表示で召喚！」

霞の谷のファルコンミスト・バレー

星：4

ATK：2000

DEF：1200

「さらにカードを1枚伏せてターン終了」

嵐

LP：4000

手札：4枚

モンスター：霞の谷のファルコン（攻撃表示）

魔法・罫：伏せカード1枚

「俺のターン、ドロー！へへ…嵐、一気に行くぜ！手札から融合を
発動！手札のフェザーマンとバーストレディを融合するぜ！こい、
マイフェアバリットカード！E・HEROフレイム・ウイングマン
！」

十代の場に白い翼に竜のような腕を持つヒーローが降り立つ。

「まだまだ！手札からE・HEROスパークマンを召喚！」

更にもう1体、雷を纏ったヒーローが召喚される。

E・HEROスパークマン

星：4

ATK：1600

DEF：1400

「フレイム・ウイングマンで霞の谷のファルコンに攻撃！フレイム・シュート！」

フレイム・ウイングマンが身体中に炎を纏って霞の谷のファルコンに突撃する。

「甘いぜ、十代！罨カード発動、ゴッドバードアタック！自分フィールド上の鳥獣族を生贖にしてフィールド上のカードを2枚破壊する！俺は霞の谷のファルコンを生贖にしてフレイム・ウイングマンとスパークマンを破壊する！」

迫りくるフレイム・ウイングマンに霞の谷のファルコンも身体中に炎を纏い、突撃して破壊する。さらにそのままスパークマンにも突撃して破壊した。

「焦るなよ、十代。デュエルはまだ始まったばかりだぜ？」

「へへ、さすがだな。俺はカードを1枚伏せてターン終了だぜ」

十代

LP：4000

手札：1枚

モンスター：なし

魔法・罨：伏せカード1枚

「俺のターン、ドロー。俺はキラール・トマトを召喚！」

キラール・トマト

星：4

ATK：1400

DEF：1100

「（伏せカードがなんにしろ、攻撃しなけりや始まらないな…）俺はキラール・トマトでダイレクトアタック！」

キラール・トマトが十代に噛みつきこうと向かっていく。

「へへ、させないぜ！罠カード、ヒーロー見参を発動！相手モンスターの攻撃宣言時に自分の手札から相手にランダムでカードを選ばせてそれがモンスターだったらフィールドに特殊召喚し、それ以外なら墓地に送るぜ！」

十代が発動したヒーロー見参はかなりギャンブル性の高いカードだが……

「ちっ、選ぶまでもなく十代の手札は1枚」

「その通り！俺の手札のモンスターは、E・HEROエッジマン！」

キラール・トマトの前に黄金のヒーローが現れる。

E・HEROエッジマン

星：7

ATK：2600

DEF：1800

「ちつ、俺はカードを1枚伏せてターン終了」

嵐

LP：4000

手札：3枚

モンスター：キラール・トマト（攻撃表示）

魔法・罫：伏せカード1枚

「へへ、俺のターン…ドロー！手札から強欲な壺を発動してデッキからカードを2枚ドロー！さらにオーバーソウルを発動するぜ！この効果で墓地のE HEROと名の付く通常モンスターを特殊召喚する！こい、スパークマン！」

『ハア！』

墓地から再び雷を纏ったヒーローが現れる。

「どんどん行くぜ、手札から融合回収を發動！墓地の融合とフェザーマンを手札に戻す！さらにフィールドのエッジマンとスパークマスを融合！E・HEROプラズマヴァイスマン！」

E・HEROプラズマヴァイスマン

星：8

ATK：2600

DEF：2300

「くっ！」

エッジマンとスパークマンが融合することで現れたプラズマヴァイスマンに嵐は苦い顔をする。

「プラズマヴァイスマンの効果を發動！手札を1枚捨てることで相手フィールド上の攻撃表示モンスター1体を破壊するぜ！俺はフェザーマンを墓地に送る！」

十代が手札を1枚捨てるのとプラズマヴァイスマンの発生した雷によってキラーク・トマトが破壊される。

「行くぜ！プラズマヴァイスマンでダイレクトアタック！」

「ぐう！」

嵐：LP 4000 1400

「俺はこれでターン終了だぜ！」

十代

LP：4000

手札：0枚

モンスター：E・HEROプラズマヴァイスマン（攻撃表示）

魔法・罫：なし

「ちっ…（やばいな…：伏せカードはスケープ・ゴート…：けど手札にアトモスフィアがない。このドロウに賭けるか…：）俺のターン、ドロウ！」

嵐は勢いよくカードをドロウし、そのカードに目を向ける。

「（このカード…これなら！）俺は墓地の霞の谷のファルコンとキラ・トマトをゲームから除外し、ダーク・シムルグを特殊召喚！」

ダーク・シムルグ

星：7

ATK：2700

DEF：1000

「まだまだ！さらに手札からハーピー・クイーンを攻撃表示で召喚！」

ハーピー・クイーン

星：4

ATK：1900

DEF：1200

「ダーク・シムルグでプラズマヴァイスマンに攻撃！ダークテンペスト！」

「くっ！」

ダーク・シムルグが巻き起こした黒い突風によってプラズマヴァイスマンが破壊される。

十代：LP4000 3900

「さらにハーピー・クイーンでダイレクトアタック！」

十代：LP3900 2000

「さらにカードを1枚伏せてターン終了」

嵐

LP：1400

手札：1枚

モンスター：ダーク・シムルグ（攻撃表示）、ハーピー・クイーン
（攻撃表示）

魔法・罫：伏せカード2枚

「嵐が逆転したんだな！」

「けど兄貴の引きならここからでも逆転できるっす！」

「いや……」

十代が逆転のカードを引くと思っている翔に沙耶が否定の声をかける。

「嵐が伏せたカード……あれによっては十代の負けだ」

「……なるほど、確かにな」

沙耶の言葉に三沢もある一枚のカードが思い浮かび、同意する。

「へへ、やっぱスゲエな！けど俺の引きは奇跡を呼ぶぜ！俺のターン、ドロー！」

「十代のドローフェイズに永續罫、魔封じの芳香を発動！互いのプレイヤーは魔法カードを1度伏せなければ発動できず、次の自分のターンまで発動することはできない！さらにダーク・シムルグの効果で十代はカードをセットすることはできない！」

「げっ!?!」

「悪いな、十代。もうお前に何もさせない」

仮に……十代が引いたカードがサイクロンで魔封じの芳香にチェイン発動して破壊しても十代の手札は0でモンスターと伏せカードも0。ドロー補助カードでも魔法・罫が使えなければ融合はできない。そしてE・HEROの中に融合せずにモンスター破壊効果を持つカードは存在しない。

「……俺はバブルマンを守備表示で召喚！その効果でカードを2枚ドローするぜ」

E・HEROバブルマン

星：4

ATK：800

DEF：1200

「（さすが十代…しつかりドロ補助を引いたな。だが…）」

いくら発動すれば逆転できるカードを引いても、それが発動できなければ意味がない。十代は悔しそうに引いたカードを見る。そこにはミラクル・フュージョンとR・ライトジャスティスのカード。ミラクル・フュージョンを使えば墓地のフレイム・ウイングマンとスパークマンを除外してシャイニング・フレア・ウイングマンを融合召喚し、さらにR・ライトジャスティスで伏せカードを2枚破壊できただろう。実質、魔封じの芳香さえなければ逆転のカードだったのだ。

「ちえ…俺はこのままターン終了」

十代

LP：2000

手札：2枚

モンスター：E・HEROバブルマン（守備表示）

魔法・罫：なし

「嵐！今回は俺の負けだけど……それでも俺は最後までデュエルするぜ！」

「ああ……それでこそ十代だ。俺のターン、ドロロー！ハーピー・クインでバブルマンに攻撃！」

ハーピー・クインがその爪でバブルマンを引き裂き、破壊する。

「へへ、ガツチャー！楽しいデュエルだったぜ、嵐！」

「俺もだ。ダーク・シムルグでダイレクトアタック！ダークテンペスト！」

トドメとなるダーク・シムルグの一撃が十代に直撃した。

十代：LP20000

「勝者、セニョール嵐なのーネ！よって、今年の友好デュエル代表

は男子、セニョール嵐！女子、セニョーラ加賀美なのーネ！」

クロノスが高らかに嵐の勝利を宣言し、それと同時に嵐と沙耶の婚約者コンビによる代表が決定した。

「くっそ、今度は勝てると思ったのにな」

デュエルに敗れ、尻餅をついている十代が悔しそうに呟く。

「はは、俺だってそう簡単には負けないさ」

「まあ、いいや。楽しいデュエルだったし…代表デュエル頑張れよ」

「ああ、もちろんだ」

嵐は十代に手を差し伸べ、それに捕まって十代が立ち上がる。こうして代表決定戦が幕を閉じ、ついに友好デュエルへと進んでいくのだった。

第36話 開幕、ノース校友好デュエル（前書き）

ようやく更新です。お待たせしました。

とりあえず今回はデュエルなしです。そしてノース校の女子代表が登場します。

感想お待ちしています。

第36話 開幕、ノース校友好デュエル

遂にノース校との対抗デュエルの日になった。

「いよいよだな」

「おう、腕が鳴るぜ」

嵐の言葉にやる気満々の沙耶が答える。男子代表の嵐と女子代表の沙耶は他の生徒たちや鮫島校長と共にノース校が来るのを待っていた。

「（まあ、ノース校の男子代表は原作通り準なんだろうが……女子代表は誰だ？）」

「嵐、沙耶！頑張れよ！」

嵐が考え事をしていると十代が嵐と沙耶にエールを送る。どうやら十代はまだノース校が来ていないのにヒートアップしているようだ。

「まかせろって！デッキの調整もバッチリだしな！」

十代のエールに沙耶が笑顔で答える。すると嵐が何か思い出したように笑い出す。

「どした？」

その嵐を不思議に思った沙耶が問いかける。

「ああ、この間のデッキ調整中の大地たちのことを思いだしてな」

「あれか……」

沙耶が嵐の言葉に苦笑いしながら思い出す。それは今から数日前、嵐と沙耶が対抗デュエルのためにデッキ調整をしているときのことだった。

嵐と沙耶はノース校との対抗デュエルの代表に選ばれた後、万全を期すためにデッキの調整を行っていた。もともとそこまで変えるつもりはなく、加えたり抜いたりするカードも僅かな枚数だったのだが……

「嵐、ここは『ウォーター・ドラゴン』を入れよう。炎属性には圧倒的に有利になるぞ?」

「沙耶、『エトワール・サイバー』はどうかしら?直接攻撃のときに攻撃力が上がるわよ?」

「『デス・コアラ』もいいんだな。大ダメージが狙えるんだな」

「あの…僕の『パワー・ボンド』も……」

「お前らさあ、嵐と沙耶の邪魔してやるなよ？」

……と、このようにいつものメンバーが自分のカードを使って貰おうとデッキ調整をする嵐と沙耶に詰め寄っていたのだ。ちなみに場所は十代の部屋である。三沢たちにも何か意見があったら貰おうと考えていたのだが、それがいけなかったのだ。唯一、純粋に嵐と沙耶のデュエルを楽しみにしている十代だけは自分のカードを使って貰おうという欲がなく、逆に三沢たちを止めている。

（あゝ、うっせえなこいつら……っつーか入れても意味ねえカードばかりじゃねえか）

嵐の中でバクラが悪態をつく。確かにバクラの言う通り、嵐と沙耶のデッキには必要のないカードばかりである。

「でえええええい、五月蠅い！邪魔すんなよお前ら！！」

そしてあまりにしつこい三沢たちに遂に沙耶がキレた。だが、そんな沙耶に三沢が冷静に反論する。

「別に邪魔してるわけじゃない。今度の友好デュエルはアカデミアの名誉をかけた戦いだ。だから俺たちも一緒に戦うつもりでだ……」

…

「そうよ、あくまでアカデミアのためなんだから」

三沢の言葉に明日香も同意する。しかし、嵐と沙耶の2人のデッキコンセプトにまったく合わないカードを提示している時点で協力し

ているとは言い難い。

「おい、勘違いするなよ大地。俺も沙耶も学園のために戦うわけじゃない、自分がやりたいからデュエルするんだ。学園のためなんてめんどくさいもんを背負うつもりはない」

「だよな！やっぱデュエルは楽しんでこそだぜ！」

すると十代が嵐に同意する。まあ、十代も名誉だなんだと言ったこととは無縁の性格なのでだいたい予想できたが。

「わかるな、その気持ち。デュエルは他人のためにするもんじゃない、自分のためにするもんだ」

「ええ……」

嵐と十代の意見を聞いて三沢と明日香がそんなことをのたまう。しかし何はともあれ、これで嵐と沙耶はデッキ調整に集中……

「だが嵐！……是非俺の『ウォーター・ドラゴン』を入れてくれな
いか？」

「私の『ブレード・スケーター』も……」

「僕の『パワー・ボンド』も」

「俺の『デス・コアラ』もなんだな」

……できなかつた。結局三沢たちは自分のカードを使って貰おうと嵐と沙耶に詰め寄るのだった。

「デメエら〜!!」

その光景にもう沙耶は我慢の限界である。今にも三沢たちに殴りかかりそうな勢いだった。

「まったく…沙耶、落ち着けた」

三沢たちを凄じい勢いで睨みつける沙耶を嵐が頭を撫でながら落ち着かせる。嵐が頭を撫でていると沙耶は先程とは打って変わり、顔を赤くして借りてきた猫のように大人しくなった。

「お前らなあ、友好デュエルで自分のカード使って欲しいからってもうちょつと考えようぜ？」

「べ、別に私たちはそんなこと考えてないわよ？」

「そ、そうだ。俺たちは純粹に協力しよう…」

嵐の言葉に動揺する三沢たち。それが嘘であることは明白だった。

「あのなあ、まず大地。相手が炎属性のモンスターを使ってくるには限らないし…なにより俺のデッキは風属性と闇属性の混合デッキだぞ？確かに一部例外もあるが『ウォーター・ドラゴン』とその召喚に必要な『ハイドロゲドン』2体に『オキシゲドン』、『ボンディング・H2O』を入れたらデッキが回りにくくなる。

沙耶のデッキだってドラゴン族縛りのデッキだしな。『ウォーター・ドラゴン』は海竜族で『ハイドロゲドン』と『オキシゲドン』は恐竜族だ。沙耶の『一族の結束』や『ミンゲイドラゴン』」

「う……」

的確な嵐の指摘に三沢は言葉に詰まる。そもそも嵐のデッキのメインは風属性と闇属性である。一部例外として『ラヴァ・ゴレム』も入っているがあのカードは嵐の切り札である『アトモスファイア』をサポートすることができからだ。

しかし『ウォーター・ドラゴン』とその召喚に必要なカードは属性的、種族的にも嵐のデッキにシナジーがまるでない。もしも鳥獣族ならば『ゴッド・バード・アタック』の生贄要員にはなったが……

沙耶のデッキに入れるにしても『一族の結束』は墓地の種族が一種類でなければ意味はないし『ミンゲイドラゴン』の自己再生の効果は墓地にドラゴン族以外のモンスターがいた場合、発動できない。正直言つて邪魔にしかならないのである。

「次に明日香だが…大地と同じで種族、属性的な理由で却下。沙耶のデッキはドラゴン族以外は邪魔にしかないし、俺のデッキも融合を組み込む意味はない」

「う……」

三沢と同じように明日香に言葉に詰まった。当然、沙耶のデッキは先程も行ったがドラゴン族以外のカードが入ると能力を失うカードがある。また明日香が進めていた『エトワール・サイバー』や『ブレード・スケーター』は『サイバー・ブレイダー』の融合素材になるがそもそも融合のギミックがない嵐のデッキには大して意味はない。

「隼人は…、まあこの中じゃ1番まともだな。『デス・コアラ』は

闇属性だし、沙耶のデッキはとにかく俺のデッキなら多少は使える」

「ぼ、僕の『パワー・ボンド』はどうかかな？」

思わぬところで好評価を得た隼人のカード。もつとも、入れるかどうかは話が別だが……そして翔が嵐にカードを見せるが……

「機械族が1枚も入っていない俺や沙耶のデッキに機械族専用の融合カード入れてどうしろと？」

「あ……」

……と、こんなことがあったのである。結局、あの後三沢たちはやっとともに協力をしてくれた。

「お、来たみたいだぜ！」

十代の言葉に数日前のことを思いだしていた嵐の意識が十代の指さ

した方向へ向く。そこには潜水艦から降りたノース校の校長と握手をする鮫島校長の姿があった。

「いやあ、久しぶりですね鮫島校長。準備はよろしいですか？」

「勿論です。あれが1番の楽しみですからな」

鮫島校長とノース校の校長が何か喋っている。その光景に嵐はあることを思いだした。

「（そういえば勝った方の学園の校長にはトメさんのキスが送られるんだっけ……）」

（マジかよ……余計にやる気なくならねえか？）

嵐が原作知識を思い出すとバクラが呆れたような声を出す。

「（まあ、好きな相手のキスがかかってたらやる気になるのはわかるけどな）」

チラリと沙耶に視線を向ける嵐。すると再びバクラが溜息を吐きながら呟く。

（相棒たちは年がら年中してんだろっが。むしろしてねえ時ってあるのかよ？）

「（ないな……まあ、好きな相手とのキスは何度しても飽きないけどな）」

「で、そちらの代表は？」

嵐がバクラと会話している間にどうやら嵐と沙耶の紹介も終わっらしい。鮫島校長がノース校校長に代表のことを尋ねていた。

「ふっふっふ、紹介しましょう。我が校の男子代表は……「俺だ！」」

ノース校校長の言葉を遮るように潜水艦から1人の人影が降り立った。

「お前ら、俺様は帰ってきたぞ！地獄から蘇った俺様の名は、――！十！百！千！」

「……万丈目サンダー！サンダー！サンダー！」

そう、アカデミアを去っていた万丈目である。万丈目の言葉に合わせて周りのノース校生徒たちが高らかに万丈目の愛称を叫び続ける。

「久しぶりだな、準」

「『万丈目さん』だ。紫藤嵐、貴様がアカデミアの男子代表か……まあいい、お前にも借りがあるからな」

他のアカデミア生たちが驚いている中、初めから万丈目が来るであろうことを知っていた嵐は特に驚いた様子もなく万丈目に挨拶をしている。一方、漆黒の制服に身を包んでいる万丈目は嵐を忌々しげに見つめながら腕を組んでいる。

「ところで、ノース校の女子代表って誰なんだ？」

未だに姿を現さないノース校女子代表に沙耶が尋ねる。すると再び潜水艦から1人の人影が現れた。

「それは……アタイだよ！」

万丈目に続いて潜水艦から降りた人物を見て嵐と沙耶は驚愕の表情を浮かべる。嵐の方は別にその人物に見覚えがあるわけではない。ただ、その人物のファッションに度肝を抜かれたのだ。

「……京子姐さ……ん!!!!!!」

先程の万丈目の時と同じように周りのノース校の生徒たちから歓声が上がると、その京子と呼ばれた少女の外見に嵐は驚愕したのだ。髪の毛の長さは肩にかかる程度で髪型は金髪のパーマ、顔には濃い化粧に黒いセーラー服のようなロングスカート。その姿は……

「アタイがノース校女子代表のスケバン、佐々木京子だよ！」

どう見ても大分前の時代の不良少女でした。

その京子の姿に唖然とした嵐は小声で万丈目にヒソヒソと問いかける。

「おい準、なんだありゃ？ いったい何時の時代のヤンキーだ？」

「『万丈目さん』だ……貴様の言いたいことは解る。だがあれでも俺たちと同年代だ」

どうやら万丈目も嵐と似たようなことを考えていたらしい。そりゃそうだ、いくらなんでも今時頭にパーマかけてロングスカートの不

良なんてそうはいない。

「よう、久しぶりじゃないか加賀美沙耶。アンタがアカデミアの代表とはアタイは嬉しいよ」

一方、京子は嵐とは別の意味で驚いていた沙耶に声をかける。その京子を見て沙耶は盛大に溜息を洩らした。

「はあ~~~~~~~~.....マジかよ.....」

「おい、沙耶。あの生きた化石とは知り合いか？」

心底ウンザリしたような沙耶の姿に嵐は沙耶に耳打ちする。すると沙耶は認めたくないような表情でコクリと頷いた。

「すつつつつつっげえ認めたくねえけど、オレの中学の頃の同級生だよ。何かとオレに絡んでくるめんどくさい奴だ」

その口調からして沙耶は本気で京子のことを嫌っているのがよくわかる。

「はん！紫藤とか言ったね？その女はアタイとアタイの舎弟たちの肋骨を粉砕骨折させて入院させたとんでもない凶暴女なのさ！」

沙耶と話している嵐を見て京子は沙耶を指さし、盛大に沙耶の過去を暴露する。

「はあ！？テメエなに言っつてやがる！アレはテメエがオレのダチをリンチしようとしたからだろうが！！嵐の前で誤解を招くようなこと言っつんじゃねえよ！」

京子の言葉に沙耶は猛反論する。先程の京子の言い方では沙耶が京子たちに理由もなく喧嘩を吹っ掛けたと思われるような発言だ。沙耶としては嵐に自分がそんな危険な女だと思われなくなかった。

一応補足しておく。沙耶は中学時代、問題児ではあったが不良ではなかった。授業は寝ることはあってもサボることはなかったし弱い者虐めなど絶対にしない。寧ろ虐められている人間を助けるタイプの人間だった。結果、その男らしい行動から同性のファンが増えてついには以前の美奈のような同性愛者が多数生まれたのだ。

「はん！それだってアンタの連れがアタイの男をかどわかしたからじゃないか！悪いのはあの女だったんだよ！」

「ふざけんな！ただ単に teme をフツた男がオレのダチのことが好きだったただけだろうが！しかもオレのダチはキツパリとその男のことをフツてるぜ！逆恨みもいい加減にしやがれ！」

京子が持ち出す過去の話を沙耶が全力で否定する。確かにそれは京子の逆恨みでしかない。少々やりすぎかもしれないが沙耶に肋骨を折られたのは自業自得だ。

「ふん、まあいい……今日のデュエルで勝ってアンタへの恨みつらみを晴らしてやるよ！行くよお前たち！」

「……へい！京子姐さん！」

京子はそう言つと数名の子分であろう男子生徒たちを連れて控室に歩いて行った。

「……随分と恨まれてんだな、沙耶」

嵐は氣遣うような表情で沙耶を労う。

「……ったく、アイツがアカデミアに落ちたって聞いたときはもう絡まれることはないって思ってたのによ……まさかノース校にいやがるとは……」

「まあ、とにかくデュエルに勝てば問題ねえだろ？代表戦の今日が終われば連中だって帰るんだしさ」

「おっ……」

ちなみにこの後、万丈目の兄たちがテレビカメラを連れてアカデミアに来訪したのだが、今回は割愛する。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9229/>

遊戯王GX～闇纏う風と盗賊王～

2011年8月25日13時08分発行